THE CENTRAL REVIEW

中央公論

11-1921

十一月號

1.　36

第三十六年　第十二號　第四百二號

最新刊

安岡正篤著

支那研究者の新羅針

支那思想及び人物講話

紙數四百七十頁 布製

定價 貳圓六拾錢

郵稅十二錢

今や支那は世界問題の中心地である。歐米諸國は皆爭うて支那研究に努力して居る。然しながら其の思想及び人物の研究に至つては、未だ俄に歐米人の企及することの出來ぬ者が多い。此れを闡明するは實に邦人の獨壇場でなければならぬ。今は是非とも新人の潑剌たる研究を要する。本書は實に此の要求が生んだ最初の好著である。著者の令名に就いては既に定評がある。

佛國學士院會員 ミッシレー著、增富平藏譯

● 結婚生活の心理と生理（再版）

貳圓四拾錢 郵稅金十錢

獨逸 ヘッケル博士著 文學士 栗原古城譯

十一版 ● 宇宙の謎

參圓 郵稅拾貳錢

白耳義 マーテルリンク著 文學士 栗原古城譯

十八版 ● 死後は如何 附錄「交靈術とは何ぞや」

壹圓九拾錢 郵稅拾錢

印度マドラス大學 ナラス教授著 曹洞宗大學教授 立花俊道譯

五版

佛教の要諦

▲釋尊影像 アジャンダ壁畫等の寫眞版十一頁入

▲四六判總布製・價參圓貳拾錢・郵稅十二錢

● 「余は佛教の知識を得んと欲する萬人に此書の熟讀をすゝむ。憶ふに此の書はかゝる主題に關する空前の良書と稱するを得ん」 ― スマンガラ大僧正

東京本郷西片町 玄黃社

東京振替七九九五番

電話小石川一三九番



中央公論第卅六年十一月號目次

▼公論

▼說苑



大正十年秋の「美術季・運動季に於ける總收穫」


プラトン萬年筆
心地よきペンの滑り…淀みなきインクの流れ…萬年筆はプラトン萬年筆
日本文具株式會社特製品
中山太陽堂文具部發賣



"THE AEROPLANE" BY A.R.W. ALLAN

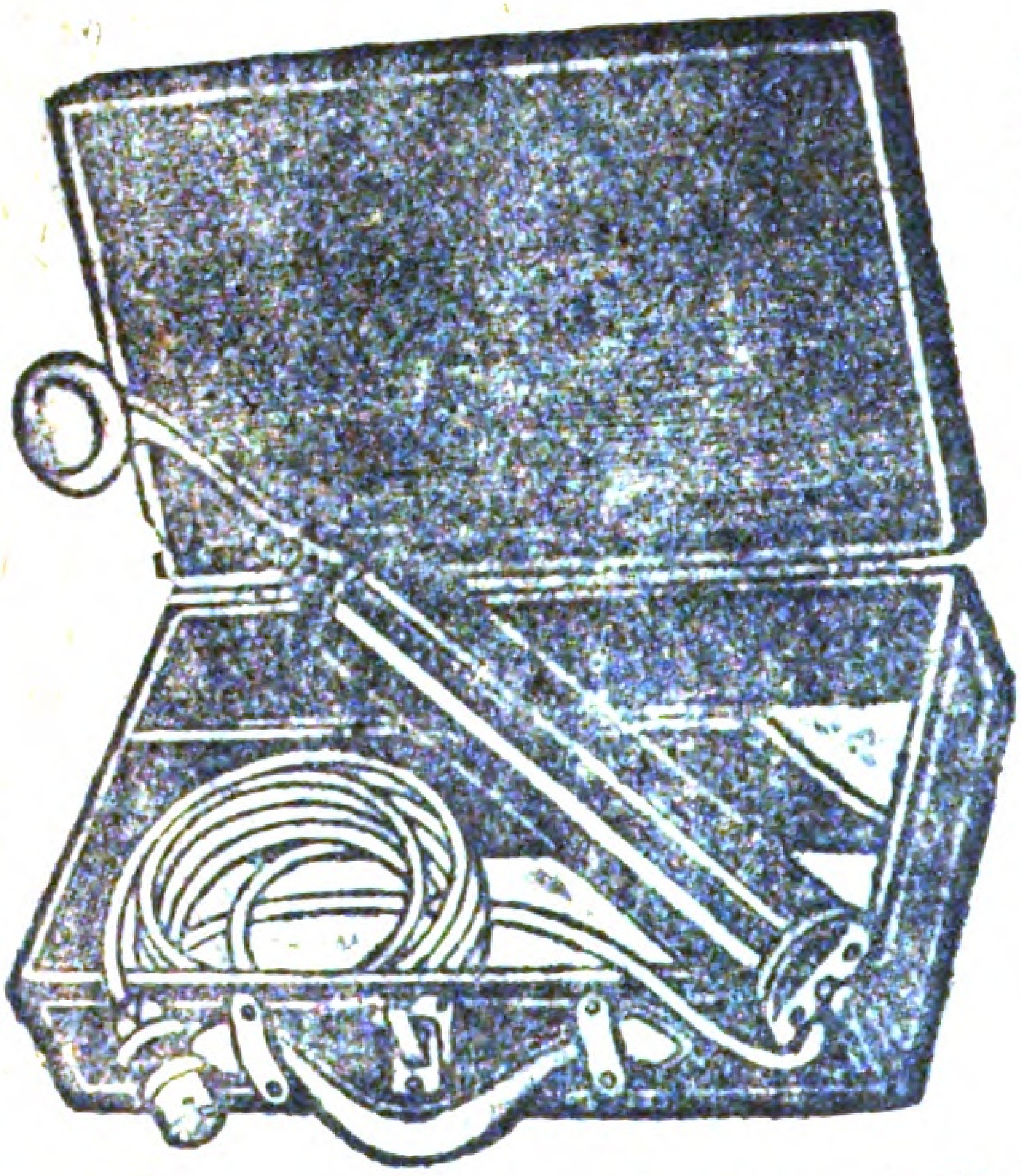
皇室及貴顯御愛用品　正價金參拾五圓

權威ある電波療器ラヂオレーヤー

慢性病や各種疾患に
使用簡單、永久使用

難病快癒
證狀如山

歐米の家庭にて白熱的歡迎



電波紫光線の人體に及ぼす偉大なる効果は本機の本邦に紹介せられて日極めて淺きも既に我國上下一般の家庭に賞用せらるゝに到れり。◆本機僅に二三分間の應用は能く頭痛、齒痛を遮止し顔面、肩、子宮等の痙攣を遮治し、十數年來難治のリューマチス、神經痛を根治し大學病院及び専門の博士連により見放されたる脊髓病を僅々一週間にて快癒し、凡ゆる藥を用ひて効なき慢性の顔面腫物を十數日にて癒治せしめ多年慢性の胃腸病に使用して未だ曾て覺えざる卓効を顯はし肋膜、肺病、神經衰弱、淋病、子宮病等に偉大の効果ありたる幾多の奇蹟的奏効の證狀多數あり◆肩癖、腰痛、便秘、わきが、たむし、火傷其他凡ゆる人體の病氣に卓効あるのみならず某獸醫學博士は本器を馬の胃歇症に五分間二回にて驚くべき治癒を來たさしめしと云ふ。要するに家庭に本器一具を備ふる時は無病にして多幸なる生活を樂しむ事を得べし、貴下は即時本器の詳細なる説明書を要求されたし。





ラヂオレーヤー東洋一手販賣元

東京本郷區本郷一丁目九番地　ラヂオレーヤー商會

電話小石川　六二〇四
振替東京　五二四七

卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社



大正十年

中央公論

十一月一日發行

十一月號

第卅六年第十二號

第四百二號

國際協働的精神に徹せざる我操觚界

每日の新聞を讀んで一番不快に感ずるものは、醜穢なる三面記事と黨派根性で曲筆せられた政治記事とである。政黨幹部の政談など〻來ては、齒の浮く樣な手前味噌に嘔吐させられるが、機關新聞の偏僻なる政論に至つては往々にして正直な市民をあやまることあるを恐れざるを得ぬ。

市井日常の報道は兎も角、内外の國家的併に社會的大問題の評論に至ては、極めて確的公平なることを要する。社會全體の爲めから云つても斯事の緊契たるは言ふまでもないが、吾人の樣に正確公平なる見識を發ひたい希望を有する者の主觀的要求から云つても、不偏不黨の有力なる新聞の發達は頗る願はしい事だ。幸にして日本には、如何いふものか、政黨の機關新聞といふものはサツパリ發達しない。少しはある。が、何れも有るも無きも同じ樣なものばかりで、公人の机上に缺く可らざる底のものは、言葉の正しき意味に於て、一つもない。信用のある新聞といへば悉く政府にも政黨にも關係のない中立の新聞である。之を政界の不具的發達より來れる一つの結果と觀ずれば悲しき現象たるを失はないが、又一面に於て爲に幾分偏僻の政論の横行に累せられざるを得るといふ點に於て幸だとも謂へる。

併し乍ら、不偏不黨の中立的新聞の發達に依つて比較的正確な報道と比較的公平な評論とに接するは、孰れかといへば内政の方面であつて、事一度渉外の問題になると必しもさうとは云へぬ。何故に然るかといへば、惟ふに是れ我が國民未だ全く鎖國時代の陋習より脱し切らず眞の國際協働的精神に徹底し居らざるが爲めであるまいか。内政問題に就ては既に政黨者流の我田引水の僻説に超然たり得るに至つた國民も、國際問題になると彼我の立場を超越して姑く事物當然の理の何處に在るやを冷靜に正視するの雅量を失はんとする。即ち我執の偏見に囚へられ自家の利害を以て直に事理の正否を分つの標準と爲さんとするのである。斯くして我國の諸新聞は、少くとも國際問題については、今なほ一黨一派の機關新聞と殆んど擇む所なきの陋態を示すのは、新聞のために惜み又社會の爲に甚だ之を惜まざるを得ないのである。

試みに最近最も公平を以て鳴る某大新聞の大連會議に關する報道の一句を引かんか。チタ側を論じては「是れ

チタ側の猾策にして、斯く部分的に會議を開き、鑛山權に就ては日本は何を欲するや、森林權は如何……夫々日本の具體案を知り、是等の條件が悉く自家に有利なるに於ては更に談判をすゝめ、不利なるに於ては直に之を破毀し、日本の要求過大を宣傳して協商不調の責を日本に嫁し……對外的に日本を西伯利より驅逐せんとする惡辣手段にして云々」といひ、日本側については「其要求は極めて機會均等の主意に叶ひ、何等チタ側の如き利益主義のものにあらず云々」とある。之は或は本當の事かも知れないが、併し我々は何んだか其間に不安を感ぜずには居られない。モツト公平な正しい報道に接しないと容易に此の問題についての見解を定め難い樣な氣がするのである。

白いものを黑いと言つて貰つて只自家の都合さへ善ければ喜ぶといふのは、政黨の陣笠の事だ。政黨員でも少し利口なものは、少くとも腹では斯んな陋態を潔とせぬ。自分に都合がよからうが、惡るからうが、事實を有りの儘に視、其理否の岐るゝ所を公平に識るといふは、現代識者の最先の要求である。公正不偏の報道批判は國内の問題に於てよりも殊に昨今は對外の問題に於て必要とされる樣になつた。而して我國の新聞が此點に就て未だ十分の滿足を與へないのは、我々の太だ遺憾とする所である。

新聞のこの未發達の狀態は、蓋し國民讀者の此方面に於ける未發達の反映であらう。とは云ひ國民のこの未發達は矢張り新聞等によりて之を開拓するの外はないではないか。國民多數の對外的見識は、兎にも角にも新聞の供給する材料に依つて作らるゝからである。昨今の樣に國際問題の格別日常の話題に上るの際、而して世界全體を通じて、國際的精神の格別躍動してゐるの際、わが新聞が此方面に於ても亦社會の木鐸たるの任務を十分に盡さんことは、吾人の切なる願である。

然るに我が新聞界の現狀は如何。

吾人は徒らに新聞界を咒ふものではない。只其の更により良き發達を冀ひつゝ其の必要の迫れるを警告したるのである。而して此點に於て我が中央公論が、多年内外各方面の實際問題につき、常に公正穩健の評論を發表し、聊にても諸般の缺陷を充たし來つたことは、また讀者諸君の諒とせらるゝ所だらうと思ふ。

中央公論



第卅六年第十二號
十一月號
第四百二號

社會批評家としてのジョン・ラスキン

林　癸　未　夫

There is no wealth but Life. Life, including all its powers of love, of joy, and of admiration.——Ruskin.

一　傳統に對する反逆者

ジョン・ラスキンは常に一人ぽっちであつた。彼の一生は寂しかつた。併しながら彼の寂しさは豫言者の寂しさのやうに尊いものであつた。

神に對する至醇なる信仰と藝術美、自然美に對する限りのない憧憬と、社會の弱者に對する熱烈なる同情とが、彼

の一人格の中に緊密に抱擁されてゐた。而して十九世紀の中葉に於ける英國の宗教界、政治界、美術界及經濟界の狀勢は、自然に彼を驅つて「傳統」といふ暴君に對する反逆者たらしめてしまつた。彼は「傳統」に奉仕するあらゆる集團、學派から排斥せられ、攻擊せられた。彼の宗教論は僧侶から、彼の社會改良論は政治家や實業家から、彼の經濟論は經濟學者から、彼の美術論は美術家から非難せられ、蔑視された。彼の一論文出づる度毎に、彼は新しい攻擊の矢面に立たなければならなかつた。

彼は凡そ思想上の反逆者が逢はなければならない運命に逢つた。彼は剛毅と熱烈と慷慨と鬪爭との間に其辛い生涯を過した。彼の長い一生は孤棲獨往の裡に終始したのであつた。

二　第一の彼と第二の彼

ラスキンの數ある能力の中に最も目立つて人に知られてゐるのは、美術批評家としての彼と、社會批評家としての彼であつた。この二つの方面に於ける彼の事業は、其處に二個のラスキンが存在してゐたと考へられる程に、表面互に隔離したものであつた。吾等は彼のターナーの繪畫や、ゴシック式の建築や、伊太利の寺院に對する讚美の聲を悦服して聽くことが出來ると同時に、彼の社會觀察や、正統經濟學に對する反噬を嫌惡を以て斥けることも出來る。而して又吾等は彼の殘酷なる工業主義に對する呪詛の聲に傾聽しつゝ、彼の美に對する理論を無頓着に觀過することも出來る。

併しながら、若し吾等が斯くの如き方法によつてラスキンを兩分し、其一面のみを觀るに專らであるならば、到底何れの方面の彼をも正當に理解し評價することは出來ない。勿論彼が美術批評家として世に現はれ、社會改良家として世を終つたことは事實である。併しそれは彼が第二の彼たるべく第一の彼を棄てたのではなかつたと同樣に、第一の彼が第

二の彼を抱擁してゐなかつたのでもなかつた。社會改良に就ての彼の熱情は、當然彼の美術研究の中に胚胎し成長したものと見るのが至當である。此兩者は彼の頭腦の一つの核心から生じた二の幹であるが故に、其根柢は常に相觸れ、相結んでゐた。若しそれがさうでなかつたとするならば、美術批評家としての彼も、社會批評家としての彼も、恐らく其意義と光彩との半以上を減殺したであらう。

藝術の頽廢と社會道德の缺陷との間に、密接な連鎖を發見したものはラスキンであつた。彼の信ずる所に據れば、人間の作品の醜劣は其時代が有する社會的疾患の徵候である。彼は政治も、經濟も、産業も、建築や、彫刻や、繪畫とひとしく人間の作品として、批評觀照の對象とした。彼の時代に於ける英國の是等の作品が、美術批評家としての彼に與へた藝術的醜劣の感は、同時に文明批評家としての彼に社會的疾患として映じたのであつた。彼に取つては總ての醜きものは惡であり、總ての美しきものは善であつた。而して人間の一切の作品は此二つの範疇の何れかに歸せざるを得ないものであつた。其處に彼の思想の核心が据ゑられてゐたのであつた。

三　彼の少年時代

ラスキンは一八一九年二月八日に倫敦で生れたが、五歳の時に田舎に移り住んだ。當時大戰役はやつと片が附いたとは言へ、ナポレオンはまだセント・ヘレナから北方の地平線外を見詰めてゐた。軍功赫々たる海陸の將軍等は、外交の危機から内政の難關に轉じた政治家等と朋黨に相伍してゐた。文學界にはキーツやシエレー、美術界にはターナーやウヰリアム・ブレーキが盛に其創作を發表してゐた。産業革命は殆ど其完成に近づいて、新設の工場から揚る煤烟は日一日と多きを加へつゝあつた。人口は次第に增加して十歳にも足らぬ小兒は、兩親の生活難の犧牲となつて、監獄にも似た工場

の中へ送り込まれてゐた。蒸汽機關は用捨なく過去の文化を篩ひ落して、人心は舊道徳の羇から新文明のきらびやかさを、驚異の眼を以て眺めてゐた。

ラスキンは丁度かういふ時代に生れた。併しながら彼れは物騷がしい過渡期に於て、隔離されたやうな靜かな環境の裡に養育せられた。

不思議にも孤獨は生れ落ちるとからの彼の伴侶であつた。彼は一人息子として生れた。ヘルン・ヒルの彼の家は美しい樹木と農園とに取圍まれて、小鳥の囀る聲は旦から夕まで窓の外にきこえてゐた。彼には遊び友たちといふものがなかつた。毎朝母と共に聖書を一章づゝ讀むのが彼の最初の日課であつた。彼等は創世紀の第一章から始めて、一行一節をも洩すことなしに約翰默示錄の終りの章まで讀んで行つた。さうすると再び創世紀の第一章に復つて同じことが幾度も繰返へされた。此外に彼は早くから讀むことゝ、書くことゝ描くこととを教へられた。而して之は彼に最も樂しい課業であつた。彼は家の片隅に小さな「書齋」を與へられてゐた。そこで彼は讀み、書き、描き、或はいろ／＼な形や色の石塊に飽かず眺め入つてゐた。其當時から地質學は彼の興味の一つであつたのである。母は彼の將來をアーチビショップとして夢みてゐた。父は彼の未來を詩人として描いてゐた。彼の父は富裕なシエリー酒の商人として、實直な併し拔目のないビジネスマンでありながら、教養ある英國人に特有の文藝趣味を相當に有つてゐたらしい。稚きジョンは彼等が掌中の珠としていつくしまれた。併しながら彼には只獨りで置かれる間が最も樂しい時間であつた。彼には書物か畫帖かを手にして、花に、川に、雲に、山に、無言の友だちを求めて心ゆくばかり語り交す間が最も幸福な時間であつた。

毎夏父は妻とジョンとを伴うて長期の保養旅行を試みる習慣を有つてゐた。英蘭、蘇格蘭の美しい湖畔や溪谷、名ある建築物や美術館が彼等の目さす場所であつた。彼等は大形の馬車に詰込んだ手廻りの品物の間に揺られながら、到處

畫趣の豐かな、物皆が暢びりと落着いてゐる英國の田園を飽かず眺める。日が傾けば行く先々の最上の旅館の前に車を停めて、最上の室を求め、最上の食物と飲物とを選ぶ。かくてラスキンは樂しい夏を幾度か重ねて、齡十五に滿たぬ間に、祖國の名勝舊蹟は既に到らぬ隈とてもなかつた。そして彼は十五歳の時父に伴はれて始めて大陸に渡り、祖國の有たぬ自然と藝術とに接して、新に異常なる感激を覺えたのであつた。

これがラスキンの少年時代であつた。彼は多くの大人物に見るやうな轗軻不遇の試錬を經ないで人と成つた。やゝ長じて彼は英國に於ける最も貴族的の大學たるオクスフォードのクライスト・チャーチに送られたが、此處で彼を益したものは正規の學課ではなくて、自由なる讀書と交友から得た知見であつた。併し其間に彼は次第に已れを知つて來た。彼は父が期待したやうに詩人の素質を備へてゐたけれども、詩を書くことを本職としやうとは思はなかつた。彼は母が希望したやうに宗教家の熱情を有つてはゐたけれども、自ら祭壇に立たうとは思はなかつた。何となれば彼は詩を書くよりも、神を說くよりも、更になさねばならぬ天職を他に見たからであつた。

四　美術から社會へ

ラスキンが『近世畫家論』の第一卷を公にしたのは二十四歳の時であつた。此書が英國の讀書界に與へた驚異は、其文章の光彩あることよりも、其名譽ある大家を攻擊する勇氣よりも、其思想の豐富なこと、其智識の廣汎なこと、其觀察の高銳なこと、及其推理の犀利なことであつた。彼が『近世畫家論』を完結するまでには十七年を經過した。其間には『建築の七燈』が出で、『ベニスの石』が出た。『近世畫家論』に取扱はれてゐる題目は次第に擴大して、相互の間に聯絡を缺ぎ、又甚だ不統一でもあつた。それにも拘はらず、ラスキンは此書によつて最も好く知られてゐる。彼を著名

ならしめたものは全く此書であつた。シャーロット・ブロンテは「此書は私の眼を開いてくれた。」と言つた。實に此書は美術を見、自然を見るべき多數人の眼を開いたに相違ない。ラスキンはアンダーセンの一童話の中の少年の如く、すべての人は故ら無識を裝うてゐるのだとでも言ひたげに、一切の傳說に支配されることを拒んだ。彼はあらゆる專門家の權威を認めることを欲しなかつた。彼は徹頭徹尾自家獨特の見地に立つて、すべての物を自分の眼のみから觀察し且批判しやうとした。然り彼は正に斯くの如くであつた。併しながら英國の社會は斯くの如き新奇なる批評家を素直に受入るだけの準備を有つてゐなかつた。彼が一個卓拔なる美術批評家であり、大文章家であることは一般に認められたけれども、彼の美論の內容に就ては、當時の美術家も、美術鑑賞家も擧つて彼の說を承服しなかつた。國民中の勢力ある階級も大部分は彼に聽從することを欲しなかつた。彼を目して、偏見我執の衒學者と罵る者さへ尠くなかつた。

斯くの如き美術批評家としての彼の不人氣は、元來血性男子たる彼を驅つて、一層當時の上流社會や特權階級に對する嫌惡の念を深うせしめた。そして彼をして「人性は本來親切にして寛大であるべきに拘はらず、狹量にして盲目である。それは直に承認することの出來るもの丶外は、何物をも承認することを欲しない。」と歎ぜしめた。彼の信ずる所によれば、眞に價値ある藝術品は優れたる人格の持主によつてのみ創作せらたるものであり、又優れたる人格の持主によつてのみ鑑賞せられるものである。此故に若し眞實の藝術品を鑑賞することを得ないで、劣等なる藝術品のみを珍重するやうな社會は、畢竟劣等なる人々によつて支配さる丶社會なのである。而してラスキン自らが高貴なる藝術品と、凡庸なる藝術品とを如何にして識別すべきかを、懇切熱心に敎へたるに拘らず、國民の大部分が彼の敎義を承服しないで、依然凡庸なる藝術を尊重してゐるのは、彼から見れば確に國民の大部分が道德的に墮落してゐる證據であつた。彼は此墮落の原因を探究した。そして彼は終にそれを產業革命以來劇變した所の英國の經濟狀態に歸したのであつた。

己的なる産業萬能主義と、それから結果したる物質的文明の謳歌と、人間を物慾の結晶としてのみ取扱ふ經濟學說の普及等が交々作用して不健全なる思想をはびこらせ、社會的正義を蹂躙しつゝあつたのであつた。そして是等の道德的頽廢によつて現實に最も惱まされ、虐げられつゝあるものは實に勞働者と貧民とであつた。當時彼が悲慘なる下層階級の生活に對して、如何に同情し痛憤したかは『フォルス・クラビゼラ』の中の次の一節によつても察せられる。「私は畫くことも、讀むことも、鑛物を眺めることも、私の好きな何事もすることが出來ない。朝日の光すら私には厭ふべきものとなつた。何となれば私が知り、私が視た所の悲慘事は、若し私がそれを知らなかつたら、如何なる想像だも、もつと酷くは考へ得られなかつたらうと思はれる程だから。私は最早とてもおとなしく我慢しゐる譯には行かない。それだから私はこれから先、私を援けてくれる二三名とでも又大勢とでも、此悲慘事を取除くために、私の貧弱ながら最善の力を竭さなくてはならない。」

ラスキンは正に斯くの如く視且考へた。玆に於て彼は美を說くよりも先づ道を說くの急務なるを悟つた。彼は如何にもして道德的墮落から國民を救濟することが己れの第一の使命であると感じた。かくて彼は美術批評家から一轉して社會批評家となつたのであつた。

ラスキンが觀察したやうに當時の英國が、眞に道德的頽廢に瀕してゐたかどうかは疑問である。併しながら少くも國民中の指導的地位に在つた政治家、實業家、經濟學者の徒が殆ど全部帝國主義者であり、工業立國論者であり、經濟的世界征服の計畫者であつたことは疑ひない所である。彼等は資本を尊重し、機械を讃美し、驚くべき工業の進歩と貿易の發達とによつて、世界の商權を掌握して莫大なる富を蓄積しつゝあつた。彼等は當時富を造るの術に於て他の何れの國民よりも卓越してゐたが故に、能く富を以て自らの福利を増進し、富を以て國家の强大を致した。彼等が富を讃仰し、

從つて富を造るに都合の好かつた當時の經濟學說、政治組織、產業狀態を是認してゐたことは固より當然であつた。然るに此の如き富の心醉者に對つて、「生命の外には富はない！愛と喜と讃美との一切の力を抱擁するものは、只生命あるのみではないか。」と絕叫して、富の非道德性を高調し初めたるラスキンの新說が、彼等の憎惡擯斥を買ふに十分であつたことは想像するに難くない。彼が社會批評家としての最初の論文が、彼に同情を寄せてゐたサツカレーにすら、中途から其公表を拒まれたことも怪むに足りない。併しながら彼は其所信を固守して一步だも退かなかつた。彼は弱き者に代つて强き者の慈愛に訴へやうとした。彼は貧しき者に代つて富める者の良心に訴へやうとした。彼は何者をも懼れず何人にも憚らず、自己の信ずる正義と人道と尊敬と服從とを高唱して止まなかつた。

彼の社會批評は論理によつて讀者を說服せんとするよりも、寧ろ讀者の隱れたる理性を呼び覺すために、其人の想像力に訴へることを主眼としてゐた。これは勿論一部は彼の性格から出たことではあつたが、同時に巧なる方法であつたとも言へる。何となれば彼は零細なる多數の事實を穿鑿して、其間から一個の理論に歸納し來る手際に於ては、到底正統經濟學者の敵ではなかつたからである。彼は端的に人の感情を通して彼の信ずる眞理に到達せしめやうとした。しかするがためには先づ其人の想像力を利用することが最も有効な手段であつた。あらゆる人々の生活を自己の經驗として感じ、其動機、其過程、其影響の眞相を十分に理解するがためには、想像力を働かせるより外に途がない。ラスキンの美術批判の根柢が「人の情緖と人の希望」とに在つたやうに、彼の社會觀察の基點もつまりそこに在つた。彼はかう言ふ。「勤勞なき生活は罪であり、美術なき生活は殘忍である。」併しながら餘閑もなく、怡樂もなく、趣味もなく、溫情もない工場の何處に美術を容れる餘地があらうか。すると彼は又かう言ふ。「美術家の最初の任務は國土を淨化し、人民を美化するに在る。」彼から見れば、勞働者の服裝も美術の一部であつた。勞働者の住宅も美術の一部であつた。工場の建築

も、鐵道の敷設も、美術の一部として考慮せらるべき筈であつた。況んや寺院をや。若し勞働者が長時間の勤務の過勞のために、寺院へも行くべき暇をも有たなかつたとしたら、彼等は天上に安息を求めるために、一日も速に地上の煉獄から取り去られんことを欲したであらう。彼の社會論は畢竟彼の美術論の續篇であつた。

五　正統經濟學の檢討

社會批評家としてのラスキンの事業は、經濟學者としての彼の著作に於て其高調に達したと言つて可い。併しながら「正直なる生產」と「公正なる分配」と「賢明なる消費」とを力說する所の彼の經濟學說なるものが、アダム・スミスやリカルドオによりて建設された正統經濟學に如何に緣遠いものであつたかは、更めて說くまでもない。

所謂正統經濟學なるものは、ラスキンの時代に於て、利己的動機からの富の生產及增殖を是認し、資本主義の道德性を辯護するのに最も都合の好い學問であつた。而して際限なき勞働の分割と、拘束なき勞働者相互間の就職競爭と、完全なる雇傭契約の自由とが、富の生產を最大ならしむる主要條件とせられてゐた。而して其富を量的にのみ考察し、之を評價するに貨幣的尺度を以てし、富の所有者の智能品性の如きは、富の本質及作用を經濟學的に硏究する場合には、全然度外視されなければならぬものであるとしたことが、正統經濟學の堪ふべからざる錯覺としてラスキンには感ぜられた。彼はかう言つた。「古往今來多數の人心を蠱惑した謬想も尠くはない。併し近世の所謂經濟學なるものゝ如きは、蓋し其最も醜怪なるものであらう。」かくの如き經濟學を檢討するがためには、彼は其理智的能力と道德的熱情との總てを傾注しなければならないとした。彼は恰も聖地を邪敎徒の手から奪還せんとする十字軍のやうな意氣を以つて起つた。而して彼が攻擊の方向は二つあつた。其一は現存の工業經營法の不正義と非人道とを暴露することであり、其二は

正統經濟學の詭辯と、混淆と、非論理とを說破することであつた。而して結局は此二つを一つにして彼自身の人道的經濟學を建設することであつた。

何故に彼が人道的經濟學の建設といふ事業に、其熱烈なる努力を捧げるに至つたかを理解することは困難でない。前にも說いたやうに、彼の美術に對する研究は、藝術品の出來ばえと藝術家の品性との間に、密接なる有機的關係の存することを彼に悟らしめた。人の作品は結局作者の人格の示現に外ならないといふ信念が彼の藝術觀の基調であつた。そして彼は等しく人間の作品たる政治にも、產業にも、學術にも、美術と同樣の理法を當てはめて然るべきものであると信じた。

かくて彼が眼を美術から社會に轉じた時に、彼は現代の議事堂に、敎會に、學校に、工場に、醜陋なる作品の堆積を見た。殊に彼は大都市の內外に、日に日に殖えて行く工場の中に、最も唾棄すべき作品の夥しいことを知つた。そして彼は是等の作品を通して其作者の醜陋賤劣なることを知つたのである。少くも彼はさう信じたのである。彼は田園から、牧場から、家庭から、寺院から遠く離れて、牢獄にも似たやうな工場の機械の間に挾まれつゝ、長時間の作業と粗惡なる食物のため、疲勞困憊した產業革命の犧牲者に取つては、其生命に歡びを與へ、其肉體に慰安を與へ、其品性に美を與へる機會の永久に失はれつゝあることを知つた。而して一方に於ては少數の貴族が懶惰にして贅澤なる生活を營み、僭分限の富豪が私利我慾に熱中しつゝあることを知つた。而して斯くの如き嫌惡すべき作品と作者とを謳歌し、肯定し、支持し、奬勵するものゝ實に正統經濟學に在ることを發見した。玆に於てか彼は慨然として擊破しなければならない敵の策源地の所在を知つたのであつた。

六　「勞働者は靈魂の持主である」

ラスキンが經濟學に眞劍に注意を拂ひ初めたのは一八五五年頃からであつたと思はれる。それから二年の後、彼はマンチエスターに於ける『美術の經濟』と題する講演に於て、美術品を營利の目的に供することの害毒を痛論したことがあつた。併し彼が始めて鋭鋒を經濟問題の核心に突入れたのは、一八六〇年にサツカレーの編輯してゐた雜誌『コーンヒル』に寄せた、『名譽の根柢』と題する一論文であつた。彼は此論文に於て主として、正統經濟學者が、傭主と勞働者との關係を、相互我慾の對立と觀じ、其間に正義も友愛も介在せざるものとして立論することの根本的に誤謬であることを立證しやうとした。彼は曰く假令「人々の利益が相反してゐたからと言つて、是非とも彼等が相爭はなければならぬといふ道理のないことを、經濟學者は一人だも記憶してゐないやうである。」彼から見れば、「傭主と勞働者との正當なる關係及双方の最善の利益は、唯兩者の正義と愛情とに依る」ものである。彼は此道理を説明するためにかう述べてゐる。若し勞働者が蒸汽や磁氣等の動力によつて働く機關であるならば、正義も愛情も勞働者に對しては無用であるに違ひない。併し勞働者は靈魂の持主である。彼は靈魂を動力として働いてゐる。而して此不可思議なる動力は、經濟學者の與り知らぬ間に、すべての方程式の中に乘除せられて、經濟學者の答案を一々虚僞のものたらしめてゐる。此故に「經濟學者の羅列する總ての動機とか條件とかを無視し去る時に、始めて愛情が眞の動力となつて働くのである。」而してそれが結局は經濟の目的にも適ふことになるのである。「經濟的の打算を棄てゝ、只温情を以て勞働者を遇せよ。」しからば其結果は自ら傭主に經濟上の利得を齎すことになる。

更にラスキンは此論文によつて賃金問題に對し、普通經濟學者の思ひも寄らぬ解釋を與へた。彼の信ずる所によれば、傭主は被傭者を選擇するの權利は有つてゐるけれども、其報酬を増減するの權利は有たない筈である。若し傭主が擅に賃金を増減するならば、被傭者の間に競爭が起つて、正當なる金額以下の賃金にも甘じて働かなければならぬ者を生ず

る。さうなることは傭主被傭者間の正義と愛情との關係を危殆ならしめて、社會の福利を損ふがゆゑに之を回避しなければならぬ。然らば謂ふ所の正當なる賃金額は何を標準として定むべきであるか。之に對するラスキンの見解は、『現世の審判者』と題する別の論文に示されてゐる。彼は曰く――勞務に對する絕對に公平なる報酬は、勞務者が他人のためにしたと全く同一なる時間と力量と熟練とを、他人から勞務者に返濟することの外にはあり得ない。即ち互に同量同質の勞務を交換することを以て、報酬に對する正義の原則としなければならぬ。併し言ふまでもなく現代に於ては此原則を文字通りに實行することは不可能である。此故に實際の賃金額を定むる標準としては、勞務者が他人に提供したのと同量同質の勞務を、他の何人からでも供給せしむることの出來る金額を以てすべきであると。但ラスキンも斯くの如き方法を以て賃金額を算出するにはいろ／＼な困難の伴ふことを豫想してはゐる。「併し其等の困難は勞務交換の原則に影響を及すべきものではない。」

次にラスキンは『名譽の根柢』の最後の部分に於て、實業家の社會に對する義務を高調して、最も善く彼の人道的經濟觀の基本精神を明にしてゐる。彼は先づ軍人の職務は國民を守護するに在り、牧師の職務は國民の敎化に在り、醫師の職務は國民の健康を保つに在り、法律家の職務は國民のために正義を執行するに在り、而して商人（彼は日本語の實業家といふやうな意味で商人といふ語を用ゐてゐる。工業家も勿論其中に含まれる）の職務は國民に物資を供給するに在るとした。而して是等の人々は右の自己の責任を完ふするがためには、常に國民のために一死を捧げるだけの覺悟を有つてゐなければならない。しからば是等の人々は果して如何なる場合に於て國民のために死すべきであるか。彼はかういふ。「軍人は戰場に於て自己の任務を棄てるよりは、醫師は疫病に際して自己の任務を竭さないよりは、牧師は虛僞を敎へるよりは、法律家は不正義を默認するよりは寧ろ死を選ぶべきである。然らば商人は如何なる場合に於て死す

であるか。」

ラスキンは此問題に對してかう答へた。商人の任務は國民に物資を供給することである。然らば物資供給の目的が、自分だけの利益の獲得に在つてはならないことは、給料を貰ふことが牧師の目的、謝禮を貰ふことが醫師の目的であつてはならないのと全く同一である。若し商人が誠實なる人間であるならば、利益の有無に拘はらず、否場合によつては如何なる犧牲を拂つても、其任務を果さなければならない筈である。即ち「彼はあらん限りの力を盡して、物資を充分に生產し又は獲得して、最も必要を感じてゐる場所に　これを最廉の價格を以て配給するに努めなければならぬ。」從つて不景氣に際し工場主が氣儘に職工を解雇するが如きは、許すべからざる社會的罪惡である。ラスキンはかういふ。「軍艦の艦長が難破の場合に、最後まで船に留つて、パンの最後の一片をも水兵に分つのが其義務であるやうに、工場主は如何なる產業上の危機或は災害に遭遇しても、部下の職工と苦痛を俱にし、自ら多くの苦痛を忍んでも、職工の苦痛を輕減してやるだけの覺悟を有すべきである。丁度それは人の親が、飢饉、難船、戰爭等の場合に、吾兒のために自己を犧牲にするのと同樣でなくてはならぬ」と。即ち彼は商人は私利私慾のために物資の生產販賣をするよりは寧ろ死を選ぶべきものであるとするのである。

かういふラスキンの議論が當時の人心に譫言の如く感ぜられたことは彼も能く知つてゐた。併し彼は斷じて其所信を枉げなかつた。「右の如き私の說は悉く奇怪に聞えるかも知れない。併しこれが奇怪に聞えるといふ事實こそ、眞に奇怪千萬なことなのである。」此故に此說に背馳する一切の學說は「不合理にして國民生活の進步と兩立せざる」ものと彼は斷定したのである。

七　富の非道德性

經濟學者としての彼の最初の論文が、唯冷嘲熱罵を以て迎へられたに拘はらず、彼は直に其第二論を公にした。彼は此論文によつて、主として富の本質及作用に對して、正統經濟學の謬論を説破しやうと試みた。

彼は「富」なる語の意義に就ては、ジョン・スチュアート・ミルの「富は交換價値を有する總ての有用（ユースフル）にして快意（プレジュエーブル）なる物から成る。」といふ見解を多少の留保を附して承認した。併しながら彼はミルの「富むとは、多くの有用なる物を所有するをいふ。」は須らく「吾等が使用し能ふ有用なる物を所有することなり。」と修正すべきであると主張した。彼から見れば此修正は「重大なる變化である。何となれば、富は只單に有つことではなくして、能ふことであるからである。」所有するといふことは絶對的の力ではなくして、相對的の力である。其程度は所有せられる物の分量や性質によつて異るばかりでなく、それを所有する人が其物を使用する能力に比例して變化するものである。甲の手に在つて有益なる物品も、乙の手に移ると有害なる物品となることもある。從つて物が有用であるがためには、其物が性質上有用であるのみならず、同時に又有用なる人の手に存しなければならぬ。此故に或物品の價値の有無及其程度は、其物品の所有者の人格と離れて考へることの出來ないものである。從つて富は有能なる人物が有用なる物を所有する場合に於てのみ存することになるのである。例へば千金の名畫も、全然美術の鑑賞力を有たない者に取つては、三文の石版刷の繪も同樣である。千里の駿馬も乘馬術を心得ない者に取つては、駄馬と同樣の效力しかない道理である。

ラスキンは右の如く富の價値は、其富の效用を發揮することの出來る人によつて所有されてゐる場合にのみ存するものとして之を「眞正なる價値（イントリンシック・ワリュー）」と名けたが、更に進んで彼は此「眞正なる價値」なるものは、正義と愛とのために之

用することの出來る人によつて所持された場合でなければ、單に私慾の具に供せらるるに止つて、人類の幸福には何等稗補する所のないものとした。恰も彼の美術論と同様に、富の眞の價値は結局富の所有者の品性に據つて或は存し或は存せざるものとなるのである。即ち彼の價値論は普通經濟學の範疇から一躍して倫理學に突入して行くのである。

右の如く議論の題目を一定の範疇に限らないで、物質から精神に、經濟から倫理に、絶えず焦點を移動させたことが彼の論理を紛糾せしめ、延ゐて彼の說全部が非科學的であるとして、アカデミツクな學者から本氣で相手にされなかつた重な理由であつた。併しながら彼の價値と品性との關係は、彼の思想の樞軸ともいふべき重要なる一點である。彼は如何に富を生產し蓄積しても、其富が品性の立派なる人によつて所有されなければ、其價値は生じないものとした。此故に眞正なる經濟學に於ては、單に富の生產增殖を攻究するだけでは足りない。富の眞の價値を發揮し得るやうな品性の養成に努めることが何よりも大切である。併しながら彼も立派なる品性と富の增殖との兩立が甚だ困難であることは能く認めてゐた。彼はかういつた。「眞の經濟學に取つての難問題は、立派なる品性と物質的の價値とが兩々相俟つて富を造るものであるに拘はらず、此兩者は相互の上に破壞的の勢力を有するといふことである。何となれば立派なる品性を有する人は物質的價値を輕視し易く、物質的價値は立派なる品性をも害し易いからである。」此故に秩序ある社會に於て能く富を成し得る人は勤勉、剛毅、機敏、正確等の長所を有つてゐる人か、さなくば貪慾、無智、無情の輩である。之に反して常に貧乏な人は愚鈍、懶惰、輕躁な人間であるか、さなくば寬厚、慈愛、俠氣等の美德を有する人々である。これは洵に悲しむべき矛盾である、

ラスキンは富及價値の本質を右の如くに論じたが、更に彼は富の作用に就て一層深刻なる觀察を下してゐる。彼は先づ經濟學を分つて政治的經濟學（ポリチカルエコノミー）と營利的經濟學（マーカンタイルエコノミー）の二つとした。而して政治的經濟學は國民のために有用にして快適なる

物質を、最も適當なる時期と場所とに於て生産し且分配して、國民の富と幸福とを増進すべき理法を攻究すべき學問であるとした。然るにリカルドオ及ミル父子等によつて完成せられた正統經濟學は、其名は政治的經濟學であつたけれども、彼から見れば實は營利的經濟學であつた。何となれば彼等は主として個人が私利のためにする經濟的活動を研究の對象として取扱つたからである。玆に於て彼も營利的經濟學の立場から個人の富なるものゝ作用を論究しやうとした。

ラスキンの考へた所によると、個人は如何に大なる富、即ち土地財貨を所有してゐても、それ自體に於ては一向有用でも快適でも有り得ないものである。何となればこの土地又は財貨を利用して他人を勞役し、自己の用をたさしめることによつて始めて富の個人的効用が生ずるからである。玆に於て營利的經濟學に於ての富なるものは、或個人をして他人の勞働に對する法律的若くは道德的の請求權或は支配力を掌握せしめることを意味するものであつて、必ずしも其個人の生存する國家の實際の財産又は幸福の增加を結果するものではないのである。彼はかういふ。「凡そ個人が富の名に於て眞に欲求してゐるものは、他人を支配する所の權力である。即ち狹い意味に於ては、自己の利益のために奴隷や商人や美術家をして勞務をなさしむる權力であり、廣い意味に於ては、國民の多數を富者の意のまゝに、善惡さまゞゝの目的に從うて指揮することの出來る權力である。」(『此最後の者にも』)

個人の富なるものを右のやうに解釋する當然の歸着として、富者の外に多數の貧者が社會に存在してゐなければ、富は其効用を發揮することが出來ないことになる。何となれば自己の生命の糧を得るがために、甘じて富者の頤使に服從する人間がゐなければ、富者は他人を支配せんとする其權力を實施する術がないからである。從つてラスキンは富者に對してかういふ。「汝の嚢中に存する一ギニーの金貨の力は、全く汝の隣人の嚢中に同樣の金貨が存せないといふ事實に因るのである。故に若し隣人が金貨に不足してゐないならば、汝の金貨は何の効用をも有たない。何となれば汝の金貨の

有する力の程度は、正確に汝の隣人が其金貨に對して有する必要若くは慾望に比例するものであるから。」(『此最後の者にも』)彼は更に此論理を徹底せしめてから斷じてゐる。「此故に營利的經濟學から言へば、自ら富を致すの術は、同時に且必然的に、隣人を貧しからしめる術となるのである。」換言すれば、「富を造る方法としては、自ら多くの金錢を蓄積するだけでなく、同時に又吾が隣人をして吾より少い金錢を所持せしめるやうに工夫することを要するのである。」(同上)

かくの如くラスキンは個人の富の增殖を本來非道德的なものと觀じたけれども、併し彼は社會主義者の言ふが如く、富の不平等が直に國民全體のために不利益なものであるとは斷じなかつた。彼から見ると、「右の不平等の是非如何は、其不平等が發生した方法の如何、及其不平等を利用する目的如何によつて定まるものである。富の不平等が不正な方法で實現せられたものであるならば、それを實現する途中に於て國民に禍したに相違ないし、又それが不正に指導せらるゝならば、其事實の存する限り一層國民を害するに相違ない。若し然らずして富の不正等が正しい方法によつて實現せられるならば、その實現の途中に於て國民を利するのみならず、それが高潔なる目的に使用せられるならば、不平等の存在によつて一層國民に幸ひするであらう。」(『此最後の者にも』)ラスキンの擧げた譬喩に從ふと、國家に於ける富の流通は自然人に於ける血液の循環と同樣である。愉快な感情や活潑な運動によつて血行の速まることもあれば、羞恥心や熱病のために速まることもある。此故に或瞬間に於ける血行の不順といふ表面の事實によつて、身體の健否を判斷するわけには行かぬと同樣に、國民間の富の移動も亦その道德的意義の如何によつて是非を批判しなければならぬ筈である。

右の如くラスキンは貧富の差の存在することを直に社會的疾患とは考へなかつたのみか、寧ろそれは人類の避くべからざる宿命とも觀じてゐたやうである。彼はかう言つた。「此世のあらん限り富と貧とが相反き相去り、富者と貧者とが

相逢ひ相對することは、川の流れて海に注ぐが如く、電氣を帶びた雲と雲とが其力を交すが如く、神の定め給へる必然的な世界の法則である。」此故に貧富の關係は「穩健安當である場合もあれば、病的であり破壞的である場合もある。それは海嘯の如く恐るべき暴威を揮ふこともあれば、漣の如く樂しげに睦み合ふこともある。耳朶に雷霆を飛すこともあれば、尊い靈火を點ずる愛のさゝやきとなることもある。」(同上)

併しながらラスキンは此貧富の關係を正當に調節して、憎みの原因とせずして愛の原因たらしめ、不正の源とせずして正義の源とすることは、主として社會の上流に在る富者の努むべき責任であるとした。何となれば彼等は最も智識あり、教養あり、理性と道德とに於て下流社會よりも優越してゐる人たちであるからである。かく社會の改造は上から下に對する正義人道の思想の發現に俟たなければならぬとするのが、ラスキンの渝らざる主張であつた。彼は『フォルス・クラビゼラ』の中でかう言つてゐる「汝等美食を常とす者よ、街道をさすらひ行く者を呼入れて其食事を彼と共にせよ。然らば汝等は何故に汝等の兄弟がさすらひ人となりたるかを次第に會得することが出來るであらう。そして汝等は貧しき者の食物が豐かなるに至るまで、汝等の食物を普通にして置くことが出來るであらう。然らざれば汝等は基督教徒とは言はれない。汝等美しき衣服を纏へる者よ、汝等の貧しき者どもが心地よく滑らかに着ることの出來るまでは、粗衣粗服に甘ぜよ。然らざれば汝等は基督教徒とは言はれない。汝等歌ひ且彈き能ふ者よ、汝等が毒を注ぎたる河邊の刈株の上に其琴を措き、或は汝等が造りなせる狂ひ、穢れ、又は聾となりたる者の群に入りて、彼等の聽の中に音律を吹込めよ。然らざれば汝等は基督教徒とは言はれない。」

八　彼の理想した社會

ラスキンが其頭腦に描いてゐた理想の社會を、吾等の想像の中に精確に再現することは甚だ困難である。彼はモーアーやカベーやフーリエー等がしたやうに、新社會の縮圖を細密に且組織的に寫し出しもしなかつた。又マルクスがしたやうに、過去及現在の社會に對する批評の論理的歸着として、當然將來に出現すべき社會の基本的條件を示しもしなかつた。從つて吾等はラスキンの理想した社會を窺ふがためには、彼の數ある著述の中から、其斷片(フラグメント)を拾ひ集めて、之を繋ぎ合せて見るより外に適當な方法はないのである。

併しながら元來ラスキンの社會及經濟に關する著述は、大部分『此最後の者にも(アンツー・ジス・ラスト)』、『ムネラ・パルベリス』、『時と潮(タイム・エンド・タイド)』『フォルス・クラビゼラ』等の數書に收められてゐるのであるが、是等の諸書は多數の論文及書簡を輯錄したものであつて、各論文の間には判然した論理的の連絡もなければ、又一論文中の題目も屢々彼方此方に右往左往し、首尾を通じ一脈の論理を追求して一箇の眞理を探究するといふやうな態度は、ラスキンには極めて稀であつた。從つて彼の著述は僅少の例外を除けば、殆ど全部が雜感隨筆の體樣をなしてゐると言つて可い。これは直覺的な、熱情的な、且幾分かエキセントリックであつた彼としては恕すべきであるけれども、彼の思想を科學的體系の上に再建して見やうと企てる者に取つては、甚しい支障をなすのである。例へば彼は不完全な部分的の設計のみを遺して突然死した大伽藍の建築技師のやうなものである。吾等が是等の斷片を寄せ集めて全體を描出さうとすると、どうしても吾等が想像のセメントを以て塡充しなければ繋ぎ合すことのできないやうな闕隙を幾つも發見するのである。又强ゐて繋ぎ合せて見ても、双方の素材や、色彩や、デテールに相違があつて、甚だ不恰好なものになつてしまふ所も尠くない。甚しきに至つては、當然シンメトリカルであるべき筈の部分に寸法や形狀の相違があつて、どちらか一方を修正しなければ全體を不具にしてしまふやうな所さへ出て來る。從て私は此際そんな困難な、そして讀者のためには退屈な企てを廢して、唯ラスキンの理想した社

會の斷片を——主として其經濟的の部分のみを玆に羅列するだけで、姑く責を塞いで置きたい。

ラスキンの理想した社會に於ては、結婚は個人の自由に放任されてはならなかつた。何となれば「一切の衞生的及道德的法則の基本は結婚を愼むに在る。淫蕩は如何なる形式方法に於ても醜陋にして無分別である。他の如何なる放縱も結婚に於ける放縱ほど人に害毒を及ぼすものはない」からである。此故に彼は人種改良の見地から、國家は個人の結婚に干渉を加へ、年齡、體質、所得に於て將來の良民を生むべき資格を有する者に限り之を許さるべきものとした。

併しながらラスキンに於ては夫と妻との本分は判然と區別されてゐた。「男の力は活動的であり、進歩的であり、又保護的である。彼は主として行ふ者であり、創造する者であり、發見する者であり、護衞する者である。彼の精力は冒險のために、戰爭が正當である場合には戰爭のために、征服が必要である場合には征服のために用ゐられなくてはならない。併しながら女の力は治めるためであつて、鬪ふためでなく、彼女の才智は發明や創造のためではなくして、美しき秩序、整頓、決定のためである。」(『胡麻と百合』)すべて男子は自己の天性を完成し、之を以て社會に貢獻するがために智識を欲求する。併しながら女子は男子の事業を理解し、それを助けるために智識を必要とする。「從つて女子の智識は智識としてゞはなく、知るといふことを共目的としてゞなく、唯感じ且判ずる」ためでなくてはならない。此故に良淑なる妻であり、溫良なる母であり、賢明なる家庭の守護者であることが、女としてのラスキンの理想であつた。

次に彼の理想の社會に於ては、敎育はすべて國家の任務とせられた。それがために全國到處に、政府の費用を以て學校を建設し、國家の管理の下に一切の兒童を玆に就學せしめる。敎課の第一は體育であり、第二は尊敬と同情との二大美德である。而して學課としては歷史、博物、數學、語學等を主とするが、都會の兒童には數學及工藝を、田舍の兒童には農事に關係ある動植物學を、海員の子弟には地理、天文其他海の動植物學を授けて、他日の就業の準備とする。し、

も是等の學校を經營する費用は、是等の學校を設立した爲に減少する犯罪に依つて、十倍も儲け出すことが出來るとラスキンは斷じてゐる。

ラスキンの理想の社會に於ては、何人と雖も健康である限りは、貴賤の別なく無爲徒食することを許されない。併しながら各人の職業の割當に就ては、彼は一種の宿命觀を抱いてゐたやうに見える。彼の說く所によれば、人はすべて其出生に應じて先天的に各自の生活及職業が定められる。從つて之に適順して各自の本分を竭すのが、全體としての社會の福利であるとした。高尙なる業務、卑賤なる業務、農業、工業、商業、官吏、軍人各々之に適する人を以て之に當てる。但罪人は懲戒の意味を以て危險若くは不愉快なる作業に當らしめなければならぬ。

上流の出生の者は概して言へば最も武術に優れ、學藝に秀で、思慮に富みたる者どもである。從つて彼等の中の力强き者は「惡德の制禦及懲戒、並に法律と秩序との一般的維持を主たる任務とすべきである。唯彼等の腕力に對する原始的の服從からは、何人も當然解放されなければならない。」又計畫と實行とに於て勝れたる者は「愚なる者、弱き者及怠け者の監督を以て其任とすべきである。商工業の組織及貨物分配の方法を定め、飢餓或は不注意や愚昧の原因から下流階級を困窮せしめないやうに、又各人の才能に應じて產業上に協調せしめるやうに努力すべきである。」又學問藝術に秀でたる者は、言ふまでもなく「民衆の敎化及慰安を以て其任としなければならぬ。」之を要するにラスキンは「上流社會全體としての責任は、下流社會の間に秩序を維持し、常に下層人民の才能に應じて、彼等を上流の最も高い水準まで引上げてやることに在る」としたのである。(『時と潮』)

ラスキンの理想した社會に於ては、地主は地代を收入することを許されなかつた。彼は必ずしも社會主義の土地國有論を其儘には贊成しなかつたけれども、個人の土地所有權には十分拘束を加へて、其管理權を政府に收むべきであると

した。彼の案に從ふと、政府は國民各自の希望と、其能力とに應じて、土地を大小種々に區劃し、各人に割當てゝ耕作せしめる。此場合地主は其所有地の開墾に對しては政府から給料を支給される代りに、不勞所得たる地代を農夫から徴收することを許さない。

ラスキンの理想した社會に於ては、一般の製造工業に從事する者を養成するために、政府管理の下に國民學校を設けて、先づ少年男女に其基礎智識を授ける。それは大體に於て職人の子には職人に、百姓の子には百姓に、軍人の子には軍人に必要なる科目を選擇する。無論其處では初歩の實務をも練習せしめる。それから成年の男女にして、職を失つた者は直に最寄の學校に收容して、試驗の上適當な業務に就かしめ、一定の賃金を給與する。若し彼等が無智なため其業務に堪えない時は上記の學校に於て訓練し、又病氣のため就業の出來ない場合には施療する。故なくして就業を肯ぜない者に對しては、最も嚴重なる制裁を加へ、比較的苦痛の多い職業或は鑛山の如き危險なる勞務に服さしめ、其賃金は其者が改悛したる後に拂渡すことゝする。

右の學校に關聯して國家は政府の管理の下に、「工場及製作所を設立し、あらゆる生活上の必要品を生産、賣却せしめ、又あらゆる有用なる技術を練習せしめる。但決して私人の企業に干渉せないのみならず、私人の營業には何等の拘束も加へず、税金をも課せない。彼等が最善の努力を致し、能ふべくんば政府事業を壓倒することも亦妨げない。只政府の工場や店舗に於ては、精良にして模範的なる物品のみを製造し、純良眞正なる品質の物品のみを販賣することゝする。若し何人と雖も、政府の指定する代價を拂ふならば、麵麭である麵麭、麥酒である麥酒、仕事である仕事を求め得ることが確實でなくてはならない。」(『此最後の者にも』の序文)

ラスキンは社會主義の如く資本の公有を主張しない。政府は種々なる産業を經營はしても、決して私人の企業に干

を加へない。併しながら彼は一面に於て、商工業者が營利を目的とすることが種々なる社會的惡德の源泉であることを說したのみならず、地代と同じやうに利子の廢止をも唱道した。彼はかういふ。「高利貸の商賣は絕對に禁ずべきである。傭主は彼の資本に對してゞなく、其作業管理に對して正當に報酬さるべきであり、地主は開墾管理者として能く其成績を擧げたる場合に報酬さるべきである。」(『フオルス・クラビゼラ』)かく一切の不勞所得を否認した點に於ては、彼も一箇の社會主義者であつたと言へる。併し彼は斯くの如き條件の下に於ては、如何に彼が私人の企業を抑壓しないとは言つても、租稅を資本とする政府の事業に對して、競爭に堪へる私人の滅多に有り得ないことには氣付かなかつたやうである。

更にラスキンの理想した社會に於ては、老廢者と極貧者には、國家から給養と住居とを與へる。彼は此制度によつて眞に不幸なる者と自己の罪惡のために困窮に陷つた者とを識別することが出來るからして、かゝる救助を受けることは其人に取りて決して不名譽ではないとした。

ラスキンは又一般の工業に從事する勞働者に對して、熱心にギルドを組織すべきことを勸說した。彼の考案したギルドなるものは同一部類の工業に從事する勞働者が相寄つて任意的に組織し、相互の出資によつて土地及資本を求め、生產及販賣を行ふ所の產業的自治團體である。各ギルドは數箇の工場に分れ、各工場の生產方法、數量、價格、賃金、利潤等は每年一回會員の總會に於て之を定める。各會員は或標準數量を製作すべき責任を有ち、標準數量以上の製作をした場合は、各工場に於て適當に處分する。各工場はギルドの中央理事者の監督に服し、其中央理事者は會員の互選によつて定める。ギルドの製作品は月給制度の販賣人をして販賣せしめ、同時にギルドに加入しない者の自由競爭を許すことは官營事業と同一である。」

ラスキンはギルドによつて一種の産業自治を提唱したけれども、彼の意は現代の勞働組合が要求するが如き、大規模なる産業民主主義の發現ではなくして寧ろ單に中世のギルドの修正に過ぎなかつたのではあるまいかと想像せられる。何となれば彼は幾多の機會に於て、智能の劣等なる勞働階級が、自らの運動によつて現社會の弊害を矯正するだけの實力を有つてゐるとは考へず、又それは人類相互の尊敬服從等の美徳を傷ける危險なる方法であると考へてゐたことを、明言してゐるからである。彼は決して下からの社會改造を豫想しなかつた。社會改造の大事業は必ず上流及智識階級の正義と愛とに由らなければ成就することの出來ないものであるといふのが、彼の信念であつた。尚彼と民主主義との關係に就ては後に說かう。

ラスキンの理想とした社會に於ては、機械の應用は最低限度に止むべきであつた。已むを得ずんば風力と水力とによる機械のみを許し、蒸汽力による機械はすべて之を廢止すべきであつた。彼が機械を憎んだ重な理由は三つある。第一はそれが勞働の人間性を破滅せしめるからであつた。彼の說く所によれば、機械の應用はます〱作業の順序を細分して、何人も自己の製作しつゝある物の極少部分しか見ることが出來ない。從つて何人も勞働の完成に對しての興味を有ち得なくなるがため、創造力も想像力もそれがために麻痺してしまふ。かくの如き作業の分割は結局人間其者をも分割して一人を一人よりも小なるものたらしめ、人の器用も自由も奪取つて、喪心したる機械の奴隸に化せなければ息たない。手工業に於ては人が道具を使用するが、機械工業に於ては道具が人を驅使する。彼から見ればこれは人の生活の慰樂を根底から覆すものであつて、ゆゝしき人道（ヒューマニティ）の問題であつた。

彼が機械を呪詛した第二の理由は、都市生活の破壞であつた。機械は由緒ある都を化して工場とする。それは煤烟と喧騷と醜穢との中に都市を監禁して、一切の都市のチヤームを掠奪する。而して樹木を枯らし、河流を濁し、農園を荒

らし、都市の住民をして、新鮮なる野菜も牛乳も玉子も味ふことを不可能ならしめる。かくの如くにしてまでも機械的の大量生產を行はなければならぬ理由を、彼は營利的經濟の外に見出し得なかつた。

彼が機械を好まなかつた第三の理由は、それが自然美及藝術美の敵であつたからである。彼は『フオルス・クラビゼラ』の第一書簡に於てイングランド及ウエールスから一切の鐵道を除却せよと極言してゐる。勿論此說は後に至つて緩和されたけれども、瑞西又は英國の湖水地方に汽車を通ずるが如きは、彼には許し難き「美」に對する冒瀆であつた。農業に機械力を應用するが如きも、田園の情趣を全然破壞するものである。織物の如き美術工藝に機械を輸入することも忍び難い藝術の蹂躙である。凡そ彼の如き美に對する感覺の極めて鋭敏であつた者に取つては、機械の與へる醜惡の感は實に堪へ難いものであつたことは想像に難くない。併しながらラスキンの機械排斥は、彼の社會改良論を非科學的だと一般に考へさせる重な理由の一であることを拒む譯には行かない。

九　彼と民主主義及社會主義

「自由あること勿れ。公布せられたる法律と、其職に在る人々には卽座に服從せよ。平等あること勿れ。あらゆる優れたる者を是認し、あらゆる劣りたる者を非認せよ。」これがラスキンが民衆に說教したる政治道德の基本であつた。彼は下層階級の生活に對しては常に深厚なる同情を寄せ、貴族富豪等の貪慾專橫を憎むことに於ては、何人にも讓らなかつたに拘はらず、彼は終に自由主義者でも民主主義者でもなかつた。彼から見れば近世の民主主義は無政府主義と擇ぶ所がなかつた。彼はそれから期待し得べきものは唯無秩序、無節制、亂雜、放恣なる社會的渾沌狀態あるのみとした。彼は民主主義を以て、人　人と、階級と階級との間に在る自然の優劣を無理强ひに、人爲的な數學的の平等に押込める

ものであつて、其結果は只德敎と紀律の頽廢を招くに過ぎないとした。此故に彼は政治上の自由運動に對してはすこしも同情を有たなかつた。ナポレオン三世が陰險なるクーデターによつて反對黨の共和論者を一網打盡した當時に於てすら、彼はナポレオン三世を呼ぶに「堅實にして聰明なる」といふ形容詞を以てすることを躊躇しなかつた。年々歲々數萬の彼の同胞が憧れ行きつゝあつた大西洋の彼岸の自由の新天地も、彼に取つては「城廓も貴族も有たぬ」卑しむべき邦土に過ぎなかつた。そこでは總ての人民が選擧權を有し、自分等の元首と裁判官を選擧するといふことが、彼には忍び難い嫌厭の情を催さしめた。かくの如き國の特長は「何人をも崇敬せざらんことを人民に敎ふる」猥雜卑陋の俗界として彼の眼に映じた。

惟ふにラスキンの貴族主義は大部分彼の人格の眞髓から發する所の美的情緖に基いてゐたのではないかと思はれる。これは彼に取つては理智を超越したる本能的の傾向であつた。彼の機械排斥と民主主義否認とは、彼の人格の一つの要素から發したる二つの示現に外ならないと私は思ふ。彼に取つては人間の起居動作一切のものが藝術であつた。一般の政治家も學者も實業家も全然美的觀念から離れて考察し、且考察しなければならないとする現實的な問題ですら、彼には其理智の上からでなく、其情緖の上から、之を美的觀念から引離して考察することが不可能であつた。彼には如何なる場合に於ても美術品と實用品とを區別して考慮することが出來なかつた。彼は紡織機械が、安價にして淸潔なる被服を生產し、汽車が急速に都鄙の必要品を配給し、機械鋤が著しく百姓の勞苦を輕減することによつて、如何に國民の文化的生活に裨益する所が多いかを會得する前に、彼は先づ大仕掛な紡織工場の俗惡なる建築、煤烟によつて溷濁する都市の天空、不快なる音を立てゝ運轉する無趣味なる器械、其器械の傍に塵埃に塗れて終日立ちつくす婦女少年、草靑く鳥囀する農村から、せゝこましき職工長屋に移つた彼等の生活、こんなものが一緖になつて、ラスキンの美的情緖を極度に衝動し、

彼に工業の繁榮を呪詛せしめずには置かなかつた。これと同じ美的情緒が彼をして、國民崇敬の中心たる國王なく、共壯麗なる宮殿なく、都雅なる貴族や優婉なる貴夫人なく、一枚の畫に數萬金を惜しまぬ藝術の保護者もなく、國民から愛慕せられる詩人も美術家もなく、總ての美しきものを無視して、一切の問題を唯功利的にのみ考察し、凡俗の理論と多數決とによつて萬事を機械的に處理しやうとする民主主義を拒否せしめたのであつた。此故に彼は寧ろ封建政治を謳歌するが如き口吻を洩すことさへ稀ではなかつた。

斯くの如く感情の上から何うしても民主主義に共鳴することの出來なかつた彼も、一度當面の問題から離れて、冷靜な歷史的批判に入ると、必ずしも封建政治の追慕者ではなかつた。彼は『野の橄欖の冠』の中で過去の封建時代の社會狀態をかう批評してゐる。『數千年間の封建政治の下に於ける歐洲の社會を構成してゐたものは、土を掘ることによつて生きゐた百姓と、物乞ひをすることによつて生きてゐた坊主と、人の物を奪取ることによつて生きてゐた武士とに區別することが出來る。聰明なる民衆の精神は能く此事實を認識して、最早今後再びかゝる狀態に惱まされないやうに努力するであらう。』かういふ彼の觀察が何故彼を民主主義に結付けなかつたかは、彼の理智を壓倒することを憚らたかつた所の美的本能に歸せなければ解釋することが出來ない。

ラスキンは現代の民主主義者が唱へるやうな、民衆のためにする民衆の政治といふ思想を如何にしても認容することが出來なかつた。彼は到底下層階級の協同運動といふのものに信用を措かなかつた。彼は彼等の自治的能力を認めなかつたのみならず、智識に於て劣等に、感情に於て粗野なる彼等は、動もすれば既存の社會的美德、自然及人工の美術を破壞しはしまいかといふ懸念が、始終彼を去らなかつた。嚢にも述べた通り彼は人間の智能に先天的の相違のあることを認め、優者をして上に在らしめ、劣者をして下に在らしめ、兩者を支配と服從との關係に結付けることが、各自の本

分を全うし、全體としての社會の福祉を增進する最大の要訣と信じてゐた。彼はカーライルと等しく一個の英雄崇拜論者であつた。崇拜すべき英雄を有せざる國民ほど低級卑賤なる國民はない。此故に眞個の英雄をして、其意のまゝに國家を統制せしめ、萬民悅んで之に服することが、國民の最も慶福に浴する所以である。且又それが人性の自然であると彼は考へた。『ムネラ・パルベリス』の中で彼はかう言つてゐる。「卓越したる一個の意志に對して、無制限に且無條件に服從することは、人類の大多數が祖先から享けて、自然に子孫に傳ふべき永遠の遺傳性である。彼等をして其自由意志に任せれば任すほど、彼等は益々多く自らを奴隷となすことを厭はぬのである。」と。此主張は屡々彼によつて繰返された。彼は『此最後の者にも』の中で更にかう言つてゐる。「私の著述を通じて殊に頻々力說したる一點があつたとするならば、それは平等の不可能といふことである。私の終始渝らざる目的は、或人々の他の人々に對する永遠の優越と、場合によつては、或一人の他の多數人に對する永遠の優越とを示し、又かゝる人々、若くはかゝる一人を選んで、その卓越したる智識と、賢明なる意志とを以て劣れる者を指導せしめ、更に必要に應じては、彼等を强制し壓服せしむることが得策であるといふことを示すのに在つた。」

　民主主義を奉ぜず、又民衆其者をも信ぜなかつた彼が、現代の意味に於ける社會主義――科學的社會主義に歸依しなかつたことは毫も怪しむに足りない。併しながら同時に彼の社會改造論が初期の社會主義的思想家の著述から、餘程影響を受けてゐたことも見逃すことは出來ない。例へば英國に於ては、完全なる平等の觀念は思想としては如何に美しくとも、實行不可能であるか、若くは社會に有害であると主張し、併しながら各市民間に於ける過大なる富の不平均は國家を微弱ならしむるがゆゑに、能ふべくんば總ての人に生活必要品の全部を獲得することの出來るやう、各人の勞働の成果を享有せしむべきであると唱道したダビッド・ヒュームの如き、地代及利子を以て地主及資本家の勞働收穫に對

る不正なる減除と辨し、土地は全國民に家族數に應じて之を割當て、國民各自の計算に於て之を耕作せしむべきを主張したるチャーレス・ホールの如き、勞働價値説から出發して全勞働收益權を承認し、生産の剩餘價値は資本蓄積の智能に秀でたる資本家の掌握に歸するものなるがゆゑ、之を矯正するがためには勞働者の任意的團體組織を以てせなければならぬことを主張したるウヰリアム・タムソンの如きがそれである。又佛蘭西に於ては、基督教の同胞主義を産業上に適用して、人間が人間を強搾する時代から脱却して、人間が相共に土地を強搾する時代に進まなければならないとを主張し、同時に人間の能力の自然的不平等を認識し、此不平等こそ社會の組織及秩序の上に欠ぐべからざる必要條件だと觀じ、地代と利子とは勞働者が安逸なる特權階級に支拂ふ所の租税なるが故に、之を廢止するの途は、輿論の進歩によりて、特權階級の遊惰生活を不正なりとするの思想を普及せしむべきであると提唱したるサン・シモン及其學徒の如き、同胞感といふ博愛的原理から出發して、社會成立の根本義は神の定め給へる法則に從ひ、各自其能力に應じて生産し、その欲望に應じて消費するに在りとし、鐵道、鑛山等を官營とし、農業工業に從事する勞働者をして國家の保護の下に生産組合を組織せしめやうとしたルイ・ブランの如きがそれである。是等の諸思想家がラスキンの思想を開發するに與つて力のあつたことは疑はれない。何となれば彼の社會批評の主要なる部分は、上記の諸思想家が彼以前に論述した範圍から餘り多く出てゐないからである。唯彼に特異なる點は、是等の思想が彼固有の宗教的信念と美的情緒と詩人的熱情とに結付いて、赫灼たる光彩を放つた所に存するのである。

併しながら若し彼が是等初期の社會主義的思想家から離れて、マルクス以降の科學的社會主義に親炙する機會を有つてゐたとするならば、彼が果してそれに共鳴することが出來たか何うかは頗る疑問である。私の信ずる所を以てすれば、唯物史觀に出發して宗教、道德の經濟的支配力を否定し、階級鬪爭の手段により、飽くまでも下から上を劃するとを以て

社會改造の原義とする所の社會民主主義運動が、到底ラスキンに——彼の理智からでなく、寧ろ其情緒の上から——容れらるべきでないことは疑ひないと思ふ。何となれば科學的社會主義の基礎が、ラスキンの嫌惡したる純物質的社會觀の上に置かれてゐる點に於ては、正統經濟學と擇ぶ所はないからである。彼は資本主義を擁護する所の正統經濟學の害毒を爬羅剔抉することに於て、科學的社會主義者に讓らなかつたけれども、兩者の攻擊の焦點には大分相違があつた。社會主義者は資本主義的生產組織の勞働階級に及ぼす經濟的害毒を指摘するのが主であつたからして、資本主義的經濟學があつてもなくても、資本主義的生產組織の存する間は、彼等は攻擊の目標を失はない道理である。然るにラスキンは資本主義的經濟學が人間の道德性を無視して建設せられ、且それが人心を支配するの弊害を非難するのが主であつて、資本主義的生產組織其者の是非は、其生產を掌る人間の品性道念によつて決せられるものとしたからである。殊に共產主義の如きは彼の想ひ及ばざる所であつた。彼はかう言つてゐる。「私は財產權の安固を傷けるやうな考はすこしも有つてゐない。私の議論の全體としての趣旨は寧ろ財產所有の範圍を擴大しやうとするのである。貧者が富者の財產を犯す權利を有たないことは古から知られ且說かれてゐる。私は富者が貧者の財產を犯す權利を有たないことが一般に知られ且說かれんことを望むばかりである。」(『此最後の者にも』)

十　尊むべき失敗

ラスキンは如何に贔負眼に見ても、學者としては餘りに獨斷的に、批評家としては餘りに感情的であつたに相違ない。その爲に彼の正統經濟學に對する苛烈なる攻擊に充ちてゐる最初の論文集『此最後の者にも』(アンツー・ジス・ラスト)の如きは、當時の英國の讀書社會から甚しい侮辱的な待遇を受けなければならなかつた。若し當時彼が既に美術批評家として名を成してゐな

かつたならば、誰しも之を一書生の無責任なる放言として取りあはなかつたらうと思はれる。只彼は全く社會から默過されるには、餘りに美術評論家としての名聲を持ち過ぎてゐた。それがために彼の此論文集は、常識的な、主智的な、實務的な英國人から「悲鳴」、「哀音」、「囈語」、「妄言」等のあらゆる酷評の雷雨の下に立たなければならなかつた。それは竟に雜誌「コーンヒル」をして、彼の論文の掲載を拒絶せしむるに至つたに見ても、如何にそれが不評判であつたかを察することが出來る。それにも拘はらず、この剛毅にして熱情的なる著者はかう言つた。「此一書は余が今日までに著作したるものゝ中で、最も眞實に、最も適切に、且最も有益なるものである。」

ラスキンの著述は如何にそれが理論の構成と發表の形式とに於て、非科學的であるといふ誹りは免かれないとしても、彼の思想其者は世の頑迷なる者を警醒し、怯懦なる者を鞭撻し、公正なる者を激勵すべき熱と力とを含んでゐることを拒むわけには行かない。その熱と力とは何處に發したか、それは彼に獨特なる人道的熱情と藝術家的情緒に在つたと私は信ずる。彼の人道主義はあらゆる彼の思想を照明する所の光であつた。あらゆる彼の判斷を形造る所の基調であつた。彼の人道主義が其宗教的信仰に根ざしてゐたことは爭はれない。それにも拘はらず彼を單なる說敎者又は道學先生たらしめなかつたものは、彼の有つて生れた藝術家的情緒であつた。彼に於ては宗教家的道念と、學者的理智と、詩人的情緒とが不思議に相抱擁してゐた。而して是等三者は相牽制して他のものゝ上に消極的に作用するよりは、寧ろ互に激勵し合つて、協同的に奮ひ起つを常とした。理智は道念によつて作興せられ、道念は情緒により鼓舞され、情緒は理智によつて援助された。此故に彼は毫末も良心を侵さるゝことなしに、美術批評家としては傳統的審美論の異端者となり、社會批評家としては正統經濟學の反逆者となり、工業立國主義の彈劾者となり得たのであつた。而して最後には聖ジオージ・ギルドの建設の悲劇にまで奔逸するに至つたのであつた。

ラスキンの聖ジオージ・ギルドは、ロバート・オーウエンの「ニュー・ハーモニーの新社會」が失敗したやうに失敗した。オーウエンの失敗は彼が餘りに人間の理性に信頼し過ぎたためであつた。ラスキンの失敗は彼が餘りに人間の道德性に信頼し過ぎたためであつた。等しく彼等は失敗した。併しながらオーウエンの失敗の尊さは其處にあつた。ラスキンの失敗の尊さも此處にあつた。彼等の失敗は彼等の人格をして、最初から斯くの如き無謀なる計畫を企てたかつたであらうよりも、一層光彩あるものたらしめてゐる。彼等の失敗は人類の歴史に於て、とこしなへに榮譽ある記錄として殘されなくてはならない。

太平洋史観

内ケ崎作三郎

あゝ大なるかな太平洋、
干潮滿潮互に月球の呼吸につれ、
大宇宙の莊嚴の曲の一律洋々の
波浪と成りて帝國の岸を洗へる二千歳、
不死の仙郷秦皇の夢みし處はたここか。
時劫の波は永く卷き、黄金國の名に醉ひて
西の海客潮分けし、其春秋も遠ざかる、
知は大塊のはて窮め、理は幻樓を碎き去りて、
三山六鰲跡なきも、おほいなる哉太平洋。
赤道帶の南北、みどりの波の幾千里、
靺鞨の岸、黒龍の水入る處、寒潮の
烟に月の眠る處、貿易風の吹きあほる
暖潮に魚の飛ぶ處、時を同じく寒熱の
季節の變を幾何か互洋の浪は跳むるや。

土井晩翠（「曙光」より）

一 支那の古典と太平洋

世界大戰は主として歐洲大陸、地中海、北海及び太西洋上に於て行はれた。五年に亘つた空前の慘劇は東半球の西北部をその主なる舞臺として演ぜられた。その間太平洋は先づその名の如く太平無事であつた。青島を逃げた獨逸の戰艦の自暴自棄的な行動や、日獨戰爭の如きも、いはゞ大海の小波に過ぎなかつた。同じ半球の一端の混雜と動搖は他の一端に左程の影響を與へずに終つた。

慘劇の跡は悲しさの極みである。勝者は誇ること能はず、敗者はまた絕望の淵に沈んでゐる。互に爭うて得んとしたる獲物は影も形も見失はれた。今や生活に必須なる資源と工業になくてはならぬ材料の缺乏とは餓鬼道に陷ゐつた交戰者達をして、眼を遠く平和にして溫かい東南の大海に注がしめた。世界の富を一手に集めたと噂され、羨ましがれてゐる北米合衆國も、防ぐにあまる財界の低氣壓に襲はれて、今やその力を東海岸より西海岸に向けんとしてゐる。嘗てカテー（支那）の名と東海の寶島（日本）とは西歐人の冒險的精神を刺戟し鼓吹したことがあつたが、今や再び黃河と楊子江とに洗はるゝ四百餘州は彼等の標的とならんとしてゐる。その以前西班牙、葡萄牙、和蘭、英吉利、佛蘭西、露西亞、獨逸等が卍巴と入れ亂れて覇を爭うた大洋の波は再び狂瀾怒濤を捲かぬであらうか。

一九一八年十一月十一日の休戰紀念日を隔つ滿三年後の米國首府は列强の代表者を會して公正と理解との基礎の上に來らんとする太平洋上の競爭を緩和せんとしてゐる。吾人はその成功を祈る。大戰の殘虐と經濟的打擊とのため、卽ち一は人道主義より、他は利害問題より提案せられたる所謂軍備制限の問題は關係諸國に幾分の滿足と幸福を齎すやうに解決されてほしい。

同時にこの時期に乘じてこの島民族を十圍二十圍（はたへ）、八百重に繞りなす太平洋の史的追懷も無益の業ではあるまい。我等の遠い祖先は或は朝鮮海峽を越えて、或は南洋より島傳への飛石を便りに此島國に到來したのである。彼等は海上の剛の者であつた。彼等は北歐のデイン人の如く、怒濤を凌ぐことを疊の上に座するよりも氣樂に考へたかも知れない。彼等は探險と遠征と航海と戰鬪の間に彼等の小艇を環る太洋を眺めては恐怖と驚異と讃嘆との念に充たされたことゝ思ふ。彼等は生存の第一義のために奮鬪した。この大海原に命名するの必要もなく、餘裕もなかつたのである。誰か空氣に命名するものがあらう。誰か大空に命名するものがあらう。命名は他との混同を避くるためである。水天髣髴の大海原を眺めては特別の稱名を與ふる必要がな

かつたのである。この海を家郷とし墳墓としたる我等の祖先は名を附せずして、之を愛し、之に親しみ、之を恐れ、之を畏みてゐたのである。

支那の古典に東夷とか島夷といふ名が見えるといふ。多分西南邊海の漁民が或は漂流して南支那の海岸に上陸したかも知れぬ。支那海を往復した我等の祖先は先史時代より絶えなかつたであらう。さはれ寡默にして實行を尊んだ島國の民であれば名を棄てゝ實を選んだ。命名は問題とならなかつた。

支那の海岸線はその面積に比して甚だ短かい。支那は江河と沼湖と平原との郷土である。海洋を歌へる時の比較的少いことはこの事實を有力に證明してゐる。唐宋より元明に至るまで多くの詩人騷客は揚子江、洞庭湖、西湖を歌つた。「陰風怒號し、濁浪空を排し、日星耀を隱し、山岳形を潛め、商旅行かず、檣傾き楫摧け、薄暮冥々、虎嘯き猿啼く」とは范文正公が洞庭湖を歌つた名文である。「孤帆遠影碧空盡、惟見長江天際流」は李白が武昌の黄鶴樓上より長江を俯瞰した感想である。西湖畔の韜光觀海は宋之問の「樓觀滄海日、門對浙江潮」の句で名高く、これは太平洋の一端に觸れてゐるかも知れぬ。

支那の古史に於て太平洋と聯想せらるゝものは秦の始皇帝である。始皇天下を統一して即位後三年、東郡縣を巡り、泰山を祭つて封禪の禮を行つた。封禪とは天地に代つて人民を愛撫した功績を天地に報告する儀式である。更に東行して山東海角の嶗山の頂に立つて、脚下に太洋を望んだ。嶗山は泰山と共に山東名山の双璧である。その主峰の絶頂嶗頂は展望雄大、壯絶を極むと稱せらる。鐵道院の支那案内記には、嶗山東北隅にある白雲洞に就いて次の如く述べてゐる。「廟は大木、巨岩より成る自然の堂宇にして、人工的裝飾に乏しく、却つて觀者をして森厳の感に禁へさらしむ。若し夫れ黎明海を蹈て巖頭に立たんか、旭日昇天金波を漾へ、紫雲靉靆奇峰に懸り、鷄鶴一聲空に舞うて思はず快哉を叫ばしむ」と。恐くは始皇は此邊に駐して、この大觀を恣にしたことであらう。余は本年五月中青島に遊んだ折、山東の名勝柳樹臺に登りて嶗山と呼應した。陝西の山國に育つた始皇の眼にはこの大水積は一種の神秘崇嚴のものと映じたであらう。況んや現實に執着力の強い始皇は不死を欲するがために知らず／＼神仙を好むやうになつてゐたに於てをやで、方士はこの隙に乘じたのである。

周末戰國時代に齊に鄒衍といふ學者があつて五行説を唱道した。彼は不思議なる直覺力を以て先人未拓の海外の地理までも

想像した。その後神仙說が流行するやうになつて、齊燕二國即ち今の直隷山東地方から、方士といふ神仙專門の階級が發生した。山東角一帶の地には蜃氣樓出現を以て名があるので、その幻影を蓬萊山と思つたり、不老不死の仙藥があるだらうと思つたりして、かゝる人士が輩出したのであらう。

史記の秦始皇本紀には、齊人徐市等上書して次の如く言つたと書いてある。『海中に三神山有り、名づけて蓬萊、方丈、瀛洲と曰ふ。僊人之に居る。請ふ、齋戒して童男女と之を求むることを得ん』と。是に於て徐市を遣はして童男女數千人を發して、海に入て僊人を求めしむ。』と。

之れより先き齊の威宣王燕の照王が人をして海に入りて三神山を求めしめた。史記の封禪書は之を記して曰く『此三神山は其傳渤海中に在り、人を去ること遠からず、且に至らんとすれば船風引いて去るを患ふ。蓋し嘗て至れる者有り。諸僊人及び不死の藥皆在り。其物禽獸盡く白く、黄金銀宮闕を爲る、未だ至らずして之を望むに雲の如し。到るに及びて三神山反りて水下に居る。之に臨めば風輒ち引き去る。終に能く至ること莫しと云ふ。』然らばいよ／＼蜃氣樓說が眞實らしい。

權力を獲、美人を集め、宮室を盛にした始皇は不死不老の藥を三神山に求めたれども、遂に成功せず、數年の後に崩去した。然れども彼は支那の古史に於て太平洋と聯想せらるゝ第一人者である。

晉の郭璞の著と傳へらるゝ「山海經」は神仙學の影響を受けたものに違ひない。第九卷「海外東經」の部に曰く、『君子國在其北。衣冠帶劍食獸二大虎在傍。其人好讓不爭。有薰。華草朝生夕死。』是れ固より架空的記述なれども、古代支那人の太平洋觀と何等かの關係があるやうである。後漢書東夷傳には『去琅邪三萬里』と出てゐる。說文には『夷俗仁。仁者壽、有君子不死國』とあるといふことである。孔子も亦『道不レ行欲下之二九夷一乘レ桴浮中於海上』と叫んだと傳へらる。又『風出於東方君子國』といふ傳說もある。要するに太平洋は日出の處である。古代支那人が之を神秘化し空想化したこともやむを得ない。

降つて隋唐の時代に日本から留學生や使節が支那に渡つたから古代の迷信は次第に薄らいだことであつた。ことに中世に及んで、倭寇の襲擊が頻繁となつたから、君子國の幻影も雲散霧消したに違ひない。

二　マルコ・ポーローの觀たる太平洋

マルコ・ポーロー Marco Polo は伊太利ヴェニスの門閥ニコーローの長子で一二五四年に生れた。父は弟のマフェオと兄弟合

資會社を組織し、海外貿易に從事してゐた。一二六〇年頃この兩人はコンスタンチノープルよりクリメアに赴いた。それより遠く東に旅して西部韃靼にゆき、齎したる寶石類を賣りて少からざる利を博した。この時蒙古族と突厥族との間に戰爭起りしため、兩人は迂路してボカラ府に辿り着いた。偶々國王旭烈兀よりその兄忽必烈帝に派遣したる使節伯顏(バヤン)に面會した。兩人共に蒙古語を自由に操りたるため、皇帝に拜謁することを熱心に勸められた。兩人は意を決して更に東行の旅路に上り、十二月の後燕京に達した。忽必烈引見して大に喜び、兩人を使節として羅馬法王廳に派遣し基督教の宣傳と學問藝術の指導のため數名の教師を供給せられんことを懇願することを托した。この計劃の裏面には何等かの政策があつたかも知れぬ。少くとも羅馬教會の威勢を借りて回教を抑へんとしたのかも知れぬ。兩人は皇帝の旅行券によりて安全に歐羅巴の地に入つた。十數年以上の長旅の後にヴェニスに還れば、ニコーローの妻は夫の出立後間もなく長子マルコを擧げたが不幸にして病死したのであつた。しかもマルコは十六七歲の立派な青年になつてゐた。

時に羅馬教會にてはグレゴリー十世新に法王に選ばれたが、忽必烈の請求に應じて二人のドミニカン派の宣教師をして同行せしむることとなつた。さて宣教師達は埃及王がシリア地方を侵略する噂さを聞いて旅を中止した。一行は波米羅(パミール)の高原を過ぎり、崑崙山の北麓に沿ひ、戈壁(ゴビ)の沙漠に達した。それから玉門關、陽關、沙州、肅州を經て甘州府に着いた。其處より忽必烈の命に依りて陝西省の中央より山西省を經由して上都即ち御帳廠に安着した。時に一二七五年。皇帝に大に滿足せられ、マルコを見て侍臣の中に加へた。かくて父子兄弟三人は元朝の優遇を受くること十七年。猶望郷の情堪えなかつた。忽必烈の姪が波斯王に嫁するを送る任を受けて、一行は直隸白河より出帆し福建省の泉州に寄港し、海南島を經て、安南の海岸より占城に達した。ラマツカ海峽より印度に着し、更に波斯に安着した。一二九五年一行はヴェニスの港に達した。出郷後二十四の星霜が過ぎたのであつた。

マルコ・ポーローは日本まで來らなかつたが、ジパング（即ち日本國）の評判は耳にした。日本では宮殿が黃金を以て屋根を葺き、舖道を疊み、床も窓も金づくめであるといふ甘い話である。これがトーレーミー以來、印度河以東に黃金の島があるといふ傳説と共に、西洋人に極東探檢の熱心を生ぜしめた風聞である。マルコ・ポーローは支那海について述べて曰く、『ジパング島の在る所の海が支那海と呼ぶ、……廣濶無邊にして七千四百四十以上の島嶼あり、孰れも人口稠密なりと傳へらる。是等の

島々に生ずる樹木は一として斧斤を放たざるなし。……さて此海を名けて支那海と呼ぶも、其實は大洋の一部に過ぎず。あだかも吾人が英吉利海、多島海と稱する如く、東方人は常に支那海、印度海と稱すれども、要するにいづれも大洋の一部に過ぎざるのみ」と。してみると、マルコ・ポーロは大洋の存在を承認した。たゞ五太洋の區別の如き彼の關する問題ではなかつた。しかし歐洲人にして太平洋の一部を、航渡した最初の一人であることはいふ迄もない。唐時代に景教卽ちネストリウス派の基督教が支那に傳へられたが、果してその宣教師が東海岸に到着したか、別言すれば、地中海や波斯灣などを見た眼をもて太平洋を眺めたであらうか。これは問題である。

マルコ・ポーロはまた爪哇、ボルネオ、スマトラ等に就いてその見聞する所を記してゐる。葡萄牙や西班牙の探檢船はこの記事の刺戟を受けたことが尠くないであらう。

三 太平洋の發見者バルボア

齊燕の方士によりてその神秘を宣傳せられ、羅馬の詩人や學者によりて空想せられたる東方の黃金島は、マルコ・ポーロの評判によりて輪に輪をかけた物語となりて西歐人の口から耳へ傳つた。探檢者の慾念は高められ、航海者の好奇心は煽られた。

コロンブスが西印度の一島に達したのは一四九二年である。彼はその後南米西北の地點に渡來したが、パナマの地峽を超えて太平洋を發見する機會をえなかつた。新大陸の西海岸より新大洋を發見したるものは西班牙の冒險者ヴアスコ・ヌネヅ・バルボア Vasco Nunez Bal である。彼は一四七五年に生れた。性來の冒險家であつたが、餘り成功せず、山なす負債に居たゝまらず、一五〇五年遠征隊に加はつて、今のメキシコ地方に上陸した。一五一〇年南米の西北方のダーリエンに渡り、移民團の信任を博して一五二一年には知事に叙せられた。彼は大膽放爲で、また妥協性もあはせ有してゐたので、土人の酋長達とも厚く交際した。或時さる酋長から、南方に大海(太平洋)あり、その遙か南方に黃金に富み、且つ相應の文化を有する邦があると聞かされた。この邦は白露のことである。恰かもダーリエンに彼の競爭者があらはれて西班牙に彼を讒奏したので、その結果の公にせられぬ前に大手柄を立てようとして、この探檢を斷行した。一五一三年九月一日、彼は武裝した百九十人の一隊を引率して、パナマ地峽を横斷した。九月二十五日とある一山嶺に達すると、一大洋が遙かに展開した。九月二十九日一行は海岸に達して、この海を西班牙の領土と宣言した。彼の驚喜は想像することが出

來る。僅か數十哩の地峽を横斷するに約一ヶ月を要したことから行路難を推察する事が出來る。一五一四年一月二十九日一行は大勇みにダーリエンに引上げた。しかるに彼の大功績が西班牙王に達する前に新知事としてパドリアスが任命せられた。パドリアスは最初その女をバルボアに與へたが、やがてその名聲を妬むやうになつた。それでも知事は彼の南海(當時大西洋は北海と呼ばれたので、新太洋は南海もしくは南洋と呼ばれた。)探檢を許可したバルボアはカリベア山腹から木材を伐出し、非常なる苦心の結果、之をパナマ地峽の西海岸に運搬し、二隻の船を進水せしめ眞球島 Pearl Island に達し、更に南下して白露に達せんとしたが、パドリアスはその名聲自己を壓せんことを恐れ、急に彼を召還し、叛逆罪を擦り付けて、彼を斬罪に處した。

西班牙人にして太平洋と關係ある次の名はフエルデナンド・コルテス Ferdenando Cortes である。彼は一四八五年に生れ長じてメキシコに渡りて征服に從事した、彼はメキシコの征服者として有名である。一五二三年知事に任ぜられ、盛に遠征隊探檢隊を組織して諸方に派遣した。彼も亦太平洋岸に立ちて驚きの眼を見張つた一人である。彼の指揮の下に幾多の船舶が太平洋岸の航海を開始した。

四　太平洋の命名者マゼラン

歐洲人で最初に太平洋を目撃したものは伊太利人マルコ・ポーローで、次はバルボアも、コルテスも共に西班牙である。茲に今葡萄牙の一人傑が波上舞臺の大立者となるのである。それは問はずしてフエルデナンド・マゼラン Ferdenand Magellan である。西班牙語にてはフエルナンド・デ・マガラネス Fernando de Magallanes と稱し、彼の生國葡萄牙語にてはフエルナーオ・デ・マガラアーエス Fernao de Magalhaes と呼ばるゝが、最初の名は最も廣く用ゐられてゐる。

バルボアもコルテスも太平洋上に船を浮べたが、それはパナマ地峽の西海岸に造られたもので、大西洋より航海して新しい太洋に廻り得ることは夢想だにもしなかつた。

之より先き、一四九五年四月十日西班牙政府は未知の國土の探檢希望者には一視同仁の許可を與ふる旨の布令を下した。これはコロンブスやその他の既得權者にとりては相應の打擊であつた。カデズやセヴイルの港の巨商は銘々に船を艤裝し命知らずの冒險者を乗り込ましめ、眞珠と黄金の採集に新大陸の海岸に向はしめた。されば種々たる弊害百出した。政府もその非を悟りて一四九七年六月二日の勅令にて之を取り消した。

武士道全盛の時代であつた。歐洲の戰場に百錬萬鍛せられた騎士は耳を聳て、海外の成金物語に傾聽した。程なくしてパナマ地峽以西の新太洋が大評判となり、太西洋との新航路の存在は一種の假説として信ぜられたが、之を實現した名譽はマゼランの得る所となつた。

マゼランは葡萄牙の貴族にして國王ジョン第二世の宮廷に於て教育せられた。數學及び航海術を修めたるマゼランは年少にして遠征隊に加はりて印度に趣いた。彼はマラッカの攻擊軍にも參加し、モルッカ嶋別名スパイス嶋の探檢にも加はつた。この間に彼は航海に關する智識と經驗をえた。

彼は葡萄牙に歸る間もなく亞弗利加の戰爭に從ひ、膝に負傷して跛者となつた。彼は歸國して休養したが、競爭者は彼の武勇を妬みて、假病に托して戰爭を避けてゐると讒言した。又國王フェルデナンドも之を信じた。マゼランは失望し、憤慨して成規の手續きを踏んで葡萄牙の國籍を脫して西班牙に歸化した。彼は西班牙朝廷に出頭して新大洋に出づるを發表したるに國王チャルス一世、印度事務大臣フォンセカ、ベルゴスの僧正等よりは歡迎せられ、國王はマゼランの保護者たらんと約束せられた。葡萄牙の大使アルヴァロ・デ・アコタスはマゼランの成功を聞いて憤激し且つ競爭國のためにスパイス嶋を占領せられんことを恐れ、マゼランの不利を招くやうに西班牙朝廷に運動したれども效がなかつた。また葡萄牙の利益を擁護するために彼の暗殺を企てた者もあつた。かゝる反對があつた爲に遠征隊の出帆が後れた丈で、マゼランの決心は動かすに由なく、葡萄牙王は羅馬法王の裁可を受けて確定した兩國の領海區劃をマゼランは敢て侵さぬといふ保證を得るに過ぎなかつた。その區劃は太西洋のケープ・ベルデ島の西方三百七十リーグの子午線を境とし、その東方の海中に於て發見せらるゝ國と島とは悉く葡萄牙人の所有となし、その西方の海中に於て發見されたものは西班牙の所有とするといふことであつた。

葡萄牙人は印度より進んでモルッカス島を占領し、又ニューギネヤ及びカロリン諸島の一部にも指を染めたが、その發展は寧ろ亞細亞大陸に接近した部分にして、中央及び南部に於ては西班牙をしてその威を恣にせしめたのである。

チャールス王とマゼランとは契約書に署名し、後者は西班牙領海内に於いて香料を產する島々を發見するといふ約束をなした。萬一マゼラン出帆後十年にして成功せぬとしても、純益の二十分の一を國王に捧げさへすれば、改めて勅許を得る要なく、自由に航海貿易を繼續し得る條件が附いてゐた。國王は改めてマゼランを騎士に任じ、聖ゼームスの衣裝を着せしめ、彼の發見す

る島々に對しては永久に男系子孫の支配權を與へた。たゞ西班牙は其支配權を管理するに過ぎなかつた。若しマゼランが六つの島を發見すれば國王の所得として一千デュカットに相當する貨物を國王に獻上すること、若し、二つの島を發見すれば第一回の歸航の際にのみ全貨物の十五分の一を國王に献ずる譯であつた。國王は二百三十四人の乘組員を有する六十噸より百三十噸までの船五隻を艤裝する一切の費用を支辨した。又分捕品の分配の際には大藏者の官吏を立ち合はせる都合であつた。

以上の約束は着々と實行せられ五隻の船、ラ・トリニダット、サン、アントニオ、ヴイクトリア、サンテアゴ、コンセプチオンはセヴィルの港にて組立てられた。この船名を見ても宗教と國家との不思議な關係を理解することが出來よう。出帆に先じて旗印のことや旗手の問題が起た。國王旗は之をサン・マリア大寺院にて、王親しく之をマゼランに托した。

一五一九年八月十日遠征隊はサン・ルーカ・デ・パラメダの港を出帆してカナリー島に向つた。十二月十三日南米のリオ・ジヤネロに着いた。彼等は東海岸に沿うて南下した。然るに氣候漸く寒冷となつたから大河を發見して冬籠りの準備をしてゐると内訌が生じた。一部は歸思矢の如くであつた。マゼランは空しく歸國するの不名譽なることを說いて之を鎭撫し、自分は死を賭してその計劃を實現することを宣言した。不平派の一船長は鐵繩に繫がれたが、程なくこの船長は食糧とこれも不滿顏の一僧侶と共に陸上に放たれた。又他の三船に對して一小艇を送りて各船長を糺問した。彼等は國王に仕ふるもので、マゼランと關係なしと威張つた。一船長はマゼランが送つた三十八の水夫の或者に刺され、一船長は船を旗艦ラ・トリニダットの側に寄せて、劍と柄を以て身構ひしながら全乘組員に攻擊を命じたがこの功が無かつた。マゼランは立所に部下の水夫をして向ふの船に乘り移らしめ、船長を捕縛し、翌日斬に處した。かくして水夫はマゼランの命令に服從するやうになつた。遠征隊は南進を續けてゐたが、一五二〇年十二月二十八日一水道に入つた。これがパタゴニアの本土 テエラ・デル・フエゴーの島を隔つる水道にして、今日この名譽ある發見者の名を帶びて、マゼラン海峽と呼ばるゝのである。一船は全然破船し、一船は船員のストライキがあつて、士官達が船長を捕縛して獨りニュー・ギネヤに向つて帆走つた、さてマゼラン海峽はノールウエーのフイヨールド(峽江)、我が瀨戸内海と世界の三大景勝に併稱せられるのであるが、生命賭けの冒險者には之を賞美する餘裕もなかつたであらう。殘りの三船は海峽を通過して一五二〇年十一月二十八日新しい太洋に浮び出てた。それは記憶すべき日であつた、地理學

上航海上の大なる謎の一つは解けたのである。されどもテエラ・デル・フエゴー嶋の南方にて太西太平の二大洋が相通ずることは流石のマゼランも氣がつかぬらしかつた。後英國の航海者ドレークが之を證明したのである。

玆に彼の航海日誌の一節を引用してその苦心を想像するの手助けとしよう。

『水曜日、一五二〇年十一月二十八日。吾々は前記の海峽を出でゝ太平洋に入つた。三ケ月と二十日の間吾人は食糧や飲料もなく、粉末となつた、虫が湧いた鼠に食ひ荒された、舊いビスケットのみを食べた。水は黄ばみて惡臭鼻を突いたが仕方がなく之を飲んだ。吾々はまた大桅帆架の下にあつた牡牛の皮さへ嚙んだ。そうしないと帆桁が索具を傷くる恐れがあつた。處が皮は日光と風雨に曝されたので、非常に固い、そこで四五日海中に漬け少しづゝ燠屑にかけてから食べた。又材木の鋸屑をも食べた。鼠が一匹半クロンの値段がするやうになつたが、餘り多くを捕ふることが出來なかつた。その外に水夫の上下の齒齦が脹れて食物を取れぬやうになつて十九人はそのために死んだ。一人の大男と一人の印度人も死んだ。外に二十五人から三十人までの乘組員は腕や脚に現れた樣々の病で悩れた。されば健康者は至つて少い。されど神に感謝すべきは我自らは健康であることである。この三ケ月と二十日の間吾々は大海を航行し、四千リーグは十分に走つた。この海を太平洋 El Mar Pacificio と命名したのは實にふさはしくあつた。以上の時の間吾々は暴風に遇はず、たゞ樹木と鳥とをのみ有する二個の無人島を見たのみである。吾々は之に不諧嶋と命名した。この嶋々は相距ること二百リーグ、海底が深いために碇泊することも出來なかつた。多の鯊といふ大魚がゐた。最初の島は南緯十五度に、次の島は九度にある。吾々は前に述べた風の助けによつて一日五六十リーグ以上進んだ。時には風を船尾に受け、時には追手の風に乘じ、時は風に向つた。若し主基督と聖母が食糧やその他の物を以て吾等の元氣をつくるやうに佳い天氣を與へて、我々を助け給はらざりせは、吾々はこの渺茫たる大海の上にて飢死したことであらふ。そして將來誰もかゝる航海を試みる者はないであらう。』

一五二一年、三月十六日、ラドロン島に達した。土人は物珍げに船のまはりに群をなした。彼等は船から一小艇を盜み去た。九十人も水夫が上陸して血戰して漸く之を取り返した。艦隊は西走してサマル島の附近に達し、更にミンダナオ嶋の北に沿ひて進み、ブツアン河口に着いて、酋長から食糧の供給をえ

た。時恰も復活祭の週間で、陸上に於て比律賓諸島に於ける最初の祭式が行はれた。土人は大に好意を表した。マゼランはチヤールス第一世に代りて形式上に占領した。酋長自ら水先案内となりて豐饒なる島セブに着いたのは四月七日であつた。この報を聞くや二千人以上の島人は槍と楯を手にして戰列を海岸に布いた。ブツアンの酋長は上陸して平和の遠征隊が食糧を求むるのみであると說明したので、國王は條約を締結することを承知し土地の形式に從つて兩當事者が胸より血を出して飲み合ふ「血の約束」によつて批准せらるべきことを提議した。

マゼランはこの條件を容れて海岸に宗教的儀式を行ふべき小屋を作らしめた。マゼランが一を行引卒して、上陸すると國王女王と王子とは好奇心のあまり出迎えた。彼等は基督教の儀式に多大なる興味を覺えたらしく、彼等も間もなく、洗禮を受けその他の王子や酋長等もその例に從ひ、且つ西班牙國王に服從を誓つた。

マゼランは新同盟者の味方となりて對岸の諸族と戰ふ事となつた。一五二一年四月二十五日彼はメガタン島に渡り、敵と會戰し、矢を蒙りて負傷し、癒えずして死した。多分四月二十七日の出來事である。この大膽なる航海者はあはれ果敢なく太平洋岸にもの〻あはれを止めた。今もこの海岸に程近いセブの市に彼の英雄的事業を紀念する方尖碑が立つてゐる。

然かし、マゼランがもし西班牙に歸つたならば彼はコロンブスと運命を同じくせなければならなかつたであらう。さて艦隊を脫走した一艦はニユー・ギネアを經て、一五二一年三月西班牙に歸り、船長の不法を國王に訴へ、且つマゼランの殘忍酷薄を讒奏した。船長も船員も共に牢獄に投ぜられた。チヤールス王は死せるマゼランを罰することが出來ぬ腹癒せに彼の妻子を捕へて獄に投じた。

マゼランの死後、艦隊を統卒したバルボアも二十六人の部下と共に島の王ハマバーの宴會に臨みて殺害せられた。他の艦長セラノーは暫く島人の氣に入りて首を繫いだが、或日衣服や刀劍を奪はれ、海岸に引き出された。島人は彼の賠償として二門の大砲を要求した。然かし乘組員は之を以て餘りに高價な代償と考へて、その儘錨を上げた。殘されたセラノーこそ宜い迷惑で、間もなく島人のために悲慘なる最後を遂げた。

マゼランを失つた艦隊は幹部會議を開き、最も破損したる一艦を燒棄した。今や漸く百人に減じた乘組員は三艦を操縱することが不可能であつた。艦隊はボルネオに行き種々の冒險をやつた。一五二一年十一月八日テドル島に達して、初めてスパイス諸島に達する西航路が發見された。即ちこの遠征隊の目的

が成就したのである。この嶋々へは葡萄牙人が最初に渡來して、肉荳蔲(ニクヅク)、丁香(チャウジ)、肉桂、蘿蔔香(タカミカクカウ)、胡椒等を買取つた。ザヴイエーも此地に傳道したこともいはれる。此島の國王は喜んで交易した。ヴイクトリア艦は五十三名の歐洲人とテドル島の十二人の民をのせて、一五二二年の初め西班牙に向つた。これは條約に背いて葡萄牙の航路を通過した。ヴイクトリア號の航海は多くの事件と困難とを伴うたが、艦長エルカノーの熟練せる技倆によりて一九二二年九月六日西班牙に歸つた。

思ひめぐらせば故國を殘してから三年以上の月日が立つた。十七人の船員と共に上陸したエルカノーはみじめなもので、顏色憔悴、肉落ち骨出で、飢と疲れのために此世ながらの幽鬼のごとく見えた。彼等はセヴイルの市民の歡呼を浴びたが、彼等は裸足で蠟燭を手に〳〵捧げて教會堂まで行列を作り、百千の艱難より逃れ來りし恩寵を神に感謝した。衣服と金と一切の必要品は國王より賜つた。エルカノーと賢げなる船員は朝廷に召し出されて、冒險談を試みた。國王は禮を厚うして彼等を優遇した。エルカノーは終身年金五百デュカット（その當時千百二十五圓に相當した）を受け、勳騎士(ナイト)に叙せら、その家紋に"Primus circundedit me"「最初の地球一週者」といふ羅甸語の銘句を有する地球を有する特權を與へられた。

エルカノー部下の二士官も恩典に浴して面目を施した。又乘組員に對してはマゼランとの約束によりて國庫に屬すべき貨物の五分の一の四分の一を更に乘組員一同に分配された。ヴイトリア號の貨物は、肉荳蔲二十六噸半と多量の香料果實より成つてゐた。テドア島民の一人は餘りに執念ぶかく西班牙の市場に於ける香料の相場を聞き糺したるために歸島する事を許されなかつた。隨分人を馬鹿にしたものである。

話が變つて、旗艦のラ・トリニダット號はテドル島にて修繕してパナマに向たつ時大暴風に遇ひ、やむなくモラッカス島に引き返したが、不幸にも葡萄牙の軍隊に捕獲せられ、艦長エスピノーザは生存した船員と共に西班牙出帆後五年にしてリスボンに送り屆けられた。

かくの如く葡萄牙の朝廷はスパイス諸島との貿易を獨占せんとしたが、西班牙のチャールス王は容易に承知せず、第二遠征隊は本國より、第三遠征隊はメキシコの太平洋岸より派遣せられたが、多くの障礙や飢饉に遭遇して成功しなかつた。就中メキシコ海岸より出發した遠征隊は太平洋中のとある島に上陸し、食糧の缺乏から猫、鼠、蛇、蜥蜴、草根までも食べたといはれる。

一五四三年サマル嶋はIsla Philipina とヒリップ嶋と呼ばれた。

チャールス一世の王子にして、一五五五年に即位したヒリップ二世の名譽のためである。

五　太平洋に浮びたる最初の英人

次に太平洋の舞臺に現るゝ役者は英國人である。フランシスドレーク Francis Drake はデヴオンシヤーの人、生れながらにして海國の空氣の中に育つた。熱心なる新教徒を父とした。少年時代から海上生活の訓練を受けた。十七歳にしてビスケー灣の貿易に從ひ、二十歳の時ギネアに航し、二十二歳にして一船長となつて、その資格にてメキシコ灣に航海した。一五七〇年エリザベス女王より私掠船の許可をえた。これは敵國の船を掠奪するために船に武裝することであつた。

一五七二年、彼は中米の西班牙人の經營したる小都市を襲撃した。この序を以て部下を卒ゐて彼はパナマ地峽を横切りて西班牙人を驚がした。彼は大木の上に登りて太平洋を遠望し、この海に必ず英船を浮べなければならぬと決心した。一五七三年プリマスに歸港して大に名聲を擧げた。彼は朝廷に召し出され女王に拜謁した。その折彼はマゼラン海峽より太平洋に出づる計劃を奏上したるに、エリザベス女王は大に滿足せられ資金を賜つた。五隻の小船と百六十六人の乘組員より成る小艦隊は一五七七年十二月英國の海岸を離れた、翌年四月五日ブラジルの海岸に達し、八月二十日マゼラン海峽に入り、九月二十五日、彼の目的が遂げられて、太平洋を見た。この時三隻の船を本國に返して二隻の船を彼は卒ゐた。マゼランはデエラ・デル・フエゴーの嶋を一つの大陸と想像したらしい。ドレークはその一つの島で、その南端に於て兩太洋が會流することを發見した。彼は智利、及び白露の海岸に沿ひて北進し、ゆく／＼西班牙船を掠奪して獲るところが多かつた。北緯四十八度まで北上して海峽を探がしたれども發見することが出來なかた。後日その土地を「新アルビオン」と命名してエリザベス女王の領土と宣した。他の一船はマゼラン海峽より英國に歸航した。彼の船は次第に西航して南洋に着し、その諸島を廻りて一五八〇年六月喜望峰にさしかかつた。乘組員は僅かに五十七人、水樽三個を剩すのみであつた。航海の困難を推察すべきである。十一月三日プリマス港に入つた。エリザベス女王はドレークを歡迎すれば西班牙との國交に惡影響を及ぼすべきを思ひて、暫く躊躇したが、思ひ切つて船中まで行幸せられた。船の宴會に臨まれ、英國人中最初の世界一週者たるドレークを勳騎士に任ぜられた。海軍の英雄としてのドレークの光榮は更に西班牙の大艦隊を追撃した際に輝き渡つたのである。

六　レガスピの比律賓征服

西班牙王フイリツプ第二世は最初は比律賓の征服に就いて何等の積極的方針を有たなかつたが、一五六〇年代にたりて彼は羅馬教會に對して熱心なる信仰を捧げ、それが一誘因となり、比律賓諸島の征服と傳道とを發意し、之をメキシコ總督に任命した。これより先き南洋の一冒險者ウルダネタは西班牙に歸りて遠征を主張して容れられず、不平の餘り、メキシコに逃げてオーガシテン派の僧團に投じてゐた。依つてウルダネタをして同じ僧團から五名の僧侶を選び、之に被征服者の敎化を命じた。遠征隊は四百人の兵士と水夫、五隻の船と一隻の戰船(フリゲート)より成つた。ミゲル・ロ－ペズ・デ・レガスピー Miguel Lopez de Legaspi が司令官に任ぜられた。彼は西班牙の貴族にして、メキシコ市長の任にありて、公正忠實の人物として尊敬せられた。

遠征隊は一五六四年十一月二十一日、メキシコのナヴイダツト港から比律賓諸島に向つて出帆した。一五六五年、一月五日、ラドロン諸島を過ぎつて、一月十三日には比律賓諸島を眺めた。食糧を島々に求めて遠征隊はボジョル島に達した。先づプツアン港に一小艇を遣したるに二週日の後に復命して、多量の黄金、蠟、肉桂、が該地方に存することを傳へた。又一小舟をセブーに遣したる島に人は敵意を有し、乗組員の一人は水浴中捕虜となつたと報告した。

レガスピ將軍はセブーに入港する決心をなし、先づレーテ島の南にあるリマサナ島沖に碇泊し、やがて西南に走りてミンダナオ島の西北端のダピタン港に入つた。

酋長パグブアヤはこの有力なる艦隊を目撃して驚愕措く所を知らず、その部下の一人をしてその行動を偵察して報告せしめた。その報告が稀世の珍物である。

『船には大男がゐて、鼻が尖つて長い。美々しい服裝をなし石(ビスケツトのこと)を食ひ、火を飲み(煙草)口と鼻から烟を吐く。雷や稻妻を自由にする力(大砲の發火)を有する。食事の時に布をかけた机にゐ並ぶ。云々』

酋長は大に仰天し、この不思議なる外人の親切なる申出では悉く應ぜねばならぬと決心した。レガスピは歐洲の品物と食糧を交換したばかりでなく、酋長からセブー島に關する知識を得たので、セヴ征服の決心を固くした。

一五六五年四月二十七日、レガスピはセブー島に上陸し、直ちに島民と協議した。島民はマゼランの一件を記憶して、獨立を失ふを欲せなかつた。依つて西班牙は武力に訴へて之を占領した。島民は西班牙の臣民と宣せられた。この成功を西班牙に

奏上するためにウルダネタは一五六七年十月三日メキシコに達し、更に西班牙に向つた。一五六七年に發せられた書面にてレガスピは全群島を比律賓諸島と呼んだ。

セヴ島は平穩となり、附近の島々も歸順した。島民も安じて業に就くやうになつた。廢王ツーパスは基督敎の洗禮を受け、その女は西班牙人と結婚した。

新しい侵略者が勢威を振つてゐる只中に葡萄牙人が來て、所有權爭ひをしたが、忽ち擊退せられた。セブーには砲壘が築かれ、西班牙人の住居區域が定まり、セブーは市となつた。同時に一五七〇年にレガスピは彼が征服する一切の島々の總督に任ぜられた。同年五月レガスピの孫のジュアン・サルセドは呂宋島を踏査して之を西班牙領に加ふるために派遣せられた。島民に歐洲戰士の行列に驚いて服從を誓つたが、やがて反抗しが、レガスピ應援して之を平定した。マニラは比律賓群島の首府となつた。

一五七一年六月二十四日マニラの市會が組織せられた。一五七二年八月二十日、レガスピは永年の張り詰めた生活の疲勞に堪えず、西班牙の植民史に不滅の名を殘して病死した。マニラのルネタ・エスプラナーデの附近に美しいレガスピ紀念碑が立つてゐる。

七　南洋に於ける和蘭の勢力扶植

和蘭人が南洋に現れたのは一五九五年である。もと和蘭は西班牙王二世の時代にその領土となつたが、虐政に堪えずして之に叛き、一五七九年ユトレヒト同盟を結びて西班牙に對抗し、英國の援助をえて、一五八一年獨立を宣言した。さて西班牙王は前年偶然にも葡萄牙を併せたから、和蘭に對する復讐としてこれまでリスボンに至りて東洋の貨物を積んで、歐洲各國に運搬した和蘭船の入港を禁じた。依つて和蘭の海運業者は他に活路を求めなければならぬこととなつた。幸にも多年印度にありて東洋の航海と貿易とに精通した同國人が歸國したから、是等の人々の經驗に基いてアムステルダムの重なる貿易商と船主とが提携して一五九四年に貿易會社を設立し、翌年より商船を東印度地方に派遣することゝなつた。その後各港に續々貿易會社が設立せられ、競爭の弊害甚しくなつたので、一六〇二年三月諸會社合併して、聯合和蘭東印度會社を組織し、政府の特別保護の下に、東洋貿易に從事した。此會社は二十一年間、貿易獨占の權を有し、喜望峰を經て東部蘭領植民地に至る航路と南米のマガルヘッスに到る航路を獨占した。會社はまた東洋の植民地に本國の主權の一部を行使することを委任せられた。一六〇

九年には印度總督及び印度洋議會より成る中央政府の組織が出來た。總督ジヤン・ピーテルスツオン・コンは一六一九年に西部瓜哇のヂヤガタラを占領して、バタヴイアを創設して蘭領東印度植民地の中心とした。

一六〇〇年には英人が南洋に現れたから、南洋は葡萄牙、西班牙、和蘭、英國の四強國の競爭の中心となつた。數年の後西班牙人がニユー・ギネアガ島なることを發見した。ソサイチー諸島も西班牙人に發見せられ、西班牙の植民地はニユー・ヘブラデスに設けられた。和蘭人は十七世紀の初めより十八世紀の初頭に至る迄の間に瓜哇を征服して全く之を領有した。

之に反して葡萄牙は次第に勢力を失うた。一六四一年和蘭はモラツカ諸島を領有し、その提督フアン・ダムはセレベス島より葡萄牙人を驅逐した。

一六四二年、提督フアン・ダム提督部下のアベル・タスマンはバタヴイアを發し東南太平洋に航し、十一月にタスマニアを發見した。最初彼はこれをフアン・ダム島と命名した。今は發見者の名を以て呼ばれてゐる。一六四二年十二月タスマンはニユー・ゼーランドを發見し、一六四三年にはフレンドリー島の一部を發見し、同年六月バタヴイアに歸着した。彼はまた一六四四年の航海にて濠洲北方のカーペンタリア灣を發見した。十六世紀の初めより太平洋の南方に大陸ありと信ぜられ、或る佛蘭西の地圖には Australis terra 南大陸といふ名を附してあつたが、その發見者は和蘭人の手は歸し、新和蘭 New Holland と呼ばるゝに至つた。

八　ゼームス・クツクの世界一週航海

十七世紀の初め、英國のゼームス第一世は大使をスマトラのアチン王に送つた。大使は國王の富と力とを委細に述べて二人の英國婦人を遣はして國王の后妃せられたし、もしその婦人達が子を生まば、この國に渡來する英國の商人に好都合であらうと附言したといふことである。恐くはこの招聘に應じた英國婦人は一人もなかつたことであらう。兎に角にもこれは十七八世紀頃の道德の標準は至つて低級なものであつたことを知る材料である。

一六八五年に英人はスマトラのベンクレンに工場を設立しボルネオと貿易を開いた。十八世紀の初めに彼等はボルネオの坎港バンゼルマツシンより放逐せられた。一七三三年和蘭人が歸り來り、五十年の後バンゼルマツシンを含んで、南部ボルネオを征略した。

十八世紀の間、幾多の新發見が太平洋上に行はれたが、特筆

大書すべきは英國の船長、ゼームス・クックの探檢である。

ゼーマス・クック James Cook は一七二八年英國のヨークシヤーに生れた。一七五五年身を海軍に投じ、加奈太の海戰及び沿海の測量に従事し、漸く頭角をあらはした。殊に日蝕の測量をなして學界に一貢献をなした。時に金星の子午線經過を南太平洋にて觀測せんため地理學的探檢航海の企てがあつて、サー・ジョセフ・バンクスは數人の科學者を連れてエンデヴオアー即ち努力號といふ三百七十噸の船に乘じた。クックは少佐として船長の職を行つた。この船は一七六九年四月十九日タヒテ島に達した。目的の觀測をなして更に南太平洋の發見を志し、ニユー・ゼーランドに達した。土人の抵抗甚しかつた爲に內地に入ること能はず、約六ケ月間海岸を航海した。南北兩島の間の海峽が發見された。卽ちクック海峽である。更にニユー・ホルランドに航し、翌年四月二十八日、その東南岸のボタニー灣に達したが、土人の反對猛烈にして上陸することが出來なかつたが、英國の領土として占領した。それよりニユー・ギネアを經てバタヴイアに赴き、船の修繕をして一七七一年六月十一日英國に歸つて、クックは大佐に昇任した。更に第二回の遠征隊を組織し、一九三人の乘組員を乘せて、四百六十二噸のアドヴエンチー、(冒險)號は一七七二年七月十三日プリマウス港を出た。一七七三年一月ニユー・ゼーランドに達し、ソサイテー島に冬ごし、ニユー・カレドニアを發見し、一七七五年七月三十日英國に歸つた。クックは掛督參官(ポストキャピテン)に任ぜられ、グリンニッチ病院長を命ぜられ王立學術協會の會員に推薦せられ、且つコプレー金牌を與へられた。

時に英國政府は北氷洋に達する西北航路を發見せんとし、之をクックに命じた。クックは命を奉じ、一七七六年六月二十五日レゾリユーション(決心)、デスカヴアリー(發見)の二隻を率ゐて英國を出帆した。一七七七年幾多の小島嶼を發見し、フレンドリー諸島に止まつた。一七七八年一月北航して、サンドウイッチ島を發見した。余はこの發見に關する記事を奥村多喜衛君著の「太平洋の樂園」の中から拔萃する。

『一七七八年一月十八日煙波渺渺の間に一の島影を認めた。これ卽ちオアフ島であつた。次でカワイ及ニーハウ二島を見出し、茲にクックは當時未だ世界に知られてゐない群島の發見を確め、己が恩人たる英國海軍大臣サンドウイッチ卿の名を取つて命名した。固よりクック以前に西班牙人が此島を發見したことは殆んど疑ふの餘地なく、また一五二八年に西班牙の船ハワイ島の海岸に難破し、船長及び其妹は上陸して土人と結婚したことも事實らしく、布哇の王冠はポリネシア風

といふよりも、寧ろ西班牙風の跡を留めて居るのは其一證であるが、布哇發見者の名は大佐クックに被らされたのである。

クックが初めて上陸したのはカワイ島のワイメアで、一七七八年一月二十日の事であつた。土人の驚愕一方ならず、ロノ神の歸來せるのであらうと考へた。土人の傳說によるに、太古ロノといふ神は一旦の怒によつて己が妻を殺し、後悔やる瀨なく、終に他日椰子の樹や豕犬などを携へて歸ると言遺して獨木舟(カノー)に乘つて、何處ともなく出立つたと云ふことである。所が今突然クックが訪れたので、正しくロノ神の再現であると思ひ、軍艦は浮島で、帆檣は椰子樹であると思つた。そこで土人は群り來りてクックを拜し色々の禮物を捧げた。同時にまた數艘の快走船を派して、各島の酋長に報告せしめた。その文句に「新來の人々は色が白く、其皮膚はゆるくして、ヒダがあり、頭には角(かど)があり、口からは火と煙が出てゐる。其身體の兩側に穴があつて、手を差込んで、色々の物を摑み出す。言語は一向に分らない」と言つてゐる。衣服や帽など見たこともなかつた土人の觀察さもありしならん。』

クックは各島を探檢して海圖に登錄した後、一七七八年一月北航し、三月米國西岸に達し、それに沿うてベーリング海峽に達したが、氷に鎖されて進むこと能はず、十一月布哇に歸りて、ハワイ島のケアラケクア灣に投錨した。

『時已にクックに關する評判は全島に擴まつてゐたので、非常な歡喜で迎へられ、三千の獨木舟に一萬五千の人々群れ來れり。王も亦、酋長及び僧侶を隨へ、ロノ神を祭る歌を唱へつゝ、豕や野菜など澤山に用意し、三艘の獨木舟にて來り迎へた。クックが上陸した時は王服王冠を被せられ、最も高價な黃金色の織羽もて作つた上衣六襲を贈られた。この上衣は一羽の小鳥の兩翼の下に唯二本しかない羽毛を集めて造つたもので、其價は少くとも百萬弗以上と考へられた。此高貴な贈物に對して、クックはホワイシヤーツ一枚と小刀一個を與へたとのことである。

クックは漸く土人が己を神として扱ひ居ることを覺つたが、而も之を止むることを爲ないで、彼等が爲るまゝにまかせた。是ぞ彼が生命を亡ふ災禍を惹起す原因となつたのである。一水夫の死が土人の心に、クック及び其從者は神の族であるまいとの疑を起させ、薪や船の修繕用に神殿の柵を取り去られたことが、太く土人を怒らせた。數十日間、食料の供給を強ひられ、此向では飢餓になるかも知れないと心配させた。この色々の事情のため、土人等漸く珍客を厭ふ樣にな

り、軍艦が出帆すると聞いた時は非常に歡んだ。されど王は終りまで親切に取扱ひ、多くの食料品なども其行を餞し、返報には數發の砲弾に膽を寒（ひや）された。所が艦隊は暴風に逢ひ一艘の艦は大破損を蒙り、已むなく修繕に引返した。前の歡迎に反して非常な冷遇。修繕に必要な用材を與へぬのみか、却つて道具や、短艇を盗み取つた。クックは被盗品を取返へすまで王を人質として艦内に誘致（つれこ）んものと數人の水夫を隨へて上陸したが、三千の土人蜂起して大混亂を起し、憐れクックは一酋長の鋒に斃された。

元來土人はクックを殺す意はなかつたが、騎虎の勢已むを得なかつたのである。さあれ土人間には猶クックをロノ神と思ふ迷信全く消へなかつたので、クックの死骸を神殿に運び、解體して筋肉は火に燒き、骨はロノ神の祭壇に納め、遺髮はカメハメハ王に贈り、心臓は三人の子供に犬の臟腑と稱へて食はしたといふことである。土人がクックの肉を食つたとのことは全く虚傳である。

クックの副官キングは王に嚴談し或日發砲して村を燒き、之を諭し之を脅かし、漸くにして遺骨を取返し、恭々しく水葬の禮を行ふた。而も四枚胸骨及び下顎は終に失はれたが、一八二四年リホリホ王（カメハメハ第二世）ロンドンに赴いた時、幾に失はれた遺骨の殘部を携へ行つて、クックの寡婦に贈つたとのことである。

布哇島コナ郡ケアラケクア灣州カアワロアにはクックのため一大紀念碑が建立されてゐる。即ち一八七四年英國軍艦ファントーム號の乘組員に由て建てられたもの、其碑の銘に曰ふ、

「大世界周航者キャプテン・クック紀念のため同國人相圖つて此碑を建つ、
彼は一七七八年一月十八日布哇を發見し
一七七九年二月十四日此地點の近傍に落命す」

彼が落命の地は此碑より約一哩を距る高地で、其所には大なる石塚に尚く銅標を建て、大發見者の英魂を弔ふてある。』

太平洋上に於ける多事の太平洋はこの慘劇を以て一先づ其段落を告げたといふてよしろい。十九世紀に入つての列強の角逐は稿を新にして記述してみたい。

恐くして狭い歐洲の各國人が赤道直下の樂園に憧れたは當然のことである。彼等の猛烈なる侵略性は自由自在に太平洋上に發揮せられた。同時に彼等の大膽なる冒險と堅忍不拔の精神と犠牲獻身の壯擧とは之を認識せざるをえない。彼等が傍若無人の振舞をなす間、我が島民族は國を鎖さし、退嬰保守を本とし

て、終に太平洋上に於ける我が民族の立場を困難ならしめたこと遺憾の極みである。過去は過去である。たゞ過去の失敗を繰り返へさざるやうに將來を戒心せなければならない。

社會問題・人道問題としての監獄衞生の改善

司法省囑托　打田義芳

はしがき

拘禁と衞生とは鑿枘相容れないとされた時代は過ぎて、行刑の根本精神と監獄衞生とは一歩一歩相接近して、監獄衞生殊に受刑者の衞生を等閑に附して行刑有終の美は望むことができず、行刑の根本精神に忠實であつて監獄衞生を閑却することができぬ。かく密接な關係が既に兩者の間に成立つてゐる。即ち自由刑の問題は受刑者を肉體的精神的及び道義的に破滅するのではなく、寧ろ如何にして肉體的精神的及び道義的に水平線上に訓導し復活させるかといふにあると思ふ。從つて自由刑に併發する不快な副作用は成可く排除しやうと努めるのは當然で、ここに監獄醫學及び監獄衞生政策が甚だ重要な意義を見出したのである。

監獄の作用は當に上水道に於ける濾過裝置と相似て居る。もし上水道の濾過裝置が不完全で其清淨作用が不十分な時は、市民は有害菌乃至有害成分を含有する不健康な飲料水を供給せられ、其及ぼす所の害は實に廣汎で深刻であると同樣に、監獄に於て受刑者の犯罪性を芟除し、濾過し、これを社會的生活に適應するやうに導くべき行刑制度が不完全で、犯罪者の不良性を匡正することができず、却つて在監中其犯罪性を高調して社會に解放したならば、其害の及ぶ所や實に想像以上である。

然も現今監獄の實狀が此狀態に甚だ近いといふことに考へ及ぶと、慄然たるものがあるではないか。上水道に於ける濾過清淨作用を失つた砂礫、それは今日の監獄當事者及び其制度を評

するに最も適切な忌憚のない言葉ではなからうか。當に化石以上である。殊に醫學的方面から見た彼等受刑者は、殆と全く不健全な狀態で解放されて行くに到つては、實に由々敷大事である。唯此方面だけでも廣く識者の腦裏に刻んでおく必要が十分だと思ふ。

幸ひ社會進化の理法に從つて、この監獄衞生の方面に於ても遲蒔ながら新生面を開拓しやうとする機運が釀成しつつあるのは、甚だ慶すべき現象で、此際醫學及び刑事政策の兩方面から觀察した監獄衞生の根本觀念並に監獄醫學について所信を披瀝して、大方の批判と垂教とを仰ぎたいと思ふ。

現今の監獄衞生はこれを一言に約すると、實に幼稚な悲慘な狀態にあるといふも過言ではあるまい。而して監獄衞生の進步發達の主動者とならねばならぬ監獄醫が社會から落伍者扱ひにされる事は、甚だ遺憾な不愉快な事實ではあるが、これを監獄醫に對する無理解から來る膠見としてよいかといふに、強ちさうでない理由も相當ある樣に思はれる。即ち監獄醫界の不振は明かな事實で、そこには內面的にも外面的にも、精神的にも物質的にも、種々の要素が具備せられてゐる。それらの多くの要素に監獄醫對病囚、監獄醫對國家、國家對病囚なる三 關係に於ける諸施設諸法規の根本的缺陷と錯誤とに胚胎し、相因果して、監獄醫界の廢頹氣分を濃厚にして今日の墮落に陷つたのである。余は敢て監獄醫界の通弊或は墮落を痛罵して快しとするものではないが、現狀の通弊を打破して監獄醫界に一つの活路を見出し、復活の曙光を翹望するものにとつては、勢其病根を索り、其剔抉を計らなければならぬ。此際根治的手術を怠にし、姑息的療法で一時を糊塗し、其經過を傍觀してゐる位では、監獄醫界も終に救ふことが出來ない。

故に私は監獄醫界墮落の諸因を考察して其排除を講じ、次に病因に對する治療の根本觀念を說き、更に監獄醫の本質的職責に說き及んで、監獄衞生政策及び監獄醫學の根本觀念を論じたいと思ふ。

監獄醫界墮落の諸因

元來監獄は刑事上甚だ重要な地位を占めてゐる關係上、官民共に細心な注意を以て行刑の完全を期せねばならぬに係らず、犯罪者の判決迄に異常の注意と興味とを拂ふ社會も、其健康に取扱ふに留意する當局も、一度犯罪者が入監するや、監獄行刑を信賴してか、犯罪者が如何なる狀態に、如何なる待遇を受け如何なる肉體的精神的變化を受けて放免に到るかについて、殆ど注意も興味も拂はない事は甚だ不眞面目な態度と思ふが、殊に

監獄衞生竝に醫學に對しても殆ど社會の顧る處とならず、論議を盡した事を聞かない。これが監獄界墮落の普汎的原因である。

更に監獄醫界墮落の重要な原因を二つ擧げる事ができる。先づ監獄衞生を輕視すると同一觀念で監獄醫の立場に重要な意義を認めず、これを遇するに甚だ低い地位を以てした事が其の一である。この事實は對社會的には社會から忘却される事によつて醫界の敏腕人格者を招く事ができず、對內的には監獄衞生向上の爲に監獄醫が自己の所信を貫くに餘りに無力で、自己開發に向つても亦物質的精神的に餘りに力の及ばないのを歎ずる狀態にある。

二は舊來の刑事政策の眞髓とされた鎭壓主義と刑罰主義の觀念に基づく治療行爲の一種の制限である。それは刑罰の對象である。受刑者に十分な治療的處置を施すことは刑罰の本質に悖るとし、疾病の苦痛を早期に十分に短期に治療し終るは刑罰の苦痛を輕減するものだといふ觀念に基づいて、藥品や衞器械其他の治療設備に著しい制限を加へ、封建以來有意識無意識の間に養はれてきた受刑者の生命を蔑視する潜在意識に飼ひされて、個人竝に監獄衞生全般を輕視した。これらの事實によつて病囚は勿論十分な醫學の恩惠に浴することができず、其健康を障碍し生命をも短縮するに到つた不幸は、詳說を要しないのみでなく、計らずも、この治療行爲の制限から監獄醫の治療に對する信念を誤らし、或は醫師としての所信を貫くことができず、良心を束縛 終に麻痺せしめるやうな結果を見るに到つたのである。この點に關して特に識者の注意を促したいから、後述の病囚に對する治療の根本觀念の項で細論するが、以上の三大原因の齎す惡影響は實に深く且つ廣く監獄衞生の根幹を蝕つたものと思ふ。

事實監獄醫に對する待遇は醫界の一智識を迎ふるには餘りに禮を失した地位しか與へぬ爲に、監獄醫界は渺々として人物なく、曉天の星を見る慨がある所以である。然も監獄內に於ても待遇官であるといふ點で甚だ重要な職責を有しながら、用度作業戒護に對する醫學的主張は勿論、其主管である醫務の事務遂行にすら、其所信を具體化するには種々の支障があり、前述の法規による治療行爲の制限等に禍されて、因循で姑息で未だ監獄醫に醫學的乃至社會的貢獻の顯著なもののあるのを聞かない。種々な材料と機會とを有しながら無爲で一の業蹟を擧げず、自然社會から忘却されるに到つたのである。監獄衞生改善などは殆ど等閑に附して自他共あやしまなかつたのは、今日までの實狀だと言つて憚らない。故に監獄醫の墮落は一面內在的な因由に基づいてゐて、其罪の一半は監獄醫が自發的努力を失

ひ、社會的貢獻は愚か自己の地位すら開拓することができず、社會的落伍者の地位に甘じたに歸すべきであると思ふ。意氣潑溂な新人を待つ所以である。

而して犯罪病理學並に犯罪心理學の見地から、更に行刑及び國民保健の實際問題から見て、犯罪者の健康を企圖することに甚だ重要な意義を見出すに到つたに係らず、到底現狀を以てしては監獄衞生の實蹟を擧げることができない。先づ關係諸法規を改正し有爲の人材を歡迎し、又現任者の發奮を促す爲に先づ監獄醫の地位向上と待遇改善を決行して、監獄なる一區劃内で特別た社會的事情の下に生活し、其健康上特異の影響を受けつつある受刑者の集團を研究對象の主體として、一意監獄衞生の進步改善に努力せしめると共に、保守的退步的な監獄及北醫界に潑溂とした生氣を注入して、諸般の施設に科學的根據を築き、啻に理論的方面のみでなく、更に實際的方面に向つて彼等の集團或は個人の健康を維持增進するに適當な要求を提出し、かつ之を實現するに便にする爲に、監獄醫には監當内に於ける特殊の地位を認めて其權限を擴張し、其所信を縱橫に發揮せしめる機會と、これを具體化する權能とを與へねばならぬ。これ等は重大た意義を持つ監獄衞生の進步改善には當然必要な制度で、此事を閑却して監獄行政は有終の美をなすことができぬと思ふ。現今まで監獄行政の進步が遲々として向上せなかつたは、北醫學衞生方面の不振に基づく事が著しいと思ふ。

病囚に對する治療行爲の根本觀念

自由刑執行中の病囚に對する治療行爲の制限は、動もすれば合理的治療を閑却するやうな現狀にあることは既に前述の通りである。

然し病囚に對する治療的行爲は醫師の公正な立場を守り、疾病治療といふ根本觀念から對者の貧富貴賤善惡に關せず、一視同仁社會民と何等擇ぶ所がなく應用醫學の最善を盡し、一日も早く健康を恢復させねばならぬ事は、識者を待たなくとも明白である。病囚の一部が社會に於ては到底滿足な治療を受けることができぬ地位にあるといふ理由でここに規準を求むべしと論ずるものもあるが、國民の保健、體質向上問題は社會の隆衰に關する重大事で、社會改造の基本定則が國民の健康に繋るが故に、社會的にも個人的にも健康による幸福を均等に享受せしめかつ能力の增進を計らうとする理想的見地から、我病囚に對しても同樣な見解を確立する事は、緊急な根本問題で又國家當然の責務だと思ふ。監獄なる一つの國家的施設が社會的衞生政策の根柢を索るやうでは、社會生活の向上民族形質の改善は到底

望む事ができぬ。

これを醫師の立場から見ても、職を監獄醫に奉じたとはいへ其醫學に對する信念を枉ぐべきではない、治療行爲及び醫師としての良心を被施術者の如何によつて束縛掣肘されるべきものでない。被施術者が受刑者だとて治療の根本觀念を二三すべきでないと思ふ。

更に自由刑の下にある受刑者としても、合理的治療要求の權利を保有するといふ見解は過ちなしと思はれる。

然るに病囚に對する制度及び治療的方面を詳かに觀察するに、其根本を誤り甚だ吾人の信念に反するものの多いのは實に慨歎に堪えない。起死回生も監獄では望むことができず、醫學は何等の權威をも偉力を發揮することができぬのは遺憾至極である、斯の如き現狀にあつては、監獄醫の立場も甚だ困難で、治療行爲に最善の努力を致すのは醫師當然の義務でかつ最も誇りとする處であるにかかはらず、此社會奉仕の觀念を畏縮せしめるやうな制度は、醫師の良心を苛責し心あるものは永續せず、心なきものは已むを得ず姑息なりと知りつつ治療を忽諸に附し去るのを常とし、進歩せる醫學を應用する事ができず、或は應用の必要がない結果、治療に研究的態度を失ひ、興味を缺き、一時的糊塗的診療をなすことに慣れることを以て能事終れりとし、終に良心が麻痺墮落に陷り醫學的智識及び技術は退歩し、相因果して監獄衞生狀態の失墜を來したものである。

故に最も緊急な當面の問題は、病囚に對する治療方針の根本的改革及び確立だと思ふ。故に余は治療的方面に於ては、彼治療者が受刑者なりとの觀念を離れて、其疾病の排除には遺憾のないことを期し、受刑者に對する輕侮的謬見並に此種の規定が疾病其ものの治療に向つて大障碍となる現狀に鑑みて、此等の制限を根本的に改革する必要上、彼等の過去の行爲と現在の異狀病的狀態である疾病とを明かに區別して意識し、疾病其ものの治療は最も適切で合理的であることを原則とするは甚だ緊要な事で、其結果に於ても刑執行の精神と矛盾することがなく、却つて有利な影響を齎すであらう。もし不幸にして入監者が彼等の天命を全うすることができないならば、自由刑は變じて體刑となり、大なる人道問題として考察せねばならぬ。醫師としての責任も重大を加へるといはなければならぬ。

故に余は監獄醫並に刑受者の立場から、「疾病の自由なる治療を希望す」といふ標語を提唱する。而して余の所謂自由な治療とは、合理的な治療の選擇實行に於て自由な謂で、此方面の制限的諸法規の撤廢を希望するものである。

尙監獄醫は一方確實な治療を持すると同時に、國家經濟觀念

の下に自發的に國家の負擔を輕減するために、熱心と注意とによつて最も經濟的に應用醫學有終の美を濟すことに努め、相俟つて受刑者をして醫學の恩惠に浴せしめる事ができる。

かくして治療方針の確立と一定の豫防法とは相俟つて監獄衛生の進步は期して待つべく、不生產的な病囚を變じて生產的となし、刑滿ちて社會に歸る事は行刑の根本精神にも合致して、吾人の立場から見るも欣快措く能はない所である。監獄醫の自覺も是等の點から出發し、進步向上の念を刺戟する事ができるだらう。

此問題に附隨して詳論すべきものに監獄藥局方なるものがあつて、藥品の使用を僅か八十七種に限定してゐることである。是明に日進月步の醫學の大勢に背馳する最も著しい時代錯誤の一例である。

合理的治療法には十分な藥品の選擇を要し、藥品の制限は治療行爲の束縛で、治癒率を低下し、死亡率を高め醫師は退步し、經濟的方面に於ても利益ある能はず、監獄醫の人格を信じ、或は信ずべき人格者を任命することによつて奏効確實で、定評のある藥品は自由に選擇使用せしむる方がよい。不適當な治療によつて徒に時日を空うするのは治療の本意に反するのみでなく、不生產的非人道的で、經濟上甚だ不利益である。近時醫藥學の進步に伴つて新藥の輩出著しく、推奬に値するものが加はりつつある際、姑息な藥品使用の制限を撤廢するは、監獄醫學並に行刑の進步に缺くことのできぬ緊急事と思ふ。

最後に病囚に對する治療の一部として其榮養につき一言しやう。一般受刑者の榮養不給による自然抵抗力の衰脫は疾病に對する素因をなし、疾病增惡の誘因となる事は、統計の示す處によつて明かで、監獄衛生の不備缺陷を指摘して僞りのない斷案を下してゐる。而して其一度罹病するや重症に陷り易いのは理の當然で、死亡率の高いのもここに原因するに係らず、一度病床に横はるや、不就業者であるといふ理由の下に十等食を支給するのを原則としてゐるのは、實に矛盾も甚だしいもので、呆然たらざるを得ない。病者殊に有熱者の新陳代謝は健康者のそれよりも促進し、多量の榮養價を必要とするは定說である。故に非罹病不就業者と罹病不就業者とを區別し、原則として病囚には病症の種類程度によりて五等食内外の榮養價を有する食物を牛乳雞卵粥其他の消化し易き形として支給せないならば、徒らに治癒を遷延し、衰弱は急速で、甚だ好ましくない結果を見るのみである。況んや病囚の大多數が監獄衛生の缺陷から罹病するものであるが故に、國家は全責任を以て其治療を完うすべきである。

監獄醫の本質的職責

從來の監獄醫は前述のやうに其治療的行爲をも制肘された概があり、豫防的方面の如きは全く度外視して何等の自發的施設をなさず、其職責も甚だ狹小な配位に止まり、其勢力が微々として振はず、其貢獻する所も甚だ尠なかつた。けれども監獄に於ける衛生問題は行刑上甚だ重要な意義を有するばかりでなく、かの肺結核や花柳病の如き傳染性疾患が新陳代謝の頻繁な在監者の間にかなり彌蔓してゐる事實から出獄後の社會に及ぼす害毒を考へると、國民の保健問題とも離れることのできぬ深い關係があるのである。

故に余は監獄醫の本質的職責として監獄施設の衛生狀態を觀察し、其病源的要件を探求し、進んで其豫防及び治療策を講じ、其研究業績を發表して交互の研究啓發に資すると共に、是を統一し綜合し監獄醫學及び衛生政策を樹立する事を根本としたいと思ふ。即ち受刑者の衛生的生活に關して行ふべき施設方策を講究し實行するを以て根本義とし、かの社會改良主義に於ける所謂社會政策と同じく、啻に監獄醫の努力に待つばかりでなく、政治家教育家法律學者經濟學者の後援によつて國家對監獄醫、監獄對受刑者、國家對受刑者に關する諸種の法規制度を改善或は創案することにより、行刑の成果に著しい貢獻を期することができると思ふ。

診療に關する意見はすでに前述の通りである。次に豫防的方面は此後監獄醫界に於て最も力を注ぐべき方面で、將來刑事政策を左右する偉大な勢力となる迄に發達せしめねばならぬと思ふ。換言すれば監獄の衛生問題特に受刑者の衛生問題を解決するには、衛生學を根據とする刑事政策に據らねばならぬ。此因果關係が圓滿な發達を遂げて初めて豫防的方面にも十分な施設が成就するのである。この根柢となるべき監獄衛生學の完成によつて、監獄醫の職責が最も本質的に根本的に盡され得た事になり、其基礎に立つて更に監獄醫學の大を成す事が出來ると思ふ。

過去及び現在に於て受刑者の罹病率竝に死亡率の著しい事は顯著な事實で、この狀態は何等かの施設を見ない限り將來まで永續すべく、如何なる方面から觀察しても遺憾な事實である。故に罹病者の治療は勿論豫防的方面にも着眼して罹病者を減ずることに努力し、一般豫防醫學以外に監獄特有の種々の要件を調査し、病源的事項の減殺を企てねばならぬ。特に注目を要するは監房工場の廣狹換氣採光乾濕床等の設備に關し、及び主食の混炊調理副菜の獻立調理被服等の拘禁生活作業生活に於ける精神的肉體關係が行刑上醫學上の要求に適應するや否

究、食糧規程による作業別と食等別との關係に對する科學的研究、作業者の勞働時間配位姿勢運動度徵罰等に關し又拘禁者の姿勢運動體操機式清潔等に關する科學的研究、受刑者の特質に對する醫學的研究等である。

是等の事業の完成によつて初めて現行の制度を科學的根據を以て論ずることができて、諸種の問題が改善と解決の曙光を見出すことになるのである。然るに此方面の業蹟は從來殆ど閑却されてしかも甚だ廣汎な事業であるので、到底少數者の努力によつては完成に非常の時日を要するから、廣く監獄醫全般の一致的努力研究的態度によつて端緒に就き、其かち得たる智識を交換し比較し、各方面の權威の意見を斟酌し綜合し、初めてよく成就するに到るのである。故に是等の業蹟發表の機關として監獄醫學雜誌を刊行し、醫學者法律學者工學者等よりなる一つの顧問機關を設け、監獄醫學及び衞生政策の發達を期すべきである。

次に監獄醫の職責實行方法として一般に醫務の執行及び監獄醫の意見を尊重すべき事項に關しては、典獄に隷屬せないか或は獨立的意見を發表し得ることとし、醫學的研究調査及醫務執行に關しては看守命令權を認め、行刑上の支障と矛盾とを來さない限り文書用度作業戒護係に對し監獄醫の意見を尊重服從せしめる事を規定し、監獄醫學の發達に何等の支障が起らないやうにする必要がある。

而してここの考察を要する問題は科學的研究或は調査を一部或は全部の受刑者について行ふ事は行刑の秩序と統一を亂すものだと論ずるものがあるけれども、是は甚だしい短見の致す所で、受刑者に一定の變化が起つた場合起りつつある場合或は起らうとしてゐる場合に、其受刑者の全部或は適當だと認める一部について其現象を客觀的に觀察し、其行刑醫學的犯罪學的社會的意義を詳かにすることは犯罪豫防疾病豫防行刑の適法上甚だ適當な處置で、何等違法行爲でなく、行刑の秩序も統一も亂れる事がない。

即ち是等の調査は在監者を對象として物質乃至動物視するのではなく、在監者に起つてをる或は起らうとしてゐる現象を系統的に配列し統一し、以てそこに存ずる一の眞理を見出さうとするので、特に在監者の健康狀態を障害し異常の負擔を課して一定の變化を起さしめない限り、調査が彼等の健康狀態を保たし改善するのを目的とする手段として何等の支障を見ない。經課な發意根據薄弱な習慣的試驗的處遇法に比して、是等の處置に學術的根據を與へて科學的に觀察することは最も適當な手段で、舊來の陋習を破つて新たな監獄衞生の基礎を築くに最も必要な方法である。

最後に引取人のない或は遺言による死亡受刑者の解剖は、官公立醫學專門學校或は大學に送付し執行し得るも、監獄醫には許れなかつた事は、如何なる理由に基づくか甚だ解し難い。自己治療の患者が如何なる病理解剖學的變化を呈するかを研索し、其臨床的變化と比較考究し、或は在監者に特異な或は著明な變化を發見するやうになつたならば、其裨益する處は甚だ大で、其業蹟發表は監獄醫學の發達上又監獄醫の啓發上甚だ有益なことで、此後一般に廣くかつ多くの機會に於て適當なものについて執行する事は當然認可すべきだと思ふ。他に許して當事者である監獄醫に許さぬなどは侮辱の甚だしいものだと思ふ。事實かかる制度の存在する爲に貴重な屍體を無爲に歸してゐることは、甚だ遺憾とする所である。

余は甚だ不統一ながら其欲する所を畧言ひ盡したけれども、其實際問題に到つてはまだ論及せないものが甚だ多いと思ふ。唯余は本文によつて上述の根本觀念が一日も早く制度の上に實現されて、抱負に滿ちた熱心な監獄醫諸君をし監獄衞生向上の爲に專心努力する機會を與へ、大方の叱正を待ちて行刑の成果を結びたいと冀ふ次第である。

小賣商の暴利問題

法學博士　堀江歸一

物價問題の諸方面

我國の物價問題は最近數年間常に時論の中心點と爲つて居るが、之を解決する政策は必ずしも一であるを得ない。時勢の變遷と共に、種々の變動を來して居るのである。始め通貨膨脹の爲めに、物價の騰貴して居つた時代には、物價調節の爲めに、通貨の收縮を必要としたのである。其後經濟社會が沈衰すると共に、通貨は自然に縮少することゝ爲り、通貨の縮少するに至つて、信用も亦次第に收縮することゝなつたのである。斯く通貨の收縮すると共に、信用の膨脹にも制限が置かれ、社會の全

點から見て、其の購買的効果は大に減少するに至つたものと思はれる。是れが大正九年春の恐慌から、暫時の間、我國に於て物價の低落するに至つた重なる原因であると認められる。昨今再び我國の諸物價は騰貴するに至つた。其原因の如何なる邊に在るか、通貨が收縮して、物價が下落しないので、世間では通貨と物價との間に、著しい關係の存しないことを論證するやうであるが、減少したのは兌換券の發行高だけであつて、信用的貨たる銀行預金の小切手に供される程度は金融緩漫の結果として、依然として甚だしきものゝある一方に、兩三年前に比較すれば、我國に於ける物貨の生産高は餘程減少して居り、隨つて市場に出廻つた上で、通貨に對して交換される分量即ち通貨に對する需要の減少して居ることを考へると、私は今日に於ても我國の物價騰貴が多くの程度まで通貨の膨脹（信用の膨脹を含むのは無論）に支配されて居る、即ち物貨生産の減少したと同じ割合に、通貨の減少しないことを擧げたいと思ふが、此事は姑へ別問題として、私が本論に於て攻究しようとするのは、我國に於ける、卸賣相場と小賣相場との關係である。即ち昨年中我國に於ては一時物價に下落を來したに相違ない、而して其下落したと云ふのは、卸賣相場の事であるが、斯く卸賣相場の下落しつゝある間に於て、小賣相場は如何に成つたかと云へば、決して卸賣相場と共に下落して居らない、而して一旦卸賣相場が騰貴の緒に就けば、小賣相場も亦騰貴し、殊に卸賣相場よりも強い勢を以て、騰貴するのである。斯く兩者が時に背馳したり又時に緊聯する働きを生じるのは、何の爲めであらうか。

元來卸賣相場と小賣相場とは、物價の形と影との如きものであつて、必ず相伴つて、變動す可き道理である。多くの場合を通じて、此道理は實際に働いて居るのであるのに、我國現下の事情に於ては、卸賣相場と小賣相場とは互に背馳し、卸賣相場と云ふ形が少さく爲つて居る時に、却つて小賣相場と云ふ影が大きく爲るといふ奇怪なる現象を示すのである。斯る矛盾した現象の生ずる原因は之れを如何なる邊に求む可きものであらうか。

小賣業者横暴說

今日世間に流行する議論としては、小賣營業者の横暴と云ふことがある。如何にも小賣營業の横暴と云ふことは、私も公衆と共に、之を認めるのに躊躇しない。今日小賣營業者は其何の種類に屬するを問はず、必ず同業組合を組織し、組合の規約を營業上に於ける大小の事項を律して居るのである。同業組合法の設けられた精神は之に依つて同業者間に自治的行動を盛に

し、斯業の製品を誤り改良を實現させようとする一事に在つたものと考へられるが、斯る効果の現はれる以前に、營業者は同業組合を通じて、斯業を獨占することを工風したのである。即ち彼等は同業組合の規約に依つて、同業者の競爭の起ることを防ぐ爲めに、或る地域に於て新に同業者の營業を開始することに制限を加へる一方に、同業者の販賣する物資に就て、其價格を限定したり、又は其引上げられる時には、同時に之を引上げて、以て消費者に對抗する手段を取つて居る。

斯くて我國に於ては、卸賣相場と小賣相場との間に於て、形影相伴はしめる現象の生じるのを妨碍するのであつて、此點から見れば、小賣營業者が暴利を貪るとか、又は横暴であるとか云ふ非難の現はれるのも、一理ありとしなければならぬ。其處で私は經濟學の理論が實際に適用されるに當つて、種々の條件の付せられなければならぬことを認めるのである。經濟學には正常價格の原則もあれば、正常利潤の原則もある。前者は物の價格で、生産費に一致す可きことを說くのであり、後者は利潤の他の收益と均衡を保ち、營業者をして營業を繼續させるに就て、辛うじて彼等の滿足を收める點に於て、利潤の決定されることを論ずるのである。而して經濟學の說明する所では、價格が正常點以上に騰貴したならば、貨物の生産を刺戟して、其供給を増加し、價格を正常點に復歸せしめるが如く、利潤が正常點を超過したならば、必ず營業者の競爭が盛に或は外部から競爭を誘致して、正常點まで利潤を低落せしめるとするのである。斯る自然の調節が一國の經濟社會に働いて、其作用に缺る所なしとしたならば、總ての經濟關係は之を自然に放任すれば宜しいのであつて、其間に何等經濟政策を施すことを必要としないであらう。然し我國現下の狀況に徵して、考へると、以上の原則は少しでも働いて居らない、小賣營業者が何處まで暴利を貪つて居るかは、之を明にするを得ないが、兎に角卸賣相場に追隨して、小賣相場の下落しないことや、卸賣相場よりも強い割合に於て、小賣相場の騰貴して居ることを考へたならば、小賣營業者が暴利を貪りつゝあるの事實は之を斷定して、妨げないであらう。然も彼等は組合の下に團結して、何時までも外來者の侵入を防ぎ、以て永く暴利を占めることに勉めて居るを見る。斯くて正常價格の理論も、正常利潤の學說も共に、我國に於ける小賣相場の決定には適用されないのである。既に然る以上は、此小賣相場の騰貴を掣肘し、同時に小賣營業者をして暴利を獲得することなからしめるには、經濟政策上の干渉を必要とする筈である。然るに政府は此點に於て何事をもしない。是れでは小賣營業者が得たり、賢しと暴利の獲得を逞うするの

も、不思議とするに足らないのである。

小賣業者は何と辯解する

然し盗賊にも三分の道理のある如く、私は小賣營業者の暴利獲得にも、彼等の立場から考へて多少の道理の存することを認めざるを得ない。蓋し我國に於ては歐洲戰時數年間に際して、經濟社會の狀態の亂脈であつたことは、他に比類を見ないのである。諸物價は騰貴に騰貴を重ねる、政府の政策は火に油を注ぐように、此騰貴の勢を助長する、資本家は事業家と結託して、會社を新設し、虛業の濫興を通じて、暴利を占めると云ふのが一般の有樣であつた。小賣營業者の如き、固より此大勢を觀望して、手を拱いて居る筈はない。彼等の內には手元に餘れる資金を融通して、株式に投機を試みた者もあらうが、同時に自己の本職である小賣營業に依つて、世間の資本家や、事業家の獲得して居ると同樣の暴利を貪らうと考へ、此點に於て出來るだけの手段を盡すことを以つて、當然であるとしなければならぬ。既に銀行に預金利子の協定があり、火災保險會社に保險料の協定があり、其れ〲競爭の行はれる程度を制限して、自家の利益を防衛する以上は、小賣營業者の團體的行動も亦承認されるに至るであらう。

小賣業者の暴利に成功する條件

但し小賣營業者が幾ら小賣相場を引上げて、暴利を貪らうとしても、其計畫を實現するに就て、困難の伴ふ場合がある。如何なる場合が之に該當するかと云へば、

第一、同業者の態度が一致しない、

第二、政府が物價の引下げに全力を盡して、已まない、

第三、政府なり、消費者なりの間に於て、小賣營業者の態度に對抗する手段を講じ、施設を行うとする、

第四、消費者が一般に小賣相場の騰貴に對して、神經過敏である

ことの諸點は卽ち是れであつて、自ら小賣營業者の小賣相場を引上げ、又之を高い程度に維持しようとする計畫を頓挫させる譯であるのに、今日の我國に於ては、上記四種の事相の如きは一として之を見出すを得ない。此一事こそ卽ち我國に於て物價問題殊に小賣相場問題が解決され可くして、解決されない根本の原因であると思はれる。

一の地域に於て、小賣營業者が互に競爭する自由を持つて居つたとしたならば、營業者中の或る者は必ずしも永く小賣相場を引上げて、暴利を貪ることを營業に於ける唯一の手段とは考

へないであらう。既に卸賣相場の下落し出した以上は、之に伴つて、小賣相場をも引下げ、斯くて廣く社會多數の人々に多量の物資を賣却することに力を致し、之を以つて商賣の繁昌を謀る方が遙に基礎に於て確實であると認めて、其方針に出る者のある可き道理である。一人が之を爲せば、他の數人が之に倣ひ、斯くて全體の風潮を左右することも、容易なるを得るのであるが、我國の現状に於ては、斯る場合に同業組合が非常に大なる力を揮つて、同業者を拘束し、組合全體の利益の爲めに、決して一騎駈けの功名を爲すことを許さない。即ち組合の勢力を通じて、小賣業者をして暴利の獲得に猛進せしめる次第であつて、是れが我國に於て卸賣相場と小賣相場との間に、大なる背馳を生ぜざるを得ざらしめる所以である。

此場合に若しも物價が近き將來に於て、必ず下落すると云ふ前途の見据へが付いて居つたならば、如何であらうか。當業者の内で、少々冒險敢爲の氣象に富んだ者は組合から蒙る多少の壓迫はあるとしても、之を排除し、組合の關係を脫退して、自由に小賣相場引下げの先驅をするかも知れない。斯くて卸賣相場の益々下落することの結果として、一般の小賣營業者をして愈々小賣相場を引下げざるを得ざらしめる譯であるのに、我國に於ては、物價の前途は如何に爲るかと云へば、大正九年四月以來暫時の間卸賣相場の下落したのは、何か一時の間違であつて、昨今の如く再び騰貴の勢を廻つて居るのが眞實の狀態であると考へられる。否今一度劇しい恐慌でも起つて、其反動として社會の表裏總てが極端なる不景氣にでも襲はれなければ、物價は諸外國と同樣の步調に就くまでに下落するとも思はれない。此考が果して正鵠を得たものであるかどうかは姑く措き、更に偶斯る考が餘程一般に行はれ、而して卸賣相場に於ける再度の騰貴が現實の現象として、目前に迫つて居る以上は、小賣營業者が何で卒先して、小賣相場を引下げる道理があるであらうか。輕卒に其引下げを行つたならば、卸賣相場に於ける再度の騰貴と共に、之に制されて、幾日の引下げを取消さなければならぬことゝ爲るのは、明瞭なる成行である。果して然らば組合全體の所爲に雷同し、卸賣相場に於ける一時の下落などは、全然之を眼中に置かず何處までも小賣相場を高くして、消費者を虐げることを得策とするのである。

政府の物價政策

一國の物價は或る程度まで、國家經濟政策上の方針に依つて、左右されるのである。故に今日の我國に於ても、政府が眞に物價を調節する、又物價政策を確立する誠意があるならば、

卸賣相場は當然下落す可き筈であり、卸賣相場が下落す可き大勢に居り、又現に下落して居るのに、小賣相場が下落しないと云ふのであれば、是れこそ小賣營業者の横暴を暴露したものであつて、之を取締る道は多々あるのである。然るに我國では肝腎の卸賣相場が一時下落したかと思へば、再度の騰貴を示す、是れでは物價下落の勢の生じる本源が閉塞されたと同樣であつて、小賣相場の下落しないことも亦敢て異とするに足らないであらう。

政府が物價調節を必要とし、物價騰貴の大勢を抑制する意思さへあるならば、其爲す可き方策は敢て少なしとしない、第一公債なり特種銀行の債券なりの發行に依つて、民間に在る遊金を回收することの如き、第二斯くて金融緊縮の端を開き、通貨は勿論信用の膨脹を抑制することの如き、第三金輸出禁止を解除することの如きは、即ち其れである。金輸出の禁止を解除したとした所で、在外正貨の存在する今日、直に通貨を縮小させる當面の効果は之を齎さないとしても、自然當業者をして資金融通上に警戒を與へさせる點に於て、相當の効果があるのであるから、之を斷行することの如き、何れも物價調節の爲めに行はなければならぬ所に屬する。而して卸賣相場が引續いて下落しつゝある場合に、小賣相場が之に對して風馬牛相關せざる狀態であつて、依然たる騰貴を示し、兩者の鞘開きが如何にも甚だしい。即ち小賣營業者の暴利を貪る事實の歷々たるものがあるとしたならば、政府の之に對す可き道は甚だ簡單である。即ち小賣營業者の横暴を敢てする本源である同業組合に向つて、其所爲の公益を害する所以を以つて、斷然之に解散を命じ、斯くて當業者の間に競爭の自由を誘導するのは、一つの策であらなければならぬ。當業者が暴利獲得を目的として、互に聯合して國民の生活を脅威することが公益を傷ける所業であるのは論を俟たないのである。而して是れだけで尙ほ當面の問題を解決することが出來ないとしたならば、私は政府が種々の物資殊に國民生活に重要の關係ある物資に就て、最高價格公定の手段に出ることを以つて、必要と考へる。價格公定の制度は諸外國に於ては、戰時經濟に於ける一施設として行はれたのであつて、或は戰爭でもなければ、此制度は實行不可能であり、又實行の理由に乏しいものゝように考へられるかも知れないが、何も歐米諸國と雖も漠然戰爭に爲つたから、物價公定制度を行つたのではなく、戰爭に爲つて、物資の需要供給が調節の道を失ひ、正常利潤の法則も、正常價格の學說も共に、働き道がなくなつた結果として、此制度を敢てするに至つたのである。果して然らば物價公定制度を誘つた直接の原因は戰爭でなくて、戰

爭の爲した價格の不當なる騰貴に外ならない。斯の如く考へたならば、今日の我國に於て、最高價格公定の制度を少なくとも日常生活の必要品に對して、適用することに就て、何の憚る所があるであらうか、私は此點に就て躊躇する人のあることを怪むものである。

原内閣頼むに足らず

即ち物價問題殊に小賣營業者の暴利問題を解決するには、多くの程度に於て　經濟政策の力に頼らなければならぬ譯であるが、政府は果して吾人の依託に負かないだけの事をするであらうかと云へば、私は此點に於て政黨内閣の無力であることを認めざるを得ない。如何にも今日の時勢に於て、官僚内閣とか、軍閥内閣とか云ふような一部國民の勢力又は國民全體の背後に隱れて居る少數者の勢力を代表する者が政權を掌握することの時代錯誤の甚だしきものであるは、論を俟たない。政黨内閣なるものが今日の政治組織の認められる以上は、政治の一形式として、必然必至のものであることは已むを得ない所であるとして、其政黨内閣が眞正の意味に於て、國民全體の爲めを念として、政治を施して居るであらうか。今の原内閣は政友會を基礎とした政黨内閣であるから、此内閣の所作は自ら政黨内閣の國政に於ける價値如何を批判する資料と爲るのである。原内閣が今日の如く衆議院に絶對多數を占める政友會を根據とし、一方に貴族院の一大團體である研究會を與黨として居る以上は、如何なる經綸も之を實行しようと欲すれば、實行し得られる譯であつて、原氏以下十名ばかりの閣員が眞に國士を以つて許される人であつたならば、國政の上に充分の成績を擧げられる地位に在るのである。然るに彼等の政治上に爲す所は果して何たる有樣であらうか。最も野卑なる黨派的根性に支配されて、國利とか、民福とか云ふようなことは、第二位に置き、先づ第一に如何にしたならば、社會に勢力ある階級の歡心を繫いで、政權の掌握に好都合に爲るであらうかと云ふ一事に全力を擧げて、工風を凝すのである。所謂金權政治は此點から端を發するのであつて、選擧有權者が少しでも纏まつた團體で運動するとか、又は背後に金權者階級があつて、或る事が成就すれば、此種の階級に屬する人々が内閣を德とするとか云ふような狀勢でもあれば、政府は必ず其意を容れて、只管自家の及ばざることを恐れて、已まないのである。原内閣の施政三年間を通じて、苟且にも金權者階級と衝突したのは所得稅法改正の時だけであつて、其れも政府の方で大々的に讓步して、配當金所得に莫大なる控除を認め、金權者階級の希望に迎合して、事端を收拾した

譯である。

随つて原內閣位い、金權者階級に取つて都合のよい內閣はあるまい。金權者階級は或は此內閣を以つて、自家の利益を防衛する機關と考へて居るかも知れない。而して斯の如く原內閣は金權者階級に有利なる政治を行うと共に、消費者とか勞働者とか云ふような階級に對しては、極めて酷薄なる態度を取るのである。固より消費者の階級と云へば、甚だ散漫なるものであつて、随つて一つの階級として、團結した上で、或る行動をするが如きは、思ひも及ばない所であり、勞働者階級の如きも、一局部では時に團體的行動をするだけの地位に達したものゝ、更に一步を進めて階級全體の利益を防衛することも出來なければ、政治上に有する權力も頗る乏しいのである。有產者と無產者、勤勞雇傭者と俸給衣食者、資本家と勞働者と云ふような團體が社會に於て、互に對立する場合に、双方の利害が衝突することは、勢の免かれ難き所であるが、斯る場合に原內閣は決して公平中正の態度を取るのではなく、孰れの階級か政治上に權勢ある者の爲めに、援助の勞を致し、無勢力の者を壓倒して顧みない。現に昨今問題に爲つて居る地方敎育費の節約にした所で、小學敎員と云ふ社會上の關係に於て、弱者である階級を虐げようとするのであつて、弱い者虐めは、徹頭徹尾原內閣の政治に離る可からざる關係を持つて居るものと見られる。既に原內閣は斯る素質を持つて居るものであるとする。小賣相場の高低に就て、利害の關係の相反するものは、消費者と小賣營業者とであつて、而して今日の如く一方に小賣相場を引下げよと云ふ要求が起り、他の一方に之を引下げまいとする當業者の運動も亦熱烈に行はれて已まない場合に、原內閣の如き素質の內閣は何を目安にして、此問題に臨まうとするであらうか。彼れ內閣員等は決して孰れの要求を容れ、又孰れの運動に從うのが社會に於て正義の觀念に適うものであるかと云ふようなことは、全然顧みず、政治上の權力者に阿らうとする。小賣營業者は相當に團結し、團體としての意思に依つて、行動する以上は、政府が或は物價の騰貴を計畫したり、又は其下落を防害したりして、彼等の意を迎へ、望に應じようとするのも亦怪むに足らない。

物價の騰貴恐る可し

或は今日物價が騰貴しても、當業者は騰貴した價格で買つた物資を同じく騰貴した價格で賣るのであつて、相當の利益が收められる、俸給生活者や、勞働者にしても、既に物價騰貴の頂點に達したと考へられた時代に於て、相當の增俸や、賃銀の

增率を與へられたのであるから、今更ら物價騰貴が續いても、何の苦痛さを感じまいと、頗る當面の問題を樂觀して居る人もあるが、是れこそ俗に云ふ痴人の樂園に遊ぶの愚と擇ぶ所なき考である。現に俸給衣食者や勞働者の内には、失業者失職者が續出して、彼等の生活を脅威して居るではないか、幸に職業に留まつて居る者にしても、俸給 食者は賞與金や、臨時手當金を奪はれ、勞働者は減給を迫られる。昨今處々に蜂起する勞働爭議が要するに勞働者の減給防止を重要なる目的として居る事實に徴しても、事の一斑を知るに難しとしない。即ち私は今日の如く國民日常の消費に密接の關係を有する小賣相場の騰貴して已まない、殊に商工業の不景氣の社會に漲りつゝある今日に於て、尚ほ騰貴の勢を更めないことを以つて、純然たる經濟問題だけであるとは考へない。經濟問題の領域を逸して、社會治安の問題と化しつゝあることを認め、且つ虞れるのである。尚ほ今一つ私が今日の物價問題に就て、何としても上記の樂觀論者に賛成することの出來ないのは、物價騰貴の外國貿易に及ぼしつゝある影響を考へるからである。過般來我國の貿易は滔々たる勢を以つて、輸入超過の方嚮に向つて居るが、是れは今日の如き狀態に於ては、當然の事實である。物資の割合に多くの正貨を擁して居る國が物資を得て、正貨を失うのは、國際間に貸借の均衡の保たれる尋常の徑路であつて、何等異とするに足らぬ。殊に歐米諸國に於て、物價下落の勢が甚だ急であつて、我國が世界を通じて物價騰貴に於て、第一位の國である場合には、尚ほ更ら如上趨勢の著しきを見されば已まない、斯くて一旦反動期に入つて、物價に急劇なる低落を來すに至つたとしたならば、其時こそ我國は再び第二の恐慌來に接することを免かれないであらう。前途の斯く明である場合に、政府が物價調節を試みない、民間に於ても之を要求しないと云ふのは、何たる間違であらうか。近頃世間には輸出貿易を增進せよとか、又は輸入貿易を抑制せよとか云ふ聲が喧しいようであるが、是等の目的を達するには、何等複雜なる施設も、綿密なる工風も必要ではない、唯一つ内國の物價を下落させれば、即ち足るのであつて、此一事を閑却して、輸出增進輸入抑制を說くが如きは、無意義の沙汰である。

物價問題と國民――消費組合

上來論述した所を綜合すると、私は物價問題の解決に就て、幾ら政府の力を藉りようとしても、殆ど其望みのないことを知らなければならぬ。斯くて政府の施設は之を斷念し、國民自身の力で、物價問題を解決することゝ爲るのである。即ち國民が

政府に向つて、經濟政策上の不備を補い、緩怠を除く次第であるが、斯る風潮が盛に爲つて國民は果して政府の政策其ものを無用視有害視するような、傾向を生じはしないであらうか、此一事は私の憂慮する所であつて。政府當局者が之を顧みないで、物價の問題を放擲する無神經加減に對しては、之を評するの辭なきに苦まざるを得ない。

借私は國民自ら物價問題を解決せよと云つた。然し之を解決する場合には、政府が如何に怠慢であり、又偏頗であり、一方に小賣營業者が如何に横暴であるとしても、吾人の爲す所は飽くまでも合理的であり、又合法的でなければならぬ。然らば吾人は如何にして物價に對して合理的合法的引下策を施す可きものであるか。私は此點に於て第一に消費組合の改造と普及とを主張する。消費組合は今日大都會に於て設けられて居るもの、敢て三四に止まらない。然しながら是等の消費組合たる、其性質から云へば、專ら配給的消費組合であつて、生産的消費組合でない。既に配給的消費組合である以上は、市中の小賣營業者が物資を仕入れると同じ所から、略ぼ同じ價格で仕入れて來るのであり、時には仕入に慣れなかつたり、製造業者や、卸賣業者に對して、充分の押しが利がなかつたりする爲めに、却つて小賣營業者よりも、消費組合の仕入れの方が仕入の高く付くことがあるかも知れない。而して消費組合は幾ら營利の觀念へ離れて經營されるものであるとか、市井の小賣營業者のような營利を貪るものでないとか云つた所で、又營業税の免除される位の特典あるとした所で、相當の店舗を開き幾名かの事務員を雇ひ、此廣い東京とか、大阪とか云ふような大都會の總てに互つて網羅された組合の會員に向つて、彼等の滿足を得る位、頻繁に御用聞きを出したり、註文品の配達をしたりしたならば、隨分大なる營業費が掛り、其爲めに小賣營業者の顧客に課する賣價と略ぼ異ならざる代價を徵收することゝ爲る。斯くて消費組合は營業費節約の爲めに、御用聞きや、註文品配達の回數を減ずれば、組合員の方では之を不便とし、何時でも時を選ばず註文品を配達する、又五月蠅い位に御用聞に來る小賣營業者の方を便利とするのであつて、私の知つて居る多くの家庭ではどうも消費組合に加入して、大なる便利を得るとは考へて居らないようである。

其處で消費組合を改造し、相當の資本金と優れた經營的才能とを要する話ではあるが、配給的の職分から、一歩を踏み出して、生産的の方面に入り、例へば薪炭を供給するならば、組合自ら山を買ひ薪を切り出し、炭を燒いて、組合員に供給する。大都會附近の郊外に牧場を經營して、牛乳牛酪乾酪の類を組合員に

配する。斯る方法の下に生産者と消費者との間に於ける多くの仲介者は除却され、物資を兩者直接の授受に任すこと、爲る。消費組合が總ての物資に對して、悉く生産者の地位に立つことは困難であるとしても、一の組合に於ては、或る三四の物資を生産する、他の組合は亦他の三四の物資を生産する、而して小賣營業者が横暴なる處置の下に、小賣價格を左右する形勢であれば之に對抗して、他に生産品の種類を擴げると云ふ態度に就いて、茲に始めて消費組合の力を通じて、小賣營業者を掣肘するに至るのである。私は我國に於て、經營の才能を具備した人の手腕に依つて、消費組合の改造されることを必要とする意識も此邊に存するものに外ならない。

第二に私が消費組合に望む所は、自家の店舖に相當の商品を仕入れて置き、廣く組合員を始め、一般世人の購入を待つのである。唯組合員に對しては半年末とか一年末とか時を定めて買入れた金額に按分して、利益金の割戻をすると云ふ形で一般の顧客よりも、有利たる地位に立たせる。双方に對しては、共に現金勘定とし、組合員に對しては、其支拂つた勘定金額を帳簿に記錄して置くのである。此方法は相當の資金を要するが、消費組合をして小賣營業者を制せしむる最良の方法である。

公設市場問題

消費組合と相俟つて、改造を要するものは、公設市場の制度である。若しも政府にして物價調節に誠意の認め可きものがあるとすれば、公設市場の如きも、國家の經費を以て、全國主要の都會に設立したいのであるが、如何にせん、今日の原内閣の如きものであつては、小賣商人を助けて消費者を壓迫することに、一勞の力を致しこそすれ、小賣値段の引下げに効果ある政策などには殆ど見向きもしないのであるから、私も斯る内閣は全然相手にしない。唯地方自治體が此際市民の利益を尊重し、然る可き財源を工風し、相當の永久的設備の伴つた公設市場の設立に當ることを希望する。一昨年來府の經營で東京市内に設けられた公設市場のような頗る狹隘なバラック式の建物であり、又殊更に市民の集まりさうにもない不便の場所に設けられたのであつては、商人も決して安心して、商品を持込まないであらう。消費者も買物に來ることを好まない。公設市場である以上は、市場らしく魚肉類を冷藏するとか、鮮魚は生洲に放つて置くとか、蔬菜類も亦生の儘で保存するとか、其れ〴〵の設備を整へて置かなければならぬ譯であり、公共設備から無料なり、又は低廉なる料金で、斯く設備の行き屆いた場所を利用す

る特典を與へられる以上は、公設市場で賣却される物資の價格は必ず低廉でなければならぬ道理である。何故に地方自治體は市民の爲めに、生活難を除き去る施設をしないのであらうか。其れとも今日の選擧制度に於て、小賣營業者の如きが存外市會議員の選擧に勢力を持つことの關係から小賣營業者の利益を傷けるように市政の方針を向けることが出來ないのであらうか、私の疑を挾む所である。

消費經濟の改善

既に政府も物價問題の解決に就て、頼むに足らず、地方自治體も如何なる働きをするか、分らないとしたならば、個人銘々の力に依るの外に道はない。斯くて私は物價が高い、小賣相場が殊に高い、斯くて生活の壓迫される今日に於ては、吾人の消費經濟を改造することが急務であると考へざるを得ない。此事の詳細を論述するのは婦人雜誌向きに屬るから、本論に於ては左に大體の筋書を掲げるだけに止める。

一、掛賣で買ふことを止め、成る可く現金勘定にすること。

右を實行するに就て、今日の如き毎月廿五日前後に俸給の支拂はれる制度が不適當であるとすれば、百圓以下の俸給は週末拂とし、二百圓以下の俸給は毎月二回拂とするような制度を取ること。

二、主婦の活動を促すこと。

我國のように、小賣營業者の御用聞きが註文を取りに臺所口に來、主婦は居座りで物資の品質や、數量をも檢定せず、御用聞きの持込む儘に受取つて居るのでは、詰り小賣營業者に乘ずる隙を與へるようなものである。主婦の居座りでは公設市場なり、消費組合なりが完全に出來ても、利用される道はない。私は中流以下の家庭では主婦自身が其以上の家庭では、家政婦が、一日一二時間は買物に市中に出掛け、小賣營業者の店舖に就て、品質の良否、價格の高低位を實地に檢定するだけの勞を取らなければならぬことゝ考へる。

三、商人をして現金拂に對する代價割引の制度を設けさせること。

月末勘定であれば代價に利子が加はつて、幾分高く爲るのが、當然であるが、更に商賣人は月末勘定の取れなかつた場合に生じる損失を見込んで、代價を高くする、隨つて今日小賣商人に向つて、確實に勘定を支拂つて居る人は實は勘定を踏み倒す人の分まで負擔して居るのであつて、此位馬鹿氣たことはない。即ち現金拂をする人は其現金拂であ

る故を以て、若干の割引を商人に要求するのが當然である。

要するに右の如きは多年の風俗習慣に反する點もあつて、實行に困難もあらう、殊に主婦の活動と云ふ一段に爲れば、封建時代からの因襲と爲つて居る所謂奥樣氣質を一掃するとか、又は服裝を如何に改良するとか云ふような問題も起つて來るが、今日こそ是等の問題を解決するのに適當なる時ではあるまいか。

物價問題の由つて生じ來つた原因を單一の事柄に歸するのは根本的誤謬であつて、之を解決するに就ては、社會諸般の關係に亘らなければならぬ。唯我國の農商務省が事の大なるものは之を閑却しつゝ、其小なるものを詮索し、世帶の會とか稱するもので、一時を彌縫しようとする際に至つては、何ともしようがないのである。

外國語ののさばりこみ

――附日本語の世界的發展――

福永恭助

一　讀者からの反駁論

◇嘗て私は本誌上で先づ、野郎事大で自主的精神に乏しい日本國民の一部が必要の程度を超えて外國語を濫用しつゝある事に就いて讀者諸君の警戒を促し――此點で彼等は支那人や朝鮮人の事大思想を笑ふ資格はありません――續いて、準外國語とも謂ふ可き漢語の濫用は我國民が漢字に對する執着を捨て無い限り之を匡正する事が出來無いと論じ最後に、それを救濟するのには實にローマ字や假名の樣な音文字に依るのが一番有効な方法であると議論を結びました。

◇處が其後此議論に對して東京の杉崎（假名）と云ふ方から私は次の樣な意味の長い手紙を受取りました。

『（前略）私は八月號の中央公論に掲げられた「國語國字問題に關する一考察」と謂ふ論文を多大の共鳴を持ち、有益なる教示を受けつゝ拜讀したのです。殊に二十九頁の「日本人が日本語を捨てると謂ふ事は日本人であると謂ふ事を捨てる樣なものだ。與々も斷つて置くが、我國は英國の殖民地でも米國の殖民地でも無い」及三十一頁の「日本人の事大思想から起る此の惡い現象で云々」と云ふ處、御識見の確固卓越せる、拍手喝采を禁じ得なかつたのであります。然るに、然るに思はざりき其末段に至つて私は背負投を喰つたのです。私は貴君が事大思想を痛擊され乍ら、自ら遂に事大思想に囚はれ、英米の殖民地の人民となられて仕舞つた事を遺憾に存じます。（中略）貴君が、國字をローマ字に改めれば根本的に改まると思はれるのこそ根本的誤見です。何となれば

（一）日本が漢字を輸入した爲めに「行」の字に十色も讀み方が出來たり、「氷枕」を「ひやうちん」と發音するやうな思想が湧つたり或は同音異義の漢語が新たに作られたりするのと同樣に、ローマ字を國字とする事に依つて日本の言語上に如何なる變化を招來するでありませうか？ 而もなほ今世界に最も隆盛を極むる英米の文字を其儘日本に移植せんとする事大思想に至つては昔時最も旺盛を極めた支那の文字を其儘移殖した事大思想と何等異る所はありません。

（二）文化の程度高く、言語の豐富なる英米の國語に於てすら同一系統の文字を有する他の國より輸入した所の言語、綴りも發音も其儘使用せられ、英米本來の綴字發音に依つては解し得ないものが許多混入して居るのは如何なる理由に依つて然るのでせうか？ 他日「ローマ字國」になつた日本が——英米に比して言語の豐富ならざる日本が——英米の言語を英國式に發音のみならず綴字をも其儘輸入し來つてローマ字綴の中に混淆使用するに至るは寸毫の疑もありません。現今ですら「日給取の組合」をsalarymen's unionと改稱する位であるのに、文字迄もローマ字に換へたならば、日本語は遂に英語化されて其影をだに止め無い樣になる時期が來はしまいか？』

◇ローマ字に就いて此種の疑を懷いて居る人は恐らくは論者一人ではありますまい。彼の熱心な平假名縱書き論者の一人で「かなのめばえ」と云ふ雜誌までも發行して居られる東京池袋の成蹊學園々長中村春二氏も其一人でして、ローマ字の採用が外國語ののさばりこみを招ぎはしないかと云ふ點をも顧慮してローマ字に贊成し兼ねて居られるやうに伺つて居ます。又私の同僚である海軍士官の大部分も此種の疑を懷く側の人である事は

皆さんの充分想像し得られる處でせう。而も其海軍士官も私共の主張する眞意をよく呑み込めば、この疑が單なる杞憂に過ぎ無かつた事を悟る――私から直接ローマ字の話を聞いてそれに賛成した海軍士官は數多いですが、其內具體的に「日本ローマ字會」の會員になつた士官だけでも百九十名程あります――樣になるのです。では今から、私が如何なる論法を用ひて從來此難しい質問の關所を切りぬけつゝあつたかを御目に掛けませう。

二　日本語の爲めの國家改良

◇外國語のさばりこみを研究する前に、先づ私は我々ローマ字論者が果して事大思想に囚へられた外國かぶれであるかどうかを明にして見ませう。單に外觀が英米と同じ文字であるからローマ字論者は事大思想に囚はれて居ると見るのは淺薄な考です。

◇論者の第一の誤解はローマ字を方今世界に最も隆盛を極むる英米の文字だと見做す事です。英米が今日ローマ字を國字として居る事には毛頭疑は有りませんけれども吾々日本式ローマ字論者が(ローマ字擁護の方々がどう考へて居られるかは知りませんが)ローマ字を見る時には英米の文字と云ふ特別な意識はありません。私共はそれを英吉利も使ひ佛蘭西も使ひ――獨逸も使ひ獨逸が龜の子文字を普通のローマ字に改めることに決めたのは餘程前の話である――伊太利も西班牙も和蘭も白耳義も丁抹も瑞典も諾威も北米諸國も南米諸國も共に使ふ處の世界的の文字であると見て居るのです。ローマ字を見れば直ぐ英吉利や亞米利加をのみ聯想される杉崎氏こそアングロサクソン恐怖病に罹つてお出でなのではありますまいか?

◇それはさて置き、左に掲げた比例式は國語と國字との關係を軍隊の事柄に當て嵌めて說き明かしたものです。

(國民の言語や思想→國語)／(國字)　＝　(軍人精神→日本軍人)／(軍服や武器など)

即、國語と國字との關係は丁度私共軍人が武器や服裝などに對する關係によく似て居るやうに私は考へるのです。そうして此式の兩側で、分子に揭げてあるものは孰れも其國に特有のものであつて、これは輕々しく取り換へる可きものではありません。度々申し上げる通り、私共の考に隨れば、日本人が日本語を捨てると云ふ事は、日本人であると云ふ事を捨てるのと同じ位に大切な事なのです。併し分母の方となると、勿論輕々しくは取り換へてならないですけれども、其程度は前とは餘なつて、若し分子の爲めとならば、都合に依つては早

も差支ないものです。言ひ換へれば、分母を取り換へる事に依つて分子の光を一層輝かす事が出來ると云ふやうなものが若しあつたならば、それに換へても差支無いものだと信じます。

◇以上申し述べた事は勿論大體論でして、特別な場合には分子だからとて絶對的に變へてならない事も無し、又分母だとて無暗に變へて良いと云ふ筋合のものでもありませんが、併しそれは分子と分母とを切り離して別々に觀察した場合の話です。分子對分母として較べて見ますと、そこに一種の段階――一は内面的で他は外面的であると云ふ――が嚴として横たわつて居ることを誰方も認め無い譯には行きますまい。この考は色々な方面から色々と說き明かす事が出來ますけれども、此處では唯左の二つの事を述べるだけに止めて置きませう。

◇先づ日本の軍隊を御覽なさい。海軍にせよ陸軍にせよ我國の軍人は孰れも西洋風の軍服を始め、大砲や水雷や飛行機やタンクや無線電信や軍艦の類に至るまで凡て西洋の道具を採り入れて居乍ら、内心は何處までも日本の軍人であると云ふ性質を失は無い――いや實は其性質を倍々輝かす爲めに西洋の品物を採り入れたのです――のを見て判ります。又國語と國字の方では、英吉利も佛蘭西も獨逸も伊太利も西班牙も文字は皆共通のローマ字を使つて居乍ら國語の方となるとどれもこれも各々違つて居るではありませんか。勿論歐洲各國の間には互に似通つた言葉も無いではありませんが、それ等の言葉ですら多くは幾らか發音が違つて居る計りで無く、更にそれを國語の位として見る時は國字の全然共通なのに比較して餘程の相違があるものと認めねばなりますまい。

◇私共の方針も實はこの取り換へて差支無い處の分母を、世界的で而もよく日本語の性質に當て嵌る處のローマ字に取り換へて、そうして日本語の光を一層輝かさうと云ふ（漢字や假名ではそれが出來無い）のであるから、その私共を指して非大思想に囚れて居るだの、ヤレ外國かぶれであるとか謂ふのは大變な誤解でなくて何でせう？。少くとも私共の先輩が往年、西洋の國露西亞に對抗する爲めに西洋風の軍服や大砲や水雷や無線電信や軍艦などを使つた――而もそれ等を實に旨く使ひこなした――事を承認する人や、今日我海陸軍が西洋風の飛行機や潜水艇を採用する事に反對し無い人の論としては誠に可笑な話と謂はなければなりません。日本の軍事當局が飛行機や潜水艇を採用するのを目して『方今世界に最も隆盛を極むる英米の武器を其儘日本に移植せんとする非大思想』などと批難したら、それこそ妙な事になつて仕舞ふではありませんか。

三　漢字とローマ字との根本的相違

◇前章の說明でローマ字仲間の方針は語り取り換へても差支へ無い方の部分を、どうしても守らねばならぬものの爲めに取り換へやうと云ふのであるから決して外國かぶれでも何んでも無いと謂ふ事がよく呑み込めたと思ひます。言ひ換へれば、文字を換へて日本語を守り立てて行かなければ、主人公たる日本語の方が段々漢語化したり聞いただけでは意味が解らなくなるから、家來たる文字は主人たる言葉の爲めに潔く打死しなければならないと考へるのです。只今の儘で打ち過ごせば、家來は或は丈夫に育つて行くでせう——それすらも疑問ですが——が、主人の方が危くなるのです。

この事が解つたら私は直ぐ次の問題に移りませう。即漢字を採用したため漢語の流行を來したやうに、ローマ字を採用したために英語（或は其他の外國語）の流行を來しはしないかと云ふのでしたね。

◇私は充分の確信を以て答へます。『漢字と假名をローマ字に換へたために、特別に英語の流行を招くと云ふ結果にはならないであらう』と。何故そう言ひ斷ることが出來るかと謂ひますと、ローマ字の採り入れ方と漢字の採り入れ方とが根本からして違つて居るからなのです。漢字の爲めに漢語が出來たと云ふやうな事はローマ字の場合には起らない筈です

◇論者を始め多くの讀者諸君は十月號の本誌で「國字改良の原理」と云ふ書き物を讀まれたでせう。あの中に亞米利加在留の日本人の言葉から說き起こして、我國の漢字の使ひ方を詳しく述べた一章がありました。即我國で「ネコ」と云ふ日本語を書く場合に漢字で「猫」と書くのは、日本語の「ネコ」に相當する支那語を研究して「ベウ」を得、然る後其「ベウ」と云ふ支那語に對する支那の文字が「猫」であつたと云ふ行き方であると云ひましたね。處がローマ字の場合はそれと全く趣が違ひます。「ネコ」と云ふ日本語を書く場合に私共がローマ字で Neko と書くのは、日本語の「ネコ」に相當する英語を研究した上で、其英語に對する英國の文字が Neko であつたと云ふ行き方ではありません。たゞ日本語の「ネコ」と云ふ音をローマ字で寫しただけの話です。

◇論者の心配して居られるやうなことは、英語の cat を訓で「ネコ」と讀まし、音で「キャツト」と讀ますやうな所謂金子式を採らなければ起る筈がありません。そうして金子式は私共の決して贊成しない改革案である事は既に私は十月號で詳しく述べて置きました。

◇古事記を調べれば直ぐに判りますが、日本でも漢字が輸入した當時はそれを單に日本語の音を寫す役目に使つた事が多かつたのです。そうして其儘に漢字の利用が止まつて居つたならば恐らくは今日のやうな漢語の流行を齎らさなかつたでせう。併しもともと表意文字である處の漢字で日本音を表はさうとするのは適當でないから、此方法は其後永く續かずに止んで、遂に今日の様な使ひ途をとつて仕舞つたのです。今日ではそれを音文字として使ふのが僅かに神様に上る祝詞の一部分に面影を殘して居るだけです。

◇以上の説明で、漢字で日本語を表はすと「氷枕」を「ひやうちん」と讀む事が起り得るけれども、ローマ字でKōrimakuと書いてもそれが日本人をして「氷枕」に相當する英語や佛蘭西語や獨逸語の濫用を爲す源因には少しも成り得ないと云ふ事が判りました。若し日本人が將來外國語を必要以上にとり入れる事が起つたとしたならば、其原因はローマ字の採用にあるのではありますまい。

◇この事は明かに今日の我國の狀態が證明して居ります。日本は今日未だローマ字を國字として採用しては居ませんのに、「外國語は今日外の原因に據つてドシドシ侵入しつゝあるではありませんか。論者の心配して居られぬのは或は次のやうなことかも知れませんが、若しそれでしたら私は嘗て田丸博士が中村春二氏に答へられた言葉を借りてお答へした方が早解りだと思ひます。

『今日ローマ字を採用しない時ですら外の原因からして外國語がドシドシ侵入して來る。況してそれをローマ字にしたならばどんなに外國語の侵入を增すかも解らない』

中村氏がローマ字に對して心配される事柄は、ローマ字を使へば外國語が澤山はいつて來て日本語が蹴落されるだらうと謂ふ點であるが、此心配は吾々の方針では一向要らない心配である。

吾々の經驗では、外國語を知らない一般の日本人に對しては、假名を使ふ場合よりも餘計厄介である。其れの譯は——例へば中村氏の刷物「かなのめばえ」の中にも使つてある「オーソリチー」と謂ふ言葉にしても、假名なれば此の通りで通ずるけれども「ローマ字で英語風に authority と書いては一般の人に判らず、又日本風に Oosoritii と書くと英語の方から其言葉を知つて居る人に却つて通りが悪い。かう云ふ實際上の點からも、外國語は假名を使ふ場合に較べて、ローマ字文に却つてはいり難いのである。尤も外國語を知つて居る人同志の間には外國語が使はれ易いと云ふ事はあるに相違ないが、それは特別な場合で一般の書き物には外國語はローマ字文に却つて使はれ難いものである。

(大正十年二月號ローマ字世界二十頁)』

右は田丸博士の所説ですが、事實は明かにそれを證明して居

ます。雜誌「ローマ字世界」のどの頁でも開けて御覧なさい。漢字交り文で同じ様な事を書いたどんな雜誌に較べても外國語は少く使つてあります。これは理屈計りではありません。事實さうなのです、

四　寧ろ積極的を

◇最後に殘つて居る問題は『英米語――文化の程度高く、言語の豐富なる英米の國語――の中に外來語が綴りも發音も其儘で使はれるのは如何なる理由に依るか』と云ふ事です。これは大變に込み入つた問題ですから短い書き物で悉〻盡くすのは困難な事ですが、それには先づ歐羅巴の地勢と英國の歷史とを調べて見る必要があるでせう。例へば英語の中には佛蘭西語が隨分はいつて居ますが、英と佛とは互に外國であるとは云へ乍らもまづ私共日本人から見れば同じ歐羅巴内のことですから互に言葉の往來のある事は多少免れ無いことかと思ひます。その邊は日本と英國との關係よりも密接なのではありますまいか。殊に英國は征服された國ですから、被征服國に征服國の言葉が侵入するのは當り前な事とも云へるでせう。ですから杉崎氏の様に、英語に外國語がのさばり込んで居るのを見て、直に日本がローマ字を採用した後の狀態を想像するのは早計でせう。

◇又氏は「ローマ字國」になつた日本が他日英語を生の儘で――綴字及發音共に英語の儘で輸入しはせぬかと心配して居られますが、未來の事は神ならぬ身の斷言し得る處ではありませんけれど、恐らくはそんな事はないでせう。第一、多數の日本人には發音しにくいから多分そうは成りますまい tincure が「チンキ」になり、diastaze が「チアスターゼ」に變り、platina が「プラチナ」になつて日本語にはいつた事を思へば大凡の趨勢は察せられるではありませんか。

◇併しこれだけ述べたのでは杉崎氏初め多くの人々は御承知しないでせう。「兎に角西洋と共通な文字を使へば、日本人は英語の書いたものを見た時に其なじみが今迄とは餘程違ふから、多少英語が日本にはいり易くはなるだらう」とも謂ひ得るから。

◇全體外國語が日本にはいる爲めには先づ外國語を知つて居る人を通して來なければなりません。處が、日本がローマ字を採用した處で、既に外國語を知つて居る此等の人々に對しては外國語のなじみが特にそれが爲めに增す樣になるとは考へられません。ですから一般の日本人の間に外國語がはやる樣になると云ふ事は文字を取換へる事とは大して交渉する處はない樣に私は思ひます。

◇今假りに一歩を讓つて、日本がローマ字をとり入れた爲めに、即文字が世界と共通になつた爲めに、外國語が日本にはいり易くなつたとしても、それを恐れるの餘り杉崎氏が世界的の文字を採用した爲めに日本語を世界に擴め得る可能性を附與された事に氣が付かれなかつたのは大變消極的な事でした。ひとから侵されまい侵されまいと氣を配るよりも自分の方から一歩踏み出す方がよいとは思ひませんか。

◇では此處まで話を進めた序に、私は日本語の世界的發展と國字問題とに就いて述べる事に致しませう。例に依つて又話が變りますから其積りで讀んで下さい。

五　日本語は世界に幅が利かない

日本と云ふ國は東隣りに亞米利加を控へて居る爲めか、いやに英語の盛んな國です。日本中の中等學校でそれを敎へる事になつて居る計りでなく、雜誌に、看板に、汽車の切符に大抵英語が並べ書きにしてあります。凡そ世界に國をなして居る國は許多ありませうが、苟も獨立國であつて日本の樣に外國語を並べ書きにして居る所は先づ無いと云ふ話です。

が併し私は今再び此處で日本人が外國語を使ひ過ぎる事の善し惡しを議論しやうと云ふのではありません。英語は啻に日本で計りでなく、世界の國々に素晴しい勢で擴まつて居ります。唯私は之程迄に盛んな英語の勢力が恐しくて堪りません。

◇日本が、世界に於ける所謂五大國であると云ふ事を裏切る樣な事實は決して少くはありますまいが、就中言葉の上では此感じが殊に深いやうに私は考へます。外の問題は兎も角として私は言葉の上では英國や佛國はおろか、伊太利に對しても我國は對等の交際をして居ない程憐れな狀態にあると言ひ張つて憚りません。

◇世界大戰中の事でしたが、東京に殘留して居つた獨逸人に對して日本の役人が日本文の印刷物を渡したと云ふ事に就いて某博士が某雜誌で、日本の役人に常識の乏しい事を攻擊された事がありました。我國の役人に常識が缺けて居るのは今更珍らしい事ではありませんが、さてそれなら、吾々が獨逸に行つた時に獨逸の役人が吾々に對する態度はどうであるかと謂へば、矢張り日本の役人と大した變りはありません。獨逸よりももつと、常識に富んで居ると謂はれる英吉利へ行つたつて決して日本文の刷物などは渡して與れ無いでせう。

◇私はこないだの大戰中地中海に出征して聯合國側の海軍と附き合ひましたが、英吉利海軍は申すに及ばず、佛蘭西や伊太利の海軍から私共に宛てて來る公用文書は凡て自分の國の言葉

――伊太利からのは伊太利文と謂ふ風に――を使つてあるのに對して、日本の艦隊側から出すのが日本文で書かれた事などは唯の一度もありませんでした。卽手紙をやる場合でも又貰ふ場合でも飜譯の手數きは恒も日本側の負擔となつて居る有樣ですが、さりとてなんと情無くも亦物要りな話ではありませんか！　多少の相違こそあれ、外務省で商の取引でも凡て此規則――『飜譯は此方持ち』――に從つて居る事かと思はれます。

◇同じ樣な事は未だ外にもあります。日本人が日本に居て西洋人と附き合ふ場合に、外國語が判ら無いと云ふ事は私共日本人にとつて非常な恥となつて居ます。噓だと思ふ人は夏休みに輕井澤あたりへ出掛けて調べて見るがいゝ。英語や佛蘭西語の話せない人は丸で日本人で無いやうに考へて居る日本人がザラにあります！　さてそれなら私共が西洋へ行つた場合に、日本語の判ら無い事を恥と思ふやうな西洋人が澤山に居て呉れるかと思へば、私の貧しい經驗では滅多にそんな人に出會した事がありません、恒も飜譯は此方持ちなのです。

◇此の樣に日本側が肯禁の上で、恒も外國に對して家來の樣な立場から逃れる事が出來無いのは何故でせうか？　また日本人はこんな情無い立場に滿足して居るのでせうか？

六　日本の事情が世界に判ら無い

◇日本と日本人の本統の有樣が、昔から今日迄、世界に判つて居ない事は豫想外です。或る場合には天國の樣に宜すぎて、また或る場合には惡魔の國の樣に惡く受取られて居ます。日本の事情が外國にハッキリ傳はつて居ないと云ふ事は本統に恐ろしい事です。假令それが買被られるのであつても、また低く評價されるのであつても、それは孰らも宜くありません。

◇私共が軍艦に乘つて亞米利加や濠洲に行くとよく聞かれる事ですが、其土地の相當な識者がこんな事を謂ひます

『日本にも此國の樣に電車が走つて居るか？』

『日本でも電氣燈を使つて居ますか？』

◇近頃日本の世界に於ける評判が殊によく無い。亞米利加あたりには明ら樣に日本を第二の獨逸だなど謂ふ者さへあります。日本が獨逸に較べられるのは或る點では大層買ひ被られた處がありますけれども、また隨分迷惑な話です。

◇人に依つては、日本の樣子が外國に解らない方が得だと謂ふ人がありますけれども、私は決してそうは思ひません。國と國との誤解は思はぬ戰爭を引き起したためし例は昔から決して少くはありません。今日は世界がお互によく判り合ふ事が

な時代です。

◇日本の事情が世界によく判つて居なかつた爲めに起つた戰として私は日露戰爭を擧げて見度い。この戰爭の始まる前には日本でも露西亞の樣子はよく判らなかつたのですけれども、其判らなさは露西亞が日本を知らなかつたのとは較べ物になりません。丁度戰爭が始まらうとする前に、時の陸軍大臣であつたクロパトキンの一行が、日本を調べに來たけれども、日本の事情はよく呑み込めなかつたらしいのです。其處で彼は日本に對して色々な見込違ひがあつて、其見込違ひが戰爭の手違ひの種となり、遂々敗け戰でけりが付いたのでした。

◇『併し日本の樣子が露西亞に判らなかつたからこそ我國が大國露西亞に勝てたのではないか』と云ふ風に皆さんが此問題を解かれ無い樣に願ひ度い。本統の處は、日本の樣子が露西亞に知れて居無かつたために此大きな賭博がザー並に其取卷連の手で仕組まれたのです。勿論後から見れば、此戰爭があつた爲めに日本の東洋に於ける足場が一層堅くなつたには違ひありませんが、日本の樣子が外國に知れなかつた爲めに、こちらの望まない時の、望ましうない時に——少し妙な物の言ひ方であるが——向ふから仕掛けられた事には少しも疑はありません。お互がよく了解し合ふと云ふ事は個人の交際で必要な許りではありますまい。これからの國際間に殊に大切な事かと私は考へます。

◇米國カリフォルニア州立大學の名譽總長だと云ふ人が去年の春、日本見物の仲間に加はつて來ましたが、此の人が日本を出立する時に次の樣な捨て言葉を殘して行きました。

『東洋と西洋の文明は迚も解け合ふものでは無い。日本人には本統に西洋の文明が解つて居ない。矢張り、永久に東は東、西は西だ！』

尤も、此の人の樣な素通りの日本見物で本統の日本が解つてはそれこそ旅費が泣くでせうが、それにしても日本の隣り國の亞米利加で、殊に我國に一番近いカリフォルニアの人がこんな事では、もつと奥深い所に居る亞米利加人に日本が解らないのは當然なことです。英國や佛國の事は云ふだけ野暮でせう。

◇扨それならどうして日本の事情が外國に解らないかと云ひますと、答は誠に易しい。即日本と日本人が解らないのは日本人の心の中が彼等に解らないからなのです。全體人の心を知る爲めには、其人の身振りや顏付などに依る方法——此點で表情に乏しい日本人は餘程損をして居ます——や、また繪や音樂などに依るのもありますけれども、言葉に依るもの程廣くて力強いものはありません。云ひ換へれば、日本と日本人を知るために

は日本語を知ると云ふ事が一番大事な事なのです。處が既に前章で述べた通り、日本語が世界に擴まつて居ない事はまだ驚く計りなのです。それなら日本語を世界に擴めて、日本の事情を世界に解らせるのには、どうすればよいでせうか？之等の細かい事は項を改めて次章で述べます。

七　世界に擴めん、日本語

◇世間には、『猫』をローマ字で Neko と書いても、それは矢張り元の日本語であるから、西洋人に對して判らない事は少しも變りは無い』と云つて、ローマ字の西洋人に對する効能を輕く見る人が少くありません。が併し私共はそれをそんなに輕い事だとは思ひません。何故かと云ひますと、

◇第一に、西洋人が漢字や假名で書いた日本語を見た場合とローマ字書きのを見た場合とでは、日本語に對するなじみが丸で違ひます。

これは丁度反對の場合ですが、兎も角英語にはかなりなじんで居る私共が、まだ少しも習つた事の無い伊太利文と、同じ樣に少しも知らない露西亞文と、また土耳古文とを見たり或は此等の國々を旅行した場合を考へて見ればよく判ることです。伊太利文は——英語にも源をラテンから發したのだあると云ふ事を別問題として考へても——それが英語に使ふのと全く同じローマ字を使つて居ると云ふだけの理由で餘程英語を習つた吾々に親しみがあります。處が露西亞文の方になると、其處にNやRを裏返しにした樣な文字が出て來て、餘程英文とは懸け離れた氣持が起ります、更に降つて土耳古文となると、『こんな文字を使ふ國民とはとても心から解り合ふ事はあるまい』と云つた樣な氣分になる事は一部の人々の經驗された處でせう。實際に露西亞語や土耳古語を深く研究したり、又は之等の國民と交際して見れば、露西亞人も土耳古人も大して吾々と違つた心持の人類ではない事を發見するのですけれども、一番初めに受ける處の此の誤つた印象は仲々力強いものです。こんな詰らない印象が抑々國際間の誤解の原因となるのです。

◇右に述べた樣な事を考慮に置いて、西洋人が日本の書を讀を見たり、日本見物をする場合を想像して見るのに、それこそ非常に分け隔てのある氣持——『永へに東は東、西は西』と云ふ樣な——を起すに違ひありません。此の氣持が極端をして日本語の研究を鈍らせる事は云ふ迄も無く、遂には戰爭と迄に導き付ける虞がある事は既に私が前章で述べた處です。併し私共が立場を換へて考へて見ても、西洋人の此の心持ちは無理もあるまいと思はれます。

◆續いて述べる可き事は、此の樣にローマ字書きが西洋人に向つて、日本語に對するなじみを深くする結果、それの當然の成行として日本語が知らず知らずの間に彼等に摑まつて行くことです。

近頃西洋から日本見物に來る御客の數は決して少いものではありません。之等の通りがかりの西洋人が、例へば銀座通りをブラついて居る時に――銀ブラは亦彼等の好む處です――店の看板に『傘と履物』と書いてあつた場合と、ローマ字書きでKasa to Hakimono と書いてあつた場合とを比較して見るのに、前者の場合は丸で譯が解ら無いから、てんで氣にも留めないのですが、後者の場合にはローマ字書きの心安さからツイ「かさとはきもの」（多少國に依つて讀み方や揚げ下げの具合が違ふでせうが）と讀んで見ます。そして恐らくは『何の事だらう？』位の輕い疑も起るでせうし、かくしに入れてある日本語字典をとり出して見るか、又は側に附いて居る通辯や案内者からKasa to Hakimono の意味を教はる事になり、尙店頭に列べてある賣物の傘や履物と較べて見て、愈々動きの無い處のKasa to Hakimono と云ふ言葉の意味を確めて、遂々此等三個の日本語をシツカリと憶え込んで仕舞ふ事になるでせう。この樣にして、日本見物の西洋人は習ふとも無しにめいめい四拾や五拾の日本語を覺えて國に皈るに相違ありません。これこそ一番易しい日本語の摑め方ではありませんか。

◆第三に、日本に居る西洋人の中に、話はよく判るけれども、日本の文字が讀め無いと云ふ人が澤山に居ますが、ローマ字は此等の人々に對して効能が少く無いと云ふことです。

元來文字と言葉とは、私がくどく申し上げた通り、別物なのですから、日本語を習ふのに漢字や假名が是非必要だと謂ふ理はありませんけれども、今の處日本の新聞や雜誌が漢字や假名で書いてありますから、此等の文字を知ら無い西洋人の日本語研究には、或程度の行き詰りがあるに違ひません。此事に就いて面白い實例があまります。

◆東大の文學部敎授ダールマン氏の話に次の樣な一節があります。

『私はもう十二年も日本に居るが、未だ日本の新聞も雜誌も讀め無いから、どうしても日本に對する私の觀察は間接の材料に據つて居る弱點があるが……』（大正九年八月廿六日時事新報に據る）

◆即十二年も日本に住んで居て、而も日本の學生を相手にして居る人が未だに日本の新聞や雜誌が讀め無いとは實に驚く可き事で多少事情を異にしてはゐますが、日本人が西洋へ行つ

た場合に、西洋の新聞や雜誌によく讀めるけれども、會話が旨く出來無いと謂ふのとは丸であべこべな事實ではありませんか。

◇ローマ字はこう謂ふ外國人に對して、更に進んだ處の日本語の研究を促して、もつと突き込んだ日本の事情を悟らせるのに効果がある事は申す迄もありません。私は前々章で、某博士が日本の役人に常識の乏しい事を攻擊された事に就いて、『それは強ち日本の役人ばかりに限らない』と云ふ事を述べて日本語が世界に幅が利かない事を大に慨きましたけれども、實は我國が現用文字を捨て無い限り私共の希望は達し難いでせう。此の意味からして某博士のあの意見は決して誤ではありません。日本に居る外國人に對して、日本の役人が日本文の刷物を渡して差支無いのは我國がローマ字を採用した曉の話です。

◇人に依つては『日本語を世界に擴めるには、日本自身を偉くすればよい。若し日本の力が世界第一と云ふ樣になつたならばよしや我國が漢字や假名を使つて居ても、世界の人々は無理にも日本語を習はねばならないやうになる』と云ふのがあります。これは今の亞米利加や英吉利の勢力に照して尤もらしい言分ですけれども、實は未だ考が足りない。

◇第一に私共は實力を養ふ爲めに今の文字が妨げになると云ふ事を看板にして居る計りでなく、いくら實力が備つても元來難しいもの――日本人自身すら困りぬいて居るもの――が西洋人に擴まりそうには思へないではありませんか。少くともいつ迄もなにがしかの分量が日本語を習ふ上に抵抗として殘る事は事實でせう。

私共は世界の人が無理にも日本語を習はなければならない樣になると云ふ共鳴した狀態から日本語を救はうと云ふのです。尚此外に、日本語が擴まると云ふ事それ自身が日本の實力の増した事になると云ふのをも忘れてはなりません。

◇さて私共が右の樣に議論を樹てると、ローマ字に反對する人が定まりきつてこんな事を云ひます。

『では、西洋人の爲めに文字を取り換へるのか？』と。

此の種の議論に對しては、私は餘り多く答へるに及びますまい。常々私共の遣り口を吞み込んで居られる方や、旣に前號の本誌でローマ字論者の方針を知つて居られる處の讀者諸君は、私共が日本自身の爲め及日本語の爲めに文字を取り換へる事を唱道して居るのである事はよく心得て居られるから。

八　世界語或は國際語のこと

◇私はこれ迄大層議論を控へ目にして來ました。それにたゞ日本語を今日の僻れた狀態から救つて、英語や佛蘭西語などと

同じ高さに釣り上げやうと云ふのに過ぎませんでした。私共の此希望は今時大流行の機會均等主義から云つても、平等思想から見ても當然許される可きものです。何故ならば、私共は只日本語に英語や佛蘭西語や伊太利語などと對等の附き合ひを將へることを要求して居るに過ぎませんから。

◇併し、此要求を極度に發達させますと、やがて私共は世界語或は國際語の問題に逢着します。世界の言葉を一種類に統一すると云ふ事は仲々難しい事でして、これは今の處、エスペラント主張家でも云つて居ない處ないですが、併し各國語の存在を認めつゝ、一方に於いて國際語を制定すると云ふ事は極く必要な事です。而して其國際語に英語を使ふか、佛語を使ふかは容易に決め得ない大問題でせう。勿論良い品は自然に勢力を得る様になるのは自然の數ですが、此點ではエスペラント側の主張するやうに**中立の言葉**——或一國に屬しない處の——と云ふ事が國際語を定めるのに必要な條件となります。そうしてエスペラントが果して其れを主張する人々の云ふ様に、中立語であると云ひ得るかどうかなどと云ふ疑も起るのですが、國際語問題に就ては又他日の論題として、これで一先づ杉崎氏に對する答辯を終る事にしませう。

マルタ島の日本語

日本にも古い處では、『花の家(はなや)』とか『松の家(まつや)』、新しい處では『藤の家(ふじや)』などと云ふ様に、家にシャレた名前を附けて納まり返つて居る人があるが、西洋人は殊にこれが好きだと見える。

地中海のマルタと云ふ小さい島の別莊町のスリーマと云ふ所には色んな家が澤山に並んで居る。いづれも、家に『ベルダン』だとか『マルヌ』だとか云ふ新らしい家名を附けて居る中に、『對馬』、『佐世保』、『日高(?)』と云ふ三軒の別莊が並んで居る(勿論それはローマ字書きであるが)。御國を遠く離れて歐羅巴の海に旭日旗を翻へす身にとつては、こんな小さな出來事でも、御國の夢がこの名も無い町に迄及んで居るのかと思つて、人知れず戎衣の袖を沾した。(大正十年十月二十日)



談話賣買業者の話

村松梢風

一箇月餘り降り續いた霖雨の後だけに今年の秋晴れは心地が佳かつた。東西と南の三方に窓のある私の書齋には、殊のうちは盛夏の淸水のやうに爽やかな秋の日光が眩ゆいほど明るく差し込んだ。夜は、隣り屋敷の椎の大木の梢の間からまつ白い貴女のやうな月が玻璃越しに忍び込んでそツと私の側に座つてゐた。山の手の林の多い此處らではまだ蚊を見るのであつた。朝起きて見ると、黑い漆で塗つた机の上に大きな藪蚊が美しい綺の腹を仰向けに出して死んでゐた。

私はゝほく書齋のうちで暮らした。さうして、書く物の材料を考へたり探したりした。手當り次第に本を讀み散らして見たり、何年も昔の旅を回想して見たり、或ひはまた人から聞いた話や、曾て自身が關係したいろ〳〵な事件を心に浮かべて見たりした。けれども、其處には何一つとして書くに足りるやうな材料は無かつた。原稿紙は何時迄經つても白紙の儘でゐた。月の半ばが近付いて來ると雜誌社からは毎日原稿の催促を喰つた。幾ら催促されても書けない物は書けないのであつた。正直な話が私は餘り書き過ぎて、書き盡してしまつたのだ。考へて見ると我れ乍らよくも書いたと思ふほど下らぬ材料までも掻き集めて書いてしまつた。最早創造の泉が涸渇して、私の頭腦は空殼のやうにかすかすしてゐるのだ。だが併し、書けないからと云つて、書く物が無いからと云つて、書かずに居られる境涯ではない。文章を作る事以外には何一つ糊口の道を知らない私である。

私は明けても暮れても大きな不安に驅られつゝ時間を空費した。自身の天分の乏しさを歎いたり前途を悲觀したりした。徒らに昂奮すると夜も睡られなくつて、朝の電車が響き始める時分まで床の中で輾轉反側してばかりゐた、かうした苦しい數日を經過した後私は偶然談話賣買業者の事を思ひ出したのであつた。この春一度伺つたことのあるあの程よく肥滿した胡麻鹽頭の老紳士の風采を眼に描いたばかりで、私は飛び上るほど嬉しくなつて、急に活き活きと元氣づいた。

「俺はどうして今迄あの人の事を思ひ出さずにゐたのだらう？」

私は自分の迂闊さを訝かつたり呆れたりしながら、兎に角直ぐに外出の支度をして我家を出た。それから約卅分後には、私は丸ノ内有樂町のとある街（ストリート）の中程の赤煉瓦の建物の前に立つて、玻璃へ金文字で Story's Exchanging と出てゐる三階の窓をば顫へる心で見上げたのであつた。私は勝手を知つてゐるのでいきなり其の室の前迄昇つて行つた。すると華奢の扉の蔭から此の春見た少年の給仕が敏感な小狗のやうな素ばしこい態度をもつて現はれて來たが、彼は私の顔を見覺えてゐるらしく丁寧に頭を上げて「何卒お通り下さい」と云つた。少年の容貌は一と夏のうちに非常に成熟して、艶麗な趣きが一段と加はつてゐた。さうして彼は青色の小倉に黑の天鵞絨で縁を取つた妙な型の上衣を着てゐた。私が、若し此の少年を往來や電車の中で見掛けたならば、あるひは只「小綺麗な子供だ」と思ふくらゐに過ぎないかもしれないけれど、此處で見るせいか何んとなく不思議な感じをもつた少年のやうに思はれて、たとへば仙人の膝元で働いてゐる童子と云つたやうな、ちよつとそれに似寄つた氣持を私はもたせられるのだつた。

「よういらつしやいました。さあ、何卒お掛け下さい」

談話賣買業者の老紳士は、手にしてゐた何やら小形の本をぽんと閉ぢてテーブルの上に置くと、獨特のチヤアミングな表情と口調とをもつて私に云つた。彼は、共襟のシャツに寛々した鼠色の上衣を着てゐた。其の貌には、健康と、優美な精神生活の影響と、複雜な過去の經驗とが、程よい調和を保つて特殊な印象を人の胸に與へてゐるのであつた。私は直ぐ様心からの親しみを彼に對して呼び起こされた。

「どうも御無沙汰いたしました。お訪ねしようしようと思ひながらつい忙がしいもんですから」私は彼と向き合つて羽布團を掛けた籐椅子の上に腰をおろしながら云つた。

「どういたしまして、御無沙汰はお互ひ様です。時に、暑中もお變りはありませんでしたか？どちらかへ御旅行でもなさいま

したか？」

「いいえ、今年は夏中家族を郷里へ遣つて自分はずつと留守居をしてゐました。私は久しぶりで東京の夏を味はひましたが、何しろ體が虚弱いものですからノベツに胃腸を害して實に閉口しました。都會は夏に限ると云ふ人もありますが、どうも虚弱い者には向きませんですね」

「胃腸がお弱いんですか、それは不可ませんな。私も中年頃までは胃腸がわるくて困りましたが、不思議と四十過ぎてから健康になりましたよ。全く胃腸がわるいのは不愉快なものです。いつかこんな話を聞きましたが……西洋の或る若い婦人が大勢の男客が集まつた時、When is your happiest day? (貴方の一番幸福な日は何時？)といふ問題を出して無記名の答へを募りました。そして澤山出た答へに對して更に秀逸なのを投票させましたところが、最高點がThe day of the burial the old wife (古女房を葬つた日)といふので、二番目がThe day of good appetite and usual bowels (大飯を食つて氣持よく便通があつた日)といふのだつたと云ひます。初めのは餘り穿ち過ぎるやうですが、第二の方は定めてあなたなども御同感でせうか？とにかく人間が生きて居ることに於て、金よりも戀よりも食ふ事が一番大問題に違ひありませんからな」

「面白い話ですね。併し、私だつたら矢張り初めのに投票します。實は折り〳〵其の日の幸福を想像して見ないでもありませんです」私は、結婚してから十年の間に五人の子を生んだ私自身の old wife の顔を眼に浮べながら云つた。

「それはどうも、あはははは――」

「はははははは――」

其處へ少年が紅茶を持つて來た。彼は器用な手つきで二つの茶碗に紅茶を注いでそれを主と客の前に置いた。其の敏捷に動くセルロイドのやうな色を帶びた手さきの感覺が、少年が向うへ立ち去つた後まで私の眼に殘つてゐた。

「時に、」と私は一と口吸つた茶碗を下に置いて云つた。「本日も一つうんと面白い談話を買つていただき度いと思つて參りましたのですが」

「はあ、はあ」

「實は、中央公論へ成る可く長い物を書く約束をしたのですが、自分で持ち合せてゐる材料ではどうにも腹案が纏まりませんので、それで、あなたの處へおねがひにまゐつたやうな次第です。ですから成りたけ長いのが結構なんですが」

「承知いたしました。では原稿にして五枚位になるのを差し上げませうか？」

「千枚……？それは餘り長過ぎます。」私は驚いて云つた。「千枚の原稿があると雜誌があらかた一冊出來てしまひます」

「さうですか、ではもつと短かい手ごろな處を差し上げませう。處で、例に依つて、談話の題目はどんなものがお宜敷いでせうかな？人情、宗教、科學、哲學、教訓、滑稽、復讐、報恩、慈善、探偵、妖怪、詐欺、賭博――」

と、談話賣買業者は急に糶り賣屋の口上のやうな口調になつて一と息に述べ立てた。

「我儘を云つて濟みませんですが、それが全部含まれてゐるやうな話は無いものでせうか？」

「いや、無いことはありませんですが、それはなかなか困難な仕事です。併し、あなたは流石御商賣柄で注文のなされ方がお上手ですな。總じて談話は內容が複雜になればなるほど面白味が增して行くものです。處が近頃は小說などでも、一つの主題(テーマ)を捉まへて、それに直接關係した事柄だけを書いて行く事が流行して居るやうに見受けますが、私などには何んだか用件ばかり書いてある手紙でも讀まされるやうで一向面白く感じませんな。それでは、うまく行くか行かぬか兎に角やつて見ることに致しませう」と云つて談話賣買業者は部屋の隅にある紫檀製の大きな棚の上の置時計をチラリと見遣つた後、靜かな聲で話し出した。

＊　＊　＊　＊　＊

此の話は、題を附けるとなれば、「三人兄弟の話」とでも附けるのが一番適當で御坐いませう。詰まり、或る三人の兄弟の、各々(めいめい)異つた運命の徑路と、其の結末とをお話しするのが、全體の目的になつてゐるのです。偖或る處に三人の兄弟がありました。便宜上名前は太郎、二郎、三郎、として置きますが、時代や場所は特に定める必要はありません。強いてそれを定めようとすると、反つて窮屈になり、不自然に陷るやうなおそれがあります。ですからお聽きになるのにも、是れを日本の話としてお考へにならうが、あるひは支那の話としようが、あるひは又西洋の物語として解釋なさらうが、それは一切御自由で、又時代の點に於ても其の通り、昔の事としようが現代の事としようが其の邊は宜敷きやうに想像して頂き度いのです。處で、此の三人の兄弟は、何れもまだ齡が若くて、多分な前途を有してゐる青年達でありました。彼等は子供の時から親の手許にあつて多少の教育を授けられました。さうして若し順調にゆけば、至極平坦な人生の行路を進むべき人間だつたのですが、不幸にして兩親が早く亡くなり、其の上大切な財產までいろいろな事情のために失くなつてしまつたので、いまは各々自分の心掛けと

實力とに依つて困難な運命を開拓して行かなければならない境涯に置かれてゐるので御坐いました。併し、彼等が生れて育つた土地は邊鄙な草深い田舍でありました。其處では、木偶のやうに變化の乏しい顏つきをした人々が、沼の底のやうに沈滯した生活を營んで居りました。其處では、舊い、愚かな風俗や習慣が、貝殼のやうにあらゆる生活に固着して居りました。さういふ處では、何事によらず新奇な事や變つた事は一般に罪惡として見なされてゐるので御坐います。すべての人間が、てうど生垣の樹木のやうに、伸びようとする芽を絕えず鋏で刈り込まれて、段々と箱のやうな或ひは板のやうな形に作り上げられて居ります。此の三人の兄弟は、各々甚だしく異つた性格を有つて居りましたが、何か仕出かして立身出世を遂げ度いと望んでゐる點に於ては、各自の心持が共通してゐるのでありました。そこで或る時、「お互に斯んな田舍にくすぶつてゐたのでは終生頭の上る見込みは無いから、これから他國へ出て一旗あげる工夫をしようではないか」といふ事に三人の相談が纏まりましたが、かういふ時には結句親も身寄りも無いのが幸せで、なにがしか殘つてゐた物を賣り拂つてそれを路用の金に宛て、直ぐ樣住み慣れた故郷をあとにして、三人打ち伴れて當途の無い旅に出たので御坐いました。

太郎、二郎、三郎、の三人は、前にも申したやうに兄弟とは云ひながら各々極端に相違した性格の所有者でありました。彼等の一人一人がどんな性格を有つてゐたかといふことは、殊更玆で說明を用ゐませんでも、後段に於て、彼等が經驗した運命に關する話の中でおのづから明らかになる事ですが、とにかく彼等は、其の性格の異れるが如くに、抱いて居る人生觀も異つて居りました。さうして、其の異つた人生觀に基いて、各々異つた方針を自己の前途に、計劃して居るので御坐います。それは至極當然の事と云はなければなりません。其所で、故郷を一緖に出て立つて來た三人の兄弟が、離れ〲になるやうな時が間もなくまゐりました。其處には一つの大きな河が流れてゐて、其の河には長い橋が架かつて居りました。橋を渡ると道が三叉に分れて居ります。此處迄來ると三人の兄弟は立ち停まりました。

「眞ん中の道を行かう」と太郎が申しました。

「いや、左の道を行かう」と次郎が申しました。

すると三郎は

「私は右の道を行つて見度い」と申しました。

三人はめい〲、自分が主張する方角にさへ進めば幸福な運命に出逢ひさうな心地がするので御坐いました。で結局相談の

結果、三人は此所から別れ別れになつて、各自の望む道へと進むことになりました。

「では、お互ひに體さへ達者でゐたら、どんなに出世しようと、またどんなに零落しようと、十五年目の今月今日再び此の橋の上で會ふことにしようではないか？」と太郎が申しました。

「それが宜い、それが宜い。では其の時は屹度約束を間違へぬやうにしよう」と、二郎と三郎が直ぐ樣同意して答へました。

三人の兄弟は、斯くして全く別々の運命の道を辿ることになつたので御坐います。

（一）太郎が最初に遭遇した運命に關する話

先づ太郎の身の上から話を始めることにいたします。處で、其の前に、太郎といふ人間はどんな人間であつたかといふ事を一應說明して置く必要があらうかと存じます。無論、斷るまでもなく彼は三人兄弟の中での一番の長兄でありました。若し、早く生まれた者は遲く生まれた者よりも多くの經驗をもつてゐるといふことが云へるならば、彼は三人兄弟の中での最も經驗家と云はなければなりません。けれども、實際に於てさういふ論理は立ちません。何故かと云へば、吾れ吾れが見たり聞いたりする事以外の精神的の經驗に於ては、ある人は短時日の間に澤山の經驗を得、またある人は長時日を費しても尠少の經驗しか得られなかつたりするからで御坐います。だから總領が舍弟よりも經驗家であるとは極められません。反つて夫れと反對の場合が世の中に多い事は、「總領の甚六」といふ言葉が十分に證明して居ります。では、太郎も矢張り總領の甚六だつたのかと申しますと、是れは決してさうではありませんでした。彼れは兄弟の中では一番優れた性格を具へて居りました。一と口に云ふと、彼は非常なる善人でありました。善人といふ言葉は、惡事をしない人間といふ意味に通常世間では通用して居りますが、是れは恰も商人の仲間で手形の支拂ひに應ずる人間の事をば德義を重んずる人と稱してゐるやうなもので、道德の標準の低下したことを物語るだけにとどまつて居ります。善人と云へば、惡事を行はないばかりではなく、進んで善行を施す人間であらねばならぬことは勿論で御坐います。太郎といふ人間は常に善い事をしようと心掛けてゐる男で御坐いました。是れは勿論彼の天性でもありますが、同時に自己の美點を識つてゐて、益それを發揮しようと努めて居るのでありました。彼は斯う考へました。「人間は常に正しい善良な心をもつてゐなければならない。さうしてそれを他人に施すのが人間の道だ。善には善の報ゐが

あり、惡には惡の酬ゐがある。正直にして、善い事さへしてゐれば自ら我身にも福徳が廻つて來てしまひには幸福な身分になることが出來るのだ」彼の心の正しきが如く、彼の考へもまことに正當なもので御坐いました。

二人の弟に別れた太郎は何んとなく寂しい氣持を味はひながら、眞ん中の道をとつて進んで參りました。眞夏の事で、田には稻が伸び、畑には野菜が成熟り、野山には草木が青々と繁茂して、空では小鳥が歡樂の音樂を奏して居ります。それを見ると忽ち太郎は恍惚として夢心地になりました。「あゝ美しい！」と彼は幾度びとなく嘆賞の聲を發しました。郷里にゐた時でも斯様な景色はふだんに見馴れてゐたところのものであるにも係はらず、今日は特にそれが美しく有意義に感じられ、路傍の一木一草にまで神の啓示が閃めいてゐるかの如くに思はれるのでありました。兄弟に別れた悲哀も自ら薄らいで參ります。と、行手に山が現はれて、道は其の山腹へ掛けて登つて行くのでした。太郎は坂路を登つて行くと、間もなく一臺の荷車に追ひ付きました。車力は六十位の爺さんで、重さうな荷を附けた車をうんうん汗を垂らして曳いて行きます。太郎は其の車力と道伴れになつて話しをしながら行きました。車力の爺さんは此の山を越えた向うの町の者だが、今日は問屋から頼まれて在方の農家から野菜を一と車運搬ぶところだと申しました。成る程さう云へば車に附けた數個の籠の中からは、西瓜だの南瓜だの紫紺色をした茄子だのが頭や脊を澤山覗かせて居るので御坐います。太郎は、此の炎天の坂道を重たい荷を曳いて行かなければならない爺さんが氣の毒に思はれました。自分は先きを急ぐ體だが、僅かな時間や勞力には替へられないから此の爺さんを助けて遣らうと思ひました。

「お爺さん、私が一つ後を押してあげるからね」と太郎は申しました。

「何お前様、そんな事して貰つちや濟みましねえだ」と爺さんとは答へました。

けれども太郎は、爺さんが喘ぎ喘ぎ熱い息を吐き、銅色の顏だの胸から玉の汗を垂らしてゐるのを見捨てて先きへ行くことは出來ませんでした。

「いいよ、私はどうせ空手だから」

斯う云つて太郎は荷車の後を押し始めました。車は急に輕く走り始めました。元々重いと云つても高の知れた荷のところへ、血氣盛りの男が後押しを始めたのですから、車は平地を行くよりも滑らかに廻轉して、爺さんは只梶棒に掴まつて居るだけで十分でありました。爺さんは大喜びで、「どうも有

ホ、お蔭で助かりますだ」などと幾度びか後ろへ聲を掛けました。太郎は何んにも考へずに、出るたけの力を出して一生懸命押して居りました。かうして餘程上迄登つた時分でした。それは實に突然の出來事で、太郎が押してゐたた車を目掛けて非常に猛烈な勢ひを以て衝突して來た物がありました。あつ」と云ふ間に車は横に顚覆して、載つてゐた籠は殘らず往來へ抛り出され、其の中から南瓜や西瓜が飛び出して、山の下を目掛けて高い高い崖の上からコロ〳〵と轉がり落ちるので御坐います。太郎が騷ぎの中から漸く自己を恢復して見ると、そこは道の曲り角で、丁度上の方から下りて來た一臺の荷車が、爺さんの野菜車の横つ腹へ衝突したのだといふ事が判りました。先方の荷車も梶棒が折れてしまつたが、車力の身には別狀はありませんでした。こちらの爺さんは車と一緒に倒れましたが、是れも幸ひ怪我は無かつたものと見え、暫らくすると梶棒の間からムク〳〵と身を起こしました。けれども、眼のあたり自分の荷物の慘狀を見るが否や、極度の驚駭と、憤怒と、困惑と、絕望と、それらの感情を一度に顏に發して、氣違ひのやうな表情をいたしました。

「やいツ！此の野郎！」と爺さんは相手方の車力に向つて悲しい響きをもつた聲で呶鳴りました。「たんで人の車をひつくり返しやあがつた？さあ、勘辨出來ねえだぞ」

相手方の車力は四十位の屈强た男でありました。其の車には山から切り出す花崗石が幾つも積まれてありました。彼は先刻から騷ぎの中にも、相手の爺さんの出様を窺つてゐたのでした。

「何い吐くだこの糞つ垂れ爺いめ。うぬが無鐵砲な車の曳き方をしやあがつて、曲りツ角へ來ても除けもしねえで、矢鱈に車を眞ん中へ突き出して來やあがつたから、己れの車とぶつかつたたぞ。勘辨出來ねえたあこつちで云ふこんだ、人の車の梶棒折つちまやあがつて、さあ、たつた今車を元通りにして返しあがれ」と、若い方の車力は眞赤な顏をして逆捻ぢを食はせて來ました。

併し、彼の云ふ處は至極尤でありました。こんな險しい坂道の而も曲り角で、下から突つ走るやうに登つて來る車があらうとは彼ならずとも誰れが想像いたしませう。爺さんは道理に詰まつて暫時口をモガモガさせて居りました。併し爺さんの身になれば是れまた止むを得ない事でした。何故かと云ふに、車の後から太郎が金剛力で押して來るので、突嗟の場合に除けることも停まることも出來ず、どうするわけにもいかなかつたので御坐います。「此奴が後押しさへしなければ斯んな事にはならな

かたのだつたと爺さんは思ひました。相手の車力から詭捻ちを食つて一層險しくなつた老車力の悲憤の鉾先きが、やがて今度は太郎の方へ向つて飛んで來たのも止むを得ない當然の成り行きで御座います。

「やい此の野郎、人が斷るのをおせつかいに後押しをしやあがつて、お負けに馬鹿力を出すもんだから、到頭己らが荷物がこんな事になつてしまつただ。さあ野郎、どうして與れるだあ」と老車力は禿げ頭から湯氣を立てて太郎に向つて呶鳴りました。

太郎は呆氣に取られてしまひました。折角親切に後押しをして遣つて、呶鳴り付けられたのでは全く割りに合ひません。けれども老車力の云ふ處が事實であることは動かされません。如何に親切に基いた行爲だと云つて見ても、結果が斯様になつたからには、今更一言の申し譯もなりません。

「どうも申し譯はありません」と太郎は頭を下げて謝罪りました。

「ただ申し譯が無いぢやあ濟きねえだぞ。谷底へ落つことした南瓜や西瓜の損害は汝どうして與れるだあ。此の儘ぢやあ己れ問屋へ歸ること出來ねえだ」

老車力は、問屋の旦那に大目玉を食ふ事を頭に浮かべました。それだけならまだしも我慢もなるが、こんな大きな損害を掛けたからには明日から出入りを差し留められるかも知れないといふ事を考へました。さうなると、病人や片輪がごろごろしてゐる一家の者が差し當り饑えに瀕することを續いて考へました。ショボショボした老車力の兩眼からは泪がボロボロ落ち始めました。

結局、太郎は、餘り豐富でもない自分の財布の中から若干かの詫び金を出して、勘辨して貰ふより他に仕方はありませんでした。すると一方の車力も默つては居りません。「貴様が仕出かした事なら、己れの梶棒を折つた損害も辨償しろ」と云ひました。太郎は此の方へも金を拂つて、しほしほと其の場を立ち去つたので御座いました。

(二)二郎が最初に遭遇した運命に關する話

「兄弟のやうだ」といふ言葉は通例よく育てゐる場合に用ゐられるところの比喩で御座いますが、是れは外形上から見た言葉で、人間の性格を比較する日にたると、世の中に兄弟ほど育てゐないものはありません。例へば二人の兄弟を比較して見ると、兄が溫和しければ、弟は大抵亂暴者で御座います。姉が快活な娘なら、妹の方は乾度内氣で陰氣な娘と極まつてゐる。是れ

は一見甚だ不自然な事柄のやうに思はれますが、實は不自然でも不思議でもなく、宇宙間に冷熱の變化が起り、一日に晝夜の區別を生ずるが如く、一つ腹から生まれた兄弟の性格が相反するといふことは陰陽の學理上當然さうあるべき道理なので御坐います。此の原則通り、二郎と太郎とは全く正反對の性格を具へて居りました。然らば、前段に於て既に太郎といふ人間が非常な善人であることを證明いたしました以上、夫れと全く反對の格性を具へて居る二郎は直ちに惡人と申さなければなりません。併し、全體此の世の中に、最初から善人とか惡人とか相場の決まつてゐる人間があるだらうかの更に又、善とは一體何か？惡とはそもそも何んなものか？といふ疑問が生じてまゐります。此の解決は哲學に屬する重要な問題で古來の賢人に依つて樣々に研究されて居りますが、玆では餘り六ケ敷く考へずに、善惡といふ言葉を單に通常の道德的の語意に解釋して、二郎を惡人だと斷定いたしましたのは、詰まり彼に道德的觀念が缺乏してゐた事を指して申すのに外なりません。今や彼を波瀾多き人生の行路に旅立たしめるに當りまして、彼が常々懷抱してゐるところの人生觀とも或ひは處世觀とも云ふべきものを左に揭げて、其の人物の片鱗を示して置くことにいたしませう。

「人間は正直では駄目だ。十の物を十に數へるのは馬鹿のする事だ。全體智惠といふ物は、物事を工夫するために必要だだ。八つの物を十にしたり、裏を表に見せたり、白を黑にして通したりする處に智惠の有難さがあるのだ。兎に角世の中は、人を胡麻化し、痴にして、自分一人で利益を占める事を考へないのは嘘た——」

二郎は、一人になると急に氣分が伸び／＼として、丁度檻の中から野に放たれた獸のやうに奔放な氣持になりました。彼は何よりも先きに懷中に有つてゐる路用の金の事を考へました。勿論それは莫大な額ではありませんでしたが、併し彼としてはふだん持ち慣れぬ金が懷にあるので御坐います。「……だが、是ればかしの金があつたところで商賣の資本になるわけではなし……旅費などは無ければ無いでどうにかなるだらう……」と彼は考へました。其の日の夕方彼は或る町へ着きました。宿を取つて、夕飯の膳で一杯やりながら、彼は再び懷の金の事を考へました。到頭其の晩は町の怪しげな女達が澤山ゐる所へ行つて、飲んだり騷いだりして夜を明かしてしまひました。翌日も、其の又翌日も彼は同じやうな事を繰り返しました。恁うして、まだ幾許も來ないうちに、彼の懷は早くも無一物になつてしまひました。

或る日のこと、二郎はぼんやりした顔をして道を歩いて居りました。それはもう陽が可成り西へ廻つた頃でありましたが、實は彼はまだ今日は朝飯も晝飯も食つてゐないのでありましたから、ぼんやりしてゐるのも無理はありません。勿論今夜何處へ泊るといふ當ても無い。どうにかなると思つてゐた行先きの不安も無いではないが、それより何より差し當りの空腹を耐へることが彼に取つて一番苦痛でありました。道で行き合ふ人間の悉くが、乞食でもみなそれぞれ満腹さうな顔をして歩いてゐるのを見ると、二郎には羨望の念に耐へられません。人生の最大幸福が飯を食ふ事一であるやうに思はれてまゐります。「何所かで何か御馳走に有り付きたいものだが――」と、彼は當てにもならぬ空想をして、空間に旨しさうな食物の形や色を描いて見てはグウグウ喉を鳴らしました。

斯うして猶も歩みを續けてゐた二郎は、颯とのこと妙な物に出遇いました。それは彼の後ろから極めて立派やかな葬式の行列がやつて來るのでした。澤山の旗や、作り花や、放鳥の籠などの行列が續いたあとから、實に美事な輿が運ばれて來る。其の後には大勢の會葬者がつき從つて、其の行列が二丁も三丁も續いてゐるので御座います。高らかに誦す經の聲は極樂迄も聞こゆるかと思はれ、悲しい鳴り物の音は諸行無常の響きを人の胸に與へます。けれども、二郎は、路傍に佇んで此の行列を眺めてゐる間に、それとは別の事を考へて居りました。彼は、此の行列と一緒に寺へ行けば何か食物に有り付けるに違ひないと考へたので御座います。で、彼は行列の一番最後に隨いて歩き出しました。すると、彼の直ぐ前を歩いてゐる二三の會葬者の間に斯んな會話が始まりました。

「なんと、壽命といふもの判らねえもんでねえか、つい昨日の朝迄はピンピンしてゐたあのお孃樣が今日は佛樣にならつしやるのだから何んだか夢のやうな氣がするだあよ。」

「まつたくだなあ、財産は有るし縹緻は佳し、おまけに一人娘で何一つ不足のない御身分だと思つたが、ぼつぼつお聟樣でも探すべえといふ時になつて斯んな事になるだから。しかし是れが詰まり前世の約束といふものだんべえ」

「さうかも知んねえな。併し旦那は嘸お力落しだんべえ。諦められねえのも無理は無えな」

「諦めが付かねえで思ひ出したが、旦那がお孃樣に買つて遣らつしやつた二千圓とかのダイヤモンドちう物の指輪を佛樣の手に嵌めさせたまんまで埋めるだとかいふ話を聞いたが、それあ眞實の事だんべえか？」

「眞實の事だとも、己れ新家の茂十どんから聞いた話しだから

間違えは無えだ」

「何んちう勿體ない事だんべえ、佛樣あ指輪嵌めたつて格別嬉しがる譯でもなかんべえに」

「二千圓有れあ巳らが家の田地は殘らず質受けが出來るだが」

「それちあお主、佛樣と相談ぶつて、指輪を借りて田地を請け出しちやあどうだ？」

「なむまいだぶ、なむまいだぶ。なんぼ金持でも亡者と相談ぶつのは眞平だ、なむまいだぶ、なむまいだぶ」

　彼等の會話を思はず耳に入れた二郎は、ふと惡い考へを起こしました。それは今夜夜なかに此の新佛の墓を發いて其のダイヤモンドの指輪を拔き取つて遣らうと考へたのでした。「盜みをすると云つたところで生きてる人間の物を奪るわけではなし、まつたく彼等が云ふ通り、そんな寶物を無意味に土中へ埋沒させてしまふのは勿體ない、まことに冥利の盡きる話だ。それよかも自分が一時流用すれば、自分の身が立つばかりではなく、其の方がどれ程社會の利益にもなるか知れないのだ」と二郎は獨りで理窟を附けました。すると、あの立派な輿に乘つてゐる佛樣の指に嵌められてゐるダイヤモンドは、天の神樣から自分に對して投げられようとしてゐる寶物で、それを受け取らないではまことに間違つたはなだしといふやうな氣持がしてまゐりました。彼は愈決心の臍を固めまして、其の儘會葬者に紛れ込んで寺へ行き強飯の振舞ひにあづかつて十分に腹を拵らへ、只管夜の來るのを待ち受けて居りました。

　こちらは葬式も無事に了り、近親の人々は土の香の生ま〱しい塚の上に盡ぬ涙の雨を灑ぎ掛け立ち去りました。兎角するうち夜も追ひ追ひに更け渡り、今や眞夜半とおぼしき刻限、二郎は墓地の中へ忍び込んでまゐりました。其の晩は朧ろの月が寂しい光を地上に投げて居りました。亡者の顏のやうに蒼ざめた墓石が累々と並んで居ります。白ら〱とした塔婆が弱々しく立つてゐたり、風に破れた白張りの提灯が人魂のやうにフハ〱と動いて居ります。あたりにすだく虫の音はさながら死の哀傷をうつたへてゐるかの如くあはれに聞こゑるので御坐います。さすがの二郎も無氣味でたまらなくなりました。彼はむしろ此の冒險を中止して引き返さうかとまで思ひました。けれども、あり〱此處に二千圓の寶物が埋まつてゐるのだと思ふと、氣味の惡るさや恐ろしさぐらゐた事には替えられないので御坐います。彼は強いて勇氣を奮ひ起こし、わななく足を踏みしめ踏みしめ漸うのことで新佛の墓の前迄まゐりました。新らしい土の香と、燃え差しの線香の匂ひとが微かに彼の鼻を撲ちました。生ま〱しい墓標が恨めしさうに彼の顏と對き合ひ

ました。二郎は襟元から水を浴びたやうに感じました。併し、最早此の時は彼の決心も定まつて居りました。彼は直ぐ樣墓標を拔き取り、そこらにあつた塔婆を鋤の代りにして、山の芋堀りがよい芋蔓を探し當てた時よりも遙かに大きな期待と慾望とをもつて、一生懸命塚を堀り始めました。まだ少しも固まつてゐない塚の土は樂々と堀り返されました。地の下からは間もなく白い棺の蓋が現はれて來た。彼はそこで更に再び大きな恐怖と自身の勇氣とを同時に經驗して、愈よ最後の仕事に取り掛かりました。彼は棺の蓋を取つて死骸を引き出さうといたしました。すると斯はそもいかに、棺の中の死骸がひとりでにムクムクと動くではありませんか。二郎はギヨツとして思はず出し掛けた手を引つ込めました。「何んだ莫迦らしい、死人が動いて溜まるものか。已れの氣のせいに違ひない」と彼は直ぐに思ひ返して、今度は思ひ切つていきなり死骸の肩へ手を掛けました。すると其の途端に、死骸は再びムク〳〵と動き出したと思ふと、すつくとばかり棺の中から立ち上りました。二郎は「あッ」と驚いた拍子に穴の中へ轉げ落ちてしまひました。髮を振り亂した青ざめた死人の顏は二郎のつい鼻先きへ來て居りました。二郎の驚駭と恐怖は譬へようもありません。彼は無意識に聲を發して「なむまいだぶ、々々々々々々々、々々々々々々」と唱へました。併し、不思議な事には、此の幽靈は二郎に喰ひ付いても飛び付いても來ないで、其の物凄く美しい顏に月の光を浴びた儘暫時けげんさうな表情をして四邊を眺めて居るのでした。

「ハテナ、是れは妙だぞ」と二郎は考へました。そして恐々自分の手を幽靈の手に觸らせて見ました。すると幽靈の手は彼の手よりもずつと溫か味があるので御坐います。

「あなたは誰れ？」と、幽靈は初めて二郎がゐることに氣が付いたやうに不思議さうな顏をして申しました。

二郎は死人が蘇生したのだといふことが判つたので、自分も生き返つたかのやうに漸く安堵いたしました。彼は突嗟の間に思案をめぐらして答へました。

「お孃さん、聢りなさい。貴女は活き返つたんですよ」

「え？ 一體此處は何處でせう？」

「此處は貴女の村の墓場です、貴女は一旦亡くなつて此處へ葬られたのですが、今私が此處を通り掛かると地の底から妙な聲が聞こえたので、どうも奇異しいと思つたから急いで堀り出してあげたのです」

娘は漸く過去の意識を取り返して、現在と結び付けて見るのでした。彼女は食べ物の中毒を受けてひどく苦しんだまではよひ出したが、夫れから後の事は一向譯が分らないのであ

た。併し、此の見ず知らずの男の言葉に依つて自分が一旦死んだ事と、また現在活き返つた事とを覺るに及んで、今更非常な駭きと歡びに打たれるので御坐いました。

二郎は、白無垢の上に經帷子を着た娘を伴れて行つて其の家まで送り屆けて遣りました。是れを見た兩親及び其の他の人々の驚駭と歡喜とはくだくだしく述べる必要はありますまい。一同は二郎に對して絶大の感謝と又其の義俠的行爲に對する賞讃の辭とを吝みませんでした。だが、爰に一つ可笑しい事は、二郎は自身が墓を掘つた動機に關して內心疚ましく感じますところから娘に云つたのと同じやうな事を更に誇張して人々に物語るので御坐いましたが、實は其の心配は尠しも必要の無い事でありました。と申します譯は、かの二千圓のダイヤモンドの一件は全然跡方も無い噂に過ぎませんでしたから、誰れ一人其の點で二郎を疑ふ者も無いのでした。何はともあれ最愛の一人娘の再生の恩人に對して、娘の双親が拂つた謝禮の額は決して世間の攻撃を受けるほど尠ないものではありませんでした。斯くして二郎は、永世紀念すべき善行美談を後に殘して、人々の感謝と尊敬とのうちに揚々として此の村を立ち去つたのでありました。

(三)三郎が最初に遭遇した運命に關する話

「善とは智惠なり」と云つた哲學者が御坐います。此の論法を裏返しにすると、「惡とは無智なり」といふことになり、從つて「無智な人間は惡人である」と申さなければなりません。併し、此の斷定は甚だ殘酷で且つ正鵠を得て居らぬことは、世間の實例が是れを證明して居ります。人はよく小兒の無智を稱へて神樣のやうだと申します。又好人物のことをば佛性とも申します。エデンの園で智惠の木の實を食したアダム、イヴは、人間の罪の知り初めとされて居ります。冒頭の哲學者の言は、智惠を讃美するに急なるの餘り、人間本來の面目を見損じたものと申さなければなりません。それはとにかく、三郎は右の無智な人間でありました。彼は至つて人に騙され易く、其の判斷は常に正鵠を失して居るのでありました。世の諺に末つ子は三文安く賣れるとか申します。又南瓜の末生りは味の惡るい物と極まつて居ります。併し是れは、總領があながち甚六でなかつたりすると同じく、末つ子とて一概に左うとは限らず、要は個人々々の天性に由ることは勿論ですが、此の三郎の場合に於ては特に其の比喩が的中してゐるのでありました。已れの愚を知る者は未

大賢の内なりと申します。性得愚か者である三郎には、勿論自己の愚が覺れる道理はありません。

　三郎は二人の兄に別れて右の道をやつてまゐりました。併し、正直な處彼には別に是れと云つて目指す目的地とても無く、又何處へ行つて何をしやうといふ方針も立たないのでありました。が、そこが愚か者の有難さには別段前途を悲觀するでもなく、空々寂々として只足の向くが儘に歩いてまゐりました。すると其の日も夕暮れ間近い頃、とある淋しい山道にさし掛かりますと、路端に一人の女が倒れて、俄かに病氣でも起こつたのかひどく苦しんでゐる樣子で御坐います。三郎は眞逆見ぬ振りをして通り過ぎることもなりませんのでツカ〳〵と側へ寄つて「もし、どうかしたのですか?」と訊ねました。すると女はさも苦しさうな聲を出して「持病の癪が起きて苦しんで居ります」と答へました。

「さうですか、それはお氣の毒ですね」と云ふには云つたが藥の持ち合はせがあるではなし、こんな場合に氣轉の利かない三郎の事だから猶更どうしやうもありません。

「あなた、どうか妾に水を飲ませて下さい」と女は三郎に向つて賴みました。

　三郎が其處らを見廻して見ると、つい近間の處に綺麗な岩清水がチョロ〳〵と流れ出て居るので、彼はそれを手拭に含ませて來て女の口へ搾り込んで遣つたあとで、無器用な手つきで背中を擦つて居りました。暫時すると女は癪が納まつたと見えて起き上つて厚く三郎に禮を述べました。

「妾の家は此處から直ぐ近くにあるんですが、どうぞ寄つてお茶でも召し上つて行つて下さい」

　と女は申しました。齡の頃は廿二三で、身なりは粗末ながら、こんな處に住む女とも思はれぬくらゐ美しい顏をして居ります。三郎は誘はれるが儘に女の後に隨いてまゐりました。女の家は往來から可成り脇へ外れた處の山蔭の一軒家でありました。草葺き屋根の廂は傾き、家の内は粗朶の煙に煤びて、何樣木樵りか獵人の住居といつた樣子で御坐います。三郎は上り框に腰を掛け、女が茶釜から汲んで出した澁茶に喉を濕ほし、さて日も暮れたので暇を告げようとすると、女は引き留めて、

「もうこんなに暗くなつたことだし、それに宿屋のある處まではまだ大變な道程ですから、汚ない處でも宜かつたら今夜は玆へ泊まつていらつしやいまし。妾は獨り者で、此の家には他に誰れも人は居りませんからちつとも遠慮することはありません」と云ひました。女が獨り者だと聞くと三郎は急に妙な心持になりました。で、其の儘女の言葉に從つて、草鞋を脫ぎ足を

洗つて上へあがり込んでしまひました。女は直ぐ様夕餉の支度をしました。三郎は女と差し向ひで旨しく御飯を食べました。其の後で二人はこんな話しをいたしました。

「お前さんは何故獨りでゐなさるんだねえ？」

「妾は亭主に死なれたのです」

「それならもう一度御亭主を持つたらいいでせう？」

「若し貴郎みたいな深切な方さへあれば、何時でも亭主に持ちたいと思つて居りますわ」と云つて女は色つぽい眼付きをして三郎の顔を見遣りました。

三郎の魂は風船玉のやうにフハ〳〵と飛び上つてしまひました。彼は生まれてからまだ一遍も女に恁んな事を云はれた覺えは無いので御坐います。「己れは何んたる幸せ者だらう？」彼は夢ではあるまいかとそツと自身の臀をつねつて見るでした。それから彼等兩名は枕を並べて寢に就きましたが、三郎は旅の疲れで直きに睡つてしまひました。すると、何時頃でありませうか、彼は突然自身の頭にズシンといふ大きな響きを感じて夢を破られました。見ると、枕元には雲突くばかりの大男が抜身の刀を引つ提げて突つ立つて居ります。今し方頭に受けた震動は其の大男に足蹴にされたものと見えました。

「やい！此の青二才、よくも〳〵汝は人の嬶あと間男をしやあがつたな、太い野郎だ。さあ、重ねて置いて四つにしてやるから出やあがれ」

と、其の男は大きな聲で呶鳴りました。三郎は吃驚仰天いたしました。そしてガタ〳〵顫へながら申しました。

「ま、間男なんて、と、飛んでもない話だ。こ、此の女にや、て、亭主は無い筈だ」

「亭主が無い？何を吐しやあがるんだ此の大泥棒、玆に俺様といふれツきとした亭主がゐるのが見えねえのか。さあもう勘辨ならねえ、叩つ殺して遣るからさう思へ」

「ど、どうぞ御勘辨命ばかりはお助け――」

三郎は米搗バッタのやうに頭を下げ、蠅のやうに手を擦つて一生懸命に頼みました。亭主は漸ら聲を和らげて申しました。

「それぢやあ、それ程命が惜しいたら助けて遣るから、間男をした詫びをしろ」

「はい、はい、何んとも申し譯は御坐いません、以來氣を付けますで御坐います」

「間抜けだな、此奴は、以來氣を付けるには及ばねえから、有り金を殘らずと、身ぐるみ脱いで出て失せろ」

「ヒエツ、そ、それぢやあ私は是れから道中が出來ません」

「そんな事俤等の知つた事かい、厭なら素ツ首を叩つ斬つて遣らあ、さあどうだ？」

結局三郎は、路用の金を財布ぐるみと、衣類持物の全部を亭主に提供して、命を助けて貰ふより他に致し方はありませんでした。かの女はと見ると、三郎が素ツ裸にされるのを知らぬ振りで、長煙管で煙草をすぱすぱふかしてゐるのでありました。云ふまでもなく彼等は馴れ合ひの仕事で御坐います。全體此の亭主と稱する男は名代の盜賊で、折り〳〵は女房を玉に使つて斯樣な美人局をも行つてゐるのです。聽てのこと三郎は裸體のまんま戸外へ突き出されてしまひました、併し、いかに夜とは云ひながら素裸では此の先き道が歩けません。三郎は戸の外から乞食のやうな哀れな聲で申しました。

「御夫婦樣　お慈悲で御坐います。どうぞ着物を一枚だけお惠みなさいませ」

すると亭主の聲で

「野郎まだゐやあがる、蒼蠅い奴だな。仕方がねえ。お熊、あの葛籠の中に何かあるだらうから、襤褸着物の一枚も出して遣んな。手めへは滿更他人ぢやあねえのだから、尠しあ憐れみを掛けて遣るがいいや」

「厭だよ此の人は、馬鹿々々しい、妾あ睡たくてしようがないのにさ」

と女はブツクサ小言を云ひながら何か探し出したと見え、雨戸を細目に明けて、

「さあ、是れをお前に呉れて遣るから、サツサと何處へでも行くがいい」

と云ひながら三郎の足元へフハリと何か抛つて寄越しました。三郎はそれを拾つ體へ掛けて見たが、女が面倒臭がつて好い加減に葛籠から引つ張り出して來たものと見え、着物でも羽織でもない何んだか譯の分らぬ恰好をした物で御坐います。其のくせ澁紙を着たやうにゴワゴワするかと思ふと、莫迦に重たくて、着心の不快いことは無類だが、今の場合贅澤も云はれず、是れでも裸よりは增しだらうと、三郎はそれを着て泣く泣く此の家の前を立ち去りました。偖、其の夜は何處かで野宿をして、夜が明けると三郎は其の姿で歩き始めました。其間見た彼の姿は世にも不思議なものでした。其の着物は子供の着るチャンチャンコのやうな形で、それが小男の三郎には莫迦に大き過ぎ、其の素地は一見金襴のやうでもあれば又は雜巾の剝ぎ合はせのやうでもあり、處々に綻裂きや虫喰ひの穴が明いて、兎に角古色蒼然たる物で御坐います、此の珍妙極まる恰好を見た往來の者は聲を放つて笑はずには居りませんでした。子供の群

れはゾロゾロ後から隨いて來て「氣違ひ〳〵」と囃し立てて石を投げ付ける。犬は畏れをなして物凄く吠え掛かります。三郎も是れには殆んど弱つてしまひました。と云つて裸では猶更歩く事が出來ないので、彼は萬人の嘲笑の中を、山から出たての仙人のやうな顏をして歩いて居りました。其の日も午過ぎ頃になりました。三郎は或る大きな町へとはいつてまゐりました。町の人達が、此の異樣な人物を見て、驚歎の眼を睜つた事は勿論で御坐います。と、三郎は或る大きな骨董屋の前を通りました。丁度其の時、骨董屋の主は、店先きへ出て煙草を吸ひ乍ら往來を眺めて居りましたが、三郎の姿を見ると非常に驚いて、直ぐ樣何事かを側らの番頭に向つて命じました。

「もし〳〵、其處へおいでのお方」と番頭は表へ飛び出すなり三郎の袖を扣へ、と云ひたいが、肝心の袖が無いので、揉み手をしながら横合ひから聲を掛けました。

「手前どもの主が、一寸貴郎樣にお目に掛かり度いと申して居ります。甚だ御迷惑ながら一寸お立ち寄りを、へい」

「私に何か用事があるだかね？」三郎は不思議さうに申しました。

「へい〳〵、左樣で御坐います。決してお手間は取らせません。一寸どうぞ」

と番頭は無闇に頭を下げて頼むので御坐います。三郎は譯が分らぬながら、番頭の後へ隨いて骨董屋の店へ這入つて行きました。すると待ち設けてゐた主は端近くへ座つて丁寧に頭を下げ

「是れは〳〵、只今は飛んだ失禮なお願ひを入れまして、誠にハヤ相濟みませんで御坐います。先づ〳〵、お掛け下さいますよう」

上等の夏座布團、莨盆、お茶、お菓子と下にも置かぬ待遇で御坐います。三郎は益以て譯が分らず、狐に化かされた恰好で御坐います。偖て骨董屋の主は、何故三郎を呼び入れたのかと申しますと、それは彼が着てゐるところの着物に着目したので御坐いました。主の炯眼は早くもそれが古い錦の陣羽織であることを認めたのでありましたが、かうして側で見るに及んで、主は心中更に非常な駭きに打たれました。其の陣羽織の錦は、蜀紅の錦といふ世にも珍らしい、尊い織物であることが判つたので御坐います。一寸四方幾らといふ其の錦の價格から推して見ると若し此の一着の陣羽織を解きほぐして、茶入れの袋だの、或ひは又書畫の幅や卷物の表裝の材料に是れを用ゐるならば、全體では何れ程の金額に上るであらうか、主の頭腦を以てしても殆んど想像も及ばぬので御坐います。「なんでもこいつを

一番捨ち上げてこつちの物にしてやらなければ――」と、主は忽ち蛇が蛙を魅込んだ時のやうな、或ひはまた實業家が美しい雛妓を發見した時のやうな、執念深い決意をいたしましたのを些かも顏に現はさず、偖徐ろに謀を廻らすので御坐います。

が、なんにいたしても不可解なのは、此の陣羽織を裸體の上に着込んで歩いてゐる若い人物で御坐います。眼付きを見たところではどうも氣違ひらしくもない。そこで、正氣で是れを着て歩くところを見ると、先づ此の物の價値を知つてゐるものと思はなければならない、よくあるやつだ、非常な金滿家の息子とか、或ひはまた身分の高い家の若殿か何かが、あゝでもない斯うでもないの結果、醉興にこんな物を着込んで歩いてゐるのだかも知れたものではない。若しさうだと浮つかりした掛合ひをすると飛んだ恥を搔くばかりだ。兎に角是れだけの商法には容易にぶつかる譯のものではないから、矢鱈安く捨ち上げる事を考へないで、穩やかに持ち掛けて相手を通さぬ工夫をするのが肝心だと、そこは老巧な商人だけに水も漏らさぬ掛け引きに苦心を致すので御坐います。

「誠にハヤ田舍の事で、お口にあふやうな菓子では御坐いませんが、何卒一つお摘み遊ばして。時に、どうも實に結構なお召し物で、何んともハヤ驚き入りまして御坐います、ハイ」

と骨董屋の主は三郎の體をためつすがめつ見ながら感に堪へぬ風情で申しました。三郎は恥入つて、顏から火が出さうになりました。それにしても彼は、骨董屋の主の念の入つた冷やかし方に驚いて「何といふ人の惡い爺いだらう」と思ひました。

「いや、お恥かしい話だが、ほかに着る物が無いもんだから」

と、三郎は頭を搔きながら申しました。

「へへへへへ、いやもう、斯樣な結構なお召し物を一枚持つていらつしやれば、他の着物なぞは何んにも無くても宜ろしう御坐います」

三郎は少々腹が立つて來て、心にもない負け惜みを云つて見たくなりました。

「なに、家へ行けばもつと上等のが澤山あるんだよ」

「ひえツ！是れより上等のを澤山お持ちで？いやどうも恐れ入りまして御坐いますなあ」

と骨董屋はしん底驚嘆の聲を發するので御坐いました。やがて骨董屋は揉み手をしながら、

「時に、甚だ失禮なお話で御坐いますが、物は相談とやらで、其のお召し物を手前にお讓り下さるわけにはまゐりませんでせうか、如何なもので御坐いませう？」

「それは不可ない、是れを上げてしまうと私は差し當り着る物

が無いからね」

「いゝえもう決して、斯んな御無理をお願ひいたしますからには、其の邊の事に御不自由のないやうに計らひますので、つい此の頃宅の悴が求めました薩摩上布がまだ仕立てたばかりで手も通さずに御坐いますから、一時それをお召しになつて我慢遊ばして頂くとして——偖、お値段のところは何れ位でお讓り下さいますでせうかな？」

骨董屋は、脈があると見ると此の機を逸せず短兵急に攻め掛けるので御坐います。三郎は煙に卷かれて眼をパチクリさせました。併し、とにかく彼にも、骨董屋の主が自分を賜つてゐるのではなく、眞實此の着物をほめて、さうして欲しがつてゐるのだといふことだけは了解されてまゐりました。けれども此の變に光つてゐる雜巾のやうなチヤンチヤンコに一體どれ位の價値のあるものかといふ事になると、まるで雲を摑むやうで見當が付かぬので御坐います。「何んでも是れは先方に値を附けさせて見る方が宜い」と三郎は考へました。昔から馬鹿の大慾とか申して、愚か者に限つて存外斯樣な智慧に出て來るもので御坐います。

「それでは兎も角もお前さんの方で値を附けて御覽なさい、値頃が氣に入れば賣るから」

「有り難う存じます。では、掛け引きの無い處を申し上げます、此處らではいかが樣で？」

骨董屋はかう云ひながら算盤を三郎の前に差し出して、パチンと三の數を置いて見せました。併し三郎にはそれが三錢の事だか三十錢の事だか、或ひは大きく間違つて三圓の事なのか、一向見當が付きません。

「其の三は幾らの三です？」と三郎は訊きました。

「三百圓で御坐います」

三郎は突然に拳固で橫ツ面を張りのめされた時のやうに頭がガトンとしてしまひました、けれども彼は、一と値で賣るのは早いと思ひましたので

「どうも安い」と云ひました。

すると骨董屋は、今度は五の球をパチンが弾いて申しました。

「それでは、五百圓ではいかがで？」

「どうもまで安い」と三郎は眼をつぶつて漸う答へました。

「では、思ひ切つて、千兩まで戴きませう」

「宜ろしい、賣りませう」と、三郎は氣が遠くなり掛けたので慌てて申しました。

骨董屋の主は、千圓の金と、約束通り薩摩上布の着物を一枚

三郎の前に置きました。三郎は陣羽織を脱いで薩摩上布に着替へ、千圓の金を懐中して、一層馬鹿になつたやうな顔をして其處を立ち去つたので御坐いました。

(四)太郎が其後遭遇した運命に關する話

太郎は、旅の日を重ねて漸く目的地に到着いたしました。其處は、開港場として知られた國中でも有數の大都會でありました。其の港内には全世界の貿易船が絶へず雲集して居りました。市街には大小の會社、商店、學校、工場、教會、料理店、其の他あらゆる種類の建物が、文明の進步と其の誇りと、人間の競爭心とを、華やかに、露骨に現はして立ち並んで居ります。其處では、需めて得られない贅澤は無かつたと同時に、窮乏と飢渇との他に何物も無い悲慘な生活をも到る處に發見することが出來ました。正義と罪惡とは、常に壁一重を隔てて同時に行はれて居りました。けれども、既に幾度びもの過去の經驗に依つて馴らされてしまつてゐる多くの市民達は、そこに何んの矛盾も不自然をも認めて居らぬかのやうに、表面極めて愉快らしく、且つ忙がしく、めい／＼自分々々の生活をば營んで居るのでありました。

太郎は、先づ第一番に生活問題に就いて考へなければなりませんでした。さうして彼は、勞働に依つて生活することに決心いたしました。是れは、無資産者である彼に取つては最も簡便な生活法であつたばかりでなく、平常の彼の持論とも最もよく適合してゐるのでありました。彼は常によく考へました。「人間のする仕事の中で勞働くらゐ神聖なものはない。造化は先づ人間に肉體を與へてゐる。此の肉體、手足を働かせて生きて行くのが人類普遍の原則である。だから、人間が一番正しく働いて生きて行かうとするには勞働に依るの他は無いのである」と。

太郎は、とある職業紹介所を訪れました。其處には、表の掲示場に、幾百と限り無き職業の名稱が書き出されてゐて、如何に世間に職業の數の多いかといふ事と、職業などを求めることは磧で石ころを探すよりも更に易々たる問題であるかのやうな感じを起こさせるのでありますが、實は其の大部分が、大劇場の座席（シート）の如く年中賣り切れてゐるので御坐います。

「お前さんは、どういふ仕事を望みなさるんだね？」と、紹介所の主は銀縁の老眼鏡の中から品物の吟味をするやうな眼付きで太郎の顔を見て申しました。

「どんな仕事でも、成る可く骨の折れる勞働をやつて見たいと思ひます」と太郎は答へました。

「ほう、それあ感心な人だ。それぢやあ幸ひ牛乳配達の口があるがどうだらう？」

「牛乳配達ですか。もつと力を出す苦しい仕事は無いでせうか？」

紹介所の主は餘程變な男が飛び込んで來たものだと思ひました。

「ちやあ、荷上げ人足の口があるがどうだね？是れなら重たい荷を下げたり卸ろしたりするんだから骨の折れることは請合ひだが」

「結構です。ではどうか其の口へお世話を願ひます」

紹介所の主は早速先方へ手紙を一本書いて與れました。斯うして太郎は其の日から或る倉庫業者の處へ荷上げ人足として傭はれて行くことになりました。彼は毎日其處で倉庫にある荷を傳馬へ積み込んだり、船の荷を倉庫へ運んだりして大勢の人夫と一緒に働きました。仕事は骨が折れたけれども太郎は愉快でありました。彼は正直に勤勉に少しの骨身も惜しまずに働きました。彼の働き振りと人物は主人の倉庫業者の眼に留まらずには居りませんでした。彼は間も無く拔擢されて人夫頭を命ぜられました。人夫頭としての太郎は、主人に對して忠實であると同時に、部下に對しては深切でありました。彼は益々主人の信用を高め部下の人夫達からは多大の尊敬と信賴とを受けるようになりました。そこで太郎は、今度は勞働者の生活を改善することを考へました。彼は其の第一着手として、正午休み(ひるやすみ)の時や雨の降る日に倉庫の隅で行はれるところの博奕を嚴禁いたしました。其の次ぎには、日給の中から毎日五錢宛の積み立金をする規約を作りました。さうしてそれを勵行いたしました。彼は一日倉庫の横手の空き地へ一同の人夫を集めまして、博奕は法律の禁ずる處で而も由々敷き罪惡である所以と、勞働者が其の日稼ぎの考へを改めなければ不可ないといふ理由に就いて、滔々と數千言を發すの熱辯を振るひ、今回の制度の趣旨を十分に徹底せしめようといたしました。彼の辯論に對しては一人として異說を立て得る者がありませんでした。斯くして此の倉庫の從業員の風儀は革まり、彼等の生活は日一日と向上しつつあるかの如き觀がありました。太郎の信望は益々大を添へてまゐりました。茲に於てか太郎は、胸中に藏する第二の方策の實行に取り掛かりました。それは傭ひ主の倉庫業者に對して人夫の賃銀の增率を要求する事でありました。是れは寧ろ第一に置くべき重要な問題で、此の要求が貫徹しなければ從業員の生活を根本的に改善することは到底不可能なので御坐いました。太郎は又々一同を空き地へ召集いたして此の件に就いての贊否を問ひ

ました。すると此の前の問題の時には仕方無さゝうに不承不承納得した人夫達が、今回は異口同音に贊成して、「太郎兄い。睨り頷むぜ」などと叫ぶ者さへありました。そこで太郎は一同を代表して傭ひ主の倉庫業者と其の事務室で會見して、日當五割増しの要求條件を提出した後、此の要求が決して不當でない所以を、縷々として說明いたしました。彼の考へでは、自分が主張する處は全く正當で、且つ多數の使用人の幸福を招來する事柄でもあるのだから、無論主人は喜んで是れに應じるに違ひないと思ひました。處が、事實は案外なわけで御坐いました。

「折角の御相談だが、斷然お謝絶りする」

と、倉庫業者は大きな事務机の上に片方の手で頰杖を突き、片方の手の指に火の付いた葉卷を挾んだ儘默つて太郎の云ふ處を聽いてゐた後で、其の麥酒樽のやうな大きな腹から出る聲でニべもなく云ひ放ちました。

「併し、私共の……」

「いや、君達の方の理由を聞くには及ばん。兎に角、人夫の日當は現在以下に下げることはあつても、現在以上に上げることは絕對にしないのだから」

倉庫業者は、最近自分が世話をしてゐる若い醫者に支給する月々の手當を倍額にして呉れといふ要求を待合の女將を通じて婉曲に持ち掛けられた時は、內心大いに不愉快で且つ不服だつたにも關はらず、表面だけは極めて寛闊に欣々然として快諾しなければならなかつたので御坐いますが、今日は全くその時と反對に、勇猛な反撥性を無遠慮に發揮することが出來るので御坐います。全體彼に云はせると、勞働者などといふものは何處迄でも付け上つて來るものだから、一々彼等の要求を聞いて遣つた日には際限が無い。（と云ふと偶には聞いて遣つたこともあるやうにきこえますが、其の實未だ嘗て一回も其の例しは無いので御坐います。）且つ、同じ勞働者でも特殊の技術を要する者は格別だが、荷上げ人足の如き力さへあれば誰れにでも出來る勞働に對して世間並みの賃銀を支給する必要は毫頭理由の無い事だ。すべて人間は技術或ひは頭腦を働かせる處に人間たるの價値があるので、彼等人夫の如きは全然何の能力も無い牛馬に等しい輩であるから、詰まり牛馬と同じ待遇をして遣ればそれが正當且つ十分であつて、傭ひ主たる自分に對して滿腔の感謝を捧げて然る可きだのに、不足がましく生活の改善などと云つて賃銀の增率を要求するなどは以ての外の話だ――といふ意見で御坐います。其處で倉庫業者は恁んな亂暴な決意をいたしました。

「勞働者に對しては須らく强壓的に出なければ駄目だ。一つ今後の見せしめに賃銀を引下げて懲らして遣らう」

彼は即刻事務員に命じて、明日以後は荷上げ人夫の日當を現在より二割減ずべき旨の掲示を出させたので御坐いました。一同の勞働者の驚駭は一と方ではありません。早速會合を開いて善後策の協議を始めましたが、太郎に對する非難攻撃の聲は囂々として持ち上りました。すると其處へ、太郎が管理してゐる積み立金が預金してある七百四十銀行が破産したといふ報知が參りましたので、騷擾は到頭爆發してしまひました。

斯の如く太郎が行つた正義に基く行爲は意外な結果を招來して、彼は多數の人の罵詈讒謗と怨嗟の聲の中に、悄然として此の地を去らなければならなかつたので御坐います。

(五)二郎が其後遭遇した運命に關する話

二郎も目的地の或る大都會へまゐりました。其處で彼は將來の方針を立てるに當つて、太郎が考へたとは全然相違した考をばめぐらしました。二郎はどう考へたのかと申しますと、それは些しも働かずして飯を食ふ法は無いだらうかと考へたので御坐います。「全體人間の手だの足だのといふものは、散歩したり面白い物を見に行つたりするための足であり、旨しい物を食べたり骨牌を弄んだりするための手であるので、是れを無意味で而も苦痛の伴ふ勞働に使用ふることほど、人間生存の意義に反してゐる事は無い」と彼は思ふので御坐います。そこで彼は、世間のあらゆる職業の中から、最も懶惰な生活を送るに適合してゐる職業は何んであらうかと選擇に苦心を拂つた結果、着目したのが宗教家の生活で御坐いました。「世の中に僧侶位樂な職業は無い、第一お經といふ立派なお手本があるのだから發明や工夫に苦心する世話の無いのがいい。又地獄だの極樂だのと仔細らしく云ふようなものの、是れも結局誰れ一人實地を見て來た人はゐないのだから好い加減な出鱈目を喋つてゐれば事が濟む。醫者のやうに夜なかに叩き起こされる心配はなく、葬式だの年忌で檀家へ出掛ければ御馳走になつたうへに日當が取れるのだからうま過ぎる。方丈へ立て籠もつた儘縦の物を横にもせず、碁でも打つたり將棊でもひねくつてゐれば日が送れるとは有り難い。要するに僧侶といふ職業は、人間が懶惰な生活に對してどれ位の處まで耐へ得るものかといふ事を試めして見るためにつくられたものに違ひない」恁う二郎は觀察するので御坐います。彼の觀察が中つて居らぬことは云ふまでもなく自明の理でありまして、僧侶とか牧師とか申す職業は、人間と神佛と

の中間にあつて、神佛の善を人間に傳へ、同時に人間の感謝や祈りを神佛に執り次いで呉れるところの、謂はば或る時は慈善家の手代の如き性質のものであり、又或る時は法廷に於ける代言人の如き性質のものでもありまして、其の清淨にして崇高なることは、是れを職業として見做すべく餘りに凡俗を超越して居るので御坐います。然るに彼れ二郎に於きましては、凸凹の鏡には凸凹に物體が映るが如く、又色眼鏡で物を見るが如く、己れの邪（よこしま）な心を以て此の尊い職業家をば斯樣に觀察して些か恥ぢる色も無いので御坐いました。

二郎は些か手蔓を求め、或る名僧の門をたたいて其の御弟子とならんことを懇願いたしました。すると丁度其の時寺では味噌摺り坊主が一名不足して困つてゐる矢先きでありましたために、彼の願ひは聞き屆けられることになり案外樂々と其の寺へ住み込む事が出來ました。彼は其處で僧侶としての修業を一と通りだけいたしました。それは主として味噌を上手に摺る事だの、お經を誦み違へた時に咳拂ひで是れを胡麻化す事などの初歩から、稍六しくなつて牛肉を匂ひを立てぬやうに煮る事、お布施の重みを手で量つて是れを片時も早く側らの和尚に何等かの方法を以て知らしめる事、といつたやうな、概して斯樣な事柄が多いので御坐いました。猶彼は其處に於て宗教家の生活といふものが如何なるものであるかといふ事をも十分に見究めることが出來ました。詰まり宗教家と雖も肉體の所有者である以上は、彼等が俗人同樣物慾や情慾の生活を欲求したからと云つて些しも不思議なことはない。寧ろ其の點に掛けては俗人以上に遙かに旺盛である事も、情状酌量すべき點が多々あることを發見いたしました。例へば手近い話が、彼が師事するところの和尚樣に就いて考へて見ても、齡は最早五十の坂であるが、運動不足と美食の結果年々肥つて脂ぎつて來る其の體に蓄積されてゐる絶倫の精力は以前は何處かの料理屋の女中で隨分鳴らしたものだといふが今は既に姥櫻の梵妻（だいこく）一人を守つてゐさせようわけは無く、藝者屋を出させてゐる妾が一人と、檀家の娘を孕ませて大悶着の結果是れも圍ひ者にしてあるのと、都合妾宅が二軒あるので月々此の方へ取られる金額も尠なからぬところへ、やれ貫長の選擧だ、やれ代議員の改選だと云つては其の都度彌勒屋にせしめられる金も仲々莫迦にならず、其の他四方八方金の要る事ばかりであるから、檀家からの收入や迷信深い酒造家の老爺から捲き上げる金だけでは到底寺の維持が立たぬので、折り〳〵しなくてもよい修繕を口實にして寄附金を勸請したり、或ひは一世一代の授戒會を何遍でもやらかして極樂のパツスを販賣したからと云つて、萬止むを得ざる次第で十分同情

に價する理由のあることをば二郎は知りました。

斯様に二郎は宗教の何物たるかを研究し、又宗教家の生活をも表裏に亙つて知悉致しました後、彼は突然寺を飛び出して還俗してしまひました。彼が還俗したのは、宗教其の物を見限つたわけでも、宗教家の生活に愛相を盡かしたわけでも、其のどちらの理由からでもなく、反つてそれと反對の動機に基いてゐるので御坐いました。彼は更に廣大なる抱負を實行すべく決心したのでありました。それは、彼自身で新たに一派の宗教を創始しようといふ計劃を立てたので御坐います。斯う申すと、二郎の奴は定めし氣が狂つたのだらうとしか思はれませんが、併し彼は氣が違つたわけでもなんでもなく、全くの正氣で而も眞劍に考へるので御坐います。彼は暫らく何處かの田舍へ姿を隱してゐた後、再び飄然として此の都へ舞ひ戻てまゐりました、しかり、彼はたしかに文字通り舞ひ戻つたらしい風采をして居りました。齊坊主だつた彼の頭には何時かふさふさした、長髪が肩まで垂れて居りました。同じく剃刀を當てぬ顔には粗らな髯が伸びて細そく縮れて居りました。不思議なのは彼の着てゐる物でありました。それは白羽二重で拵らへた法衣ともインバネスとも付かぬ妙な恰好をした物でした。彼は場末の方へ借家だが併し堂々たる門戸を張り、門の柱には眞つ白い檜の板へ達筆に「大日本天竺教本部」と書いた大看板を麗々と掛け出しました。借家で此の天竺教なる物の教義に就いて、二郎が云ふ處の言葉をかい抓んで紹介すると、先づ此の天竺教は、役の行者を祖神と齋き祀るところの教で、神佛兩道を基礎となし、是れに婆羅門の秘法とマホメットの精髓を取り入れた深遠高尚なる大宗教である。天竺教の最も特色となすべき點は、天界と下界との境界を無くした事である。すなはち古來の有らゆる宗教では、例へば神道の高ケ原と大八洲の如き、或ひは佛教の地獄極樂の如き、或ひはキリスト教の天國と下界の如き、すべて人界と神の世界との間に劃然たる區別があつて、人類は信仰に依つて死後に及んで始めて其の靈魂が天國に救はれ、或ひは極樂に行くことが出來るといふことになつてゐるが、是れは甚だ不完全で且つ不自然の極みと云はざるを得ない。然るにわが天竺教では、人間は生きながらにして天國へでも極樂へでも何處へでも行けるのである。すなはち人界と神界との交通を極めて自由に易々たる事にしてしまふのが、天竺教の根本要義なのである――と云ふので御坐います。教祖二郎は、インバネスの如き又は歌劇俳優の舞臺衣裝の如き不可思議なる天の羽衣を身にまとふて、天空を翔ける事飛行機よりも速く、水上を走る事帆前船よりも滑かに、天地の間何れを問はず游行自在の神通力を

會得してゐるのださうで御坐います。彼の幕下であるところの二三の長髪の徒が吹聴するところに依ると、うちの先生は夜半祭壇の前から其の姿が倏忽として掻き消されてしまふ。軈て又一時間も經つと不思議や忽然として元の座に現はれて來ると申すので御坐います。是れを二郎に訊す人があると、彼は微笑を浮かべて、祖神役の行者が伊豆の大島へ配流に處せられてゐた時の業にならつて、夜な夜な富士山の頂上迄行つて天上の諸神と會合して來るのだと申します。此の世にも不思議な魔術に依つて神に祈る時には、啞者も忽ち歌ひ出し、躄者は其の場に杖を捨てて去り、如何なる難病業疾と雖も立ち處に全癒するといふので御坐います。斯様にして玆に天竺教は創始されたので御坐いましたが、偖是れから愈々信者を吸收する一段になると、二郎が豫期した通りにばかりはまゐりませんでした。偶々本部を訪れて來る者はあつても、多くは一時の氣紛れかひやかし的の出來心から遣つて來るので、永續きがいたしません。是れには流石の二郎も内心弱りました。此の分では折角の此の大宗教の前途も些か危ぶまれる形で御坐いました。併し、是れは未だ時節が到來しなかつたからで、佛像も曾ては難波の池中に投ぜられ、基督が十字架に掛けられたのと一般で、決して天竺教の教義が浅薄であつたからではなかつた證據には、茲に偶然一つの奇拔な事件が持ち上つたのが動機となり、天竺教が頓に社會へ流布するに至るお話で御坐います。

近頃天竺教本部へちよい〳〵遣つて來る一人の相場師が御坐いました。此の相場師はまだ若い男でしたが、近來相場ですつかり凹つてしまつてどうにもかうにもならない有様だつたので、煩悶悲觀の餘り、苦しい時の神頼みで、一寸天竺教に足を踏み込んで見た譯で御坐いました。處が、此の男には非常に縹緻佳しの妻君がありましたので、彼は折り折り其の妻君をも伴れて本部へ遣つてまゐります。其處で、二郎は追ひ追ひ此の妻君とも懇意になるといつた譯。もともと二郎は大の好色漢のことて、忽ち此の妻君に目を付け、どうかして手に入れたいものだといふ不埒な考へを起こしました。其處で、ちよい〳〵變な眼付きなどして氣を引いて見ると、先方も滿更でもなさうな様子。尤も是れには二郎の自惚れも随分手傳つて居りました。が、何を云ふにも亭主持ちなのでどうする事も出來ません。いろいろ考へて見ましたが、是れには第一に亭主の相場師を彼女から引き離してしまはなければ仕事が始まりません。と云つて理由なく離縁を勸めたところできかれる譯も無いから、何か他に旨い方法はあるまいかと考へた結果、彼は漸く一つの手段を案出して、或る日のこと夫の相場師に向つて斯う申しました。

「君は一つ大金儲けをして見ようといふ氣はないかね？」
「有りますなあ。正直なお話が旨い儲け仕事がないばかりに恁うして悲觀してゐる譯です。金儲けならどんな仕事だつて遣ります」と相場師は非常な熱心を以て答へました。
「それぢやあ君、一つ奮發して蓬萊島へ出掛けて見ないか？」
「蓬萊島へ行つて、一體何をするのです？」
「いや其の事に就いては後で話す、が第一君の決心が定まらないうちは此の相談は出來ない」
「決心と云ひました處で、私は勿論構はないのですが、實はお恥かしい話ですが目下非常に窮してゐまして、旅費位は何んとかなるにしても、妻を殘して行きますと其の方の生活費も要りますから――」
「いや、それは心配するには及ばん。わしが恁うしてお勸めするからには旅費は勿論の事、其が成功して歸つて來る迄の奥さんの生活費も貢いで上げようと云ふのだ。なに、わしは隱者の生活をして居るから金など欲しいとは思はんが、折角恁うして懇意になつた君のことだから一つ儲けさせて上げたいと思ふだけのことだよ」
「有り難う御座います。さうして頂ければ問題はありません。行きませう」

「ではお話しするが、是れは秘密な話だから其の積りで聞いて下さい。あの蓬萊島といふ島には世間の人に知られてゐない金鑛があるのだ」
「えッ！金鑛ですか？」と相場師は忽ち眼の色を變へて申しました。
「其の金鑛といふのは、蓬萊島がまだ我邦の領土にならぬ前にある外國人が發見して既に採掘し掛けた處へ、今度の戰爭が始まつたので、其の外國人は巧みに鑛口を塞いで判らぬやうにして置いて本國へ引き上げてしまつたのだ。で、未だに誰れにも其の在處が知られずにあるんだが、わしは仔細あつて大體の地點を知つてゐるからそれを君に敎へて上げようと云ふのだ。詳しい地圖を持つて出掛ければ譯無く知れる。それに君には餘の人とちがつて祖神樣の御加護があるによつて成功は疑ひ無いのだ」
「有り難う存じます、實に何んともお禮の申しやうはありません、御恩返しは成功の曉に十分いたすつもりです」相場師は既に大金鑛を發見したやうな氣持で申しました。
「わしに禮を云ふには及ばない。禮を云ふなら祖神樣に申し上げるがよい。はッはッは」
神ならぬ身の相場師は騙されるとは夢にも知らず。次ぎの便

船を待つて蓬萊島へ出發いたしました。

「先づ是れで一方は片着いたといふものだ。奴が蓬萊島へ行つて有りもしない金鑛探しに夢中になつて山の中を迂路付いてゐるうちには、人食ひ人種の土人の手に掛かつて殺されるか、猛獸毒蛇にやられるかどつち道命は無いものに極まつてゐる。縱しんば命だけは無事で歸つたにした處で、其の間にはこつちの仕事を物にしてしまふから大丈夫だ」

と二郎は凄い笑みを漏らしたので御坐います。處で彼は目的物である相場師の妻君を一日も速く手に入れたいのは山々でありますが、此の女流石は相場師でも亭主に持つて一苦勞して見ようといふ位だけあつて、柔かいやうで存外堅く、堅いやうに見えて其の實柔かいといつたやうな、先づ女としては難物の方で御坐います。だから二郎もさう輕々しくは手が出せず、それにどうせもう袋の鼠で早晩こつちの物と極まつてゐる以上何もさう慌てることはないと、表面さりげない體で、至極深切に面倒を見て遣つて居りました。偖、世の中には、偶然といふ事が澤山有ります。否、見やうに依つては人生は悉く偶然の聯結であるとも申されます。我れ我れが生てゐる事がすでに偶然の最も大なるもので御坐います。我れ我れはよく物事を計劃すると云ふ。けれども、計劃する事がすでに偶然に屬してゐて、而も其の對照になるも物の存在は勿論偶然の存在に過ぎません。爰に全體を支配する大きな神意が働いて居るとしても、其の一つ一つは人間に取つて全く偶然の物であると申さねばなりません。そこで、人生に於ては、どんなに偶然な出來事が起つたにしても、それは別に不思議がることも怪しむこともなく、寧ろ一種の當然であるとは做す方が正當で御坐います。處で、二郎とかの相場師との關係の如きは、此の偶然を證明する最も顯著なる場合だつたので御坐いました。相場師は、半歳經つか經たぬうちに歸國いたしました。彼は蓬萊島に於て偶然にも一つの砂金鑛を發見して歸つたので御坐いました。彼の歡喜と得意の程は誰れしも想像することが出來るでありませう。併し、彼が二郎に對して傾倒した感謝と尊敬とが如何に絶大であつたかといふ事に就いては、相場師は二郎を神以上に尊敬したといふだけの事實を擧げて說明して置くことにいたしませう。此の評制は忽ち全國に傳はり廣まりました。同時に、今迄世人が其の存在すら氣付かずにゐた天竺教の眞價と、教祖二郎の名聲とは一時に世に認められ、教祖の不思議なる神通力と叡智力とに信賴して、斯かる偉大なる宗教の恩寵に浴したいと希ふ者が日夜本部の玄關を指して雲集するに至りました。天竺教本部は宛然城廓の如き大建築と變りました。此處へ集まつて來る信者は、

社會の有らゆる階級を網羅して居りました。藝人社界や花柳界等の定連は申すに及ばず、百姓、商人、相場師、職人、會社員、官吏、軍人、學生、新聞雜誌記者、文士、實業家、學者、政治家、と云つた具合。とりわけ新興の宗教としては智識階級の信者を比較的多く有してゐる事が、天竺教に對する社會の信用を增さしめる一つの原因にもなつてゐたので御坐います。が、由來智識階級の人間ほど、現實に滿足せず急激な理想を追求する傾向を有つて居るのでありますから、天竺教の教義が前述べたやうに頗る非常に突飛である事は、寧ろ彼等の性癖と嗜好に投じたやうなもので、且つ又、信仰を求める心の根本には常に人智以上の何物かに對する憧憬れがあるのでもありますから、往々社會に斯樣な現象を見ましたところで尠しも怪しむに足りないので御坐います。それはともかくとして二郎は、事の意外な結果を見て私かに驚くのみで御坐います。併し、軈て其の驚きにも馴れて來ると、彼は、自身の經驗に對して從來とは異つた解釋を下すやうになつてまゐりました。

「己れの心の中には、己れ自身でも今迄氣が付かなかつた或る尊い精神――つまり神とおなじ物が宿つてゐるのだかも知れないぞ。曾て己れが墓を發いた時でも、己れは惡事をしてゐるつもりだつたのに、結果はあんなに善事になつてしまつた。今度の相場師の一件もさうだ。詰まり內在の精神が表面の意識を一つの手段として動かして、結局大きな善を成し遂げてゐるのかもしれない。己れは殊に依ると非常な善人――神なのかもしれないぞ」

二郎は斯う考へるので御坐いました。さう云つて見れば、彼が創始した天竺教の場合でも、彼自身では是れに依つて虛名を馳せ、世を欺き人を陷れようといふ徹頭徹尾惡い意志の發現に他ならなかつたので御坐いますが、其の結果はさしたる害毒も社會に流さぬばかりか、寧ろ尠少ならぬ善に影響を及ぼしてゐる點を見遁すわけにはまゐらぬので御坐います。例へば、部下を叱咤する事と戰爭をする事より他に何事をも考へなかつた退職將官の心に兎も角信仰といふ觀念を起こさせたり、思想の涸渇した文士の頭腦に神通自在力の空想を注入して一種の創作衝動を刺戟させたり、或ひは實業家の未亡人や倅を夢中にならせて、先代が權利株で儲けた惡錢の一部を懷ろから吐き出させるなどといふ藝當は、二郎ならでは何人にも出來難い社會奉仕の一端で御坐いませう。

(六)二郎が其の後遭遇した運命に關する話

人間の賢不肖といふ事位がどれまで人生に影響があるか、詰まり、賢人は必ず成功して愚人は悉く困窮に陷るかと云ふと、あながち左ぅとばかりは限りません。反つてそれと反對の實例を、我れ〳〵は人生に於て屢々見いだすので御坐います。それに依つて我れ〳〵は神の恩寵が如何に博大で且つ公平であるかを知ることが出來ます。三郎の場合は其の最も好適な實例で御坐います。偖三郎は、錦の陣羽織で思はぬ利得をいたしましたところから、都へ出て來ると上等の旅籠屋へ泊り込んで、至極呑氣に諸處方々と見物して日を送つて居りました。或る日の事で、彼は公園へ出掛けました。そしてキヨロ〳〵しながら邊りを眺めて居りますと突然に横から「今日は」と聲を掛ける者がありました。見ると齢頃三十位の物堅さうな商人風をした男で御坐います。三郎も同じやうに「今日は」と挨拶を返すと、其の男は續いて申しました。

「今日は結構なお天氣ですな。時に貴君は御見物ですか？」

「はい、左樣で」

「失禮ですがお國はどちらで？」

などと商人體の男は直ぐ樣馴れ〳〵しい調子で話し掛けます。

「貴君は植物園を御覧になりましたか？」

「いいえ。まだです」

「彼處を見なくつちや駄目ですな。是非行つて御覧なさい、駭く物ばかりですぜ。世界中の有りと有らゆる不思議な植物が集めてあつて美しい花が一面に咲いてゐてまるで極樂へ行つたやうですぜ。貴君はまだ金の生る木なんて植物を御覧になつたことは無いでせう？」

「そんな植物がありますか？」と三郎は駭いて申しました。

「有りますとも、まだ其の他にお釋迦樣がお手植の盆栽だとか、小人島の松の樹だとか、つい此の頃鬼ケ島から來た高さ五丈もある珊瑚樹だとか、珍らし物が澤山有ります」

三郎は急に植物園へ行つて見たくなりました。

「此處から其の植物園へ參りますにはどう行つたら宜いでせう？」

すると商人體の男は一寸考へるやうな風をしてから申しました。

「貴君が植物園へいらつしやるなら私もお案内して上げませうか？なか〳〵遠くて初めての人では判らないでせうから」

「それは濟みせんね、初對面の貴君にそんな事をして貰つては」

「何構ふもんですか、どうせ今日は私も遊んでゐるんだから」

三郎は其の男と一緒に歩き出しました。池の方へ下りて、其の縁をぐるツと半分程廻つて、それから電車通りを歩いたり、横丁へ這入つたり、坂を上つたり下りたり、約二時程あつちこつち歩きました。其のうちに三郎は草臥れて腹が減つてしまひました。

「植物園はまだですか?」

「もう直きです。併し、向ふには喰べ物屋がありませんから此の邊で一寸中食をして行きませう」

三郎は、今此處で此の男と一緒に飯を食ひにはいると、相手の分まで勘定を拂つて遣らなければならないと思ひましたので、まだそんなに腹が減つてゐないから食べなくても宜いと答へました。すると商人體の男は云ひました。

「さうでもありませうが、今日はお近付きのしるしに私が奢りますから、是非付き合つて下さい」

「何んといふ深切な人だらう?」

と三郎は都會の人の氣前の宜いのに感心いたしました。人の奢りと聞くと彼は急に空腹の度が増して喉がグウ〳〵鳴つて來ました。二人は淋しい横丁にある小汚ない鳥屋の二階へ上つて鳥鍋で一杯やり始めました。すると其の隣りの室でも一人のお客が酒を吞んで居りました。什切りが葦簾の障子だのでよく向うが見えます。其のうち隣室の客は鞄から紙幣の束を出してしきりに勘定をし始めました。それを見ると三郎の伴れの男は、小聲で三郎に囁きました。

「あんなに澤山金を持つてやがる、ひとつあれを二人でこつちへ捲上げて遣らうぢやありませんか?」

「どうして捲き上げるのです?」と三郎は駭いて答へました。

「何、細工があるから取らうと思へば造作は無いんです。併し貴君も幾らか元手を持つてるでせうね?」

三郎は此の深切な男がこんな事を云ひ出したのを不思議に思ひましたが、併しあれだけの金をこつちの物にすることが出來ると云はれて見ると、急に慾が出て來て、自分も元手を出して仲間にならうと答へました。すると商人體の男は直ぐに例の馴れ〳〵しい調子で隣室の客に話をしかけましたが、先方もたつた一人で詰まらなくてゐた處と見えて直ぐに懇意になつて、都合三名一緒になつて飲み始めました。

「どうです皆さん、酒ばかりでは詰まらないから一寸慰みを遣らうぢやありませんか?」と商人體の男は切り出しました。

「結構ですね」と相手の客も直ぐに賛成いたしました。

其處で三名の者は、マッチの棒の數の偶數奇數に依つて勝負をする博奕をやり始めました。商人體の男と隣室のお客とは其の

仲間同志で、斯うして三郎の金を卷き上げる魂膽で御座ます。彼等は都會には澤山あるポン引と稱する惡徒共で、此の鳥屋は彼等が常に田舍者を引っ張り込むポン引き宿といふので、幾分宛の割り前を彼等から受けてゐるので御座います。處で、博奕に使ふマッチは、ポン引きの方では前以て棒の數を數へてあつて、勝たうと負けようと自由に出來る仕掛けになつて居ります。併し、どんなに計劃した事でも物事は一寸した隙きから壞れる場合が往々にして御座います。丁度此の鳥屋へ昨今來たての山出しの女中が、鍋の下の瓦斯に火を點じる時自分の懷ろから出して使つたマッチと、彼等が大切の商賣道具のマッチと何んの氣なしに取り違へて置いて行つたのを、彼等はつい浮つかりしてゐて氣付なかつたのでありました。運のよい三郎は、丁と張れば丁と出、半と張れば半と出て、忽ちのうちに二人のポン引きの持ち金をすつかり懷へ淺ひ込んでしまひました。二人の惡徒はこんな筈は無いがと呆氣に取られてしまひました。彼等は便所へ立つ振りをして、階段の處で間拔けな顏を見合はせました。

「おい兄貴、一體全體どうしたつて事なんだ?」

「どうもかうもねえさ、まるで狐につままれたやうだ、いめへめしい

「己れも何だか譯が分らねえ。仕方がねえからもう一遍あの椋鳥を何處かへ引っ張り込んで、今度こそ確り遣らなきやあねえか?」

「當りめへさ、此のまんま逃しちまつたまるものけえ」

間も無く三人は一緒に鳥屋を出ました。すると、ものの小半丁も來た處で、横合ひから突然に刑事巡査が飛び出して來て、「御用ツ！」と聲を掛けるなり忽ち二人のポン引きを高手小手に縛めて、呆氣に取られてゐる三郎を置き去りにして警察署へ引っ立つて行つてしまひました。都會といふ處は、何んといふうまい金儲けのある處だらう？と三郎はつくづく思ひました。

三郎は追ひ〱此の土地に知り合ひの人が出來てまゐりました。或る時其の一人が彼の處へやつて來て「非常に格安の家屋があるから買つてはどうか」と云つて勸めますので、話しを聞いて見ると、家は少々古いが土藏附きで、住居の方が三十坪あつて、それで賣り値が千圓だと申します。此の家屋周旋の仲介人と同道で見に行くと、成る程家は可成り古いが土藏付きでなか〱立派な家で御座います、三郎は一も二もなく千圓で其の家を買ひ受けてしまひ、とりあえずたつた獨りで其處へ引き移りましたすると其の晩のことで御座います。夜中に三郎が

を醒ますと、隣室の方から算盤を彈くやうな音が聞こえてまゐります。「ハテナ、此の家には俺より他に人がゐる筈はないが、」と彼は不思議に思つて耳をそば立て聞いてゐると、確かに誰れか算盤を彈いてゐるのに違ひありません。餘り不思議だから彼はソツと起き上つて行つて障子の穴から覗いて見ると、見たことのない六十位の老爺がしよんぼり座り込んで、しきりに算盤を彈いて居るので御坐います。三郎は吃驚しました。そして、「お前さんは誰れだ?」と聲を出さうとした時、其の老爺はヒヨイとこちらを振り返つて
「覗いてはいけないよ」と云ひました。

三郎は體ちうに寒けがして、聲も何も出なくなりました。彼は急いで寢床へ歸つて布團を引つ冠つて居りました。算盤の音は直きに聞こえなくなりましたが、其のうちに夜が明けてしまひました、其の翌晩も又其の次の晩も、算盤の音は毎晩同じ時刻にきまつて聞こえてまゐります。時々三郎が恐い物見たさで障子の穴迄覗きに行くと、老爺は乾度こちらを振り向いて「覗いてはいけないよ」と云ふので御坐います。三郎は弱つてしまひました。土藏附き三十坪で千圓といふ理由が判つてまゐりました。「幾ら安くても幽靈と同居では敵はない」と三郎は思ひました。併し、辛抱強い三郎は我慢して居りました。何事でも、慣れるに從つて刺戟が減じて來るのは當然の理で御坐います三郎は何時となく、算盤の音が聞こえて來ても、幽靈の老爺の顏を見ても、以前程凄いとも恐ろしいとも感じなくなつてまゐりました。斯樣にして一と月餘り經つた或る晩のこと、寢てゐる三郎の枕元へヒヨコリ例の老爺が現はれました。是れには三郎も驚いて、キヤツと聲を立てようとすると老爺がしやがれ聲で申しました。
「三郎さん、お前さんにお賴み申したい事があるのだが、何んと聞いて呉れませんか?」

三郎はいよいよ以て驚いて、幽靈なんかに物を賴まれては大變だと思ひましたが、厭だと云ふ事は恐ろしくて出來ません。
「何んだか知らないが、私に出來る事なら聞きませう」と三郎は顫へ聲で答へました。
「それは有難い。ではお話し申しますが、實は私は以前此の家に住んでゐた者です。私は若い時分から金を溜めて金貸しを渡世にして居りました。そんな譯で、金を溜める事ばかりを考へてゐたものだから、到頭一生獨り者で通つてしまつたのです。だから壽命が盡きて病氣で死んでも誰れ一人後を弔つて呉れる者もありませんので、未だにかうして行く處へも行けないで迷つてゐるやうな譯です。そこでお前さんにお賴みと云ふのは他

でもないが、どうか私の菩提を弔らつて頂きたいのです。其の代り私が生涯掛かつて溜めただけの財産は殘らずお前さんに差し上げませう」

「お爺さん、あなたの財産があるんですか？」と三郎は思はず布團の上へ起き上つて申しました。

「私が溜めた金は、土藏の奥から三枚目の床板を外して御覽なさい、其の眞下に殘らず仕舞つてあるのです」

「お爺さん、承知しました。あなたのお賴みは相違無く私が果たしませう」

爺さんは、大變嬉しさうな顔をしたと思ふと、忽ち其の姿は消ゑ失せてしまひました、三郎は夜が明けるのを待つて土藏へ這入つて、爺さんに教へられた通り奥から三枚目の床板を外して見ました。すると其の下から、箱だの甕のやうな物が幾つも出て來ました。其の中には、何萬圓といふ金がはいつてゐたので御坐いました。

(七)十五年經過して三人兄弟が邂逅した話

太郎と二郎と三郎との三人の兄弟が故郷を出て、橋の側の三叉の道で別れた時から丁度滿十五年の歳月が經過いたしました。其の日になると、右の道からは二郎がやつてまゐりました。彼は例の天の羽衣を身にまとふて、眞に神樣が降臨して來たかのやうに、威容堂々たる態度でやつてまゐりました。彼が創始した天竺教は今や世界に於ける宗教として認められて居りました。そして、教祖であるところの二郎は、釋迦基督に亞ぐ偉大なる聖者として人類の尊崇の的になつて居りました。勿論彼自身に於きましても、自己の有する靈智力と、偉大なる人格とを他人以上に多く信じて居りました。彼は、其の昔自分で自分を惡人だと思つてゐた頃の事を考へると、愚かしくもあり、又不思議なやうな氣もするので御坐いました。左の道からは三郎がやつてまゐりました。彼は、全國の經濟界を意の儘に左右し得る大實業家でありました。彼の有する富は量り知る可からざる莫大な額に上つて居りました。彼は多くの過去の經驗から、自分が事業や金儲けに對して異常なる天才と世界的手腕を有してゐることを知つて、常に誇りとして居るので御坐いました。此の聖者と、富豪とは橋の上で邂逅いたしました。そして互ひに相手の成功に驚歎し、且つそれを不思議な事に感ずるのでありました。處が、どうした譯か太郎の姿が見えません。

「太郎兄さんは約束を間違へるやうな人ではないのにどうした事だらう？來ない處を見るとあの人だけが早く死んだのか

れない」

　二人の兄弟が恁う云つて話し合つて居るところへ、先刻から橋の下に菰を敷いて寝てゐた一名の乞食が、ムクムクと狗のやうに起き上つて、二人の居る方へやつてまゐりました。それが太郎だつたので御坐います。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

　談話賣買業者の話しは爰で終つた。

「どうです、拙しは面白う御坐いましたか？御注文通り大抵の題目は談話の中へ盛り込んである積りですが」

「結構です、お蔭で原稿が出來て雜誌社へ義理が濟みます。時に談話の代金は何程で宜ろしいでせう？」

「是れは無論一時間以上の談話ですが、貴君だけは特別にして差し上げませう。一時間、五十圓の口にいたして置きます」

「さうですか、それは誠に濟みませんです。では五十圓」

　私は金を拂つて、暇を告げて外へ出た。

■次回豫告

　此の次ぎには、私が談話賣買業者に賣つた話を書きます。（作者）

米國の友に日本のいいところを知らす手紙

佐々木指月

○月○日

○○に

お前とわかれてからもう一年はたつちまつたねえ。この頃は雨ばつかり降つてそとへ出ずにゐたよ。でも、昨日今日は、やつと晴れた。

あたしはまだベツドを買はない。マツトの上に寢てるんだよといつたらお前がびつくりするかも知らないが、日本にはタタミと云ふいいものがあつてね、フロアは、そつちのフロアより

はもつと人間の生活に適してゐるよ。

あたしがそつちにゐた時にきらひだつたのはあのカーペットだつたよ。寢ころべばいやにかたくつて、夏なんかは白いパンツもなんにもすぐよごれてしまつて、手をつけば手がきたなくなるし、掃けばもさもさほこりが立つて鼻のあながむずがゆくなるし、それにいつも外から靴ではひつてくる時は、なんだか悪いことでもするやうな氣がしてならなかつた。ことに雨なんか降つて靴がしめつてゐるときは、靴が吸ひつくやうな氣がして、いやつたらなかつた。

だがお前、日本のタタミはいいよ。そら、あたしが送つたボツクリね。あれのおもてにオーヴアルなマツトがついてゐたらう？あれとおんなじ品質のもので、堅がシツキスフイト横がスリーフイトぐらゐにできてゐたね、なかにはビイトしたライスストローをスリーインチぐらゐな厚さに固く縫ひかためてね、その横のエツヂを、紺に染めた、薄い、目のあらいキアンヴアスでトリミングしてあつて、ちよいと考へるとぶはぶはしてゐるやうにも思はれるけれどもそうぢやないよ、男性的のエラステシテイをもつてゐるよ。

西洋では柔かいものと云へば、みんな女性的だけれどもね、日本にはお前、男性的でさうしてやはらかいものがあるのだよ。さうだね！疊のやはらかさには、靴の底へ打ちつけるラバー、ヒールのやはらかさともちがふねえ！あんな、こねこねしたものではない。それかといつて、アウトモビイルのタイアのやはらかさともちがふ。あんなスプリンギングなものでもない。まづなまがはきな土の持つてるやはらかさといつたらば、そのやはらかさをいひあてることだけはできたらう？

タタミは手でさはれば固いものだ。足で踏めばやはらかいものだよお前。日本人はその上へ女性的のやはらかさを持つてゐるクツシヨンを敷いて坐るんだよ。土の持つてるやはらかさの上で寢たり起きたりしてゐる日本人の生活を、お前、考へてごらん。さうして窓は大きい。大きいの小さいのつて、うちのまはりぢう窓なんだよ。あたしが送つた寫眞でお前も見て知つてるとほり、パアラアの庭に面した方には窓がなくつて、タタミの上から、すぐせまいポーチに出られるやうになつてゐる。ポーチには手摺がなくつてすぐ庭に出られるやうになつてる。あたしはほんとにいやだつたよ。ルームから出たりはひつたりするのにいつでもドーアをあけなけりやならなかつたり、それからちよいとガーデンへ出るのにも、いちいちフロントステーアからまはつて行かなけりやならなかつたそつちのうちは。寢てゐるところから、一と足で、すぐに外へ出られる。日本

の家のつくりはほんとうに自然に近く出來てゐる。全く、日本に住んで見ていいところは、この自然に近く住めるといふ、その事が何よりも一番だ。それだのに近頃は、いやに西洋の眞似をして、西洋人のお前さへもうあき／＼してゐる、あの斯をつなぎ合はして、ところどころへ孔をあけて、空氣と光線を通したやうな、あゝした家を建てよろこんでゐるよ。

第一日本の家は、地に近いよ。さうして空に近いよ。天氣がいい日なぞに、窓をみんなあけはなして、日あたりのいい居間にゐると、家全體が、まるで空氣と光線のなかに、ふうはりと浮いてゐるやうだよ。お前と二人で住んでゐたあのトワンティセキススストリートのアパアトメントのことを考へてごらん。下には二つステーアがあつて上にも二つストーリイがあつて、窓はみんな北向き。日の目なぞは朝のうちにたつた二分か三分裏にあつた高いビルテングの壁の間から、ちらりとさしたら最後、もう日がな一日、見えつこはなかつたぢやないか？　いつでも二人で言つてたねェ　いくら文明の都會に住んでゐるつたつて、人間も、かうまで、地に遠く、空に遠く、いい空氣も吸へないし、乏しい光のなかに住むやうになつては往生だつて。

だが、お前、あたしは今、その空のすぐ下に住んでゐるんだよ。あたまの上には、たつたひとへの板の天井と、それから屋根裏の少しの土と、素焼きの瓦の並んでゐるのがあるばつかりだよ。そうしてその上は、昨日はじめて晴れあがつたばつかしての、フレッシな秋の空さ。でも、あたしは、あんまり地を好かないよ。日本の地面はねえ。少し、しめり過ぎてるから。だから、あたしは、ニカイが好きさ。ニカイと云ふのはねえ、アップステーアの事よ。日本にはたつたトゥストリーの家が多くて、スリーストリーより上の家は、住宅には先づないと云つてもいいくらいだ。そのうちでも住みいいのは、わづか、ソン、フライト、アップのニカイのに越したことはない。

お前、ショージを知つてゐるだらう？あのフエフス、アヴエニウの、ヴアンタインの、ショーウインドのなかにいつでも飾つてあつたあのペーパア、スクリーンのことさ。あれがねえ。また、世界に類の少ないいいものだとあたしは思ふよ。グラスを越してくる太陽の光線は、なんだか少しスピリチユーアルな感じがしない。それに、そとがあんまりはつきり見え過ぎて、お前、人間は、たまには、そとを見ずにゐたいと思ふこともあるぢやないか、さういふ時には、グラスの窓は都合がわるいよ。ブラインドをおろせば暗いし、カアテインはうるさいし、と、云つて、シエードグラスでは、そとの音まで聞こえなくなるから、こんどは自然との交渉があんまり遠くなりすぎる。すべて

グラスはいけないよ、外界の自然のなかにふるへてゐるあるものが、あの一枚のステッフな物質にさへぎられて、居間のなかへ通つて來ない。そこへゆくと、ショージはどんなにいいだらう。

お前ショージのそとで鳴いてゐる小鳥の聲をきいたことがあるかい？向ふからは、こちらの姿が見えないから、思ひきつて窓ぎはへ寄つて來て鳴くぢやないか？それをこちらで靜かにきくと、小鳥だつてお前なかなかタンヂブルなことを云ふよ。さうして太陽の温かさは、たゞそのまぶしい、目まぐるしい光をつや消しにしただけで、そのほかのすべては、もとの活きてゐるまんまで、人間の肌(はだ)の上にふるへかゝるぢやないか。また、そのショージの紙の上にうつるシルウエッテと云つたらほんとにそれは西洋では見られない美しい自然の一つだよ。日本のアーテストは昔から、そのすぐれた自然に目をひらいてゐたよ。日の光でうつし出されるものゝかげよりは、青い月の光のうちにうつされるかげ繪の方がはるかにいい。けれどもそれは、お前のやうなトウ、センシティヴな女(をんな)には、あんまりメランコリアに過ぎるかも知れない。わたしとしても月夜のショージよりは、晝のショージの方がいい。

尤も近頃ではこの國でも、冬、寒いと云ふので、紙のかはりにシエードグラスのショージを使つてゐる家も多くなつた。だが、それをあけたてする時(とき)は、いやに重い感じで、それはいやだよ。また、こはれ易くも思はれてねえ。

わたしのうちではね、あした、古いタタミを新らしくするのだよ。さうすると、そのまた新らしいマッテングの青い匂ひが實によくなるのだよ。水に生じる艸のにほひだからねえ。そこのラグスのむせつぽい毛の臭ひとはちがつて、そのうへにあふのけに寢てゐると、目さへつぶれば、まるで野のなかに寢てゐるやうだよ。

日本へ來てごらん。お前のきらひなカアテインを洗ふ用はなしさ。テーブルクロースも、ナプキンも、ベッドのスプレードも洗はなくつてすむんだよ。洗(あら)はうと思つたつて、そんなものは使いはしないんだから。夜、寢るのにはねえ、綿の厚いマツトレスを敷いて、その上へシーツを敷いて、キモノの形の大きなクイルトをかけて寢て、起きるときにはそれをたたんでクローセツトのなかへしまつちまうのだよ。それはほんとにシンプルなものさ。日本のうちにはお前、クローセツトはたくさんあるよ。そい、あすこの、シツキステンス、ストリートへ住まつたときには、クロース、クローセツトがなくつてこまつたぢやないか？

それから、もう一ついいことがあるよ、お前が、いつでも夏になると云つてゐた、あの素足のことさ。靴をはいたり、靴下をはいたりしないで、しじゆう、足をむき出しにしてゐたいつて云つたらう？あれがこの國では出來るんだよ。タタミはね、その素足のために出來てるんだよお前、洗ひたての素足かなんかでその上を歩いてごらん。そのさらりとした觸覺は、お前が生れてからまだ知らない觸覺だよ。足も身體の一部分として解放してやつたと云ふ感じがするよ。

久しぶりで雨が晴れて今日は靑空が出た。さうだねえ、しばらく病院へ行つてが人が全快してひよつくり歸つて來て、顏を見せてくれたやうな氣もちがするよ。そのおもてが輝いてゐるけれども、どこかしらんやつれてゐて。

いま、あたしは、ニカイの大きな窓にむいて、机にもたれてゐるのだよ。さうしてそとには、もう、少し黄ばんだけれどもまだ靑い葉のたくさん殘つてる樹が林のやうに立つてゐるよ。そこであたしはこの手紙を書いてゐるのさ、これから出なければならない。今日はこれでよして、また、こんだ書かう。お前も書いておよこしよ。

○月○日

○○に

君が送つてくれろと云つた日本美人の寫眞は、まだあ
ない。

何しろ、そつちとこつちでは美人の標準がちがふから、日本の人たちが美人だと思つて寫眞にとつたり繪端書にしてゐる美人が、必ずしも君に見せたい美人ぢやないからね。

それに日本の美人は、體格の美人ではないよ。顏と、キモノと、ヘイアドレッシングの美人だ。だから寫眞をあつめるのにならなくつて困つてゐたのさ。

だけれどもよく考へて見ると、これはあたしの觀察のしかたが、きつと、何かにくつついてゐるせいで、それで、ほんとうのこの國の美人が目につかないのだらう。自分に最も直接な感じをあたへる女がありさうなものだが、これほど、女のたくさんゐるトオキヨオ、シテイに、さうした女がゐないと云ふはずはない。あたしは自分の今迄の美人に對する審美眼や、また日本在來のそんなものを捨てて新らしくそれを、ぴつたりと、この自分自身の心の上に感じ直すことにした。

するとね、あつたよ！最初はね、電車のなかで見つけ出した。あたしはある朝、暗いうちに起きて、しらしら明けに電車に乘つて、シテイを横切つて行つたが、電車が、インペリアルユニヴアシテイのある、トオキヨオでのユニヴアシテイ、スト

リートの角でとまると、そこへ四五人のガールスが乘つた。このガールスは、この都會の多くのガールスとは違つた服裝をしてゐる。日本の女はみんな、あのながいスリーヴのあるキモノを着てゐるのに、このガールスたちはダークブルーのシャーツ、ウエイストのやうなものを着てゐる、ピッチ、スリーヴストで肘をまげるとうちがはへ喰ひこむやうな皺ができる。ウエイストの裾がすぐ前のひらいたスカートになつてゐる。このガールたちはダークブルウの厚い木綿のサックスをはいて、ストローサンドルスをその上へつけて、おんなじダークブルウのレッギングスで、膝から下を卷いてゐる。たいていの日本のムスメは、例のオビをしめてゐるのだけれども、このムスメたちは、オビのかはりに赤い紐をしめてゐるので、それが、君の方のガールスがピンクのバンドをしてゐるやうに見える。ところがそれは、このムスメたちのしてゐる、やつぱりダークブルウのシングルエプロンの紐なので、そのまたエプロンが狹いから、腰かけてゐるガールスの膝のうちがはがどうかするとのぞけるぢやないか。ガールスは、白いコットンのペテコートを一つしてゐるきりらしい。君、まつたく、ぢかづけな想像がそこにあるぜ。

よく見ると、このムスメたちは、細いダークブルウの紐を、その乳の下にも卷いてゐるので、胸がやはらかくもり上つてゐるよ。質素、このガールスは、そのニユ[illegible]、たゞダークブルウのピッチ、クローセスで包んでゐるだけなのだ。さうしてこの女たちのコムプレクションといつたらば、まあなんともたとへやうのない、いい色だぜ。淡い琥珀色のしたに若い血が燃えてゐるから、それはちやうどストロベリープーテングをバタア、スキンでくるんだやうだ。なめるのにもよければ食べるのにもよささうだ。それを君、ジエット、ブラックの髮の毛で、フレームド、アップしてゐるのだからたまらないだらう？そればかりぢやない。その髮の上へブルー、エンド、ホワイトの、そら、あの、君の方でテーブル、クロースにつかつてゐるジアパニースタヲルねえ、あれが輕くかかつて、うしろでゆるく大きく結んであるんだ。さうして君、目が髮よりも黑くつてどこかに、ムスメのハートが、ちよいと光つて、ものを云ふんだぜ。さうしてそのスムースな、ひたひから眉にさ、例の、ブルウ、エンド、ホワイトのかげがさすんだぜ。どうだい、聞いただけでもよからうが？日本の女といへば、赤い色や青い色や黄いろい色やがセンスレスにからだぢうに卷きついてゐると思ひたまふな。そこにはかうしたピクチユアエスクなガールスもゐるんだ。

だが君、このガールスはなんだか知つてゐるかい？ユニヴァ

シテイ、ストリートの角から乘つたからカレッヂガールスだと思ふだらう？ところがさうぢやないんだ。これはトオキヨオ、シテイのそとにある田舍から出てくる、ヤング、フアーメレセスなんだ。それが朝のマーケットプレースに荷物を賣りに出る父親や兄弟たちの手つだひをするために、彼れらよりは一と足さきに、電車でそのマーケットプレースへ行く途中なんだ。君の方にはフアーメレスなんていふものは、まあ殆んどないといつてもいゝくらゐだつたがね、この國にはそれがまだたくさんゐるんだ。さうしてそのフアーメレスの體格は、シテイにゐる女よりははるかにいいんだ。何よりも、肉體に力が見える。これがどうもなんといつてもこたへられない。

しかしこのフアーメレセスは、都會にゐるあたしたちの目にいつでも見られるといふのではない。たまにどうかすると、ふとしたストリートの角なぞでそのダアクブルウのユニオンクロースの腰に、思はせぶりなエプロンの赤い紐を、はちきれさうに結びつけて、二三人で話しながら歩く姿を見せることがある。あたしはその後、シテイを貫く河の岸で、一人のヤング、フアーメレスが、キヤアリング、ポールで、そら、君も知つてる、ウキヨエにあつた、ものを擔ぐポールさ、あれで、になつて來たバスケットをそこへ、おろして、梨を賣つてゐるのを見たことがあつたが、このフアーメレスは、セーヂの葉でこしへた、さしわたしトウフイト、スリーコブタもあらうと云ふ広いハットをかぶつて、ダアク、インデゴオの、ピッチ、パンタルウンスをはいてゐた。ハットのうちがはから、かかつてゐる赤い紐を、結ひつけてそのまるい顎が、少しうごくと、アンブレラのやうにひろがつてゐるそのハットの、大きなブリムが出ひきつてうごく。片々のバスケットにキヤアリング、ポールを渡してその上へ腰をかけてゐるものだから。ピッチ、パンタルウンスの、ずつと上まで、襞一つよつてゐないぢやないか。腕肉のかすかにうごめくのが、ダアク、インデゴオの夢を誘いて、あたしの胸のなかへぴつたりと來たぜ。肩のあたりのクロースのフイッテングと云ひ、顔をあげて、そのハットのシエードの下からあたしを見た、おゝ！君、目つきと云ふものは、それが都會の女の持つてるウルトラソフイスケーテッドしたそんな安つぽい目つきぢやない。そこには田園の光があつた。いや、それも田舍へ行つて感じる田園の光ぢやないんだ。わたしの云ふのは、ちやうど、そら、ニューヨルクの夏のさなかの、窓ぎはへ買つて來て、水をやつて飽かず眺めるあの草花の赤と緑に、少しのアウニングの日陰をたよりに籠の小鳥が息をついて鳴きかゝつたやうな、あゝした田園の想像だ。忘れたかい、こ

ゝに自然の一片があると君が云つたぢやないか？あの自然のワン、フレーキだ。それがその梨を賣るフアーメレスの眸の奥に瞬いたときには君、あたしのハートがどんなに躍つたか？

實際、このトオキヨオに、この國民の根底のない思想と、それからたゞ外面的な西洋の模倣とのために、この國の過去の美人と同じやうに、餓くつて、乾いて、痩せて、滅茶々々になつてしまつた。そのなかで君、あたしは、その自然のまゝの日本を見つけ出したのだぜ。いや自然のまゝに育つて來た日本の美人を見つけ出したのだぜ。さうした美人の姿には、また外國で見られないいいところがあるよ。それはねえ、形の上の美と云ふよりは、性の魅力と云つた方が近いんだ。たもどろ、ぽつてりとして、むつちりとして、チヤアミングなんだ。見て眺めると云ふよりは、抱いて愛するものなんだ。さう云ふ見方で日本の女を見てゆくと、こゝに世界の人のまだ知らない美をもつてゐる美人が、新らしい審美的標準を、あたしたちに強ひてゐるのに氣がつく。それは、何も、フアーメレスに限つたことはない。さうした美に目ざめて見れば、その新しい型の美人は、そこにもこゝにもたくさん往來を歩いてゐる。

こゝに同封した一枚の寫眞は、これはフアーメレスではないが、田舍のタウンから來た一人のムスメだ。わざと君のために薄いキモノを着て、細いオビ一本でそのすはつた腰の恰好を少しうしろの方から撮つたのだ。君、これに似た美は、世界のどこの藝術家によつてもまだ紹介されたことはないぜ。西洋の女の腰は、むしろグロテスクだが、チヤミングと云ふわけにはゆくまい。見給へここにふくらんで、さうして紐でくびられて、まだ解かれずにゐる日本の若いセツキスをさ。

○月○日

○○に

日本へ歸つて、たべものをどうしてゐると云ふお尋ねには、ふきだしました。

あたしは、もともと日本人ですもの、ネーチヴの國へ歸つてたべものに困るとお思ひですか？それは歸りたてには、ちよつと、おなかの工合が惡るくなりましたが、だん〱馴れて來まして此の頃ではなんともなくなりました。

しかし、この國の人は、水をたべて活きてゐると云ひましたら、さだめしあなたがお驚きになるでしやう？でもそれはほんとうなのです。

シンプルライフと云ふことは、あなたも、しじゆう口にしてゐられましたが、まだまだ西洋のシンプルライフは、この國の人

から考へさせれば、よほどコンプリケートしたものです。

水のスープを呑んでゐる日本人のことを思つてごらんなさい。そちらのスープは肉をゆでゝこしらへたものでしやう。その外に、ミルクといひ、クリームといひ、一つだつて脂肪の氣のないものはないでしやう。あなた方の呑むものゝうちで、ごくさつぱりしたもので、あのテイぢやありませんか？それも、クリームを入れて、砂糖を入れないと、お口にあはないでしやう。これは、あなたがたのライフがシンプルでないことを語つてゐるのです。

日本人は、病氣でなくつても、たゞの、ハツト、ヲータアを呑みます。あなたは、あたしが風邪をひいたときに、ハツト、ヲータアを呑ましたでしやう。だが、あたしは、日本へ歸つてから食後には必ず、それを呑みます。なぜならば、これは日本人の習はしですから。食後に、カーヒイや、ココアや、チヨコレツトを呑むあなたがたとくらべて見たら、ほんとにをかしいくらゐな相違です。

シンプルなことは水のやうにといふこともいひますし、また、水のやうにシンプルな心とか、水のやうにシンプルな交りとかいふことも云ひますが、人工的の味ひをつけないところに自然そのまゝの妙があるとしたならば、朝、一碗の、さ湯を味ふといふところに、どんなに深いシンプルライフの象徴があるでしやう？

日本の人は、ほんとうに水が好きです。シントーイストは、毎朝、ゴツドや、ゴツデスに、水と、米と、鹽をあげます。神や、女神にそなへるのに、このくらゐシンプルなそなへものはないと思ひます。西洋では、マグダラのマリアが、イエスの足に香膏を注いだといふ話がありますが、日本では、イザナギと云ふゴツトが、穢れの國へいつた歸りに、河の水で身を洗つたと云ふことをいひます。一人は罪を赦された女、一人は心を清めた男神、人間と神とその名は別にしても同じ結果を得るために、香膏と、たゞの水とを、つかつた違ひがあるとは、よいコントラストぢやありませんか？

尤もバプテズムと云ふことはどこからはじまつたか知りませんが、日本人ほどバプタイズの好きなネーションはまづないでしやう？かれらはシラインを拜むのにもテンプルに詣でるのでも、一々その手をバプタイズドします。なんだか、をかしい云ひぐさのやうですけれども、日本人は、手を洗へば、心の穢れも落ちると思つてゐます。

かれらは、正月元旦に、まだ暗いうちに、井戸の水を汲んで、これを、ゴツドや、ゴツデスにさゝげます。一度、さゝげ

れば、それは、セクレット、ヲータアです。神水に、聖米に、聖鹽またその水と米とでし醸た神酒。それだけあれば、かれらは活きてゆけると思つてゐます。しかし米は水から實るもの鹽は水から銹びるもの、酒はもとより水だから、この三つのものはみんな水からうまれる。だから水は、人間の生活のみなもとだといひます。

セクレット、ヲータアは、かれらの家のなかにある一の愛らしい小さいシラインに毎朝そなへられるのですが、かれらの日々の仕事はそれからはじまります。また、どんな爭ひが、かれのなかに起つても、それは水に流すといふことを云ひます。かれらのライフは水にはじまつて水に流れる。さらりとして、ものに拘はらない心もち、それを日本人は尊んでゐます。すべてその心も暮しもシンプルなこと、それが日本人のいいところです。

しかし、いくら日本人が、シンプルだとて、さういつもいつも水ばつかりで活きてはゐられません。そこでその水へほんの少し味をつけます。茶の葉を煎じてその自然の香と味ひを愛します。それが日本のテイの調れです。最も自然に近いフレーヴオアを愛する心もちなんです。親しい友だちと二三人して、靜なテイルームに靜にすはつて、心にしたしくそのテイを啜りながらあるかないかの風味を味ふのです。その風味を透してエクスタシイに近づくのです。

そこには自然をそのまゝのガーデンがあります。ガーデンには石や橋に至るまで自然をそのまゝのポンドがあります。すべて日本人は自然そのまゝを愛するのです。

水のスープと云ふのもそれです。それは、さ湯のなかに、ワンドロップの酒の香と、フエイントな鹽の味と、味の淸らかな海の魚の幾分を入れて、ほんとにそれは日本にばかりあつてほかの國にはない料理です。

日本人は、たいていの料理には水を入れます。それは丁度、あなたの國の料理には、いつでも、バタアかミルクがはひるやうなものです。なるたけ、かるい味の料理が、この國の人のテーストには合ふのです。

だけれども、近頃では、日本人も、もうその輕い味の料理にはあきたらなくなつて、そちらのやうな、肉と、乳と、脂肪との、しつこい料理をたしなむやうになつて來ました。したがつてかれらのライフも、シンプリシテイと云ふことや、自然といふことからは遠ざかつて、かれらの胸からも、あつさりした水のやうな心もちは、だん／＼と消えてゆきそうです。

水を味ふといふテーストは、ほんとうに、すぐれたテーストぢやありませんか？どこの國にさうした本質的なテーストがある

つてゐる人々が住んでるでしやう？しかしこの國の人も、もうそれを失ひかけてゐます。こころぼそいことです。

シンプルライフといふことをしじゆう云つてゐらしたあなたは、それは人間味そのものだと、前の御手紙にお書きでしたが、うれしく思ひました。今は、日本の秋のさなかです。樹の葉に落ちかゝつてゐます。

○月○日

○○に

この間の香水とどいたよ。どうもひどい香ひだね。なる程、頽廢した氣分を味はせる香水だ。香水を作つて、これだけの感じを人に味はせることのできるお前の藝術はほんとうにたいしたものだよ。

頽廢といへば日本は面白い國だよ。殘つてゐる舊日本は、もう腐爛してゐるし、これからの新日本は、まだ俗惡で見るに堪えない。その俗惡さ加減は、お前の方のテンセンス、ストアで賣てる、テンセンスの香水のやうな香ひだ。この國に、蚊とり香水と云ふのがあるがね、あたしは蚊帳がきらひだから、この夏は、この香水を毎晩ふつて寢たがね、ある晩あんまり蚊がひどかつたものだから、一と壜みんなふつてしまつたら、蚊どころか、こつちが死にさうだつたよ、あたしは、その時、つくづく新日本の香ひは、まさにこれだと思つたよ。

だからあたしは、いくらそれが頽廢してゐても、やつぱり舊日本のにほひがすきだよ。さうして日本へ歸つてからはなるたけそのなかに生活してゐやうとしてゐるよ。腐爛した舊日本の臭ひは、ちやうどお前がよこした、この強い燐のにほひを含んだ香水のそれのやうなものさ。この國の舊文明の死骸の腐つてとろとろになつてるさまが思はれるよ。しかしそこに得も云はれない、いいところがあるのさ。

朝、はやく起きて、お前が遠くであこがれてゐる、ゲイシヤガールスの住んでゐる、町のアレイをあるくとね、夕べはシヤミセンのおとと、はなやかなランタンの光にヴアイブレートしてゐた空氣が、すつかり沈澱しちまつて、もう動きも流れもしずにゐるよ。この頃は秋だから、その空氣の溫さは、ちやうど人間の肌のぬくもりと同じくらゐでね、どうかすると、自分のからだと空氣のさかひがなくなつたやうな氣がするよ。

すると目には見えないが、ある、臭ひの層が、あたしの鼻とすれ〳〵ぐらゐな高さに、空氣のなかにたなびいてゐるのがわかるんだよ、それは、あのね、靜な部屋で、夕方なんかに香でも焚くと、烟が白く幾段にもたなびくだらう？あゝいふやうにた

なびいてゐるのにちがひないんだ。それがあたしが歩くものだから、揺られて、きつとやはらかい波をうつてゐるのだらう？かすかに臭つてくるのだよ。あたしはそれを嗅ぎながら、鼻からそれを吸ひ込みながら、そろりそろりと歩くとね、その臭ひから想させられる聯想のこまやかさといつたら、どんな藝術だつて、これほどデリケートな内容を持つてはゐまいと思はれるよ。

それがお前、なんの臭ひだか知つてゐるかい？それはね、それこそもしもあたしがお前のやうなするどい嗅覺をもつてゐたらばあたしはほんとに、亡びてゆく舊日本の悲哀をうたつた厚い詩集を繙いて讀んでゆくやうな氣もしたにちがひない。そこにはお前、いろんなちがつた臭ひが溶けあつてゐたよ。しかもお前それが、そのゲイシャ、ガールス家のちがふたびごとに、その前にたゞよつてゐる臭ひがちがうんだよ。ちやうどそれは、かの女たちが夕べたべたたべもののちがうやうにさ。

あたしは、いちいち佇んでその臭ひをかぎわけたよ。古い泥沼のなかに流れ込んでゐるものを引き出して、それから起る想像をひとつ残らず追ひつめて味はうとするやうにさ。あたしはその時思ひ出したよ。夕べおそく嗅いで通つた、このゲイシャ、ストリートのバスハウスのバスの湯のぬけた臭ひを、ほんとにそれは男の胸におもい鉛を入れるやうな陰慘な臭ひだつたよ。お前そのゲイシャ、ガールスは、疲れきつて、うだれたやうになつて、まだ家のなかでは少し暑すぎる空氣に惱まこしめりきつて、朝、はやいから、寢くたれてゐるんだよ。家のなかには、きつと、かの女たちの寢息と、白粉と、髪につける油のにほひと、夕べ呑んだ酒の香と、それからなまぐさいお前が送つてよこした、この香水のやうな臭ひが、一ぱいになつてゐるのにちがひないと思ふがね。しかし、家のそとにたなびいてゐる臭ひは、それとはちがふよ。家のなかの臭ひが熟した柘榴の赤ならば、家のそとの臭ひは土のなかに埋めてあつた壺の[illegible]だよ、それがお前、なにから來る臭ひだか知つてゐるかい？

昔、あたしが、お前の國へいかない前には、いつかお前に話した、あのヨシワラの、オイラン、タウンのまはりには、ツウス、ダイイング、ドレインと云ふ大きな深い下水があつて、そこへは、よくオイランが身を投げて死んだ。まつくろなどろどろした水が流れてゐて、それはトオキヨオ、シテーの名所の一つだつたが、その、どぶは、あの土のなかで腐つた卵の臭ひがしたよ。さうしてその臭ひこそは、ずつと昔の、エド、シテーと云つた時代からつたはつた、ヨシワラと云ふものの、その氣分の名殘りだつたのだよ。今は、もう、そのドレインは下水に

事ができて、臭ひはしなくなつたけれども。

ほんとに、なんだ、ゲイシャ、アレイの、朝の臭ひは、どこの國にも類のない、デキアダントな臭ひだよ。さうしてやがて、ねまき姿の、ゲーシャがお前、しどけない、ねくたれ髮でヴェランダアの戸を明けて、なぜか、手を洗うんだもの。

○月○日

○○に

西洋は、ものさしのおもてをつかふ國。日本は、ものさしのうらをつかふ國だ。

西洋は、一尺を、何寸何分と割つてつかふ國だが、日本は、さうではない。寸や、分は、少しぐらゐ、どつちへ寄つても、一尺が、一尺につかへさへすれば、いいと思つてゐる。いや、さう思つてゐた國だつた。實はそこに今迄の日本のいいところがあるのだ。君がもし日本へ來やうと思ふのならば、その、ものさしへ、すつかり目が盛られないうちに、來て見なければいけない。

日本人は時間を、ちやんと守らないと云ふのもそれだ。晩の八時に、はじまると云ふ相談會へ、九時頃ゆくと恥をかく。十時に行つてぼつぼつ皆の顔が揃つて、相談は先づ十一時かつはじまつて、では、さういふことに致しましやうと、手をて――日本では相談がまとまると、みんなして手を拍つ。三度づゝ三度を、三度くり返して、都合、二十七度、手を拍つ。さうして御苦勞さまと云ひ合つて、てんでんの家へ歸つてくると雞が鳴く。どうだい君、ものさしに目の盛つてない日本には、タイムの記してある時計もないと見えて、明け方雞の鳴くのを合圖に相談會がおしまいになるぐらゐだ。夜はどうせ寢るのだから、寢るあひだは休みだから、あしたの朝まではどうつかつてもいいと思つてゐる。さうして彼れ等はその朝は、いつもの通りに仕事をはじめる。居ねむりしてもかまはない、ともかくも、また晩になつて寢るまで、仕事をしてゐればいいのである。どうだい、西洋には、かうした生活があるかい？

彼れ等は仕事そのものを樂しんでゐる。どうせ朝から晩までやらなければならない仕事だから、それを樂しもうと云ふのではなさそうだ。樂しいからそれを朝から晩までやつてゐるのらしい。その意味では、日本人はみんな藝術家だ。彼れ等は仕事に惚れてゐる。百姓なぞは、朝は足もとの見えるのを待ちかねて田畠へ出て、晩は手もとの見えなくなるのを悲しんで歸ると云つた風がある。仕事に忠實だと云ふ點では、日本人は、恐らくほかのどの國民にも負けまいとあたしは思ふ。

彼れらは、どんな仕事のなかにも、きつと樂しみを見つけ出す。さうしてそこへ彼れ等の藝術を加へて行く。日本の百姓が、その農園を藝術的に耕やすことは、ほんとうに、君の國のガーデナアが、ガアデンを作るほどに、纖細な美的注意を拂つてゐる、あのヒロシゲの繪で有名になつた東海道を、汽車に乘つて旅をして見ると、兩側の田園は、みんな、可愛らしい庭園だ。そこにはこの國の百姓が仕事を樂しんだ跡か、あざやかに殘つてゐる。君の國の勞働者が、仕事を苦しみだと思つて、早く晝間の八時間が過ぎて、自由の夕暮れの來るのを待つてゐるあの心もちにくらべると、日本人は、まことに幸福な生活をしてゐると云はなければならない。

尤も、君の國のやうに、あゝ分業が發達してしまつては人間は全く機械と同じことになつてしまつて、その仕事を樂しまうにも、樂しめないのはあたりまへだ。たとへば大工にしたところで、孔彫りは、明けても暮れても孔ばかり彫つてゐるし、鋸方は、朝から晩まで鋸ばかり使つてゐる。釘うちは、毎日釘うち。鉋師は、日がな一日鉋をかけてゐなければならない。あれではやりきれない。美的注意も何もあつたものではない。腕を見せるにも見せやうがない。たゞもう、からくり人形のやうに、きまりきつた動き方より外は出來ない。あれでは人間は

可愛さうだ。いや、それは大工ばかりではない。西洋の社會組織といふものは全く融通がつかなくできてゐる。一分は一分、一寸は一寸と、あんまりきちんときめすぎてゐる。

そこへ行くと日本は有り難い。石屋さんがお墓をたてゝる。墓場へ吹鞴を擔いで來て、朝から、鼻唄かなんかで火をおこして、それからしばらく鍛冶屋さんの眞似をして、それがすんで、まづ煙草を一服。日本の石屋さんは、鑿へ、テンパアを入れるのは、仕事のうちに數へてゐる。道具は彼れ等の魂だ。自分の道具のテンパアは自分で入れる。人の入れた燒きではどうも承知ができない。君の國の職人は、土曜日に貰ふ給料が魂ぢやなかつたか？ 道具なんぞはどうでもいい。あたしは遂ひぞアメリカの石屋さんが、道具をしまつて歸つたのを見たことがない。しじゆうそこへらへ抛りだして置いて、先が丸くなれば捨てゝしまう。道具は、たゞの鋼鐵だと心得てゐるらしかつた。さうぢやなかつたか？

午前十時、日本の石屋さんはやつと仕事をはじめる。煙草はいつでも吸つていい。一とつきり仕事をすると十二時だ。ランチをたべて晝休みが一時間。それからまた小道具の先を荒砥でおろすと午後二時。三時にはテイタイムがあつて、二三十分は茶を呑んで話して過ごす。それからはじめて、仕事をするには

とうの氣分になつたと思ふ頃は、もうかれこれ五時。どうだいみんな、そろそろしまはうぢやないかと、自分の道具をかたづけにかかる。それで一日はすんでしまう。どうだい、ものさしに目のない國の職人はちがつたものだらう。いくら賃金が安くつてもかうしてライフを樂しんで、暮してゆける國が、日本を置いて世界のどこにあると思ふ。いや、これは石屋さんばかりではない。日本人の仕事のしぶりは、みんなかうだ。彼れ等は氣まかせに仕事をする。さうでないといい仕事は出來ないと云ふ。

この、ものさしのうらからくる哲學は、日本人の生活の、どの點にも及んでゐる。人間と人間とのあひだに、しつかりしたくぎりをつけないから、人のものは我がもの、我がものは人のものと云つてゐる。だから人のものゝ無斷でつかふぐらゐなことは何でもない。お入用ならばいつでも持つて行つておつかひなさいと、つかはれた方では云ふ。金は天下のまはり持ちといふ、立派な經濟思想を、彼れ等はもつてゐる。

また、家の建て方にしてもさうだ。西洋では、ルームをつくつて一と部屋ごとに鍵をおろすのに、日本では、ほんの申しわけにペーパア、スクリンをはめて、いつでも、誰れでも無斷で明けてかまはない。着るものは、上と下とユニオンになつてゐて、ボタンのかはりにオビをしめる。たべものは、一つの鍋からみんなして、つついてたべることがある。君の方には、それだけは全くないが。

日本人は、なんでも長いものを好むらしい、オンリイ、ワン、ダイナスティに、シヤミセンに、ヌードルス。君、日本ぐらゐうどん屋の多い國は、まづ世界にあるまい。

トオキヨオ、セテイの、なかをながれる、スミダ、リヴアーといふ川は不思議な川だ。セテイのうちには、君の國にあるやうなオフイスビルヂングが立ちはじめ、ギンザ、アヴエニユウと云ふ通りは全部、オクシデンタル、ナイズして、デパアトメント、ストアが出來たり、カフヱが出來たり、また、市街電車はその數が乏しいながらも、どうやら、シテイを、まんべんなくまはつてゐるのに、この川ばかりは、どこに西洋から來た文明の風が吹くかと云はないばかりに、昔のまゝの日本式の船や小舟が行つたり來たりしてゐる。荷舟に乘つて、夫婦もろとも、一つの櫓を押してゐる。夫婦喧嘩をしながらでも、その櫓は一緒に押すだらうと、あたしはいつも思つて笑ふ。こゝにも夫と、女房のへだてはない。夫の舟は女房の舟、女房の舟は夫の舟だ、二人は同じ生活の櫓にすがつて、上げ汐の汐どきに乘つて、舟を川上に漕ぎあげる。夕滿はおりてゐる。水はさか

さに流れてゐる。

この川には、昔のまゝの渡し場がある。春は、チエーリー、プラッサムの咲く堤に、その舟は人を渡す。夏でも秋でもいつでも舟はそこにあつて、向ふの人をこちらへ渡し、こちらの人を向ふへ乘せてつれてゆくが、その舟の發着には、決して時間といふものはない。こちらの岸から人をのせて、川のなかばまで漕いで行つても、誰かそれを呼び返せば、舟はまた、もと來た岸へ歸つてゆく。それは二度でも、三度でもかまはない。向ふの岸の間ぢかまで行かない限りは、一人のために大勢の客を乘せたまんまで歸つてゆく。大勢は、なんとも云はない。これが、あたりまいだと思つてゐる。人の時間は自分の時間だ。自分の時間は人の時間だ。二十分や、三十分、どうなつてもお互ひにいいのでゝる。

君、もし日本へ來るのなら、日本人が、その、ものさしへ、すつかり目を盛つてしまはないうちに、來なければいけない。ちやうど友だちが遊びに來た。また書かう。

現代富豪の暗黒面と安田翁の死

高・須・梅・溪

□黄金萬能の富豪に對する呪咀と反感

近時、生活不安や、階級鬪爭の勢が一段の烈しさを加へつゝある現社會に向つて、突如として、強い衝動を與へたのは、富豪安田善次郎翁の死である。明治初年以來、時の富豪の上に起つた災禍はいろいろあつたけれども、安田翁のやうに、壯士のために國賊のやうに呪はれて、其の鋭い刃に倒されたものは一人もない。山城屋和助の名で知られた野村三千三の死、五代友厚の死、中野梧一の死などは、何れも悲痛の色が深いけれども、それは彼等自ら倒れたので、他から呪はれて倒されたのではなかつた。其處に自ら時代の隔りが見えて居る。同時に意味の複雜さも加はつて居る。

安田翁の死は、稀有の事例とか、いたましい出來事とか云ふ以外に意味深い暗示を含んで居るやうに思はれる。ある新聞紙では、大久保利通や、伊藤博文や、星亨、森有禮らの死にくらべると、安田翁の死の方が遙かに思想的の深みを持つて居ると云ふ意味のことを云つて居たが、考へやうによつては、左様したところがないとは云へない。

私は、安田翁の死に三つの意味を認める。其の一つは、黄金や、權力の何れかの上に極端な自我主義を實現しようとするものゝ最期が大抵悲痛な死に終る場合が多いと思はれることだ。今一つは、黄金の勢力が、どんなに大きくとも、其の所有者の死を救ひ得ないことだ。それと共に、も一つ考へらるゝことは、現代無産階級者の富豪――公共的事業に餘り力を入れない人々――に對する反感と呪咀とが、可なりに强烈になつたことだ。

以上のやうな三つの意味のうちで、私等が一番强い衝動を感ずるのは、無産階級對富豪の暗鬪である。一般民衆の富豪に對する呪咀と反感とは必ずしも、今日に始つたのではない。江戸時代に於ても、既に左様した傾向が明かに現はれて居た。民間に於ける富豪呪咀の感情を代表したのは、大鹽平八郎、生田道滿らであつた。平八郎の檄文のうちには、手ひどく富豪の罪を攻撃して「大阪金持ども、年來諸大名へ貸付候利足の金銀、幷扶持米等莫大に掠め取り、未曾有の有福に暮し、町人の身を以て大名の家老用人格に取用ひられ、又自己の田畑等を夥敷所持、何の貧人乞食をも敢て救はず、其身は膏粱の味とて、結構のものを食ひ、妾宅へ入込み、或は揚屋茶屋へ大名の家來を誘引參り、高價の酒を湯水を飮むも同様にいたし、此難澁の時節に絹服をまとひ、かはらものを妓女と共に迎へ、平常同様に極樂に耽り候は何等の事に候や。」と罵つたのは、空前の大飢饉に悩みつゝある貧民の眼で富豪を見た心持を表現した聲である。生田道滿が「天命を奉じて國賊を誅す」と記した旗を掲げて、富豪を襲撃したのも、大鹽騷動の刺戟を受けた以外に越後柏崎の貧しい人々の對富豪感情を暴露したものである。

けれども當時に於ける富豪階級と貧民階級との鬪爭は、今日のやうに險惡狀態を示して居なかつた。彼等は、大鹽や生田の後に附いて、突發的に暴動したことはあつたが、未だ現代のやうに世智辛くなかつた上に社會主義や自由平等などの思想をも知らなかつたから、ある時期が濟むと、富豪呪咀の感情を自然にゆるめるやうな具合になつて居た。

それに、時の爲政者は、場合によると、容赦なく、富豪の頭上に手ひどい制壓を加へた。松平定信の執政時代には、旗本が

札差から借りた金を返すことが出來ないで元利共に增大するのに苦められて居るのを見ると、突如として古借金棄捐令を發して、天明四年の末までに札差が旗本に貸した金を一切、棄捐せしめた。其の總額は、金百十八萬七千八百八兩餘、銀四匁六分五厘餘に達した。旗本は、それによつて救はれたけれども、札差は何れも大きい打撃を受けた。だが、札差は正面から堂々と定信に反抗することが出來ない狀態にあつた。當時はたとひ巨富を擁したものでも、ある場合には、政治の前に屈伏しなければならなかつたのである。畢竟 政權が主で金權が從であることを意味して居たのだ。故にこそ、貧民階級が富豪階級に對する反感を緩和すべき小さい安全瓣があつた。ところが現代は最早左樣した緩和瓣となるものがない、また定信のやうな一種の富豪征伐を行ふことを許されない。時勢は、日に悪化して、富豪對無産者の闘爭を極度に激甚ならしめようとして居る。安田翁の死は、明白にそれを象徴したものだ。それは呪はれた灰色の死だ、物凄い沈痛な死だ。

□現代史に現はれた富豪の死と秘密

仄かに聞くと、安田翁の死は、一部の富豪に向つて、深い恐怖心を起さしめたさうだ。一二の例外者を除くと、大抵自我主義や、利己主義や、黄金萬能主義の權化とも云ふべき人物の多い富豪階級が、安田翁の死に脅かされたのは、恐らく、當然のことであらう。表面、花やかな、明るい生活をしつゝある彼等の裏面には、何となく、暗い影が漂りて居るやうに思ふのは、私ひとりばかりではあるまい。

私は、日本近世史專攻の立場から、明治大正時代の富豪について、史的考察を加へて見たことがあつた。それから得た結果は、現代富豪の多くが、光明的方面よりも、寧ろ暗黒的方面をより多く有して居ると云ふことだつた。云ひ換へると、富豪の多くが、社會奉仕の精神に乏しくて、自家の利益を擁護し、伸張するために、あらゆる手段を講じて、社會を毒し、國家を毒し、民衆を毒しつゝあることが著しく眼に付くのだ。

彼等及び其の部下のものが、自家の利益を增大するために策した仕事はいろいろある。其の主要現象は、政府の大官と結托して、政商的利益を占斷したり、金權を以て政權を動かしたり、新聞を買收して、自家の辯護、防衛に備へたりするまだ、富豪のために政治が行はれに居るわけでないのに富豪政治が根を張つたのは、それがためだ。富豪のための新聞でないのに、富豪新聞が出來たのはそれがためだ。富豪のための事業でないのに、其の利分が悉く富豪の手に落つるのも、それがためだ。

斯うした恐るべき形勢は、勿論、一朝にして出來たのではない。それには、一應簡單に現代富豪の起生時代を回顧する必要がある。新しい時勢は、常に新しい富豪を生ずる。今日の富豪中には、三井家や、鴻池などのやうに古い時代から續いて居るのもあるけれども、其の多くは、明治維新の改革につれて、新たに擡頭したのである。

蓋し明治維新の革命は、ひとり、政治上に於ける一大變革をもたらしたのみならず、實業上にも、ひとしく、大きい變動を與へた。在來に見られなかつた新しい事業が起ると共に、新しい町人や槍一筋で身を立てた士族などが、實業界に流れ込んだ。そして此の時代に新しく擡頭したのは、主として、薩長土肥に關係ある商人だつた。其の時分、薩州系の實業家として勢力を張つたのは、五代友厚、笠野直吉、岩崎萬造らであつた。長州系の實業家として知られたのは、山城屋和助、藤田傳三郎、中野梧一らであつた。土佐系では、岩崎彌太郎が輝いて居た。政府の有力者と實業家との握手は、既に此の時に始つたのだ。

勿論、彼等の握手は、最初から私情を以て行はれたものだとは、考へられない。同國で同時代に生れ合せたと云ふことや、いろいろの因緣が其處にからみ合つた結果、自ら握手するに至つたものであらう。私は斯う善意に解釋したい。けれど双方の關係が親密の度を加へてくると、其處に一種の情實が生ずるのを防ぎ難い。輿論の監視が未だ嚴重でなかつた時代だから、互ひに利用し合つた形があつた。殊に政府が新しい事業を發達させるため、保護政策を執つて、殆ど無條件に近い形で、關係出身の實業家らに巨額の金を貸與したことは、どの位、それ等の實業家を利したか知れなかつた。

山城屋和助の名で知られた野村三千三が、士族の商法であつたに關らず、一時大きく成功したのは、云ふ迄もなく、政府の保護によつたからであつた。また彼れが辭世の歌を殘して、陸軍省の一室で、自殺したのは、金錢上のことについて、長州系の政治家らと暗い關係があつたことを示したものではなかつたか。

五代友厚の死は、病氣のためだとも、自殺だとも傳へられて居るが、其の死因は、表面實業上の失敗によるとされて居るけれども矢張、私の眼には、山城屋和助のやうに、金錢上のことについて、薩州系の政治家との間に暗い關係があつた爲めではなかつたらうかと推測される。

中野梧一の自殺も、矢張、彼れと長州系の政治家との間に於ける暗い關係を示すものだ。巷說によると、中野は、井上馨と結托して、大阪の米相場で、五圓二十五錢だつた長州米を四圓

二十五錢として、石について一圓の利を收めることにしたと云はれたさうだ。當時長州米は、防長二州から凡そ百萬石出たのだから、彼等の懷ろには、百萬圓の金が這入つたわけになる。勿論、それは單なる噂に過ぎなかつたと私は解釋する。だが、左様した噂が立てられるまでになつたところには、何となく、一種の暗影を伴うて居たであらうことを否定し難いやうに思はれる。

中野が咽喉を突いて死んだのは、五代友厚や、山城屋和助のやうに、矢張、其處に暗い秘密があつた爲めだと推測される。要するに、彼等は、何れも、安田善次郎のやうに呪咀されて死んだわけではなかつたが、其の行詰りの結果は、自ら藩閥政治家との間に潜む秘密の謎、金錢上の謎を暗に葬り去るために死んだのだ。

明治富豪史の第一ページは、斯うして明るいうちにも、暗いところがあつたことを示して居る。五代や、山城屋が榮華を誇つて、時人の羨望を一身に集めた時、既に彼等の身には、悲痛の影が附き纏つて居たのだ。無造作に握られた巨額の黃金には、人の知らない、一種の恐しい秘密が蛇のやうに卷き付いて居たのだ。嗚呼富の罪惡！正しい意味の富や、純な意味の富が少くて、暗い富、不正な、不純な富が多いのは、必ずしも、明治時代に始つたのではないけれども、山城屋や、中野などの死から、私は何となく、沈痛な悲みの感情を惹起される。彼等は、一面から見ると、富の犧牲者だ。今の富豪はこれを何と見るか。

政府の大官と結托した富豪の罪惡

私は今少し私の史的考察について述べて見たい。藩閥政府の巨頭と藩閥に纒り付いた實業家との握手が、一面、暗い秘密を生じたことは、既に述べた通りだ。更らに當時の實業家が、藩閥の政治的勢力の蔭に居て、法外の成功をした點に考へ及ぶと、どれも、これも、獨力で、正直に成功したものは、殆ど一人もないことがわかる。

勿論、私は五代や、山城屋の後繼者とも云ふべき藤田傳三郎や、海上王と云はれた岩崎彌太郎らの人物としての價値を認めないわけではない。彼等の成功は、一面、彼等が實業家として卓越した材能を持つて居た爲めだと云ふことを否定するわけには行かない。だが、若し彼等が藩閥の政治的勢力と結び付かなかつたら、どうであつたか、左様した一種の情實を利用しなかつたら、どうであつたか。

私は斷言する。恐らく、彼等は、其の成功の五分一を、

得なかつたらう。五代友厚は、單に一個の人物として見ても、頭腦が明晰で、計數に明るくて、意力の强いところがあつた。けれども彼れが、澁澤子などよりも早く官吏生活をやめて、不馴れな商賣に手を染めたに關らず奥州の半田銀山などを手に入れ、一ケ月三十萬圓以上の收利を見たのも、一方に於て、薩州の政治的勢力を背後に有して居たからではなかつたか。

山城屋和助は、長閥との關係から、陸軍省で六十四萬圓の金を借りて居たと云ふ位だから、五代も、薩閥の恩澤に浴したところが少くなかつたであらう。それが彼れの成功を助ける上に宜い影響があつたのは云ふ迄もないことだ。大久保利通と彼れとの關係を探つてゆけば、五代の成功が、半ば薩州の政治的勢力を背景とした爲めだつたことがわかる。

藤田傳三郎の成功も、矢張、五代とひとしく、長州の政治的勢力を背景とした爲めに其の半ばを助けられたものだと見て差支えあるまい。勿論、藤田は一個の人物としても、すば拔けた長所を持つて居た。大酒を飮んで、眼中、人がないやうに豪語したところは、尋常商人とちがつて居た。だが、彼れが西南戰爭の際に世人の耳目を聳動させるほどの巨利を得て、藤田組の基礎を固めたのは、畢竟、長州の政治的勢力を利用した爲めだつた。

岩崎彌太郎が、三井家に對峙し得るやうになつたのも、頭、藤田らとひとしく、薩州の政治的勢力に結び付いた爲めだ。彼れは、規模の壯大な點に於て、膽力の大きい點に於て、精力の强い點に於て、既に何人をも壓倒する丈の資格を持つて居たのだから、彼れの成功は、必ずしも、閥閥政治家と結び付かずとも、相應に目ざましかつたであらう。けれどもそれ丈では、恐らく、三井家に對抗する迄には成つて居ない。畢竟、彼れは、後藤象次郎伯や、大隈侯の聲援を得て、薩州政治家とも巧みに氣脈を通じた爲め、すば拔けた大きい成功を得たのだ。

要するに、新興の富豪は、何れも政治的閥閥と結び付いた爲め、めきめきと擡頭し得たのだ。澁澤子、大倉男の如きも、矢張、同樣の系脈を辿つて來たと見て差支えない。澁澤子は井上侯との深い關係によつて、大倉男は伊藤博文公との因緣によつて、其の成功の一部を助けられたのだ。ひとり、安田善次郎翁のみが、比較的に斯うした方面から遠ざかつて居たのは、奇妙なコンツラストだ。

新興富豪以外に於て、素封家として、逸早く、長州系の政治家と握手したのは、三井家である。同家は、明治維新の際、政府の用金を調達した關係から、自然政府の要路に近付いて、井上馨が大藏大輔となつた時代には殊に親密の度が加はつた。明

治十五年に日本銀行が出來る迄は、國庫金全部を三井の手で取扱つた位だ。左樣した勢力と巨金とを背景として、三井は明治初年の實業界に花やかな活動振を示し得たのだ。

以上は、明治時代の序幕に政權と金權とが接觸すべき端緒を演出したことをざつと示したのである。玆に一つ注意しなければならぬのは、此の時代には、政權が主で、金權が從となつて居たことだ。時の富豪は、政治家の前へ出ると、未だ頭が揚らなかつた。剛岸な五代友厚も、大久保利通對にしては恭しく低頭した。不屈の意氣があつた藤田傳三郎も、井上馨の面前では、小さくなつて居た。要するに、富豪の勢力は、未だ政治家を壓倒するやうな時代に到達しなかつたのだ。今日から見ると、何となく、隔世の感があるではないか。

此の時代の暗黒面としては、藤田傳三郎が一時、贋札事件の中心人物だと云ふやうな疑ひを受けて、其の背後に長閥政治家の巨頭が居ると睨まれたことなどがあつた。傳三郎は證據不充分で無罪となつたが、社會の一部には、尚ほ疑惑の眼を以て、傳三郎を見て居たものがあつた。それは、單なる疑ひだつたとしても、左樣した騷ぎを惹起したについては、別な方面に於て、何等か暗い謎のやうなものがあつたのではなかつたか。

贋札事件と前後して、北海道に於ける開拓物拂下げの紛擾事件が起つたが、それには、黑田清隆伯と五代友厚、中野梧一らとの間に暗い默契があつたやうに見られた。黑田伯は十年間に一千萬圓の費用を投じた記念とも云ふべき開拓官有物を僅かに三十萬圓で、而も無利益、三十箇年賦と云ふことにして、五代らに拂下げようとしたのだ。此の事は、非難攻擊の中心となつてやめられたが、勿論、其の背後に疑惑を起させるやうな影があつたと推測されても致方はあるまい。今日も、矢張左樣した事が繰返されて居るではないか。

〔〕恐るべき富の王國と政治の黃金化

金權が政權の前にいくらか讓歩した時代は、さう長くは續かなかつた。いつの間にか、金權が政權を壓迫する時代が來た。其の豫兆を明白に示したのは、三菱會社を創立して岩崎彌太郎氏の飛躍だ。それは彼れが勇敢に時の政府と金力の戰ひを開いて、最初の勝利を得たことだ。一私人の富が、政府の富に讓らなかつたと云ふ事實は、やがて恐るべき富の王國が、政府以外に出來たことを意味するものである。

時は明治十四年の政變以後、其の頃、農商務大輔となつた品川彌二郎子が、共同運輸會社を新たに興して、三菱に挑戰したことがあつた。此の會社は、政府の金力を背後に有したのみな

らず「海坊主退治」の叫びの下に自由黨が外から、三菱攻擊を開始して聲援したのであるから、三菱に取つては、此の上もない强敵だつた。斯うして、內外から挾擊を受けた三菱は、流石に痛手を蒙つて、一時危殆に瀕した。そして其の血戰中に彌太郎氏は、胃癌で倒れた。けれども運輸會社の疲憊は、三菱以上に達して居た爲め、結局、三菱のために其の咽喉を扼せられて敗北して了つた。

三菱が斯うして、政府の金力と戰つて勝つたのは、彌太郎氏の手腕、力量によるところが最も多かつたにちがいないけれども、一つは、政府の保護の下に目ざましい發達を遂げて居た爲めだつた。明治八年には、大久保利通の庇護の下に政府所有の汽船十三隻と郵便蒸汽會社から買上げた船とが三菱の物となると同時に航路を上海まで擴張すると云ふ條件で、每年二十五萬圓の金が政府から三菱へ下付さるゝこととなつた。また西南戰爭の時は、擴張費として、七十萬弗の巨金を政府から受取つた。それ等が、どの位、三菱の發達を助けたか知れない。

ところが、斯うした保護と彌太郎の手腕とによつて、偉大な進步を遂げた三菱は、瞬く間に海上王となつて、政府に取つては、一敵國とも云ふべき巨觀を示すに至つたのだ。金權が政權を壓倒するであらうところの豫兆は、三菱の膨脹の上に逸早く反映されたのだ。

勿論、玆に注意しなければならない一事は岩崎彌太郎が、運輸會社と戰つた最中、岡本健三郎の手を透ほして、四十萬圓の金を政府の內部に撒いて裏面から競爭の中心を打壞はしたと云ふことだ。それは、當時の悲劇ではあるけれども、黃金の魔力を持つて、先づ敵を軟化させると云ふ術策は、往々、誰れも用ゐる常套手段だから、或は斯うしたことがあつたらうと推測される。其處には、金の力が、政治家の心を腐蝕させた事を意味して居る。

爾後、富豪の實力は、ずんずん伸びた。日清戰爭時代に入ると、彼等は、最早政治家の前に出ても、對等の態度を執つた。畢竟、此の戰爭が、彼等の懷ろを非常に肥したのだ。勿論、彼等は、明治二十年、二十一年の事業熱勃興の勢を利用して、既に其の富を倍加して居た。そして時の政治家は、何をするにも先づ彼等の加勢を得たければならぬ狀態となつた。井上馨の自治研究會は、表面、自治制度の研究を目標として、內實新政黨を組織する考へだつたが、澁澤、藤田らが反對して、運動費を多く支出しなかつた爲め、空しく頓挫した。金力の前には井上も屈したのだ。

斯うした具合だから、明治二十六七年頃に時の總理大臣伊藤

公が、三井家に向つて內々、いくらかの借金を申入れた時、同家の專務中上川彦次郎のために素氣なく、拒絶されたやうな有樣に立ち至つた。伊藤の勢力を持つてしても、最早、彼等を動かすことが出來なくなつたのだ。

其の時分から、歴代の內閣は、どうしても、富豪の機嫌を執らねばならなくなつた。明治二十八年、伊藤內閣が、戰後經營のために、大藏大臣として、新たに、松方侯を迎へて、元の藏相渡邊子を遞信大臣に轉ぜしめたのは、矢張、富豪らの好感を得るためだつた。けれども松方は、伊藤に對して從順でなかつた爲め、感情上の衝突から辭職して了ふと、忽ち政府は富豪の好感を失つて、やがて伊藤內閣瓦解の一因となつた。此の事は、金權が政權を壓迫したことを意味して居る。後に首相となつた桂太郎は、畢竟、此の間の呼吸を最も能く諒解して、鰻會などを開いて、時の富豪を操つたのだ。

斯うして、金權が主となつて、政權が從となると、いろいろの大きい弊害が出來る。大正時代の劈頭に於ける憲政擁護運動は、表面から正直に見ると、明かに政治史上の有意義な現象だ。因習と情實とに支配された政界はそれがため、いくらか革新の曙光を見るであらうと誰れも考へた。當時の青年は、大正時代の黎明が來たやうに其の熱い血を沸かした。

ところが、其の裏面を探ると、誰れも驚かさるを得ない暗い影がさして居た。それは、主として、川崎造船所の經濟的窮迫を救ふための一運動に過ぎないからであつた。川崎は神戶の富豪だ。其の背後に薩閥の政治的勢力を荷つて居る怪物だ。それが憲政擁護と何の關係がないやうだが、實は第二次西園寺內閣で立てた三億五千萬圓の海軍擴張案が、桂內閣の時代に入つて、陸軍との均衡上から六百萬圓に減じられたことが、殆ど川崎造船所の致命傷とならうとしたのだ。それは畢竟、製艦の注文が非常に少くなるからだ。

それで、川崎造船所は、此の苦痛を薩閥の巨頭山本伯に訴へると同時に、正に烈しい波をあげつゝあつた憲政擁護運動を巧みに利用しようとしたのだ。犬養毅氏が、坂神地方へ憲政擁護のために出かけた時に、造船所が空前の歡迎をしたのは、何のためだつたか。また巷說によると、造船所から、五萬圓の金を犬養氏の運動費に送つたと云ふことは、何のために傳へられたか。更らに當時、阪神地方の燒討騷ぎをしたものゝ中に造船所の職工が參加して居たと噂されたのは何のためだつたか。要するに、自家の利益のために川崎造船所が、憲政擁護運動の蔭にかくれて必死となつて、桂內閣を揉み潰さうとしたことを略ぼ推測するに足りよう。そして其の結果は、やがて山本內

立を見たではないか。山本伯の起立した事情のうちには、勿論川崎造船所の保護と云ふ一條件が暗に含まれては居なかつたか。結局、憲政擁護運動は、富豪川崎や、松方幸次郎氏らの利益を擁護することになつて了つたではないか。其處に色濃く浮びつゝある暗い富を見せ付けられるやうな心持ちがするのは、私ひとりであるまい。金權が政治を左右して憲政の進歩を阻害しつゝある恐るべき實例を誰れも玆に見るだらう。それは、確かに戰慄に價することだ。

□代議機關も言論機關も富豪の私有物か

富豪の魔手は、ひとり政府に向つて伸びて居るばかりではないのだ。議會にも、政黨の上にも伸びて居るのだ。先づこれを衆議院の斷片に見ると、第一期に當選した實業方面の議員は、東京、大阪、京都を通じて、僅かに八名に過ぎなかつた。そして當時、政戰場裡に討つて出た澁澤榮一、原六郎、平沼專藏、大倉庄三郎、大三輪長兵衛、五代龍作、牛場卓造らは、何れも逞しい金力を荷ひながら、見事に失敗した。此の時代は、未だ富豪の勢力が政治上に於ても社會上に於ても微弱だつたことを示したのだ。

ところが、第六期には、安川繁成が第一位を以て當選した。第七期には大橋新太郎、第八期には岩谷松平が何れも最高點で衆議院に出たのは、最早、金權が非常に政治的にも社會的にも强大になつたことを示した。爾後、實業議員の數は、年毎に增すのみで、今日は、其の過半數が實業に關係を有し都鄙の富豪との聯絡を有するものが少くない。そして政黨の背後には、必ず富豪が潜んで居る有様となつた。

今の有力な政治家と富豪との關係は、切つても切れないものとなつて居る。現内閣の首相原敬氏の背後には、古川家が附いて居る。國民黨總理犬養毅氏の背後には、岩崎家が光つて居ることは、憲政會總裁加藤高明子と同様だと云はれた時代があつた。それから現内閣の遞相野田卯太郎氏の背後には、三井家の金力が光りを放つて居るやうに見える。文相中橋德五郎氏は、それ自身が大阪財界の一巨頭だつた。

一體に原内閣は、黄金光りのする内閣だ。山本農相や、高橋藏相も亦財界の有力者で、彼等自身が富者だ。内田外相、元田鐵相も共に金の方には緣がある。そして與黨たる政友會の幹部には、岡崎邦輔氏を始め、當世の富豪に關係あるものが少くないのだ。だが、それは憲政會とても同様の傾向がある。其の總務の一人、小寺謙吉氏は、三百萬圓を擁する神戸の富豪だ。斯うして、黄金の勢力は、何處にも伸びて居るのだ。

以上のやうな關係の下に富豪が政治を左右すると共に、それを腐敗せしめつゝあることに、憲政擁護運動の裏面を見てもわかるが、其の他、海軍將官の一部を軟化させたシーメンス事件及び日糖事件滿鐵事件なども、黃金の魔力が、政治を毒しつゝある證據を示したものだ。

彼等は、斯うして、自家の利益を擴張するためには、どんな惡手段をも執ることを辭しない。そして自家防衛のために、新聞紙を買收したり、發行したりして居るのだ。今日の新聞中には可なりに富豪の金力を手賴つて居るものがある。若くは、事實上に於て、富豪の持ち物となつて居るのが少くない。

元來、新聞は、正しい輿論の味方で、多數民衆の利益を擁護しなければならぬ職分にあるのだが、事實に、却てそれを裏切つて居る。寧ろ富豪の利益を擁護したり、若くは、彼等の横暴を默認したりする機關となつて了つたのが多い。それは、富豪が黃金の魔手を以て新聞を軟化させ、骨拔き鯖のやうにして了ふからだ。

シーメンス事件に於て、海軍を腐敗させた火元は、明かに三井物産會社であつたのだが、時の新聞紙上に於て、其不都合を詰責したのは、ひとり『東朝』の社說ばかりだつたことは何を意味するか。其の頃『中外商業新報』などは、三井家に少しでも不利なことを揭げなかつたのは、何を意味するか。

川崎造船所と薩閥の關係には、何となく、暗い謎があるとされて居るに關らず、京阪神に於ける新聞が、大抵沈默して、左樣した方面の問題に觸れるのを避けて居るのは、何を意味するか。『大阪每日』の一記者が、曾て醉中、藤田傳三郎氏に非禮の言を放つた一事で直ぐに首を刎ねられたことは、何を意味するか。

それは、富豪の新聞政策の成功を意味するのである。三井には、新聞社の事情に通じた幹部が居て、巧みに新聞記者を操縱して居るのだ。川崎では、副社長（川崎芳太郎）が新聞に興味を有して、「神戸新聞」を自分で經營するのみならず、巧みに新聞記者と交際して、其の歡心を收むることに些の拔け目がない。今日の「神戸新聞」は「神戸又新」を壓倒して了つて、岡山邊まで勢力を伸ばしたやうだ。「福岡日々」「新愛知」などに讓らない有力な地方新聞となつた。畢竟それは川崎造船所の財力を背景として、川崎芳太郎氏が新聞政策に力めた結果である。

「大阪每日」に、長州派の新聞のやうに思はれた時代があつた。現に其の社長であるところの本山彦一氏は、藤田氏の女婿だ。今日は長州派の新聞と云ふ噂さへも聞かないけれども、藤田氏が、其の大株主たることは、誰れも既知の事實だ。世說が

藤田組に對して、流石の「大阪毎日」や「東京日々」が筆を謙んで居るやうだと云ふ理由は、全然、不合理だと云ひ切れないところがあるやうに思はれるが、どうか。

「大阪朝日」「東京朝日」なども、政治上では「大毎」「日々」と同様、獨立の態度を執つて居るが、其の大株主中には、矢張、富豪が加はつて居る。「時事新報」は、中上川氏以來、三井家との關係があり、莊田氏以來、三菱とも關係がある。政治上ではこれ等の新聞は、大體、獨立の態度を示し得ても、實業方面に向つては、少しばかりの除外側を有するやうに見える。結局、洗ひ立てれば、どの新聞も、富豪と無關係なものは一つもなからう。地方新聞の大半も亦、大小富豪の支配下にあるものと見て差支えがないやうだ。斯うして、大新聞も、小新聞も、富豪のために多少の束縛を受けたり、或は全然、其の手に左右せらるゝ風潮が甚しくなつてゆくことは、避け難い大勢となつて了つて居る。

仄聞するところによると、三井家では、部下の新聞記者で、同家に出入するものに向つて、毎月、多額の手當を支給して居るさうだ。それは、恐らく、三井家ばかりでなく、他にも、同様の例があらうと思はれる。大新聞は兎も角、中以下の新聞は、其の生存上、どうしても、富豪の鼻息を覗ふやうなことにならざるを得ないとすれば、其處に富豪と新聞との間に暗い秘密が造られないで濟むだらうか。要するに今日の新聞社會にも、恐しい富豪の魔手が伸びて正しい輿論を抑へようとするのだ。

富を誇る生活と權力を追ふ結婚政略

富豪の暗黒面は、單に以上に留まらない。彼等は、人々が住宅難に苦みつゝある今日も、廣大な地面を占領して居ながら、それを民衆の便宜のために開放しようとしない。啻にそれのみならず、巧みに脱税して居るのも少くないと仄聞して居る。此の點に於て、著しく、目に着くのは、三菱の岩崎久彌男の住宅だ。彼れの本郷切通や、富士前町に於ける家は丸で城廓のやうだ。そして富士前町に於ける彼れの所有山林と畑とは廣大なもので、宅地の必要な今日、其の儘に放任してある。また深川の別邸は、空家同樣になつて居るに關らず、一向、これを宅地のために提供しようとしない。

だが、それは、ひとり岩崎久彌男に限られたことではない。現代の富豪や、富める貴族のうちには、左樣した公共心の缺乏したものが多いのだ。今日、一萬坪以上の庭園を所有して、傲然、住宅難に惱みつゝある東京市民を眼下に見て居るものが、東京市中だけでも可なりに多い。藤田平太郎、岩崎小彌太、三

井八郎右衛門、渡邊治右衛門氏らは、何れも一萬坪の庭園所有者だ。舊大名で、現時富裕を極めて居る德川賴倫、細川護立、黑田長成、前田利同、蜂須賀正昭らの人々も亦廣大な庭園の所有者だ。

一般市民が住宅難の絶頂に起ちつゝある今日、彼等の多くは冷かにそれを傍觀して居るのは、どう云ふわけかと云つて、非難の聲が大分聞えて居る。鍋島直大侯や、小笠原長幹伯のやうにせめて其の一部丈でも開放したら、どんなに市民のためになるか知れない。また無用にちかい山林、田畑を市中に所有しつゝある人々も、進んでそれを開放すべきであるが、矢張、自省しないものが多い。そして平氣に脱税しつゝあるものが少くない。

富豪らの專恣は、以上に留まらない。其の金力を以て、天下の珍寶を私し、美人を私し、名爵に有付くと云ふことも亦一般の反感を挑發する點である。殊に結婚政略によつて、巧みに權勢と結び付いて、公私の利を得ようと力めつゝあることは、著しい現象である。富豪らが、自己の娘を學者、政治家に嫁せしめた例は、いくらもある。岩崎家の加藤高明子木内重四郎氏に於ける、澁澤家の穂積陳重、坂谷芳郎男に於けるが如きは最も著名のことである。外相内田康哉子の土倉庄三郎に於ける、故穂積八束氏の淺野總一郎に於ける關係も亦人の知るところだ。

富豪の側では、其の家格を宜くするために大抵、貴族の令孃を嫁に貰ふ習慣が多い。古川虎之助氏夫人は、西郷從道侯の女である、大倉喜七郎氏夫人は、溝口伯の娘である、安田善之助氏夫人は、酒井忠篤伯の從妹である。三井高保氏夫人は、德大寺侯の息女である。それ等ゝ一般に著名なことである。唯茲に今日も、富豪が金權を以て貴族の心を動かした不快な一例として記憶されて居るのは九州の炭坑主伊藤傳右衛門が二萬圓の結納を入れて柳原伯の美しい令妹で「火の國の女王」の名がある白蓮女史を迎へたことだ。それは一種の反感を以て見られて居るやうだ。また某富豪が百萬圓の資産を讓るべき養子を捜がして、一時、ある公爵の弟を迎へようとして見事に失敗したことは金權が必ずしも萬能ではなくて、巨額の黄金のみを以て、何人をも自由に左右し得なかつたことを示した。

富豪の女を娶つた男子は、可なりに家庭の不快に惱まされて居るのが多いやうだ。それは富豪の家庭のうちに往々渦卷いて居る淫靡な放恣を極めた空氣が、自然其の子女にも傳はつて、浮華な傾向を帶びるやうになるからだ。穂積八束氏は、品行の方正な學者だつたが、其の夫人は、淺野總一郎氏の娘で、我儘に育つた爲め、俳優との間に醜聞が往々あつたと噂されて居

た。高島小金治氏は、大倉喜八郎男の娘を貰つたが、其の結婚條件は、平生好むところの觀劇を自由にさせ、また彼の女の望むところは、何事も承諾しなければならぬと云ふことだつたと傳へられる。彼の女も、淺野の娘同樣、放恣な生活をして居た爲め、矢張、梨園に醜聲を流したとか云はれた。私行上に於ける富豪の無節制は、やがて其の子女の性行の上に暗い影を反映しなければやまないものと見える。今の富豪は之を何と考へるか。要するに富豪の家庭は一般に美しくないやうだ。

〔　〕灰色の死の前に於ける富の悲哀と寂寞

富豪には、以上のやうな欠點が多いに關らず、彼等は決して心から自家を反省しようとはしない。澁澤子の如く、積極的に公共のために盡くさうとはしない。偶ま公共のために寄附したことがあると、其の裏面には、自家廣告や爵位を希望する野心を抱いて居ると云ふ有樣だ。無私と誠實とを以て、其の財產の大半を公共のために投げ出したものは、未だ曾て見ない。

富を積むことは、わるくないが、同時にまた有意義に富を散ずることをも心がけねばならぬ。安田善次郎翁の如きは、殆ど積む一方に精力を集中して了つて、有意義にそれを散ずることを知らなかつた。一概に金錢に愛着し過ぎた。黃金の價値を絕對的の威力、永遠不死の生命の如く、買ひ被り過ぎた。一步んで富の寂寞、黃金の悲哀と云ふ境地にまで味到することが出來なかつた。

すべての富豪は、安田翁の死によつて始めて富の寂寞を知つたであらう。黃金の悲哀を悟つたであらう。安田翁が、あのやうに富に執着しなかつたら、そしてそれを有意義に散じたら、百歲までの天壽を保ち得たかも知れない。彼れはそれを知らず、また進んで實行しなかつた爲め、長い間、無產階級の一部からは烈しく呪咀された。强い反感を以て睨まれて居た。それがため彼れは、意外の死に襲はれた。死の前に於ける富、これが安田翁に取つて何の値があるか、墳墓の下から見た黃金、それが安田翁に取つて、何の慰藉となるか。

暗殺は、どんな場合にも罪惡だ。私は安田翁を暗殺した一靑年の行爲を是認するものではない。けれども烈しく、富豪を呪ふものが多くなれば、どんな兇暴な壯漢が出て又同じやうな暗殺を繰返へさないとも限らない。私は、富豪の多くに共通するところの暗黑面を見る每に、先づ彼等が、其の生前に於て、富の寂寞、富の悲哀に味到して、貧しき人々のため、社會公共のため、自動的、積極的に其の富の一半を快く提供せんことを期待したい。だがそれは、私ひとりの空望に終らねばならぬだらうか。

文學市井に墮つ

田中貢太郎

○匏瓜佛

九月十九日に糸瓜忌の催しあるは、その道の人の知るところなり。その糸瓜忌の前日、先輩森匏瓜君の生前の供養を營むこととなれり。余が匏瓜君を知りてより五六年、醉へば必ず大正十年には死にますると云ふ。期日を問へば、九月十九日なりと云ふ。十九日は今も云へる糸瓜忌なり。讀めたり、正岡子規の門下たりし君は、恩師の命日を己の命日と定めたるなり。

七月のはじめなりし、匏瓜君を先達とする俳句會の一行十餘人、多摩川に鮎狩を催したるが、その席上にて、いよいよ匏瓜君の生前の葬式を行ふことになり、余の名も發起者の中に加へらるることとなれり。場所は飯田河岸の柳屋と云ふ待合、期日は十九日を一日繰りあげて十八日の午前十時よりと云ふにぞ、驟雨模様の空を氣づかひながら、八時過ぎ茗荷谷の草庵を出づ。新小川町のほとりに道寄する所ありければ、行き着きたるは十一時に近かりき。生佛の匏瓜君をはじめ、十餘人の同人既に集りをれる中に、川柳久良岐翁も交れり、その久良岐翁の狂歌を書きたる半折二枚を、床に貼りたるが見ゆ。室は神田川に臨み、欄干の前には濁りたる水光り、折から降り出でたる雨、石垣に生へたる藜の葉を洗ひて侘し。藜の傍には無花果の木もありて、澤山の實を着けたり。薄黄ろなるその實の紫に染まるも數日を出でざるべし。

追悼句は後廻しにして、席題となりをれる秋季雜詠の三句を作らんとして、廊下を背にしたる柱に凭れ、心を縹渺の際に馳す。匏瓜君は、その待合に托しありし手文庫を持ち來りて子規居士の記念品を取り出せり。居士の寫眞、居士揮毫の短冊、扇面、手紙、葉書など、麗はしき師弟間の情誼を語る品品を見て、垂涎三尺なりしは、余のみにはあらざるべし。

短冊は匏瓜君より氷詰の鯛を贈りたる返禮の句にて、上にはしがきして、『氷詰乃鯛一枚御贈被下難有候　六月二十一日

書き、その下に『三尺の鯛生きてあり夏氷　規』とし、扇面には、『藻の花や絶えず泡ふく何の魚』『水草の花にふれたる水棹かな』の二句を書き、それには『病子規』と署名したり。朱骨の小さき扇にして、匏瓜君の言によれば、子規居士の御揮毫せる扇面は、後にも前にも僅に二本にて、竹冷子の手元にあるものと、この扇なりと云ふ。かかる珍品の匏瓜君の手にあるは、子規居士の母堂が『書いておやりなさいよ、書いておやりなさいよ』と强ひて口添へしてくれたる賜なりと云へり。

二三通の書翰は、封筒ばかりありて、中味は失せたり。葉書の一枚には、『岩代國福島町通十丁目十番地金澤忠衛門方金森利兵衛殿』としたるものあり。その葉書は、年始狀を用ひたる物にて、『鶏いはく　めでたさよ。雀いはく　千代八千代。國限り無く　窮まらず。君萬歲に　星の數。お家繁昌　福多かれ。何がさてさて　生きむ吾。明治三十二年一月　東京下谷區上根岸町八十二番地　病室に籠りて　正岡常規祝賀』と印刷したる空間へ『先日は御光來失禮致候其後も兎角臥勝に候ひしが本日ややう几に向ふやうに相成候』と書きたり。匏瓜君の說明によれば、この葉書は、一日八日の子規社の新年宴に出席せし挨拶なりと云ふ。その時まで匏瓜君は、氷花の俳號を用ひしが氷花では面白くなし、なんとか俳號を更めてくだされと賴みしに、居士は俺よりも鳴雪翁が好からうと云ふにぞ、一座なりし鳴雪翁に賴みしに、鳴雪翁、糸瓜の如く長やかなる匏瓜君の顏を見て、論語にもありますとて、匏瓜の二字を書いてくれたりと云ふ。

匏瓜君は奥州石之巻の生れ、家は金物屋と云へば、彼の吉次某が血を引けるやも知るべからず。親子して巨萬の富を酒にかへたる奇人なり。年齡は何時聞きても、二十八ですよと云へど、戶籍の表は五十を過ぎたるなるべし。余は『本當に死ぬなら、子規の扇面は、田中にやつてくれと、遺言狀に書いて置いてくださいよ』と云ひながら追悼の句を書きたり。

俳友にして會葬せざる者は、手紙や香奠を送り來れり。渡邊水巴子の香奠の表包には、『匏瓜佛』と書きたり。その待合の娘の家よりは、稻荷ずしにお供物と書きて送り來れり。酒出でて三味線鳴れば、匏瓜佛は廊下に出でて、都々一踊と云ふのを踊れり。その背はひよろ長かりし。

○醫師の辯明書

九月の六日頃なりと覺ゆ。築地河にて七八歲になる男の子の溺死したる際、通りかかりし人人の、兎角してその子供を引き上げ、附近なる某醫師の玄關へ擔ぎ込みしに、十五分經過する

も醫師出で來たらず、男の子は他の醫院に連れ行かれしが、それがために時をくれ、遂に死亡せしと云へること、七日の新聞に出でたり。而して、その新聞の多くは、醫師の不心切なる行爲を攻撃せざるはなし。それに對し右の醫師より、辯明書を子供の家に送り、その大略を朝日新聞に掲げたるを見しに、右の醫師は、十數年來の不眠症と神經衰弱とにより、八月以來、毎日一二時間ばかり午睡する習慣あり。その日も四時過より午睡せしに、玄關のあたり騷騷しくなり、同時に看護婦來りて、『只今、前の川で溺れた子供を、大勢で連れてまゐりました、』と云ふにぞ、『それは大變だ、今直ぐ起きて行くから、先におり、介抱してゐてくれ、』とて、先づ看護婦をやり、重き頭をかかへて起きあがり、寢衣を診察衣に着替へ、二階の奥なる居室を出でて、診察室に下らんとして、居室を五六歩出でし時、階下の様子急にかはりて、人聲も靜になりたれば、はてなと不審する所へ、看護婦、裏階段よりあがり來り、大勢の人人、先生を待ち遠しがり、罵りながら他の醫者に行けりと云ひしが、その間、五分乃至七分にて、十五分も手間取りたるにあらずと辯明せり。又その辯明書の中には、看護婦の報告なりとて、溺死者は脈搏、呼吸共に絶へ、眼は半ば開き、眼球上轉し、瞳孔散大、指を眼球に觸るるも、反應なく、指を口中に入れて刺戟し、吐水を促せしが、ただ口中にありし水を少し出したるばかりにて、四肢皮膚弛緩して、彈力性を失ひゐたりと云ひ、また築地警察署長は、當方へ運び來りし時は、最早や蘇生せぬ筋力なりと檢視が認めたりと云へりなど云ひて、最早子供を死亡せし者となしたり。或は事實なるべし。事實なると共に、時間と云ひ溺死者の狀態と云ひ、辯明としては委曲を盡したるものなるべし。然れども人の子の親として缺けたるところなきか。もし、溺れたる男の子が、自己の子供とすれば如何、看護婦來りて、『大變です、坊ちやんが川へ落ちました』と傳へしとすれば如何。『それは大變だ。今直ぐ起きて行くから、先におりて介抱してゐて呉れ』と、先づ看護婦をやり、而して重き頭を抱へて起き、而して寢衣を診察衣に着替へ、その間、五分乃至七分の時間を經過して、而して悠悠と二階を下り、而して診察室に入りて、愛子の手當をなすことが出來るや否や。理屈は拔きにすべし。醫師君足下、足下は足下の愛子の場合に、かかる冷靜たる態度に出づることが出來るや否や。

五六年前のことなり。余が隣家の一室を借りて自炊せる少年ありき。本人の性行も家庭の事情も此所には云はざるべし。感ずる所やありけん。上野附近にて鐵道自殺せんとして出でしが、心臆してなし得ず。石炭殼に石灰を交へたる物を

が、飲みたる後にて、夢中になりて車に乘り、宿に歸り來れり。それは午後一二時のことなり。山妻、宿の老人に代り、平生かかりをれる醫者に走り行きしに、その醫師は診察室にありしに係はらず、病氣と稱して來らず、その時醫師の書生、山妻に敎へて、本當のことを云ひては、來る醫者なし、普通の急病と云ひて行かるべしと云ふ。山妻他の醫師の許に至りて、彼の書生の言の如くせしに、果して來りしが、自殺者と知りて怒り、『こんなことで呼びに來て貰つては困る』とて、そこそこに歸り去れり。由來日本の醫師は、面倒にして金にならざる者を嫌ふの風あり。彼と此とを一律にせんとするは、或は不當なるべけれど、人道に缺げ、人の子の親としての慈愛に缺げたるは一なりと思ふ。

○物の正味

暴風雨の晴れたる日、料理通の友人に誘はれて、淺草馬道の鳥屋に行く。老鷄の肉やや硬くして、汁、重どろみ、酒徒の口には合ばざる味なり。然れども友人は、その材料なる肉は、一定の時間中に飼養せる鷄を用ひ、潰す前の五日間は、餅米を餌にし、その上、汁も濁らず、鳥としては日本第一の味なりと云ふ。なる程、飼養時間の一定せる肉を用ひて、味覺を一定せることは、市中さらにあらざるべし。汁もまたその如く、一定の材料を用ひたれば、出鱈目の汁とは同一視しがたからんも、出來人間の味覺は、その面の異るが如く、それぞれ異るものにして、上戸には上戸の味覺あり、下戸には下戸の味覺あり、同一人にしても、その時の精神狀態と健康狀態の如何によつて、味を一にし二にす。日本人と外國人と云ふやうなそれ程大なる範圍にあらざるも、關西人と關東人の嗜好物に見ても、大なる相違あるは人の知るところなり。魚肉から云ひても、關西人は魚のすき燒を好めど、關東人はそんな生臭き物は思ふてみても嫌なりと云ふ。出雲の人は、うるつぷい海苔に趣味を持ちて、酒にも味噌汁にも、その海苔なければ、物足らざる心地すと云へど、余等が食ひては、ただ鹽辛き無趣味の海草なり。余が郷里にては、松魚の肉をあぶりて、それを刺身の如く切りたるタタキと云ふ物を酒徒最上の美味とすれど、他國の者は氣味惡がりて口にせず。また吾が郷里には、楊梅ありて、木の實にては天下この右に出づる物なしと思へるも、東京あたりの者に食はしむるに、あんなすつぱき物よりも苺の方が數等旨しと云ふ。ウルカ、酒盜、鹽から、煉製、うに、なまこ、このわた、皆それぞれ好惡あり。納豆にしても然り。皆父祖傳來の習慣、風土の相違ありて、一概に律し難し。彼の鳥屋の場合に於ても、余と

しては、もすこし若き鶏の肉と、さらさらしたる汁を欲したるが、これ友人の眼には、料理のことは共に談ずるに足らざる木强漢と映りしなるべし。木曾義仲が京師に入りし時、無鹽の椎茸を猫間中納言に强ひて、有難迷惑をさせしは人の知るところなるが、木曾の山中に人となりし義仲としては、無鹽の椎茸を天下第一の美味と思ひしためなるべし。故郷の田舎にて、芋や大根ばかりかぢりゐたる者が、急に都會人となりて、食物のことを新聞や雜誌にて讀み、道樂者の友人より聞きかじりて、一ぱし料理通顔するが現下の通弊なると共に、余輩もその御たぶんに漏れざる者なるが、思ふに世の料理通なる者は、その料理の正味を玩味せずして、その料理店の歴史的幻影を玩味するものなり。これに就いて莊子は豪きことを云ひをれり。民は芻豢を食ひ、麋鹿は薦を食ひ、蝍蛆は帶を甘んじ、鴟鴉は鼠を嗜む、四者孰か正味を知らんと。食道樂の徒の頂門の一針とすべき言にあらずや。

○神田祭

中秋名月の日は、神田の書店に行きて、其所の店友をそそのかし、須田町あたりにて月見せんとて行く。數日間降り續きし雨、朝より晴れたれど、道のぬかるみ甚し。そのぬかるみの中を、神田祭の御輿を擔ぎたる者ねり歩く。多くは濃藍の地に白き縦したる縮緬の浴衣を着たり。同伴せる書店の主人、『あれは、皆、縮緬ですぜ、揃ひをこしらへるに、十五萬圓かかつたと云ふんです。神田兒は即ち江戸兒ですからね、』と云ふ。余は『生命より大事に浴衣を着てゐる者もありますね、』と悪まれ口を利く。その神田祭にて思ひ出したるは、余の知れる古本屋の一老人なり。名も場所も憚りあれば記さず。その老人の若き時、神田祭に矢張り揃ひの浴衣をこしらへんとせしが、金の都合つかず、女房を吉原に賣りて、浴衣をこしらへ、ツキダシの晩は、友人を誘ひて登樓せしと云へり。その好漢惜むらくば、右の鼻覓潰れて無し。

○大江天也翁

九月十九日午後二時、芝の增上寺に行きて、大江天也翁の葬儀に列す。翁は土佐國幡多郡柏島の人、晩年を賤民の解放に委ねたるが、その略歴を箇條書にすれば左の如し。

『慶應元年宇和島に遊學し英式兵術を學び、之を土佐藩に傳ふ。

慶應三年、鷲尾侍從田中光顯香川敬三等と謀り、高野山に勤王の義擧を企つ。

慶應四年鷲尾侍従の密使として紀州藩に赴き、勤王の正義を說き藩論を傾く。

慶應四年鷲尾侍従の命により京師に使し、勤王義擧の勅命を奉受錦旗節刀を賜はる、之を高野山に捧持し歸る。高野山の駐屯軍其氣勢大に振ふ。

明治元年土佐藩に歸り、大に郡縣制を論ず。

明治二年兵庫縣出仕を命ぜられ、伊藤博文、陸奥宗光、中島信行、五代才助等と廢藩置縣を議す。

明治三年八月神戸宇治川の賤民住居を視察し、其の狀況に同情し、之れが救濟の必要を感じ、十月東京に到り大隈重信に建言す。大隈は大木喬任へ謀るの捷路なるを告げ紹介す。依て大木に建議し、翌年一月、穢多、非人の賤稱廢止を建白す。

明治四年民部省地理寮權大佑准席出任勸業係を命ぜらる。

明治四年七月庶務佑を命ぜられ、有栖川宮に扈從して福岡藩に使し、廢藩置縣を實行す。

明治四年八月賤稱廢止の令出づ。之れ四民平等の聖旨に出る所にして、大江の建白に基く。

明治四年九月工務省七等出仕鐵道掛を命ぜられ鐵道法規を作る。

明治四年十一月神奈川縣參事に任ぜられ、日本警察制度を制定す。

明治五年神奈川縣令陸奥宗光と謀り、地券税法を開始す。

明治五年橫濱に勝讀會を起し官民の和親を計る。之れ今日の倶樂部の濫觴なり。

同年英和字彙の完成を援助す。

同年七月神奈川縣權令に任じ、ペリユー國汽船マリアルース號の事を審判し、支那の奴隷解放をなす。

同年十月藝娼妓を廢止するの議を建て司法省より布達す。

明治六年六月大藏省に最初の地方官會議開かる。神奈川縣權令として出席し建策する所あり。

明治七年一月大藏省五等出任に轉じ、二月陸羽地方の民情視察を命ぜらる。

同年四月記錄權頭を兼任す。

同年五月第一照査課纂編課長雜務課長に歷任す。

條約改正調査の爲めに理事官となり、大藏省關係事項を調査す。

明治八年二月故廣澤參議殺害事件取調の參座被仰付。

明治十年八月陸奥宗光、林有造と共に國事犯に座し、禁獄十年の刑に處せらる。

明治十七年刑期一等を減ぜられ出獄す。

明治十九年北海道に遊び小樽港埋築を發し、翌二十年より着手す。

明治二十三年衆議院議員第一回總選擧に際し、岩手縣第五區より候補者に立ち當選し、第一回帝國議會に豫算委員長に選擧せらる。

明治二十五年東京株式取引所頭取となり、又東京商業會議所副會頭となる。

明治二十六年取引所法改正に盡力す。

明治二十七年帝國商業銀行を發起す。資本金の五百萬圓なりしは常時に於て異數とす。

明治二十九年日本興業銀行を發起設立す、後ち帝國商業銀行に併合す。

同年製鐵所の設立を計畫す。

明治三十二年二月渡韓京釜鐵道の線路を踏査し敷設案を立つ。

明治三十三年京釜鐵道速成建議案を帝國議會に提出し、兩院滿場一致を以て通過す。

京釜鐵道株主は日韓人のみと限定す。之れ將來日韓合併の動機をなせるなり。

同年三月竹內綱、大三輪長兵衞と渡韓す。

明治三十四年京釜鐵道工事を起す。

明治三十六年十一月北淸に遊び日支親善を務む、

明治三十七年十一月九日京釜鐵道完通す。

明治三十六年、明治三十七年、明治三十八年の交、八重山製糖株式會社其他數多の株會社の發起設立す。

大韓光武五年七月二十二日宮內府水理課監督に勅命。

大韓光武六年四月十一日水輪院監督に勅任。

同年八月七日水輪院監督兼提工部臨時博覽會事務監査員に任ぜらる。

同年九月七日水輪院副總裁に勅任。

大韓光武七年五月一日最高顧問に勅任、年俸日本貨六千元を給す、期間三ケ年。

明治四十年支那雲南干崖刀安仁の最高顧問となる。

大正二年帝國公道會を創立し、賤民救濟の素志を完成せんとす。

大正三年二月佛門に入り、大本山總持寺貫主石川素童禪師(勅特賜大圓玄致禪師)を導師として得道し、天也と改名す。

大正三年帝國公道會成立、板垣退助伯會長となり、大木遠吉伯、本田親濟男副會長たり。而して講師として各地方を巡回視察し、社交上融和及改善の必要を說く。その後公道會は

吉備會長となり、翁は副會長たりしが、大正九年十一月に至りて病にかかり遂に九月十二日に至りて示寂す。』

翁は弘化四年九月二十一日の生れなれば、享年七十五歳なり。翁が隆隆の盛名を馳せたるは、神奈川縣權令として、マリアルーズ號の支那人奴隷を解放の際にありとす。神奈川縣令大江卓の名は、今や横濱なる大江橋に殘るに至れり。

その大江翁に就きて思ひ出さるるは、大正三年、翁が佛門に入らんとせる際、板垣伯を訪ねしが、翁は六十七八歳、板垣伯は七十四五歳、半佛の兩老翁、その夜なにをか語りし。翌日、板垣伯、門下の某氏に語りて曰く、『大江は感心だ、もう女もいらないやうになつて、佛門に這入ると云つたよ、』と。兩翁の偉大なりし半面の理由、其所にあるなるべし。

○假名垣魯文の講師

大江翁の話にて思ひ出したることあり。そは假名垣魯文のことなり。魯文　幕末より明治の初年にかけて、有名なる小說家なりしは人の知るところなるが、翁の神奈川縣權令となるや、教育の普及を計るには、下狀に通じたる者を用ゐざるべからずとて、魯文を雇となし、縣下を巡回せしむ。昨日の遊蕩文學者、今日は羽織袴の巡回講師となりて各村を廻ることになり、到る所の村落にて、假名垣魯文の名刺を出せしに、戶長區長類は眉をひそめたり。一日、巡回の途次、某旅館に投じて湯殿に入りしに、二三人の者既に浴槽中にありしが、その中の一人、他の一人に向ひて、『今日のお役人は、お前知つてるならう、あれが戲作で有名な、魯文と云ふ男だよ、あれの云ふ通り教育した日には、大事の悴を放蕩者にしてしまふよ』と云ひさして、魯文と顏を見合せ、驚きてそこそこに逃げ去れり。魯文もさすがにきまり惡く、間もなく雇を辭したりと云ふ。今日文壇の某某氏の國語調査員となりしと軌を一にせずや。そは明治六年の冬にして、その當時魯文の書きたる物に、毒婦高橋お傳の譚ありて、お傳研究には唯一の物なり。

○福本日南翁逝く

福本日南翁寂莫として逝く。翁が國士的文學者として代議士となるや、後輩のその門に遊ぶもの多く、英雄會などと云ふ門下の會なども出來たるやうなりしが、晩年甚だ寂莫、後進としては余が友石川諒一君位が門下たる情誼を盡したるやの觀あり。翁はまた石川君を愛して、臨終の際にも、『石川がゐない、石川がゐない、』と云ひたるより、門下後輩にして、臨終の際、特に呼ばれたるは石川君一人なりき。然れども先輩と後輩の離

合は、先輩の人格の如何にもよることとなれば、離れたる者必ず惡しと云ふべからず。余は石川君のみをあげて、他子を貶せんとする者にあらざるが、これに就いては彼の假名垣魯文が、晩年に記錄せし『耄錄』と云へる備忘錄の中に、死亡の一ケ月以前筆入せし偶感と題したる物あり。

『親戚同胞朋友も賴むべからず、一身の外味方なし、夫さへ故人の證歌に「幾たびか思ひ定めてかはるらん賴むまじきは心なりけり」甲者は昔し惠を掛けし緣あり、乙者は兄弟にひとしき交りありて庇護を加へしよしみあり、斯かる時には逸散に馳せ來るべしなど心賴みは、多く畫餅に屬するなり、人情日に薄く、金があるところには人心あつまり、錢なき家には來者おのづから疎し、澆季半開の人情皆かくの如し、密かに此の事を記して世態の眞相を示す。』

○文學市井に墮つ

出所は忘れたるが、『近學市井に墮ち、文、縉紳に振はず』と云へる文句を讀みたることあり。この頃、文壇に小說家協會なるもの出來て、一部の物議を招きをれども、協會の性質としては、すこしも非難すべきことにあらず。然れども、文學市井に墮ち、苦苦しきこと一にして足らず。その中にて最も苦苦しきは、文士の花をひくことこれなり。それも暇潰しの遊戯として、單に花をひくだけならば、別に云ふこともなけれど、物を賭けて輸贏を爭ふに至りては、純然たる賭博なり。如何に辯解の辭を創作するも、賭博本來の目的は、有ゆる手段と奸策を弄して、相手の物品を掠奪せんとするもの、これ强奪主義を添するなり。夫子自ら口にする人格、人道、愛、社會奉仕の言葉とは、大なる逕庭あるにあらずや。思想の空虛を掩はんとする襖代用の遊戯として、笑つて捨てて置くべきことにあらず。

○案山子の解釋

この頃、友人と二人にて、案山子の句を作りしが、その案山子にて思ひ出したることあり。明治三十六年、余が最初の上京の時、神田鎌倉河岸なる書店にありて、一雜誌の編輯に從事せしに、店主と同鄕の一老人、店員ともつかず編輯員ともつかず店の人となりて、雜務を受持ちたり。甚だ酒を好みて、夕方、錢湯に行くふりして、コップ酒を飲み來れり。その老人、ある時、和歌の話をはじめて、古來案山子の解釋違へり、かゞしは嗅すにて、田畑に硫黃などの臭氣ある藥石を置きて、田畑を荒らさんとする鳥獸の害を防ぐものにして、人の形をせる藁人形の類は、僧都と云ふべし、かがしにはあらずと云へり。面白き

解釋と思ひたれば、今に記憶せるが、木せる(煙管)と飲み(鑿)の名の相違せりと云ふ笑話のやうにも思はるることあり。

○小說と大說

鑿と煙管の名稱の相違せる笑話より聯想するは不敬なれど、小說と云ふ名稱も考へて見ればちとへんなものなり。老人が博士めかすまでもなく、支那文學史を覗きたる者は、何人も知るところなるが、そもそも小說と云ふ語の記錄の上にあらはれたるは、漢書藝文志なりとす。尤も余は孫引の智識なれば、誠は本物の漢書藝文志を見たることなけれど、其所は見てゐることにして置くべし。その漢書藝文誌に『小說家者流蓋出於稗官。街談巷語、道聽塗說者之所造也』とあり。稗官については、『細米爲稗、街談巷說、其細碎之言也、王者欲知閭巷風俗。故立稗官。使稱說之。』と注せり。これによれば、逸話、奇談、怪談、人の噂、青鉛筆、赤鉛筆等、新聞の社會欄の記事をはじめ、一口噺などの街談巷語が、本當の小說にして、今の小說は、その名稱を盗みたるものなり。この小說の名稱に就いては隨筆などの名稱と共に、文壇の士の間に問題となりたることもあり。過日も菊池寬氏の口からも聞きたることとなるがそ、の名稱を改めるに就いては、多士濟々たる文壇、老人がさし出口を利かなくとも、何人か適當なる人あるべし。先づそれまでは、街巷說的の小話、一身上、一家庭上の構圖の小さき創作は、これを小說と云ひ、構造の雄大なる、波瀾重疊せる物語の類は、大說とでもして大切にしたきものなり。隨つて老人などの書く隨筆の多くは、小說の第一位に置かるべき筈なり。

○草鞋小說

小說のことを云ひ出したからには、もうすこし小說について饒舌を弄するも面白かるべし。余が郷里は土佐なるが、古來俳句の盛なる所にして、花料——一句一二錢——を取りて懸賞を出す俳句會所在に多し。目下は兩日刊新聞にて、一等百圓位の懸賞句を年中のべつに募集しをれるが、その以前は、しのまきとて、糸にて紡ぐ綿を百斤二百斤——一斤二十五錢位——の懸賞をかけ、應募者も、米を五俵十俵と花料に投じて應募せり。然るに名聞の徒は、慾得以外、その賞に入らんとして、窃にその點者なる宗匠の家に至り、不言不語の間に了解を得、謝禮を出して、自作の添削を乞ひ、若しくば宗匠の句を乞ひて、それを投稿す。點者なる宗匠も、體面上他の句よりも、己の名句及び添削句を最高位に押さざるを得ず、故に彼等は労せずして入選の榮に浴することを得。土地にてはこれを草鞋發句と云ふ。

けだし草鞋を履きて、歡願に行くの意なり。今の文壇にても、流行大家の玄關にお百度を踏みて、原稿を紹介して貰ひ、それのみにては嫉妬を招くの恐れあるより、月評職に至りて了解を得、厄病神先輩の同情を求め、乙の上たる名聲を贏ち得んとするが、現下の通常事にして、老人の眼より見れば、草鞋發句と甲乙なきもの、命名すれば、草鞋小説とでも云ふべきか。

○月の句

九月十七日の夜は、十六日頃の月冴えたり。その夜、牛込神樂坂の席亭にて高潮會の主催せる句會あり。余も月を踏みて川席す。近頃新らしがる若輩ども、運座は遊戲なり、本當の句を作るところにあらずと云ふ。或は然らん。然れども、余は句そのものよりも、なんのわだかまりもなく、煎餅をかぢり、澁茶を啜りて、句作い、談話する空氣をこの上もなく好むものなり。酒あれば更に可と思ふ。その夜、月の句を作る。

　二階には黄なる燈、月のぼる
　川柳の葉をしごいて見たり月の下

○夜來吟社

九月十九日の夜は、降りしきる雨を衝きて、牛込砂土原町なる土佐協會の樓上に催したる夜來吟社の句會に臨む。こは土佐出身の人人によりて社交的に作られたる團體なり。夜來吟社とは、『土佐はよいとこ、南をうけて、さツまあらしがそよそよと、ヨサコイ、ヨサコイ』と唄ふヨサコイより取りたる名なり。日本派の俳人濱田波靜君が宗匠株。

　ガラス戸の外は野分の雨斜め
　野分の中に電車待つ人二三點

○驟雨模樣

驟雨模樣のむせ暑き夜、坂の上のバーにありてビールを飲む。

　羽蟻電燈のまはりを飛ぶこめかみの痛み

○無花果の句

八月の終より九月の始めにかけて齒に故障あり、近くの齒醫師に行く。待合室に宛てたる二階の室に旋風機ありて、いらだてる神經に觸りて苦し。出でて廊下を歩せしに、割竹の垣根越しに、隣家の庭見えて、埃の白くかかりたる無花果の木立てり。

　無花果の葉の實、事務員の淋しさ
　無花果に埃り白く格子戸のリン響き

デブの女優殺しローマンス

「映畫の世界」を驚倒せしめた大事件――全米國人の昂奮――證人プレヴオスト孃と探偵長との問答全文（犯罪當夜のデブの醉態と女優ヴアジニア・ラツペの苦悶――犯罪の行はれた室の描寫）――米國各地のデブに對する反感電報――ラツペ孃の戀人にして婚約者たる男の悲み――デブの妻君の態度――デブの辯護士連の公開狀――陪審會議の決定――獄中のデブ

大川佐一

喜劇の大立物として「映畫の世界」を風靡した「デブ君」ロスコー・アーバックルが九月五日桑港セント・フランシス・ホテルの十二階で女優ヴアジニヤ・ラツペ孃を殺害したといふ電報が日本の新聞にも掲載された。國際通信のサーヴイスはこれを歐洲を初め南阿、濠洲、印度の端々にまで打電したから世界中の活動愛好者を一時に吃驚させたのである。併しデブの殺人事件――デブ君の女優殺しといふ樣な事は一寸頭に入り難い、如何にも喜劇の題目らしくて事實としては想像できないので、「又例の活動興行者の狡猾い宣傳だらう」位で結局一笑に葬り去らうとしたのは、本元の米國は勿論のこと、歐洲、日本、何所も同じだつた。それにも拘はらず、事實は事實として「デブ君の女優殺し」は次から次へと明白になつて行つた。眞犯人がデブと決するまでには被害者ヴアジニヤ・ラツペ孃の屍體解剖が行はれ、或はその內臟を化學分析に附してまで死因の探究に努め、遂に九月十日デブのロス・アンゼルス市警察の手で拘束された。

デブに拘束の命令を傳へたロス・アンゼルスの探偵長ミカエル・グリフスは當日新聞記者に次の如く語つた。

『アーバックルは逮捕されたのぢやない、たゞ我々が捜査の目的を達するまで拘束を加へるだけなんだ、目下のところでは彼を起訴するなどの事は考へられてゐない――』

事件は拘束から始まつて、證人や參考人の喚問、檢案鑑定、陪審會議、豫審とまで進行したので、昨日までは世界の人間の膽の皮を撚らせたデブ君アーバックルもとう〳〵怖しい殺人の

刑事被告人として犯罪現地の桑港に送られ、市監獄の未決に投ぜられた。事件の發端は九月五日、セント・フランシス・ホテル十二階なる自分の部室でデブ君は昵懇の若い女優その他夫人連を招待して無禮講を演じた、その無禮講では室の扉を締め切つて、主人役のデブ君が寢衣一枚といふ亂暴な姿で禮裝の婦人連を迎へたばかりでない、其所にはごろ／＼と瓶が並んでゐた！

今は合衆國全州に禁酒令を布いてゐる米國だから、大ホテルの一室で名優デブが「飲め、踊れ」の大亂痴氣を演じただけで。無事に濟まない所へ持つて來て、その揚句の果が殺人！　女優殺し！　まだ芳紀十八歳の美人で賣出したヴアジニヤ・ラツペ孃を殺したといふのだから米國中が騷ぎ出した。

『ロスコー・アーバツクルは當市監獄に收容されてゐる、彼は刑事被告人として公判を待つてゐる、監内における彼の生活は他の入監者と何の差別もなく、全然同一の待遇を受けて與へらるべき物は與へられ、規定の示す權利を保有してゐる、同時に制裁と取締とについては嚴に之を履行して他の者と差別を設けない――』

當局が斯んな公表をしなければならぬ程に公衆は亢奮したのである。ちつとも假借は仕てゐないと云ふ事をもつてデブに對する社會の道德的亢奮を沈靜させやうとしたのである。

問題は洵に大きい――證人や參考人として召喚される人々が皆「活動」の有名なスターで、公衆は亢奮した感情を休める暇もなかつたのである。殊に、桑港の探偵長ダンカン・マテソンがゼイ・ピイヴロン・プレヴオスト孃を召喚して、デブ主催の無禮講の狀況及被害者ヴアジニヤ・ラツペがデブの別室において裸體にされてゐた前後の眞相を究明した日は新聞紙も讀者も亢奮の極に達して、デブの非人道、沒義道、獸的行爲が米國四十八州を通じて罵られたのである。

探偵長ダンカン・マテソンがヴアジニヤ・ラツペ孃の死因を何所までも突きとめやうとして若い美しい證人プレヴオスト孃に向ひ辛辣針の如き言葉をもつて質問を續行すると四時間、遂に彼が或る確信を掴んで「これは非常に重大な事柄だが、あなたもそれは承知だらうね」と最後の念を押すまで――その證人プレヴオスト孃が「相違無之」の自署をした質問速記の調書は次の如きものである――

問『あなたがセント・フランシス・ホテルに着いたのは何時頃だつたか』

答『一時頃でした――一時と一時半の間だつたと思ひます』

問『誰か一所に行つた人でもありますか』

答『わたし一人で行きました』

問『あなたが行つた時には室内に誰か居ましたか』

答『デブのアーバックルと、ヴアジニヤ・ラッペとローエル・シヤーマンと、デルモント夫人、セムナセー夫人、アリス・ブレーク夫人などがゐました』

問『それで、アーバックルはあなたが行つた時にどんな服装をしてゐました?』

答『わたしは驚きました、皆は食卓(テーブル)についてゐましたが、アーバックルとシヤーマンとは、浴衣(ゆかた)を着て、寝間袴(ねまずぼん)を穿(は)いて、スリツパを引つかけてゐました、その外の者はみんな禮装でした』

問『デルモント夫人の服装は?』

答『いつもの禮服を着てゐました』

問『デルモント夫人が寝間着(ねまき)に着更(きが)へたのは何時か』

答『夫人は「此所は熱(あつ)くて堪らない」と云ひつゞけてゐました。共でシヤマンは夫人に「寝間袴(ねまずぼん)をお穿(は)きなさい、さうすれば大丈夫ですよ」と云つてしまました』

問『着物を更(か)へるために夫人は他(ほか)の部屋に行つたかどうです』

答『夫人は浴室に入(はい)りました』

問『どつちの浴室(よくしつ)で?』

答『ローエル・シヤーマンの部屋の浴室です。それから夫人が出て來ますと皆は笑ひました、寝間袴(ねまずぼん)を穿いた夫人は「これで氣持(きもち)よくなりました」と云つて坐つたきりで、夫人の妙な寝間着姿についてはそれきり誰も何とも云ひませんでした』

問『セムナセーが來たのは何時頃だつたか』

答『セムナセーはわたしが行つた時にはもう來てゐました、わたしが一等あとで行つたのでした』

問『ラッペ嬢は何時頃に室を出て行つたか』

答『アリス・ブレークとわたしは提嚢を取つて白粉(おしろい)をつけやうとしてゐたのです、で千二百二十一番の浴室に行きかけてゐました。行つたのでした。ほんの一寸(ちよつと)の間(ま)でした。そこで白粉をつけてもとの所へ歸つて見ますとヴアジニヤとロスコーの姿が見えません、「ヴアジニヤとロスコーは何所へ行つたの」とわたしが云つたので、「二人はあそこにゐるんです」とローエル・シヤーマンが教えました』

問『どの室(しつ)を指(さ)して?』

答『ロスコー・アーバックルの室(しつ)を指(さ)してです』

問『その室に二人はどれほど入(はい)つてゐた?』

答『随分長い間でした、それでわたしはデルモント夫人に「ヴアジニヤを呼んでごらんなさい」と云ひました、夫人は何度

も呼びましたが返事がないので「扉を蹴つて見るがいゝ」とわたしは云ひました、そして自分でも三四度蹴つて見ますし「もつと蹴りませう、開けるまで蹴りませう」と夫人も何度か蹴りまして、「ヴアジニヤに一寸用事があるんです、ヴアジニヤに話したい事があるんですから扉を開けて下さい」と云つたのでとう／＼開けたのです』

問『誰が？』

答『ロスコー・アーバツクルが開けたのです、わたしどもは室内に入りました、ヴアジニヤは寢臺に倒れて、髮はほどけて苦悶てゐました。「どうしました」と尋ねると「わたしは死にさうです」とヴアジニヤが云ひます、併しヴアジニヤは別に飮んではゐなかつたので或は何か瓦斯中毒でもしたのかとも思ひました。その時ヴアジニヤは俄に着物を引き裂いて脫かうとしました』

問『ヴアジニヤはどんな着物を着てゐたか』

答『禮裝でした、服は全部着けてゐました』

問『アーバツクルは何か云つたか』

答『アーバツクルは「外へ連れて行つて下さい、ヴアジニヤは騷々しくつて不可い」とか何とか云つてました、ヴアジニヤはうん／＼悶えながら着物を去らうとするので、わたしは「お止しなさい」と云ひましたがアーバツクルが來て着物を脫がさうとしました。わたしは彼の手を押し拂つて「お止しなさい、ロスコー、加減が惡さうだから」と云つたのです』

問『扉を蹴る前にヴアジニヤの叫ぶ聲が聞えなかつたか』

答『扉が二重になつてますから何も聞えません。中に入るとまた居間の扉と浴室の扉があるんです』

問『あなたはどうして扉を開ける氣になつたのか』

答『ヴアジニヤが入つてから餘り長くなりますから』

問『長いといふのは、どれほどの間だつたのか』

答『さうです、一時間ほどにも思はれました』

問『あなたが入つた時にはヴアジニヤは一方の寢台に仆れてゐたのだね、その時アーバツクルは何處にゐたの？』

答『初め彼は扉を開けに來たのです、それから浴衣を脫ぎました。わたしとアリスとはヴアジニヤをもう一つの寢台に移して重曹を嚥ませました。ヴアジニヤは眼をくる／＼廻してゐました。わたしは「醫者を呼ばなくつちや」と云ひましたが其處へデルモント夫人が入つて來て皆でヴアジニヤを冷水浴に入れました、それが餘り長いやうでしたから「上げた方がいゝでせう」とわたしは云つたのです。それから、わたしは電話で醫者を呼ばうとしましたけれど誰かゞわたしの手から

受話器を奪つてしまつたので「ボイルさんか誰かを呼んで下さいな」と云つたのです』

問『それから？』

答『そこへ誰だか娘さんが入つて來ました、名は確かには覺えません、メーとか何とか云つたやうでした。その娘さんがアーバツクルに「上着をお召しなさい」と云ひました、その時その娘さんとわたしと會釋しました、前に二度會つた事があるんです。娘さんはアーバツクルに「一寸お話し仕たいんです」と云ひました、アーバツクルは「よろしい」と云つて今一つの室に入つて行きました、わたしどもはそれからヴアジニヤを他の部屋に移したのです』

問『ヴアジニヤはその時は確かだつたね』

答『はい、移した時には確りしてゐました、デルモント夫人は寢台に休んでゐました、くた／＼に疲れて寢込んでゐたのでせう』

問『あなたが千二百十九番室の扉を蹴り開けて初めて室内に入つた時にアーバツクルは寢間袴を着てゐたか、それでも上着を掛けてゐたか』

答『上着を掛けてゐました、釦を留めてゐました』

問『アーバツクルはよく話しをしたか』

答『はい、それはよく話しました！』

問『アーバツクルの云つた言葉をもつと思ひ出して御覽……』

答『彼は突つ立つた儘で驚いた顏をしてゐました、大層むつかしい顏でした「何でそなんにむづかしい顏をしてゐるんです」と訊いたら「もう一度喚いたら窓から投りだしてやるんだ」と云つてヴアジニヤを睨んで云つてました』

問『どうだつたね、彼は醉つ拂つてゞもゐたのかね』

答『醉つ拂つてゐましたとも、飲んでゐたのですから』

問『その日あなたは彼が飲んでるのを見たんだね』

答『はい、見ました』

問『どれ位飲んだのか』

答『存じません』

問『何杯位飲つたか見當がつかぬ事はないだらう』

答『その場には隨分酒が澤山ありました』

問『どれほど酒があつたらうか』

答『彼を無茶苦茶にするに十分なほどありました』

問『何を飲んでゐたか』

答『ウイスキーとホワイト・ロツクを飲んでゐました、彼はわたしにお酌をしてくれと云ひましたから、わたしはオレンジジユースをついで遣りますと「それは欲しくない、ウイスキ

ーが欲しいのです」と云ひました』
問『彼の話しつぶりは如何であつた？』
答『顔觸は恰好かつたのですから、汚い言葉は少しも使ひませんでした』
問『いや、彼の言葉つきに何か變つた所はなかつたかと云ふのだ』
答『十二階の窓から飛び出さうかなど〻云つてゐました、「畢竟人生はつまらないものだ」など〻云つてゐました。それが別に怪しくも何とも聞えなかつたと云ふのは、わたしどもは皆窓の側に坐つてゐたものですから、彼が「誰でも飛ばうといふ人があれば私も一緒にこの窓から飛びますぜ」と云つても平氣で怪まなかつたのです』
問『窓から一緒に飛ばうと云ふ者はなかつたか』
答『誰もありませんでした、わたしどもは彼の顔を眺めてゐました、その時彼はこんな事を云つたやうです、「私がこの十二階の窓から落つこちて死んだところが、世間は翌る日から私の事なんぞ話しにも仕ないだらう、そんな暇があつたらベース・ボールでも見物に行くだらう、だから人生は結局つまらないのです」と――』
問『着物を脱がしてからヴアジニヤを見たか』
答『はい、見ました』
問『ヴアジニヤの身體に何處か撲られたやうな痕跡を認めなかつたか』
答『脚と腕とに撲られたやうな跡がありました、「一體この黑い紫色の斑點はどう仕たのです」とわたしは尋ねて見たんです』
問『その時ヴアジニヤは？』
答『まるきり何にも云ひません』
問『あなたが室内に入つた時にアーバツクルとヴアジニヤとは何か話し合つてゐなかつたかね』
答『別に話し合つてゐなかつた……と思ひます』
問『ヴアジニヤはアーバツクルに向つて何か咎めてゐなかつたか』
答『わたしどもが千二百十九番の室に入つてからですか』
問『さう、アーバツクルの面前で』
答『云つてゐました、「私は死にます、私は死にさうです、あなたは私を非道い目に逢はせました」と云つてました』
問『ヴアジニヤは「私を非道い目に逢はせた」と確に云つたんだね』
答『はい、申しました、「非道い、非道い、もう死にます、もう

死にます」と云つてゐました」
問『さう云つた時にアーバツクルはその場にゐたか』
答『皆そこにゐたやうに思ひます』
問『それに違ひはないだらうね
答『違ひありません』
問『それはアーバツクルに聞えるほどの聲で云つたか』
答『確に。アリスもわたしと一緒にそこで聞いてゐたんです』
問『ヴアジニヤの喚くのを聞いた事はないか』
答『喚きました、ほんとうに叫んでゐました、それでアーバツクルはむつかしい顔をしてゐたのです、彼女が悲鳴しながら先程のやうな事を云つたからです』
問『これは非常に重大な事柄だが、あなたは全くそれを承知してゐるだらうね』
答『はい、解つて居ります』
問『今日取調べた事柄については誰にも話しをせんやうに願ひたいのです、あなたは證人ですから』
答『でも、わたしのお母様にまで面倒のかゝらぬやうにお願ひしたいのです』
問『後で供述が變更されるやうな事はありませんな』
答『供述を變へるやうな事はありません』

ゼイ・プレヴオースト(自署)

ヴアジニヤ・ラツペの死については果してデブ・アーバツクルが下手人であるか何うか今までは半信半疑でゐた者も、ゼヴロンプレヴオスト嬢が證人としての供述が右の如くであつたから、デブの名聲が高かつただけに彼に對して起る反感もそれだけ強く、惹いては彼の映畫一切を活動寫眞商から撤回せよとの輿論が非常な勢ひを示して來た、狡猾い興行者は却つて此際にデブの映畫を寄せ集めて一と儲け仕やうと試た者もあつたが、社會の反デブ熱は遂に極端まで行つて、桑港を距る數百哩の中央部の某地ではデブの映畫を上場する活動館に群衆が殺到して興行者も餘儀なくこれを撤回させられたと云ふまでになつた。

事件が發生してから一週間後の九月十二日の各夕刊新聞はデブに對する反感の各地電報が滿載されてゐるが、その二三を摘記すると一寸斯んな風である。

市俄古、九月十二日——多數の活動寫眞館を經營する二大會社はロスコー・アーバツクルの映畫を取消した。公開中のものは勿論、目下前觸で人氣を呼んでゐたゝのも興行者の手から引上げて會社の倉庫に投ぜられた。

ロス・アンゼルス、九月十二日——ヴアジニヤ・ラツペ嬢の

死に關して桑港に送られた「獄中のデブ」のフイルムは本日撤回された。これを興行してゐた館主ジッド・グラウマン氏は撤回については特に理由を語らなかつたが行興期間中だつたに拘はらず他の映畫と取代へたのである。(この電報によると機敏なロス・アンゼルスの興行者はデブの護送や入監前後の模樣を素早く撮影して三四日間は客を呼んでゐたものと見える、それさへも撤回しなければならなかつたのを見ると輿論の壓力がどんなに强かつたかゞ知られるではないか)

ベツド・フオード、マサチユウセツツ、九月十二日――市長ハイネス氏は全市活動館に警告を發して、ヴアジニヤ・ラツペの死に關して桑港に拘禁されたロスコー・アーバツクルの映畫は、法廷において事件の判決を與へらるゝまでこれを上場しない樣に傳へた。

ロス・アンゼルス、九月十二日――當地ハリウツドを中心とする多くのフイルム會社及び各フイルム代理店は數日來デブ映畫契約取消の電報を頻々として接受しつゝあり、當地にて既に取消を受つけたるフイルムの延長は二百六十萬呎に上るべし。

映畫に關する電報だけではない、デブの前身を洗ふ樣な、噛んで吐き出す樣な猛烈なのが少くないうちに圖らずもデブの結婚當時のみぢめな事實を素破抜いたのが次の一電である。

ロング・ビーチ九月十二日――アーバツクルは千九百八年(十三年前)には當地海岸餘興場の案內人をしてゐた。段々出世をして役者の樣になり、歌をうたつたり蜻蛉返りをしてゐる間に唄ひ女のミンタ・ダーフイと懇仲になつて、その年八月五日に舞台で結婚式を行つた。興行師は早からこれを廣告して入場料を取つて式を見せた。その後小屋の持主が變つたのでアーバツクル夫婦はロス・アンゼルスに行つて職を求めたところが偶々口に有りついたのが活動喜劇の撮影場だつた。その頃の喜劇といふのはパイや玉子を無暗に投げつけて見物をひやひやさせるのが關の山で、役者の給料も實に安かつたものだ、がこれが抑々彼の出世の端緒になつたのである。

そんな電報があるかと思ふと、また一方ではデブを全く映畫界から葬り去らうとする、宣告的のものもある、矢張活動寫眞の本場ロス・アンゼルスの發電である。

ロス・アンゼルス九月、十二日――ロスコー・アーバツクルが再び映畫に現るゝ事はあるまいと本日市會公安委員會において活動作者協會々長フランク・イー・ウツド氏は述べた。また、委員アラン・ブローク氏の質問に答えて、デブの日は去つたと思ひます、輿論は彼の惡影響を怖れて彼の映畫を撤回せしめまし

た、撤回は檢閲官が命じたのでなく興行者が自發的にしたのであります」と云つた。

死んだ女優ヴアジニヤ・ラツペには婚約の成つた男があつた。ヘンリー・ラーマンと云つて今紐育で映畫の撮影監督をしてゐるが、この男は嘗てデブの撮影にもデブとラツペとの共同撮影にも監督をした事がある。現在は紐育にゐて、セルジニツク社のフイルムで有名なスターのオウエン・ムアーを監督するほどの地位を得てゐる。

彼は最愛のラツペを地下に奪ひ去られたので全く失神の形でゐたが、こんな事にかけては最も猛進的な桑港一新聞の紐育特派員が彼を訪問して卒直な質問を連發したに對し、ラーマンは心神亢奮の狀態で滔々と次の樣な思ひ切つた話しをしてゐる――

『これを見て下さい、これはラツペが私に贈つたプラチナのカフス釦です、「ヘンリーに捧ぐ、我が最初にして最後の愛に。ヴアジニヤ」と刻つてあるんです。

『私は正義公道が行はれる事を祈つてゐるんです。桑港には出かけ度くありません、若し私がアーバツクルに會ひでもしたら彼を殺して貰ふでせう。壁にかゝつたラツペ孃の大きな寫眞を見上げながら)看護婦の口述によりますと、ヴアジニヤはアーバツクルを咎て彼が罰せられるやうに頻りに口走つてゐたと云ふぢやありませんか。私は先刻長距離電話でシデア・スプレツクルス夫人と話しをしましたが、ヴアジニヤが死期を自覺するまでは、「ヘンリーに知らせないで下さい」と云ひつゞけてゐた相です。ヴアジニヤは私に知らせ度くなかつたのです、私が何を仕出かすか知つてゐますからね。

『アーバツクルは獸です、私は一年半ばかり彼を監督しました。その時には彼が女優の衣裳部屋に近寄よつて仕方がないので私はとう／＼「これから止めないと考へがある」と云つた事がありました、嫌だと云ふ娘を何とかしたと云ふ話を私に自慢してゐた事もありました。それは、あんな下司下郎を下水の中から拾ひ上げて滅法な給金を拂つて偶像に仕てしまつたのが悪いのです、アーバツクルは桑港の酒屋の給仕をしてゐたのです、酒場長ではなくつて杯を洗つたり喫煙室を掃除する下廻りだつたんです。彼はコカインや阿片の針を使つて、頽廢した羅馬の狂態よりもつと非道い狂態を演じたのです、私は聖人ちやありませんが、そんな亂暴な無禮講などには一度も出た事がありません。ヴアジニヤはあんな卑しい男と交際したくなかつたでせう。

『ヴアジニヤが肺炎で死んだなどゝ云ふのは馬鹿氣切つた噓で桑港のラム・ウエルスといふ醫者からの電報によると彼女の膀胱に不審な痕跡があつて、これが腹膜炎となつて死因をなしたものだと云ふのです。その電報を受取つてから紐育で第一流の醫師に尋ねて見ましたが皆矢張り「外部から餘つぽど強い力が壓しかゝつたのでなければそんな内部裂傷を起す様な事はない」と云ふのです。

『ヴアジニヤは平常からアーバツクルを嫌つてゐましたので、或宴會の場合に私はヴアジニヤを蔭に呼んで「嫉妬を直して氣持よくアーバツクルにもつき合つては何うだ、好い人間ぢやないか」と云つ聞かせた事もある位でしたが、ヴアジニヤは仲々聽き入れないで「あの人間は粗野で下司つぽいから頭が痛くなります、下等な癖に自分で面白い人間だと思つてゐるんです」と云つてゐました。

『こんな具合ですからセント・フランシスでも二三杯も飲んでゐたかも知れませんが隨分アーバツクルとは虎のやうになつて鬪つたに違ひないと思はれるのです。ヴアジニヤが活動界に入つてから四年になります、紐育の生れで市俄古で育つて、一日だつて病氣なんぞした事はありません、活動界の俗な仲間には平常接近しないで高くとまつてゐました。私は電報で立派な葬式をしてくれと賴んで遣りました。

『私は最初にスペレツクルス夫人から電報を受取つた時、アーバツクルに宛てゝ「ヴアジニヤの世話を十分にせよ」と云つてやりました。アバーツクルは私とヴアジニヤとの間はよく知つてゐるんですもの、如何に畜生とは云へ彼が指一本だつてヴアジニヤに觸れやうとは思ひませんからね。私はもう自分も死んでしまつて此處でこの部屋にゐるのは全く事實でない様な氣がします、ヴアジニヤが死んだと云ふ報知があつてから私は一歩もこの室から出ないのです、けれども今では私は生きて公道の地に墮ちないのを見屆けたいと思つてるんです。

『アーバツクルには有力な友人もあるし、彼を助けやうと思へば多くの勢力や金も用ゐられるでせう、たとへ自由を贖ふ事が出來るにしても、彼は私と云ふ者のある事を勘定に入れて置かねばなりません。』

アーバツクルの妻君ミンタ・ダーフイも紐育にゐた。この女は前のロング・ビーチ來電が報じた通りデブと舞台結婚をして觀客を集めたほどあつて、夫のアーバツクルを信じて、熱心に辯護に努めたその模樣をニユヴアサル・サーヴイスが報じてゐ

る――

紐育、九月十二日(ユニヴアサル・サーヴイス)――アーバツクルの妻君ミンタ・ダーフイは本日往訪の記者に向つて「たとへ夫と土地は隔てゐても、ラツペ事件の嫌疑は無實であると信じます」ときつぱり斷言して、夫の急を救ふべく桑港に出發する仕度に取りかゝり、「アーバツクルがこんな怖しい事件に何の關係があるものですか。わたしは彼が無罪放免になるまでカリフオルニヤに行つて夫の近所にゐる事にします、妻としてその他に仕様がないぢやありませんか」と話しつゝも彼女の顏には悲痛の色があつた。けれどもその健氣な言葉の裡には夫のデブを絶對に信じて疑はぬ信念が籠つてゐた樣だつた。「あなた方夫妻が進退去就は双方ともに任意自由たるべしと云ふ契約に署名してから一年も經ちませんね」と記者が云つたに對して、彼女は手を打振つて無雜作にそれを打消し「私どもはまだ結婚して居るんです、離婚や別居の訟訴をした事はないのですから」と應へながらも彼女は獄中のアーバツクルに電報を出した。夫に對する深甚の同情と、彼が無實であるのを自分は十分に信じてゐる事をアーバツクルに知らせるためである。妻君は早速西部に向つて出發するのだと語つた。

デブに對する社會の反感が極點に達したについて、彼の辯護士數名は鳩首凝議の結果、何とかして輿論緩和の對策を講ずる事となり、玆にデブ側辯護士の連名をもつて各新聞紙上に公開狀廣告を揭載したのである。米國でなら洵に行り相た事で、即ちフランク・イー・ドーミングエツ、チヤールス・エチ・ブレナン及びミルトン・エム・コーヘンの三顧問辯護士が連署の公開狀は次の如きものである――

『ロスコー・デブ・アーバツクルの法律代理人として、且つ友人として、我等は公明正大をもつて名ある加州法廷が被告の無罪を判決さるべき事を謹んで明言するものである。我等は事實の全部を知悉するが故に彼の無罪なるを知るものである。デブ・アーバツクルの微笑と抱懷とを知り給ふ無言戲曲の愛好者各位にして誰かデブが斯くの如き罪を犯したと信ぜらるゝ方がありませうか。

神を畏るゝこの國民の基督教的感情は、我等の主の御旨において立證されない限り斯くの如き犯罪の嫌疑を受けた者を裁判するを欲しないでせう。神は「人を審くこと勿れ、爾も亦審かるべければなり」と仰せになつてるではありませんか。

デブ・アーバツクルに對する批難憎惡は今や旋風を捲きつゝありますが、眞相は軈て僞說の暗雲を拂ふに到るでせう。眞理は有力にして擴がるものであります。

我等は本事件に對しては、文化世界の基督教的博愛を示さるべきを固く信じ且つ米國社會の情意に訴へて、法廷が被告の無罪を決するまでは如何なる豫斷にも耳を藉されない事を切望するものであります。

我等はヴァジニャ・ラッペ嬢の死に關してはロスコー・アーバックルが全然關係ない事を保證すると共に、加州の法廷は被告の無罪に對する我等の信念を確證すべきを公言して憚からぬものであります。

デブの後援者各位並に國民諸君に對して、我等はデブの起訴は無根に基くものである事を宣言すると共に、適當の時機において法廷においてもこれを主張する積りであります。我等は加州の憲法に司法當局の健在を信じて疑はないものであります」

此堂々たる公開狀がデブの側から發表された翌々日(十四日)ラッペ事件に關する大陪審會議は三時間半に涉る討議の結果、ヴァジニャ・ラッペの死因調査及び鑑定の報告を基礎として、傷害致死罪として起訴するに決したのである。大陪審會議においてこの裁決に署名したのは八名で、一名の陪審官だけはデブの豫審を拒んだ。この會議において事件の經過が最も微細に涉つて取調べられた結果、ヴァジニャ・ラッペは内部傷害に因る腹膜炎で死んだもので、原因はロスコー・アーバックルが或る暴力を加へたからと云ふ事に一致した。若しこの決定に誤りがないとすれば、デブは飲酒、亂醉、殺人以外に彼にとつては自殺的不名譽とすべき行爲をラッペ嬢の上に加へた事が推測される。

裁判決定書の主文は斯うある――

下名の陪審官はロスコー・アーバックルに對して傷害致死の公訴を提起す

コルバート・コールドウェル
エー・チー・ハンター
ユーゼン・エル・シモンス
アール・ゼー・ザン
ダブリコー・ガーナー・スミス
ゼーハス・キング
ダブリユー・イー・マクパーソン
アルフレッド・デー・マーチン

斯うしてデブは陪審會議から傷害致死の公訴と共に加州の法廷に移されたがいよ〳〵彼の運命を決すべき最後の判決が下されるまでにはまだ〳〵長い時日を要するであらう。

未決監獄におけるデブ・アーバックルの生活は、日本では一寸想像の出來ない變つたところがあつて、「獄中のデブ」を記すのは、つまり米國の監獄制度の片鱗を紹介する意味にもなる――。

デブは桑港市監獄重罪監の十二號に入つてゐる。彼が此處に投ぜられ、獄中最初の夜を過して、十一日午前七時點呼に起された時、まづ石鹸のない不自由を感じた、顔を拭くべきタオルもなかつた、頭髪を梳くべき櫛もないのに落膽したが、漸く先輩の監友の情で彼は朝の身仕舞をした。それから彼は四十の監房が並ぶ長い廊下を散歩した後に外へ朝飯の註文をした。間もなく料理店から運び込んで來たものはボイルド・エッグと、麺麭の焙つたのと、珈琲とだけだつた。

この日彼は上等の寢具の差入を願つて却下されたが、獨房のさびしさに堪え兼ねて一人の監友を一緒に入れてくれと典獄に希望して許された。日本では斯んなのは絶對にない事であろう。

この夜、彼は近くの監内から歌をうたふ聲を聽いた。他の檻からも聲を合して歌ひ出した樣だつたが、彼は默つてそれを聽いてゐた。

最初の日に彼は數通の電報を受取つた、これは友人から慰問の電報だつたのである。警察署長オブリエンに手紙を送つて面會人制限の事を願ひ出したのも第一日だつた、

何卒左記の者にのみ面會を許可され度く他は一切御許し無之きやう願上候

フランク・ドーミングエッツ、ミルトン・コーヘン、ロウ・アンガー、チャーチル・エチ・ブレナン

翌十二日にはデブは「三二〇五二」の番號を胸にぶら下げて今までとは異つたカメラの前に立つた。警察部の寫眞師ジョージ・プラムが「さあ、これから」と云ふと、アーバックルは苦笑ひをしながら「心配しないで好うがす、寫眞機の前にさへ置けばすべき事は自分で心得てゐますよ」と云つた。「落ついたものでさあ、用意が宜かつたら云つて下さい、首に番號の下らない純粹のアーバックルの姿勢をしますから」とも云つた。

寫眞師はアーバックルの正面と側面の寫眞を二枚撮つた。この寫眞は彼の指紋や體重と一所に米國各地に送られるのである。此處でピーター探偵が指紋を取り、鑑識官のアドルフ・フアニングがバーテロン式の犯人調査を行つた。「この台に立て」「片腕を此處に載せ」「この引手を握れ」「この板まで腕を伸せ」など、彼は命令される通りにしなければならなかつた。

□　□　□　□　□

この事件の最後の判決までにはその經過においてまだ〳〵報ずべき曲折の生るべきを期待してゐるが、いづれは我々に意想外なる報知の數々に接するだらう。現に十月七日に至つてデブは五百弗で保釋出獄を許され、八日彼の辯護士と一所にロス・アンゼルスに引上げたではないか。

華府會議全權徳川公と東宮殿下外交御指南番珍田伯

文學博士 三宅雪嶺

□

運命の神は何を爲るか知れぬと云ふが、實に運命は分るやうで分らず、分らぬやうで分り、適當に形容するに苦しむ。徳川家達公の今日あるは、生れた時誰か考へ得たらうか。全權委員と成つて華盛頓會議に赴いたのは、相當の才幹あつての事であつても、公爵といふことが少からず與つて居り、公爵たるは宗家を繼いだが爲めであり、若し宗家を繼がなんだならば、現に伯爵として立ち、伯爵階級で働きが有るか無いかに見られるに止まらう。

宗家を繼いだのは六歳の頃であり、何の分別あるべくもない。十五代將軍徳川慶喜が朝敵となつた丈けの爲め、田安龜之輔が新政府から跡目相續と定められたのである。慶喜は三十五年目に公爵となつたものの、不運と謂へば不運である。無理に將軍職を押付けられ、それで朝敵にされ、三十年間靜岡に蟄居するの餘儀なきに至つた。水戸烈公は攘夷側で評判好く、其子たる慶喜が將軍となつて朝敵視され、それ丈け何も爲ずに居つた田安家が取立てられ、種々の便宜を與へられた。家達公は全權委員を御受けする時、皇室の恩を承くること篤く、身に應のた事を盡くしたいと人に語つたが、眞に恩を承けること篤いと云はねばならぬ。慶喜公は夙に政權返上の意あつたにせよ、薩長の爲めに抑除けられたのは快い次第でなく、其相續人たる慶久公及び關係者が、貴族院で政府案に反對したりするのも、

つて來る所ないとせぬ。特別に不平あるのでなくても、明治以後の政府に關係が無かつた。家達公の方は、居ながら新政府の力で慶喜公に代り得た形になつて居り、自づと新政府贔負になり、薩長藩閥でも、閥族でも、之に關係ある政友會でも、肩を持たうとする傾向がある。特に何の求むる所あるのでなく、政府側と縁が深いやうになつて居る。貴族院議長になつたのも、今回全權委員になつたのも、要するに其關係から來て居る。

□

そこで聊か奇妙なるのは、公と近衛篤麿公との關係であつて、兩家が親戚の間柄でありながら。貴族院で近衛公が屢々政府に反對し、德川公は之と共にしなかつた。朝廷と共にした公卿の主立つたものが、薩閥とか閥族とかに反對し、諸侯の旗頭なるものが之を擁護するに傾いた。人物として兩公の孰れが優つたらうか。兎も角も近衛公が先きに顯はれ、早く議長ともなり、或る方面で將來の首相を以つて目せられた。容貌態度からして尋常でない事を示したが、今日まで生存して何の狀態になつて居らうか。順當に行けば內閣を組織すべき筈であつて、とかく官僚側に反抗し、其側に好まれぬのであり、政友會との關係も如何であらうか。或は大隈侯に近く、憲政會の累ひを受けて居らうか。憲政會で公を總裁とし、發展を圖るやうな事もあらうか。

近衛公の存命中、人が貴族院の人物を尋ぬるに對し、答ふるやう、どうも人が無い、何と云ふてもやはり德川だらう、と。篤麿と家達と、公卿と大名の違ひこそあれ、共に爵を同くし。年齡を同くし、家事上に相扶け合ふ方であつて、今、一人は歿して十數年を經、一人は米國の首尾如何で內閣を引受くべき順序になつて居る。篤麿公が存命ならば、巧く行くか行かぬかは別とし、首相候補者として魁けて居らう。德川は遺傳と云ふでなけれど、待つ事を知ると云はねばならぬ。家康は能く待つて天下を得、誰か惡戲に「鳴かぬなら鳴くまで待たう時鳥」と云ひ、世間に傳はつて居る。慶喜公も不思議に能く待ち、後に拜謁を仰せ付かり、皇后が御酌なされた程である。龜之輔の龜からして兎に勝つやうなところがある。何の長所あると知れずに、何時の間にか首相候補者となり、それで前に交渉あつたのを斷つたところに智慧を示して居る。前に引受けたならば、失敗するに定まつて居り、然う云ふ危いところに出ようとせぬ。幾許か心が動いたらしいが、其氣振りを見せずに終つた。

□

全權委員となつて何事かを爲し得るかどうか。幣原大使と加藤海相とで大抵の事を引受け、德川公は列席するに過ぎぬであ

らうか。自ら何等か期待して居り、場合によつて追が徳川といふやうな事あるかも知れぬが、自分の落度となるやうな事がなからうか。大勢寄合つて會議するには、誰が良い不良いといふ程際立つた事なく、何か彼にかする內に事が運び、或は會期が過ぎて了ふ。徳川公は社交的に好感を米國人に與へるやうな事もあらうか。餘り取出て云ふべき程の事が無ささうに思はれるけれど、少くとも箔を付けて歸り、損になるやうな事がなからう。首相原氏に於いて世間に飽かれ、面倒の起らぬ前に、暫く留守居を賴むかに推察されて居り、先づ其邊の所であらう。仲繼ぎ內閣など氣の利かぬ次第であり、さういふものを引承けてならぬと云ふ者もあるが、さういふ事を云ふて居つては、首相となるの機會が無い。前に話のあつた時は事が危なかつたけれど、今は危いのでなく、留守居では氣が利かぬと云ふに過ぎぬ。然し留守居とて强ち氣の利かぬ譯でなく、原とて自分勝手に留守を預けるのでなく、預けねばならなくなつて居る。何時までも續けて居れるならば居つて見よと云はれては、困るでないか。留守が難しいから、どうぞ留守を賴むと折入つて賴み込む次第になつて居りはせぬか。徳川が謝絕すれば原が困る譯ではないか。政友會のみで內閣を維持する事が出來ず、研究會の力を藉りねばならず、留守を預けるといふて、さう勝手に出來るものでなく、徳川に於いて引受けたとあれば、原が政友會を引纏め、無理を云はぬ事にするであらう。其內に勢も變り、單純なる留守居役と見られぬやうにもならう。徳川は既に公爵であり、最早爵の上り樣がなく、爵の爲めに顏を出さうといふやうな心持ちがなく、何か祖先を辱しめぬやうな事を爲して見たいと云ふやうな所がある。何の經綸あるか覺束ないにしても、何か善い事を爲やうといふ心掛けがあり、內閣を組織せば、初め暫く世間で興味を有つて待ち受けるであらう。失敗しさうなれば、深入りせずに罷めるであらう。何にしても、徳川內閣の噂が出るとは、近衛公存命中に人が想像しなかつた所である。

□

運命の不思議なのに、前に小村侯及び林伯があつた。二人共に久しく奏任官で續き、勅任になれぬと云はれたのに、一は侯一は伯となつた。一が外相、一が駐英公使で日英同盟が出來、次いで日露開戰となつたが、林の云ふやう、小村は先輩と關係無いので、外相として都合が好く、自分ではあゝいふ譯に行かぬ、と。後に外相となつて香はしくないこと、猶小村が大使となつて香しくないが如きであつた。珍田伯は外國に在つて現在の位置を得たのであり、國內に居れば何の處まで到達したか、恐らく好い事が無かつたらう。嚮きに外相職について交涉あつ

た時、之を辭退したのは、自ら見るの明あるを示す。珍田は何程の者でないといふ事になつて居つたけれど、自ら見るの明ある所で、何程の者であるかを說き明かすやうになつた。クレマンソー氏とか、ロイド・ジョージ氏とかに向ひ、何事かテキパキ事を定めようとなつては不向きであるが、定まり通りの事をなし、決して無理をする者でなく、ペテンが無いといふ所で信用される。老練といふ點は、林伯以後に之を推す。大使として老練と云へるが、それよりも東宮殿下の供奉長の如きに適して居らう。縱横自在、八方に應酬する柄でなく、眞面目に地道に働く方で、供奉長など氏に適任である。早く米國で修業し、英語が達者といふ事が、外務省に行つた所以であり、外交の能よりも通譯の能を以つて立つたのであるが、長い經驗で自づと外交に通じ、老練第一を以つて推されるに至つた。同僚に比べて職分を重んずるの念が強さうであり、老練といふのも之れから來て居るのでないか。職分を大切にせねばならぬ、謬ちあつてはならぬと努める所で、周到を旨とするに至る。基督教の信仰がどれ位か、何にしても職分の念に與つて居らう。

□

それにしても思ひ出すべきは、故本田庸一氏である。本田が東奥義塾長であつて、珍田は其教員となつて居り、本田は政治界に奔走し、次いで宗教界に入り、後にメソヂスト監督になり、基督教徒に於いて政治界に出たよりも有利であつたと云ふけれど、早く外交官になつて居れば、珍田どころの話でない。事を周密に取扱ふに於いて、珍田と孰れであるか、或は之に劣らうが、人格の輪廓に於いて確かに之に優つて居る。優つた丈け外務省に閉ぢ籠らうと思はず、更に廣い範圍に入り、政治界に奔走し、更に廣い範圍を求め、宗教界に出でたのであるが、生憎基督教が明治初年暗黒界に光を放つたに似ず、働いても普通世間の見る所で働き甲斐が無い。時代によつて日本に基督教を盛んにする許りでなく、廣く東洋に盛にし得たらう。大使だの伯爵だのといふくらゐでなく、文化的に永く印象を殘し得たらう。功名心を滿足する點よりしても、其方が優つて居るだらう。何分にも時代が許さず、基督教徒以外で殆ど知る者が無いやうになつた。之に比べて劣位に在る珍田伯が、將來の元首の外交顧問の形になつて居る。本田氏も政界に居つた頃は兎も角、後に職分の念が强く、世俗の功名を問はぬ事になつたらう。職分の念に於いて珍田伯も之に似て居ると考へられる。基督教牧師に如何はしい人物あれど、かかる人達になれば間違ひはない。

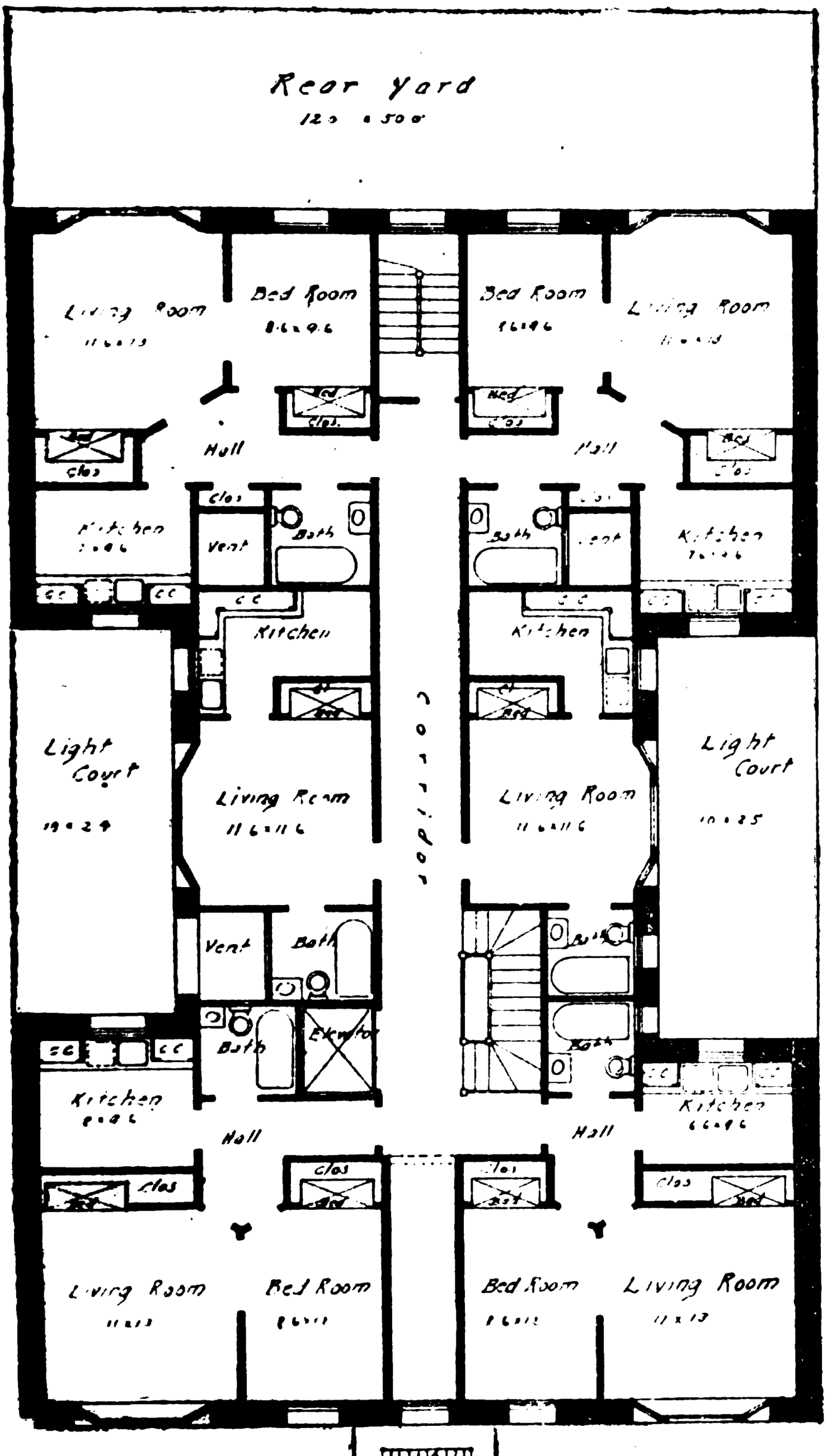
□

何れにしても、近來、樞要の職務を帶びる者が、明治維新に力を失つた東日本から出ること、多少の注意を値する。薩長土肥に關係ある者は、幾十年間か勢力を占めたが、位置を得るに急であつて職務の念に薄かつたでないか。何かと云へば權力爭ひである。德川公でも、珍田伯でも、自ら位置を求める事が無く、職分として大切と見た所で力を盡くさうとする跡がある。權力爭ひする柄でもなく、爭ふて勝てさうもなけれど、何處かに能力の打消すべからざるものがあり、之を押出さずに居れなくなる。明治維新より此處に約半世紀間、種々の變遷ある内、此邊の變化を認めずに居れぬ。東日本は西のやうに、自働的に成り得なんだ所もあるが、自ら求めずして位置を得たりする。之れも運命であつて、初め仕方ないと諦めた所が、却つて都合好くなり來つて居る。運命は分らぬなりでも、何處かに平均を求めつゝあるでないか。



前號挿圖正誤

前月號社苑欄、佐藤工學博士の「輕便快適なる新式都市住宅アパートメント・ハウスの話」の中に挿入せられたる圖（一一〇頁）は寫眞の撮り誤りにて、左圖を入るべかりしものなり。右筆者及び讀者諸彦に謝す（編者しるす）



大正十年秋の美術季・運動季に於ける總收穫

今秋の日本畫壇 其他

笹川臨風

此數年來、現代美術に就いての批評と畫家の世話とは一切やらぬことにしてゐる。展覽會なんかは、ぼんやり入つて、ぼんやり見て、ぼんやり出て來るに限ると思つてゐる。なまじ批評なんか頼まれて出かけると、窮屈で面白くないこと此上なしである。畫家の世話なんかは、もう懲々である。畫家は知らなくつて其作品だけ見てゐるのがよい。斯う云ふやうに極めてゐるので世間の批評と云ふものも大概は見ない。一體批評家なんて勝手な事を云つてゐるもので、作家の爲めにも、見物人の爲めにも大した利益になるものでない。利益どころか、中には有害になるものもないではない。其の利益にもならず、有害にでもなりさうなものを自分で書いたり喋舌つたりするのは、猶更ら以ての外のことと云はねばならぬ。美術は自分で見て、自分で樂んでゐればそれで善いと信じてゐるのである。

されば歴史的に傳統的に美術を研究することは面白いので、それには沒頭してゐるが、現代美術界に對して、入らぬおせつかいはしないことにしてゐたのを、口說き上手の瀧田さんに口說き落されて、感想だけを述べることにする。固より利益にならうとも思はないが、有害になるものでもあるまい。

鷹田其石氏は帝展廢止卑見なる小冊子を寄せて意見を求められた。之は都下の新聞紙にも掲載せられてゐたから、讀んだ人もあらう。其の審査の弊を論じたところには急所を突いたものもあつて、帝展の罪過も決して默視すべきものでないが、文展開會以後今日に至るまで其功果も少しとせぬ。鷹田氏には其弊を痛撃するに急にして、其利に對しては一顧だにせぬ。氏の論鋒には

ふと、文展帝展は弊害百出で、一利もないと云ふのであるが、之は極めて僻論であつて、嚴正なる批評は之を許容するわけにゆかぬ。帝展なるものは新進作家の競技會とするが善い。中流作家は個人展覽なり、團體展覽なりをやつていゝではないか。新進作家の登龍門として、帝展の存在は決して無意義でない。帝展に對する反感は常に中流作家の不平より起るのであるから、帝展より中流作家を一掃してしまふのが却つて帝展の爲めにもならうし、中流作家自身の爲めにもならうし、新進作家の爲めに道を開くものともなると思ふ。

帝展の會員や審査員や推薦連が團體を組んで、自分達の主張を發表しようと云ふのは、決して感服したことではない。之は權力爭ひの基ともなるし、黨同伐異の根源ともなる。會員審査員、推薦連は自家の作品を大膽に帝展に發表し得る特典があるから、何も別に團體の必要は存在せぬ。鑑査審査に就いての不公平は何も帝展ばかりでない。私設の展覽會に於ても見受くる現象であるし、批評家の批評のうちにも見られる。廣いだけ帝展の方が案外不公平の度合が薄いかも知れない。人間の遣つてゐる仕事である以上、到底神樣のやうにゆくまいではないか。

一體會員審査員推薦連にしても、中流作家にしても、多くは制作熱を失つて居る。眞面目に眞劍に、何等か求めよう、何等か現さうと努める態度は、獨り新進作家に於て見るべきである。中流作家などは寧ろ自家の個展若しくは同氣相求むる團體に於てのみ始めて生氣を發し、熱を喚起し得るものである。然らずして帝展へ出品するとならば左顧右眄、審査員を氣兼し、其意を迎合せんとして、遂に熱のない眞摯を失つた態度に陥るを常とする。鷹田氏が個展を標榜してゐるのはよい。元來藝術家は團體なんか組なくつてもよいのだ。尾竹氏が八火會を開催し、京都の中流作家が自由畫壇を組織するが如きは、時宜に適したものである。如水會の分裂は頗る醜態で、斯やうな薄弱なる會合は寧ろ始めより企畫しない方がよかつた。國畫創作が廣く天下に募りて鑑別を行ふが如きは無くもがなと思はれる。日本美術院の如きも、宜しく同人院友會員だけでやつたらばよからう。帝展は獨り新進作家に向いて開放すべき場所としたらばどんなものか。

日本美術院の院友にて其鑑別同人推薦に對する不公平の態度を攻撃にやつて來た者が少からずあつたが、さう云ふ愚痴は云ふだけが野暮であると返答して、一笑に附して置いた。官設に師弟關係の情誼あらば、私設にも保護者關係の情弊はあらう。さう云ふ愚痴をこぼす間に、龍門に登る努力をした方が善い。今日ほど藝術家が優待され、一躍順境に進んで大家の列に入る時はな

い。遠くを求めないでも、帝展の會員若くは會員格の諸氏があの地位に至るまでの悪戰苦鬪は決して容易でなかつた。鑑査や審査に愚痴を云ひなが、離れることもならず、男らしく出處進退を決することも出來ないから、見縊られるのは當然でないか。

批評家の或者に頻りに新らしがらうとしてゐる。新らしがりをしないと、何だか古く思はれるやうな心配がある。そこで畫家に向つても、盛んに此新らしがりを宣傳しようとつとめる。美術家も新らしいと云はれることに努力する。しかし新らしいことが必ずしも善いのではなく、傳統を離れて、作家が其構圖の上にも、手法の上にも、傳彩の上にも新工夫をして、舊の天地から離れた別天地を開いたところに新しい價値がある。唯々奇を設け異を立てゝ新しがらうとしても、それは無意味である。しかも他人の新工夫を見て、之に随喜し之に摸倣したところが其新しがりに何の意義があらうか。しかし新しがらうと云ふことに一代の風潮である。自家の本領までも沒却して、無益の新しがりを試みんとするものは到る處にある。現にかゝる風潮は今回の帝展に於ける審査員の作中に於ても之を看取するに難くないではないか。

摸倣は何の藝にても、何の時にても之を避けねばならぬ。昔を摸倣するを笑ふものは、新を摸倣する柄利けないのである。然るに新の摸倣は隨處の展覽會に於て見受けられる。必ずしも今秋の美術界のみではなく、年々之を認め得ることは誰しも氣附く處であらう。院展に於ける大觀張りは云ふを待たずであるが、帝展に於ける國畫創作の摸倣は今秋に於ても少くなかつた。麥僊張りの舞子、栖峰張りの赤松は注意するまでもなく、頻々として眸裡に映じて來る。しかも摸倣なるものは形態の摸倣であつて、原作者が現さうとした精神や氣分やは、其捕捉する所でないのである。斯うなると唯厭な感じのみして、創造力なき藝術の淺ましさを思ふのである。

甘いものだと云はれるが厭さに、何か新しいことをやつて見ようとする如き審査員には、新しいと云ふ意味を履き違へてゐるのであるまいかと、思はれるものがないでもない。全然自家の本領を棄てたり、自家年來の主張を抛擲したり、自家の手法自家の技倆を蔑みして、其の所謂新しいものに就かんとしてゐる。之は必ずしも悪いとは云はぬ。技巧より出た無技巧ならばそれも結構である。從來の手法や從來の技倆の上に卓絶した新しい試みなら至極善いが、唯に目先を變へようと苦心してゐるのは、下らぬ努力である。道樂氣から出た氣紛れとしたところで新進作家晴れの場所に模範を示さうとする審査員の態度とし

ては取る所でない。會員なり審査員たるものは、模範たらんとする氣込みを以て制作せねばならぬ。模範制作が幾多の新進作家の制作に劣れりとすれば、審査すべき資格はなきものと自覺せねばならぬ。良心は之を咎むべきであらうし、德義は之を責むべきであらう。今日の如く審査員が藝術家のみで組織される場合には、斯くあるべきが當然ではないか。同じことは、日本美術院の同人に對しても云へる。同人と名乘る連中にて果して鑑査に對して耻ぢざるものはなからうか。苟くも鑑査を行ひ審査を行ふ以上は深く自ら考慮せねばならぬ。

近年の傾向として、日本畫に現はれた一つは、下らない努力をすることである。何の爲に畫を描くのか先づ作家の藝術的思索を疑はねばならぬ。忠實に一線一畫を苟もせずに寫生をしたところが、そこに何等の感興も何等の趣致もない。苦んで苦みぬいた擧句の畫材とすれば、其愚や及ぶべからずである。天地萬象皆畫となるべきものであるが作家は藝術的見地より之を取捨せねばならぬ。予は常に畫家は畫を描くを知つて、畫材を鑑別することが分らないではなからうかと疑がつてゐる。此等の例は枚擧に遑あらずであるが、最も適切なるものとしては、今秋帝展に於ける蔦谷龍岬氏の「浦の御座船」を擧ぐべきである。昨秋の同人作「大原の露」は畫面に騷がしい所があつてももつと引締まつた小品物にした方が、效果があつたらうと思はれたが、それでも構圖の上に於て觀るべきものがあつた。しかし今秋の作に至りては唯忠實に御座船を寫したと云ふだけで、そこに何等の藝術的價値があらうか、斯る圖面は製圖家の方が間違なく描く。龍岬は東京の新進作家中最も囑望してゐる一人者であるから、同型の作品中殊に之を擧げて反省を促すのである。

同じ忠實なる寫生圖ではあるが、福田平八郎氏の「鯉」は見上げた技倆である。今少し軟い感じのあつたらばと思ふ點もないではないが、水中の光に映發したさまざまの色した鯉魚の三十六鱗は洵に美しくある。他の力を假らずに鯉魚だけを寫して水中游泳の狀を見せたのも手際である。作りつけの御座船と活々した鯉魚との間は、其差數十里のみならんや。

水中の魚類を寫したものに、院展の前田靑邨氏作「遊魚」がある。才鋒凡ならず。見もて行く中に觀者は魚と共樂を同うする趣がある。一つ一つに忠實に寫生をしたものでないが、濃淡其影を異にして、其效果は忠實な寫生に優るとも劣りはしない。更に忠實なる寫生の例としては院展に於ける速水御舟氏の「菊」を擧げることが出來る。御舟は院展中堅中最も將來ある作家にして、今後赤曜會を背負つて立つべきは唯此人である

が、昨秋の「舞妓」の如きは惡寫實の弊に陷つたもので、御舟將來の進路として甚だ憂慮すべきものがあつた。しかし御舟の寫生は更に一段の進境を拓き今春東京會出展の「鳩」となりて其效果を示した。今秋の「菊」の如きも、細緻な寫生ではあるが、從來の諸作家とは其途を異にし、近く之を諦視すれば驚くべきほど精密なる筆致を以てしてゐたが、他の寫生畫に見るが如く、久しく凝視して興味索然たるものとは其類を殊にし、遠く之を見て姿態幽艷の狀掬すべきものがある。唯其葉の餘りに黑ずんで、實物に見るが如き生々した青い光を缺いてゐるは色彩の工夫に於て未だ至らざるものがある。猶又斯ほどまでに精緻な筆致を用ひずとも、同じ效果は收め得べきものであらうと思はれるのである。他日此作家が斯る筆致より蟬蛻して十分の功果を收め得んことを期待しよう。

院展に於ける横山大觀氏と、帝展に於ける川合玉堂氏とは、最も力作してゐると云ふ點で、推稱すべきである。下村觀山氏の「楠公」は如何にどう贔負目に見ても、行詰つた悲哀を語つてゐる。近年此作家の振はざること夥しいのであるが、今度は其の最も本領であるべき倭縮の行方で描いたから、よし批評家には新らし味がないと云はれても、押しも押されもせぬ彼がどつしりした重味を見すべき筈であるのに、之に又どうしたことであらう。一體に技巧の優れた人であるから、まだ傑作の出ない筈はないのであるが、院展出品のもの丶みならず、市井の展觀にも間に合せものばかりより見ないのは惜むべきことである。よし行詰つたにしろ彼には較上顧盼の勇氣はあるべきである。

觀山に比して、大觀が五點陳列した所は、見本陳列の譏はあるにしろ、大に買つてやらねばならない。其うちで「老子」は彼の得意な作であらうが、凝つては思案に能はずで、道具立てばかり多くて、清靜にして虛を守る老子の風丰とは受取れぬ。跪つた侍童で、說明させようなどとは、窮した遣方と云はねばならぬ。寧ろ「蓮」の色彩の鮮かなるを取るべきか。しかし明畫あたりには、もつと韻致の多いものが澤山あるから、大觀としては決して誇るべきものでない。唯大觀の善い所は底力があつて、男らしい點にある。彼には纖細なか弱い所が微塵もない。近時彼の作にも新し味が減じて來て、進境の見るべきは、獨り手際のよくなつて來たと云ふ所にある。「愛宕路」と往時の「山路」とを比すると手際のすぐれた點は「愛宕路」にあつても、「山路」だけの感興は乏しいであらう。一體此人は反抗熱――文展及競爭者に對する――の熾んな時には頗る熱のある作品を出して、何糞と云ふ氣慨を見せてゐたが、近來安心とともに調子を下げたところがある。今秋の諸作の見答へせぬのも、

亦已むを得ないところであらう。

帝展の川合玉堂氏が他の倉員、のみならず審査員の多數が出品せぬ間に立ちて二點の出展をしてゐる其の銳氣な武者振は天晴と云はねばならぬ。しかも二點ともに昨秋の波と前景とが離れ〳〵になつてゐた作品に比べると、いづれもすぐれてゐるは人意を强うするに足りる。「小雨の軒」は小點ではあるが、廣重の畫をもう一層軟かにしたやうな、善く氣分の出た畫である。しよぼぬれた馬も軒下に佇む子守も落ついて、靜かな細雨情調を現はしてゐる。色の加減も善い。「岩魚釣」は威壓するやうな斷崖、瀬に脊立てゝゐるやうな急流、そこに釣竿を湍流に投じてゐる漁夫、調子は柔かく、布置が引締つて緊張しゐるのは、「行春」以來の作である。委員の作では、菊池契月氏の「鶴」と小室翠雲氏の「南船北馬」とを推さう。契月の「鶴」は平凡な題材を捉へて心ゆくまで軟く上品にこなした手際は　此人獨得の壇場と見るべく翠雲の支那土產は從來の此作家の作に比して規模雄大に、生氣滿幅に溢れて、極めて力强く感ぜられた。西山翠嶂氏の「錦鮮女」は賦彩の巧を見るべきもので、殊に紅流しの皿と紅色とは妙云ふべからざるものあるが、全體の結構は餘りに作り過ぎて品致を缺いてゐる。川村曼舟氏の「閑え」は、先生斷し味を殷き違へてはゐやしまいか。其本領を棄てて、あらぬ方に彷徨しゐるのではあるまいか。昨秋の「三十三間堂」もつまらない努力であつたが、まだ今秋のものよりはましであつたに、今度の作は餘りに細工を弄して、失敗に歸つた。白蓮獄集を伏せて僅に煩悶を表現させようとしたり、敷島の袋や、吸殼を床に散らした小細工を施したり、之では雜誌の口繪か小說の挿畫とより外は受取れない。美人を描くも善し、煩悶を描くも善し、しかし小細工を用ひず、能力を假らずに、主題を表現させる方法があるではないか。栖鳳氏の「あれ夕立に」を見よ、「螢になる祕」を見よ、卑近な斷材を捉へて、之を活かす巧みさがあるではないか。「閑え」の如きは、其氣品は姑く論ぜず。手際さへも決して推稱すべきものではない。同じ美人畫を扱つた美人畫專門の閨秀作家中伊藤小坡さんの「琵琶記」は此人從來の作品に見ざる韻致の高きものであり、栗原玉葉さんの「清姬物語」は氣の利いた纒つたものであり、新入選の柿內青葉さんの「舞踏室の一隅」は現代風俗を取扱つて、表情の巧みさを見せてゐる。曼舟たるもの宜しく美人畫中に於て中流及新進作家の爲に範を垂れ暗示を與ふべき手際のよいものを描くべきに却つて群小作作家の亞流たらんとしたのは、抑も了解違ひではあるまいか。作者は京都畫壇の中堅であり、技術は卓れて居り、殊に帝展に於ては、山元春擧等苗會を代表すべき重要なる人物

なるが故に殊に自重を望まねばならぬ。予は此作者と私交淺からぬを以て、此機會を利用して苦言を呈し置く。曼舟君たるもの須らく岐路に迷はず、又道樂氣を出さずに眞面目に其本領の美に還るべきである。

荒木十畝氏の「松」は與月の舖と同じ題材を取扱つたものであるが、之は主として松の幹に工夫を凝らしてゐる。山内多門氏の「金剛九成洞」は餘りに勁拔過ぎて餘情がない。右半双を見た折には、狩野探令氏かと思つた。松岡映丘氏は今秋に於て金鈴社同人を代表してゐるが、建武中興帷幄の謀臣、意氣頗る揚らず、腰つきふらふらとして危氣なるは甚だ以て物足らず、環境の光景は、比較的調子のよかつたに惜いこととしてけり。新推薦飛田周山氏の「傳說の淵」は色彩の關係で、畫が離れ離れになつてゐる感じがする。矢澤弦月氏は東京新進作家中の有數なものぞが、畫の調子が一體に弱い。しかし今度の「室生の夕ばえ」は此の作家としては寧ろよい方であるが、夕ばえにも似ず、下部が餘りに明る過ぎるは如何。殊に五重の塔の下層に於て此感が深い。塔の下部を薄暗くどつしりと重味のあるやうに描くが、夕暮の氣分を出すにふさはしくある。とは云ふものゝ此作は、決して場中に於て推稱すべきものでないことを斷つて置く。

一體に京都の畫家が東京派よりも優れてゐる。數ばかりでなく、其水準も高い。特選中に福田堂本印象二氏に配するに蔦谷龍岬を以てしたのは、權衡上の關係であらうが、龍岬の畫作は前二氏の佳作に比すべきものでない。「浦の御座船」を學げるならば、他に幾つでも擧げ得べきものがある。堂本氏の「訶梨帝母」は色の諧調に於て優れてゐるが、同じ作家の「兜山映雪」も面白い構圖で、此人必ずしも技巧の人に非ず、構思の奇なるものあるを看取し得られる。

近來の著しき一傾向なる洋畫風は最も多く國畫創作にあり、ついで院展にあり、又帝展にも少しとせぬ。院展に於て此派の代表者は川端龍子氏であるが、今秋の「火生」は甚しき失敗である。此作家としては荷が重過ぎた當然の結果であらう。此作家の着眼は、自然の一部を寫すに奇警であり、小手先きも善く利いてゐるが、斯る理想畫を描くには、轅下の駒であつた。帝展にも此傾向を帶びた諸作は少からずあるが、多くは自然を寫してゐる。中には「南歐の樂土」の如き見るからに毒々しい仰山なものもないではないが、全體から云ふと、割合に落付きが出て來たやうである。元來岩繪具をこてこて塗つて洋畫の眞似をすると云ふのが、てんで誤りである。あゝ云ふ描き方をしたければ何も好んで絹や紙に描かずとも、カンバスを用ふるが善く、

日本繪具よりも油繪具を用ひた方が善い。此風の最も甚しいのが尾竹竹坡氏の八火會である。八火會は竹坡の最努力を現はしたもので、謗嘆に價する。十人二十人のやる藝當を一人でやつてのける手際は、才筆此上なしと謂ふべきである。竹坡が文展に志を獲ざるやうになつてから一時陶器畫のやうないぢけた繪を描くやうになつて、往時の盛名に伴はぬものがあつたが、近來の氏には熱があつて、眞劒勝負の觀がある。其うち最も氏の力を見るべきものは多く花卉にあるが、惜らくは氏の生兵法の獨りよがりは「蚯蚓を食ふ犬」とか、「蟋蟀」の類を描いて、盛んなぶちこはしをやつてゐる。此等も西洋かぶれの惡い一面ではあるが、善い一面には仲々見所がある。洋畫風も此まで徹底させると、洋畫に見ない、別な感じを現はしてゐる。竹坡の如きは木島櫻谷氏と轡を並べた當時日の出の新進作家であつて、今日では優に審査員格である。若し當時今日の如き推薦制度があつたらば木戸御免として帝展に横行すべきであつたのに一朝審査員の反感を買つてから全く失脚してしまつた。之れは氏の方にも少からざる缺點はあるが、審査員の方にも甚しい偏見があつたと云はねばならぬ。廣田氏の帝展廢止卑見中にも此事を一例として痛論してあつたが、至極同感を表する。竹坡をして全く沈淪せしむるは、吾が藝術界にも惜むべきである。彼の濫作を戒め、彼の西洋かぶれの惡癖を矯め、其製作中の花卉の如き熱あり力ある描畫をさせたならば、竹坡は十分に復活すべき素質があると信ずる。しかし之には然るべき有力なる後援者を要するから、果して實現し得るか否やは問題である。

帝展の洋畫かぶれは落付いて、一般に日本畫の領分に多く踏み込んで來たらしいが、文展以後のけばけばしい裝飾風の弊が未だに跡を絶たずに、隨處に見られるは、決して好感を抱かせるものでない。此等は次第に其影を潜めさせたいものだ。全體から見ると飛びぬけた傑作は見當らざるも、一般の水準は高まつたと云ふが至當であらう。會員審査員推選連が振はざるに、中流作家の葵臨してゐる間に、新進作家がとにかく見られ得る作品を出してゐるのは、帝展存在の意義を端的に證明するものではないか。

院展に於ける小林古徑氏の「罌粟」は他の奇を用ひずに、上品に、優し味があり、溫か味があつて、すぐれて美しかつた。此作家の行く路は確かである。匠氣がなく、覇氣がなくして、着實に、しつかりした路を歩んでゐる。決して傍目を觸らずに、日々に其進路を開拓しつゝある。今秋の院展に見なかつた安田靫彥氏は院展中の重鎭で最も藝術的良心に富んでゐるが、此人先年來良寛かぶれとなり、書風の良寛張りはまだしも、畫で

も良寛氣分を現さうとつとめてゐる。良寛は超俗の天眞爛熳な善知識であるから之を慕ふは結構なことであるが、良寛の書は良寛にして始めて能くすべく、良寛氣分は良寛にして始めて表現し得るものである。才子の靫彦が急に良寛摹倣をしたところが、一躍良寛になり得べきものでもない。畢竟するに良寛の形骸を眞似するに過ぎずして、其精神を得ることは極めて難い。靫彦が其技倆を棄てゝ、良寛流の天衣無縫を眞似しようとするのは、惡いとは云はぬが、唯に書を摹倣するやうな簡單なことではない。近時の氏の作品が甚だ見劣りするは、其結果に外ならない。靫彦が此橫路へ外れたに反して、古徑の畫はどし／＼進んで行く。古徑も良寛の書に傚つてゐるとか聞いたが、流石に畫までは良寛氣分に觸れないやうである。靫彦も才子ならば古徑も才子であるが。靫彦の才と古徑の才とには相違がある。古徑は或は良寛になり得よう。靫彦に至りては、良寛たるに餘りに才子過ぎる。

院展に古徑の作品のあるは、院展をして重からしめる一原因であるが、帝展審査員の橋本關雪氏の作品が帝展にないのは何だか物寂しく感じられる。栖鳳氏其他會員諸氏の作品を見ないのも寂寥であるが、あの男らしいきび／＼した、それで詩趣に饒かな關雪の作品が見られないのは物足らない。關雪はやはり大家である。

自由畫壇の諸氏が奮闘振りは目覺しくあるが、藝術界に問題を惹起すべき一作品の發表あるやうに希望して置かうと思ふ。少くとも畫界に多少の影響を波及するやうなものを。

帝展の洋畫が概して步調の揃つて、しつくりしてゐるのに對して、二科會は新し味を漲してゐる。二科會には未來派もあれば立體派もあり、氣分を主として現さうとしたものもあつた。特に此氣分を現さうとつめた作品中にはよいものがあるやうに見受けられた。此會の空氣が著しく個性を尊重してゐるのは、快く感ぜられる。帝展は流石に紅紫絢爛であつて、堂々たる官設の洋畫部たるだけの價値はある。されば此部の展觀には不快な感じをする作品に出逢ふことは殆ど稀れである。日本畫部を出でて此部に入ると、頓に清新な氣に打たれるのは、毎年の感じである。今秋の展觀には場中を壓するほどに力强いものはなかつたが多くは美しい快いものばかりであつた。常に理想派た出して異彩を放たうとしてゐる中村不折氏の「摩耶」は從前の氏の作の如き硬い平板的のものではなかつた。岸田劉生氏の「童女像」は小品ではあるが、帝展中に在りて、やゝ異彩あるもの、藤島武二氏の「女の顏」は流石に力強い筆致である。長原孝太郎氏の「森の雪」はどこかに氣品の揺曳するもの、

金山平三氏の「菊」には洗錬の妙があり、岡田三郎助氏の「榕樹の森」は色彩の調子が如何にも落付いて全體に善い感じを與へる。高間惣七氏の「花園の鷄」は華やかな色であるが、そこに此作者の製作熱は迸つてゐるかの如く感ぜられた。中道達氏の「すまり星」は着眼奇警で、夜の壯嚴を思はせるが氏の力強い蒼潤な作としては何だか物足らない。寧ろ同じ作家の「結氷の湖水」を取らう。吉田博氏の「鹿島鎗ケ嶽對營の朝」雲の色はとにかくよかつた。太田喜二郎氏の「菜種刈」は色の配合が巧みに、山本森之助氏の「新緑の奈良」には情趣掬すべきものがある。一々に作品を評するは避けるが、洋畫のうちに著しく日本趣味を發揮し來れるには興味を催さゞるを得ない。

彫刻部の暗鬪は新聞紙の種となつたが、我等の眼から見ると、あれは當然の歸趣である。新海派と朝倉派との潮流は滔滔の水容易に合し難いものがある。朝倉氏は蒂士拉社あり、東臺彫塑會ありて、其牛耳を執つてゐて、彫塑會に於ける新進作家を代表する覇者であるし、內藤伸氏は朝倉氏と深交ありて、木彫界の風雲兒である。此二人者が提携し、彫塑界の元老新海高村兩氏を向ふに廻して、彫塑界の革命を企圖せんとするのであるから、彫刻部に暗鬪と云ふよりも寧ろ白兵戰のあるのは當然である。從つて今秋の彫刻部は頗る活氣の旺盛たるものありて、未曾有の賑やかさを現出してゐる。新進作家の入選も多く、木彫にも澤田寅吉氏の「人魚」の如き幽艶なものもありて、從前の型を打破してゐる。彫塑界に取りては一進境を開くべき黎明きではなからうか。審査員辭職だ、即時撤回だのと云ふやうな態度はやめて、兩派共の信ずる所に依りて鑑別し審査して、彫塑界の舊弊を一掃し、彫塑界の前途に向つて光明を齎らすべきことを期待して已まぬ。

感想だけにして、一切の評は抜きにするつもりであつたが、引例として間々之に及んでゐる。書き畢つて見ると、やつぱり批評するのは面白くないことだとしみ〴〵思ふのである。

洋畫を一瞥して

久米正雄

二科會と帝國美術院展覽會の洋畫を瞥見した。二科は殆んど最終日が差迫つた日に、それから帝展は頃日寸閑を偷んで、いづれも慌しく一瞥したに過ぎなかつた。だが、其慌しい瞥見を悔ゐるやうな、若くは其慌しさを恥ぢたい程な作品は、さう澤山なかつたから、自分はもうそれだけで堪能した。世には一目惚れと云ふものがあると反對に、一目で愛想を盡かすこともあり得るから、それも止むを得まい。

兎に角、私はいつも二科會を見ると、妙な清新な興奮を、刺戟的な陶醉を、必ず感じたものだつたが、どうしてだかそれは今年は起らなかつた。私が二科會に對する、心持が弛緩してゐるためか。それとも二科會そのものが、弛緩しかゝつてゐるためか。恐らく其兩方かも知れんが、いづれにしても二科會が、今、小さく固まりかけてゐる事は、惡い意味で完成しかゝつてゐる事は、拒み得ない事實であらう。丁度二科會に對する感じは、戀愛結婚をした愛人同志が、各々少しづゝ世帶染みて來て、倦き初めた頃の心持である。その代り彼女は、家政婦としては稍々大人になつた。

兎に角、兩三年前の二科は、暗中模索してゐただけに、煩悶してゐただけに、活氣があつた。焦躁の感や、雜音の不愉快がその中にはあつたが、何となく各畫家の「心」が潑剌と動いてゐた。此頃の二科は、さう云ふいらだゝしいもの、がむしやらな反逆的氣分のもの、さう云ふ喧騒がなくなつた代りに、各作家が各々自分の方途を見出し、又は見出した積りで――或人は模倣から入て、模倣に其儘安住したものすらある。――各々小さい自己の殼の中へ、安全に閉ぢ籠らうとしてゐる。正面からぢつと押して行つて、自然に發動する人格と云ふものよりも、一種の偏つた風格を、努めて作つた個性を、完成しようとしてゐる跡が見える。二科會の中堅所の新進たちも、各々手が定まつて來た。落着いて來た。勿論それはいゝ事には違ひない。無暗な焦躁と力作熱ばかりが、藝術上の精進ではない。議論な

る努力、中から靜に流れ出る力こそ、より深いものである。さう云ふ意味で、讀すべき二三の人々があるにはあるが、併し概して繰り返す事によつての、退屈なる完成が見えない事もない。そして同時に又、同じ會場に並べられる因果から、自然の相互影響に依つて、各自相似た傾向のものは、益々相似して來た事も拒み切れまい。梅原型、安井型、中川型、何型、何型と云つた風に、それらは各々病菌の系統を辿つて、區別を作り又區別を作つて、それ〴〵大きな一の二科型に一網される。あゝ、二科だつて矢つ張り會場藝術の悲しさはあるんだ。僕たちの創作に、雜誌藝術の悲しさがあるやうに。

併し、そんな餘談は兎も角として、今年の二科會に於て、最も著しくなつた傾向は、非常に「文人畫」が增えたと云ふ事であらう。洋畫の文人畫、さう云つたのでは、鳥渡妙に聞えるかも知れんが、つまり作者の風格なり味なりを、單純に無邪氣に表出したもの。散文詩と同じやうな意味で、繪畫詩に近いもの。朴素な子供の樣に自由な稚拙な感じ。惡く云へば繪畫の造形的な正道から離れて、或る寧ろ文學的な感じに重きを置いたもの。

最もいゝ意味での例は、中川一政君の作品である。あの青い罎とコップとの運作、誰か一人として、あのナイーヴな感じを、可愛がらずに居られよう。それらの靜物は各々、あの單純な畫面の中で、各自の存在の淋しさを、沁々呟いてゐるやうに見える。あの罎の青さ、と、いふよりも寧ろ純さ、の如き、實に智巧を交へない何とも云へぬ單純な色で、まことに微妙である。私は悉く微笑を以て、それに數分時徘徊した。が、併しあれが繪畫と云ふ造形美術の、究極のプロダクションかと思ふと、餘りに小品的な感じがする。あれは僕らの方で云へば、俳句とか短詩とか云ふやうなもので、それ自身存在理由は劣るべきでないし、勿論結構なものではあるが、どうも大きな制作と云ふ氣がしない。さうした傾向は、今の際淸凉劑として、殊に嬉しい者には違ひないが、又餘りにそれに終始されては困る氣がする。林倭衛君のもさうである。君のは又石垣も畑も、橋も一つのふはついた塊のやうにしか描いてなくて、しかも矢張り一味自然に對する單純な沁々した感情を抱いてゐる。がこの詩のペリトレンズが、繪畫的な形象を暈し、一種ナイーヴな感傷が、對象との間に霧・立罩めさせて、はつきり畫家的な對象物への肉迫を、弱めてゐるのは何處となく物足りない。

會員津田靑楓君のも、その又代表的なものであらう。そしてそれは殊に和式であるだけに、より俳畫めいた、文人畫の傾向が著しい。稚拙な瓶、ヘラで目の痕をつけて花籠。而していろ

いろな花の姿、矢つ張り此處にも中川氏に云つたやうな、稚拙な味は充分ある。が、これは兩氏の時代の相違であらう。津田君のは少し陳套な感じと、少し作り過ぎた稚拙の風格とが、稍々苦澁の跡を止めてゐる。氏の今年の努力は、珍らしく嬉しかつたが、矢張りかうした文人畫に、氏も終るのかと考へると、其心境には同感しながら、何となく「花鳥風月」の物足りなさを覺えた。

此處に於て私は、矢張り純畫家的な、中堅の會友どころでは裕伊之助君や鍋井克之君の、正道な傑起を要求したい。その意味で會員の正宗得三郎君が、今年は居なかつたのも淋しい。而して更に梅原龍三郎氏のないのは猶更淋しかつたし、安井曾太郎氏の妙に變つたのが、何となく必然な氣がせずに、在來の技巧に退屈した所から、手法を換へたやうな氣がするのが、面白くなかつたし、——あれも一種の文人畫的傾向に煩ひされたのではないかしら。——一體に正統派の人々がつまらなかつた。たゞ其中有島生馬さんの桃の畫は、或る點では甘いと云ふ非難があるかも知れんが、矢つ張りいゝと思つた。あれには適度の詩があり、文學的の情緒があるが、明に文人畫ではない。私は氏の畫には隨分不服を持つて來たが、今度は稍々慰められた。

それにつけても院展の洋畫がなくなつて、山本鼎君や木村莊八君なぞの正道な、素直な寫實派でしかも一種の詩の感じがある、作品に接し得なかつたのも物足りなかつた。

帝展では併し、又餘りに正統派の畫家的なのに、いつもながらではあるが愛想ヶ盡かして、少し二科あたりの文人畫的傾向を祝福したくなつた。帝展で著しい傾向と云ふのは、いつに變らぬ事かも知れんが、婦人雜誌の口繪の引伸しである。三色版である。椅子に腰をかけてゐる若い婦人、それは或は鳥渡向きが變つてゐたり、光りの當り所が違つてゐたり、或は本を持つてゐたり、小供を抱いてゐたり、少しは變つてゐたところで、何の相違があらう。だからその中の熊岡美彦君のや、某——君のを拾ひ上げて、特選とした事は吾々も點頭けるが、それとて表面的な技術以外に何の差別があらう。庭の一部に日が黃色く輝いて、そこにも女か小供か動物かゞ居る。その中で淸水良雄君のゝやうに、通俗的な淺さだが、鳥渡變つたのを發見したつて、又大久保作次郎君が、外光の斑點の中に又美しい女の人が、「病後」から癒つて子供をあやしてゐたつて、それが又何にならう。況んや其他の風俗畫をや。若しそれ風景畫に至つても、湖水を小高みから眺めたと云ふ課題でも出されたやうで、其中にたとへ南薫造さんののやうな、選者の御手本が交つてゐて、さすがに仄かな美感を感じさせて與れたところで、鳥渡仄かな快感に足を止

めるだけで、今更それ以上どつのからのと云ふ氣も起らない。高間君の庭や牧野君の庭や片多君の庭やは帝展の相變らず中堅で、稍々異色とは云へそれ迄である。靜物にしても、そんな感じである。田邊至氏が卓布をどう扱つたつて別に變りやうがないし、平山金三氏が去年の芍藥の代りに今年は菊を描いたつて、……いや、併しこの靜物は鳥渡いゝものだ。去年のも通俗的とは云へ矢つ張り美感を感じたが、今年も何となく氣は咎めながら、矢つ張り鳥渡感心した。此人手法はクラシツクで、アカデミツクかも知れんが、何處となく清新で、寧ろイキである。澁さも顰めつ面でなく、何となく黑白の對照なぞが、通俗的と云つちまへばそれまでだが、粹な洗錬さを持つてゐる。白桃畑に風雨の日の白い波頭が見える風景も鳥渡いゝ。二科の有島さんのと、鳥渡いゝ取組だといふ氣がした。帝展も藤島さんや南さんや此人なぞで、固められたらさう滿更惡くなくなるだらう。

そこへ行くと同じ人物でも放後の室の一隅に、小さいながら燦として光つてゐるのは、岸田劉生氏の童女像である。岸田氏にはいろ／＼其進退に就て、鳥渡反感を持つて見たい人だが、併し繪を見ると眞に敬服する。殊に今回のなぞは、これまでの無益な精進的な迫眞力が、砕けて云へばあの空力みが、露骨でなく中へ浸み入つて、しかもそれを少しも甘くない「父」の情緒で融し、堪らなく可愛ゆい愛を以て「子」を描いてゐる。或はではカリカチュアライズしてゐると思はれる位、——併し決してそんなものではない事明白だが、——愛の力が動いて對象を凝視してゐる。氏が年々反抗的な力作味から、かうした深い美へ入つて行くのは、武者小路實篤の文章が、だん／＼磨きがかゝつて行くのと同じやうに、鳥渡反感は持ちながら、——それは氏らを妙に取澄く末期の氣分から來るのが大部分だが、——日本一だと云ふ氣がして來る。此の人たちを見ると、鳥渡勉強したくなる所以だ。序でに、と云つては失敬かも知れんが、今年は椿君はどうしたのだらう。何でも此人帝展へ、繪を持つて行つたと新聞で見たが、矢つ張り出さたかつたのだらうか。出したのを落としたとすれば、帝展審査員に勇氣がある。

審査員で思ひ出したが、終りに臨んで、藤島さんの女の顔鳥渡いゝと思つた。バツクの筆觸をあらくして、人物の顔をすべ／＼と色つぽく描いてある。小古な近代的な感じで、少し下品だが、目には殘つた。併し、もう一度見に行く氣はしない。

繰り返して云ふ。慌しい管見だが、もう一度見に行かねばならぬやうな氣のする作品は、僕に取つてはまあない。美術祭りの樂屋を、見に行くのなら格別だが。——

藝術の本質より觀た帝展と院展の彫刻

木村莊八

一

帝展の彫刻のうちでは木彫の(二四)女生(石川確治氏)が稍見られると思ひたゞけである。之れには兎に角材料を比較的素直に感じたところはある。他には全帝展を求めて之れだけの——假りに此の字を云ふ——「藝術的」些細の味も、然し殆んど見當らない。

作者が認めた材料の幻影を彫作に仕生かして——低い程度の意味でも——結果を藝術品に解き放つ爲めには、この作(二四)は然しまだ〳〵、當分は、手を加へなければならない。材料を感じたことはこれでわかるが「感じ」を創るには之れからで、實はその境が彫刻の要である。それを、仕事の下彫りと云ふか、殆んどやりかけのほんの入口のところで、今見るあの像では既でに仕事が途切れてゐる。あれで「出來上り」では素直と云へと情けない。餘り無力である。肝心の線が解きほごされずに諸所に木の中に曖昧にねむつてゐる。(顔、手等、殊に部分について見よ)。つまり繪で云ふ素描の〆まらぬボヤけたところがある。從つて形ちにいゝかげんが起り、我々は之れをこのまゝ一彫刻とは受けとれない。——只以上は難じたが然し難じる前に云つたつまりあれだけの善意の批判を見る者に與へるところが、此の像の微弱ながら生きかけるとりえで、それは兎に角材料を素直に享けてゐるから——さう思はすから——と、前言に返る。

この像の乘つてゐる共木の臺のくり方は何とおろそかな美感に乏しい樣であらう。かう云ふことも「像」をつくる作家は當然氣をつけなければ美術家には足りない。

○もう一つモティフは善意に想察出來る作が(四四)子供の顔(貝塚七郎氏)のものにあつた。然し如何にも表現が淺く、うるほひがなく、材料の皮相にしか觸れてゐない。効果が不斷掃すぎてモティフの健康さ(?)も作者の偶然か、必然か、怪しいものに思はれてたよりない。——殊に何故とも云ふ意味であのメガ

ホーンの様な不細工な嚢をつけたのだらう、然も同色同質に。

あれがある爲めに――その健康さが初めてあの種の素材には何所までも深いよりどころとなるものを――あの首は稍もすると第一感で怪奇感(グロテスク)を受ける。容易くグロテスクにしてはあの塊りを刻んで形美を起す意義がなくなり、(仕事は樂になる)、極めて能なきすさびに思ふが。尤も、眼や口のあたり作味それ自身怪奇でないことはない。然しそれは表現が不完全な爲め材料負けで出たのかも知れない……

何しろ、かう云ふモティフはよさ想ながら然し効果の漠とした、善くも惡くもとれる、觀者に云ふ可きを云ひ切れぬ作は、よくあるがそれで批評者の善意を閉ざす。

私の善意が汲まれゝば幸であると作者に云ふ。

○(四九)草昧の世(日名子實三氏)を見よ。あゝなつてはおしまひである。人體の健康さを曲げ病的を好んでかき出し、慰樂してゐる。何と惡い趣味だ。――私の「善意」は私だけの主觀で若し(四四)のメガホーンも(顏の或る味も)その種の作爲なら、何も云ふことはない。

○ さう云ふ作家は人生が暗く、私は哀れむ。同時に排斥するだけである。(三八)指環(荻島安二氏)も――(四四)式に不離豁だが――その種である。

○(一)煩悶(建畠大夢氏)を見ると兎に角から云ふ仕事――鍛冶職の仕事、大工の仕事と云ふに同じ。渡世の仕事――のコツを呑み込んだ技術を試みる爲めに、彫刻を生活の手段にしたあまりに、現象的のはかない受感が濃すぎる。あはれである。仕事が全孤人的でその生存の漸く能なき影となり、美には一點の機縁もなく、索莫たるものに感じられる。

○(二)(三)(四)等――その作侶多し――は只拙い空虛なものである。生活手段の仕事としてもとりゑが少ない。(五)輪車(新海竹太郎氏)は又ヴルガーな荒んだ細工で生活の虛無背景だけ忍ばれるに止どまる。

○(五一)浴後(北村正信氏)は頗るかたく、石そのもので、(三七)寂境の夕(關野聖雲氏)のひからびた木彫りと好一對である。形似をいくら刻んでも何にもならない。彫刻は矢鱈に人間を引き寫す手職ではない、決まり切つたことだが、いろ〳〵木彫りや、大理石にこの類が澤山にある。この低さには殆んどあきれる。

○ ポーズに就てかくことがある。――何故まるで無作爲(だらしがない)か又は作爲一杯(イヤ味)のポーズのみとるのであらう。それも仕事の素因が元來內にはないものを外から切り貼るから無理もなからうが、(七七)彫(大杉朝雄氏)のポーズ

など通俗だが――つまり通俗だけに――先づ無事な方である。あの上げた兩手を下げ素直に膝において、足もギクシヤクさせずにおとなしく作つたら猶よからうに。人の形ちには、平凡なやうな無理のない極く當り前の形ちに然し美に適ひ、生理にも適ひ健康にも適つた靜雅な美しさがあるものである、その奇もない樣なところに然し初めて汲めども盡きぬ人間の深い美が出て來る。それを描き示し、刻みとる仕事が作家の眼の要るところで、何も不整形にする事が、美術家の仕事ではない。極くつまらぬ、然しながら專門の境にはそこに唯心の意義も潜み、造形の根もある、極く重大なことである。が、只美を識らないとわからないことだから容易くは人に味到出來ないかも知れぬ。(シヤヷンヌのポーズやギリシアのものゝ其形を見よ。)――そのポーズのいつも帝展のひどさ――(七二)漁師(北村西望氏)など驚くばかりである。物質の眼はあつて靈眼はまるでない、その露骨さを思ふ。その他(八〇)だとか(八二)、(八四)、(五四)、(五三)、(六三)等、擧げるにいとまがない。餘りにすさまじく美に盲ひすぎる。――(二四)のポーズだけ漸く素直である。――

○(五四)ポーズせる女(松田尙ゝ氏)を思ひ付きでこしらへる樣な、そんな仕事の目標の低さでは――又それが特選候補とか何とか先號に賞揚されるあの會の空氣では――全く美はおろか、技術と云へど、進まないのが尤もなことである。

○審査外と云ふ札のついてゐる人のものには共通の或る味感があるが、それは木彫(三三)(吉田芳明氏の蛇遣)にせよ石膏(一一)(吉田三郎氏の彫)にせよ、形ちの彫り出し方にギゴチなさの少ないつまり器用さで、叡智に係らず習練で至れる只技術味である。材料さへあれば、ある點まではモデルに觸發されて、それをおかしくなく寫しとることが出來ると云ふ程度の工作メリツトで、彫刻作家の樂屋落ちと云ふ可く、他には何にも世に通用しない。で、それが然しあの井中へ行くと互ひに勵み合ひ奬勵されてゐることを感じる。およそ目標の低さを感じるし世に不有益をつく〴〵感じるし、小人閑居して不善を爲す愚かしさを感じる。特選の(一七)岐路(大國氏)と云ひ(一八)後悔(柴田氏)と云ひ、あの會のその境を語り、我々はその種の空氣へどう機緣が保てるか、機緣は更に感じられず、只バカバカしくなつて來る。

○岐路と云ふのが二つある。二つとも今云つた工作の樂屋味をそなへたもので、それを除けば他に何のとりえも味もなく、美はまるで知らず、醜の肯定がある。形美を唯一の作機緣ともたのむ彫刻技の道に就きながら然しそれは全く蹂躙して(この兩像の淺ましく醜く、無能な出鱈目な汚ないポーズを

見よ）只々ものをこしらへることだけ特技としてゐる。又ものが築屋落ちの「あかぬけさ」に出來ればあとは出鱈目でも卑賤でもかまはないとしてある。より重要で根本の方面のことは。――批判にたへず。

○　之等が政府の主催のもとにある現象は思へば、日本のすさましい恥だ。――が腹も立たない。

○　私は初め見た時（五九）舞（石川確治氏）を能なき愚作に感じたが、（二四）を見てから見直すと成程、（二四）のいゝところは愚作の（五九）にも然しあることを感じた。で好意をよせた。情けないかな。有るかないかの好意である。然しあすこでは初めて事實であるから云ふ。

ねぼけたつまらぬ作である。彫刻としてはまるで問題にならない。然し、つまらない、實にとるに足らぬながら、ほのかに作味に時に可憐なたど〳〵しさと或る温か味があり、それは素直な（二四）と同じで決してイヤなものではない。で他には全くこの影だにない。――此の作の着ものゝ外線など肉がゆくなる程切れの悪い、ヌルヌルで氣持のわるい間の抜けたものだが、私は帝展ではやつと此の人（石川確治氏）を無氣力にとることが出來ただけである。

二

院展のものはそれを見てから日が經つたのと、格別注意しなも當時見なかつた爲め、何があつたか、殆んど忘れた。然し、只、川上邦世氏の三つの木彫りをおぼへてゐる。それには風格がある。作者の愛情があり、あれ等を刻んだ生活の境に思ひをひそめた姿も忍ばれて、この愛感は微笑める　素直に好意の持られる一境である。帝展にはさう云ふ味は更に々々なく、否今迄の彫刻にも餘りこゝまで作中に忍んだ風情の味は容易く見たことがなく、私はあの作を愛するものである。

あの作は無心に熱心に材料にとけてよく刻んである。作要求はひくい。然し仕事のスケールの如何は第二回として兎に角作者は自分の好みを、その好みの滿足の行くところまでどうかして刻み込まうとあの作にかゝつてゐる。――その効果が又中々作家の風情相應に素直にうまく出てゐたと思ふ。且あの作家は前より進んだと思ふ。さう云ふ作は、一寸の玩具にせよ些細の床おきにせよ展覽にかける値打ちがある。帝展の様な出鱈目を並べる破廉恥に比し、どの位ひ有意義か段がちがふ。私はあの作の作られ方には（先づ無形に）好意を持つてゐる。

賞めすぎたかもしれぬ。然しあれだけ作者と作品と融けた、故

果も稚拙でなく、見て感じのある作の仕事は、一體世間にさらふ。にはない。私はそれを認めるのである。

○ 實は院展で繪よりもあの木彫三點を一番素直に觀賞した。面白く思つた。

○ 一般の露骨なロダン影響に對しては——それも帝展の歪め方より數等粹も誠實もあるが——私は批判を持つてゐる。然し此所には簡單にしか云はない。ロダン影響はいゝ。然しロダンの缺點も鵜呑みに學ぶのはつまらぬと思ふ。ロダンは強ち彫刻に正道の人、完全の人ではないのである。(私はこれに就 は嘗てわりに詳しく批評を書いた。)唯心が淺いのは藝術の致命である。寫實はいゝことである。然し手段である。美に奉仕して初めていゝが、寫實が目標になり、即ち手段味が到達頂點と仰がれて省察淺く只人間やものがモティフの要素となるのは、——過々その誠實勤勉な遂行は美の一階に至ることはあれ——賢い道ではないと思ふ。肉を石に代へても仕方ない。美を石にうつさなければ仕方ない。そこのところがロダン影響の人の作には了解不鮮明と私は思ふが、(作品の效果にも同じく感じるが)——つまり淺い。然しこれは個々作品について丁寧に云へるのが一番いゝことである。私は今院展評についてそれが出來ない。それ故この機で、院展についてのことは打ち切りたいと思

三

要するに、帝展の彫刻は殆んど藝術の名に全く適さぬものばかりである。がらくたともゴミとも何とも殆んどたとへやうがない。

○ レオナルドが彫刻家と畫家を比較して彫刻家は音響を立て、勞力を用ゐ、身體も室内も汚れに汚れ苦闘して辛くその作をこしらへる。それに反して、畫家は靜雅に室内に座り、耳には音樂を聞きながら、悠々と仕事をする事が出來る。彫刻家に畫家に比してその仕事の境で劣ると云ふ意味の、感想を述べてゐるのを見た事がある。支那では、畫家や文人は早くから尊習の作家にふさはしい地位なり待遇なり與へられたが、彫刻家は長く一工匠の卑賤な扱ひしか受けてゐなかつた。——それにも(レオナルドの謂ひも)、強ち故がないとは云へないと思ふ。事實彫刻家の作家の條件にはさう云ふ工匠範圍が少なからずある。現に作物に物質世界の輪線の濃いものを以つてものを直接空間の存在に象どる術、世に云ふ血で血洗ふと云ふ種の性質が仕事それ自身の組成に斷ちがたくあるのである。うまく行けば世にも高貴な仕事の代り、拙く行くと忽ち醜を身自ら作る。

——この仕事本來の質にあるけんのんなカセを打ち破つて、塊即美の境に到る爲めには、餘程の高さの唯心境から仕事が起らなければ、彫刻は所詮效果に至らない…………

○が、そんなことには帝展はまるで世にも尻のカツパである。論らう方が愚なだけだ。

○

はるかに院展あたりの仕事の方が少くも藝術境の感じを持つてゐるだらう。尤も簡單に感心は出來ないが、時に美の消極さまでは有ることがある。殊に今年は川上氏の作の樣な中々無垢純情の風情ある仕事がそこにはあつた。此の人はさすが木彫師だと思へる樣な味感があつた。——概して、丁度洋畫に云ふ二科對帝展の差位ひである。いろ〳〵貶けやうが一筋〆切に追はれてかき、本意ないかき不足も多分あるかに思ふ。之れで擱筆することにする。(大正十年十月下旬)



今秋野球界の壯觀

飛田穂洲

九野球團の來朝

外來野球團が今秋の如く東京に流込んで來たことは全く稀れな事である。加奈陀中商賣人、インデアン、華州大學、バンクーバー朝日、全布哇、沙市旭、布哇島ヒロのゼー・エー・シー、シヤアマン・インデアンの八チームに加へて十月下旬には布哇ホノルヽの精鋭を蒐めたオール布哇と稱する一チームが來朝するとの報道に接した、此れを合するならば都合九個の外來軍を迎ふるわけとなるのである。九、十、十一の三ケ月間に九個のチームを引受け、しかも大學リーグ戰までもなさねばならぬと云ふ事になれば、その目まぐるしさは一通りではない、勿論此等の事實は一面本邦野球界の殷盛を語るものには相違ないが、早慶明法立の五大學と關西に於けるダイヤモンド、スター、大阪毎日の三倶樂部を合せて僅か八チームに過ぎない現今の勢力では其の負擔が可成に重過ぎはしないか、殊に日本は學生チームの天下で、學生チームの援助を得なければ、此等外來チームは殆んど經濟的に助からぬのである。學生野球の專門家ではない、野球ばかりに沒頭する事は全然許されないことはわかりきつてゐる、五大學チームが試合を强要されて此れを拒む事は勿論易々たる筈であるが、そこには種々の事情もある、布哇、亞米利加共に早慶明の諸大學はその遠征都度に彼の地の同胞より少なからぬ好意をうけてゐるから、その返酬としてもむげには斷り兼ねると云ふ事もあらうし、また一方には折角使つて來朝したチームに經濟的の苦痛をかけたくないと云ふ所謂武士の相見互と云ふ事もあつて、一回や二回のゲームは是非とも戰つてやらねばならない。自然過重のゲームが各大學に負はされる事になる、多數のゲームをなす事に就いて時日さへ許すならば、それは必ずしも不可ではないであらうか、眞の野球戰の興味を味はうとするものには聊か迷惑に思はれぬでもない、ゲーム興味を中心とするならば、それは數でコナスわけには行かぬ、十

の悪戰を見るよりは一の善戰をしんみりした氣分の下に、或は緊張した氣分の下に競球する事は必然の要求であらねばならない、試合數が多くなれば總てに粗雜になり、粗雜にならぬ迄も眞劍味から遠ざかる事が屢々ある、試合に眞劍味がなくなれば私共は野球戰に對する愛着心を失はねばならない。血眼になり氣がつまるやうになつてこそ試合氣分は味はれるが、單に技術の優劣のみを爭ふと云ふ事では試合の精神的價値は無視されたものであらう。

殊に今回の如く猫も杓子もと云ふ具合に飛込んで來た中には日本の大學チームに歯もたゝぬものがあつて、其勝負は殆んど段違ひの感を呈し、一向歡迎されぬものもあつた、かゝるチームは勝負と云ふ事には我々が思つてゐる程深い執着心はないかも知れぬが、經濟的方面からは非常な打撃を蒙つたに違ひないであらう。この經濟的方面の事は一般の人々には何等の關係を有せぬから念頭に置く好球家は少ないであらうが、外來チームが經濟的に失敗して四苦八苦するやうな狀態に落つる事は對外的に甚だ面白からぬ結果を殘す事になるのである、失敗チームが辛じて歸國した曉に於て彼等は必ずよき印象を殘してゐないに相違ないのであるから日本の事を決してよくは云はない、事實を事實として語るならばまだしも一種の腹癒せとしてある事ない事かき混ぜて惡口をされては堪らない、興行人の手などに弄されたチームのメンバーが虐待に虐待されて歸た時などの事を考へると私は甚だしい不安に驅られざるを得ない、昨年來朝した商賈人野球團の或る分子が監督ドイルに不平を抱き分裂して歸國した際の如き、ボーン、ザムロック其の他の不良徒が桑港に上陸と共に排日記者に語つたところのものなどは實に寒心せねばならぬ、彼等はドイルに對する不平までも日本人の不深切にかこつけて針小を棒大にした位には止まらず、捏造の上に捏造して出來るだけの惡口をなしてゐる、『我々は命から〲日本から歸へつて來た』と云ふやうな不埒な言動をさへなしたのである、幸にしてドイル及歸國して此等不良分子に對する反駁痛烈を極め、却つて彼等不良徒の面皮をむいて與れたので聊か無事なるを得たやうなものゝ、此れが全部不滿を抱いて歸へつた時の事を思ふと悚慄せねばならない、更らに太平洋沿岸から來た外人チームには明らかに此の杞憂をかけ得るのである、国際野球戰は一方には非常によき影響を齎らす代りかゝる不安も伴なつて來る事も思はねばならない、米國人は金と云ふ事には私共の想像もつかぬ程の執着心がある。彼等は經濟的に失敗があると精神的待遇等は凡て忘却して仕舞ふのであるから此の點の呼吸を充分に呑み込まぬと此方では十二分に盡してやつた積り

でゐても丸で反對の事を云ふやうな事實は數多くある。早稻田大學が招聘した華州大學選手などグラウンドに於て妙な擧をあげたり、投手を彌次つたりはするが割合によき態度を示してゐる、けれども一度金と云ふ事になると彼等は目の色を變へる、金が欲しくて欲しくて仕樣がないのである、此れが學生であるかと思はれる程驚くべき拜金振を發揮する、華州大學は早稻田から二萬圓の保證を得、日本滯在の費用は全部早大が負擔してゐるのであるから、一等船客として往復しても二萬圓あれば十分であるばかりでなく、利得がある、しかも彼等は二等船客として來たから一萬圓以上を餘し得るにも拘はらず、早大軍との試合が終ると或る興行人の手に渡つて滿支に轉戰する契約をなしたと云ふ事である、早大は招聘者として出來るだけ彼等に歸國を勸告したが、『既に早大との契約を果した上は自分達の行動に干涉を受ける理由がない』と云ふ態度で金のためにゲームをすると云ふのである。云ふまでもなく早大は此れに干涉するわけには行かぬから自由に行動さするほか道はないのであるが、此の滿支旅行が成功して彼等も滿足し、興行者にも手落ちなく終れば何事もないお互に萬々歲である、私はさう云ふよき結末を得たいと思ふ、唯私の恐れるのは不成功の場合である、彼等が早大から得た好感までも打壞して例の我儘な土產を持つてシヤトルに歸る樣な事があれば獨り早稻田の迷惑ばかりでなく我々日本人の迷惑であり、更らに在沙市同胞の迷惑ともならねばならない。昨年サンテルを籠絡して異鄉に泣かしめた無恥な興行人のある事實を思ふ時私共は一層警戒せねばならない。

華盛頓大學のことは私の杞憂に過ぎないであらうと思ふが、多くの來朝したチームの中には必ず經濟的の打擊を受け非常な困難を生ずるものがあるに相違ない、此れは自發した罪で我々の何等關係なき事ではあるが如上の理由からすれば決して安如たり得ない事柄であらう、さればと云ふて弱きチームを强くするわけには行かぬから排斥防禦するより他に道はない、けれども此れによつて他を考へて置く必要は當然起つて來る、即ち外來チームの防止策である、頼みもせぬのに續々と來朝し、それがため迷惑を感ずるやうな事があつては馬鹿々々しい事である、明春よりは在大學及び其の他有力なるチームに交涉なく來朝したチームとは一切交戰せぬと云ふ規約を造る必要があると思ふ、さすれば今秋のやうに無謀な押掛けて來る事なく、精選された二三チームを每シーズン招ぐ事が出來、我々觀球家としても大に助かる事を得、萬事に好結果を齎す事にならう。

外來チームの强味

今秋のシーズンの先頭を切つたものは、加奈陀軍にインデアンの兩チームであつた、インデアンは餘に弱く東京に於て慶明及び加奈陀と戰つたが遂に一個のランをすら得る事が出來なかつた。元來米國には黑人（ニグロウ）チームには一流の商賣人（プロフエツシヨナル）を凌ぐ程の強チームがあるけれども亞米利加インデアンにはさして強いものゝあるのを聞かない。此のチームは高等學校（ハイスクール）の學生を以て組織したと云はれてゐるが其の眞僞は知る由もなく、興行者の手によつて渡つて來たのであるが、沙市の日本人などには大分その前途を危ぶまれたとの事であつた。加奈陀軍は半商賣人のチームで年配も平均二十七八であり技術にあつても頗る洗錬されたもので、慶明共に非常な苦戰をなした、明治は三對一、慶應は二對零で共にその第一回を勝つたが、之れはまだ彼等が陣容の整はぬ前の試合で慶應の勝利は第六回加軍が一舉四點を得たが、終りを持つた慶軍の攻擊が完了せぬ以前に猛雨となつてコールドゲームとなり、慶軍の勝利となつたのであるから力は充分加軍に認められた、第二回戰は兩軍とも易々と打破られた、慶應は六對零のスコアで慘敗した。明治は相連れ立つて長野松本に轉戰したが、松本のゲームの如きは十五對零で明軍大敗するに至り、大阪地方に於てはダイヤモンドもスターも零敗を喫し實に破竹の勢を示してゐる。今秋來朝のチーム中にあつて確かに傑出せる強チームで華州大學と共に日本軍を蹂躙したものである。早軍とは十月十一日に會戰する約束が成つたけれども雨のために中止となつた。

バンクバーの加日は外人を四人加へて來たが、其の四人の外人は餘りに勢力が微弱で援軍の効を成さず、稻門立教に敗れて東京に失敗し、關西に去つてからは相當の成績を擧げたが、これも遠征としては成功せなかつた。全布哇と稱したチームは日本人の選手に布哇土人等を加へたものであつたが、直後大阪に下つて戰ひ連戰連敗した、東京に引返してからは連雨と華州大學戰に日割を奪はれて五大學との會戰は見ないが、先づ勝利の程は覺束ないかも知れない。沙市旭は純日本人のチームで母國觀光を主としたものであるが、立教法政に連敗した、然し此のチームには二三の有力なる選手が事故の爲めに加はらなかつたゝめ、攻擊方面に不備があるけれども、若し全部の選手が相連れ立つて來たならば、尙善戰の餘地があつたであらう。

布哇のヒロ市に覇を唱るゼー・ユー・シーはホノルルの朝日軍と一勝一敗の記錄を有つてゐるチームで昨秋朝日軍に同行して強打を擅にした沖野を主將とし、ホノルヽの朝日から千田を、オールアラウンド支那人チームから捕手の某（日本名和田）を、ヒロの土人チームよりブラウンを驅つて陣容を備へた、此のチ

ームは未だ一回の仕合もなさぬから其の技倆を知る事が出來ないが、ホノルヽの朝日と善戰すると云へば相當の力を示し得るであらう。

日本運動協會招致のシャーマン・インデアンは契約した選手が約に背きチームの中心をなすべきものなく選手僅かに十人の淋しさで、大阪の仕合はダイヤモンド、スター、大毎等に連破され、東京に於て五大學と戰ふ豫定であるが、どうやら勝味がないらしい、インデアンのチームは二つながら大々的不成功であつたのは氣の毒と云はねばならない、日本のチームを侮り過ぎて此等のチームでも相當成績を擧げ得るもの丶如く考へた推擧者の罪を大に責めねばならない、運動協會などはこれがため少なからぬ迷惑を感じたであらう。亞米利加に生存する此の種の日本人は大に警戒する必要があらう。

此等の試合に介在して稲門對湊の仕合があり、リーグ戰としては明法戰、明立戰等があつたが、未だ油が乘らない、明法は四對三で明治、明立戰は立教軍最初の參加に二對零の善戰をなした。リーグ戰中にあつては慶明戰早明戰が最も緊張したゲームをなすかも知れない、何にしろ外來チームの盛り澤山に頗る影が薄い。然し實際は外來弱チームとの仕合に比ぶれば氣力あるゲームとなるに相違ない。

十一月の初旬或は中旬には一高對早慶の野球戰が開かれる筈で、これまた特種の意味に於てファンの氣を唆るであらう、昨年は慶應が敗れてゐるから今年の一高對慶應戰は慶軍の復讐戰に一層人氣が立つ事であらう。

早慶と華州大學

息もつけないやうなゲームスケヂュルの中にあつて代表的仕合として歡迎されたのは何んと云つても早慶對華州大學戰であつた。華州大學はこれで第三回目の來朝で、前二回は氣品もなくチームとしても完備したところはなかつたから、餘り深い印象は殘してゐないが、只日本野球界に最初に迎へられた米國大學チームとして多くの野球愛好家に知られてゐる。早稻田渡米軍は遠征の途次同軍の客となつて五回のゲームをなし三對二のスコアで七月九日に袂を別つた。決戰は是非共日本でしよう、その代り『君達がとつたやうな試合日割は斷じてとらない、五日間打通しの慘酷のゲームをして敵を苦しめるやうなスケヂュルは日本の武士道にはない、君達をゆつくり休養させてから命がけて勝負を爭はう』と云ふ事を約した。

或人は此れを以て仁に過ぐると云ふが、眞の野球戰はかうして休養させた後ちでなければ出來ぬのが本當で、始から上つ

その疲れに付け入られては遠征軍の立つ瀬がないのである。それは早稻田軍も泌々米國で味はつてゐるから安部教授は或る一部の反對を退けて、華軍選手に一週間の休養を與へた。

外國へ行けば船の疲れ汽車の疲ればかりでなく風土人情の變つたと云ふ點からも意外の疲勞を感ずるものである、其の神經の鈍つた鼻を討たれては多少技倆に差があつてもホームチームの方が利を占める事になるのは當然である。華軍は早大が遠征の苦を嘗めて歸へつたばかりであつたゝめ十二分の思ひやりを受けたわけで、此の點に就いては日本人の寬容に最大なる感謝をせねばならぬと思ふ。

九月九日に上陸した彼等は十七日に早大と第一回戰を行つた一週間の休養と練習に元氣の滿ちた彼等は早軍を一氣に挾み潰さうとした、けれども早大の左投手、谷口には沙市の會戰以來甚だしく手を燒いてゐる、沙市の五回中彼等の勝つた三回は有田が二回、谷口が一回敗れたのであるが、此の勝ち得た一回の仕合も實　殆んど敗けて居り、第九回に奇勝を博したに過ぎないのであるから、彼等は全く谷口に魅せられてゐた、果して此のゲームに於ても谷口の牛耳るまゝになつた、早軍が案外レナードに封られたゝめクロースゲームとはなつたが、華軍には全然勝味のないゲームであつた。早軍は第三回一死後石井、谷口が四球、久保田の雜ゴロ遊撃トーランスが好捕して、谷口を封し、更らに久保田を併殺せんとした稍々右方の低球を一壘ハレットが後逸して石井が生還し、此の一點は早軍敵の過失に得たのであるが、第四回には滿壘となり、第八回には久保田が二壘打を飛ばして肉迫し共に點を得なかつたけれども、勝味に遊んでゐた事は爭はれない。兩投手の戰爭であつたから總體としては安打が少なく淋しいゲームであつた、然しこれをネット裏から見るならば仲々に興味淺からぬものがあつたらう。谷口が緋絨に皆うた若武者の名稱を擔つて敵將を刺す華かさを示せばレナードは千軍萬馬を往來した勇士のそれの如く、二回までも危きを逃がれてゲームを深味に誘つて行つた、こゝに此の日の勝負は鮮さがあつた。成績から見て早軍の捷ちを當然と認めなければなるまい。

天候はこの一回戰を奇蹟的に許したが、雨から雨に續いた天氣は遂に第二回を九月中に行はしめず、慶軍の第一回戰は實に十月一日まで引き延ばされたのである、此の間に華軍は必死の練習を積み東京の風土に　馴れて充實した氣力を試合に漲ぎ得るやうになつた、眞に好運な遠征軍であると云はねばならない、然し早軍の勝てる後ち慶軍もまた猛襲を試みねばならない、然し慶軍は今春以來共のチームに大打擊を受けてゐる。投手が一

人になつた事もそれの大きなものに違ひないが、攻撃力の減退したのは更らに慶軍の惱みの最大なるものであつた。新田投手は敵の攻撃を抑へるにさして衰へてはゐない、けれども味方が得點して吳れねば、徹頭徹尾消極的の戰をするより他にないのであるから、結局敗北は免れぬと云ふ不幸に到達せねばならない。

此の日のゲームも實にさうであつた、新田投手はよく其の分を盡し敵をして乘ぜしめず、稍何んとなく氣力の減退を見られたが巧みな投球に華軍を打ちつけて行つた、若し桐田の巧みさがなかつたならば毎回ランナーを出した慶軍は、順次スコアを重ねて行かれたに相違ない。華軍は第三回に安打と敵失に一點、第四回同じく安打と敵失に一點を入れたのみ、此のスコアも新田に責めはなく、內野手の失策が禍根となつたのである。慶軍は第八回に機會が來た、濱野安打松村遊撃の失、高木の犧牲に三二壘に進み、長谷川の打棒に當り損ねた球は捕手も投手も間に逢はず一死滿壘となつた、一死滿壘或は無死滿壘と云ふチャンスは比較的得點なし難い場合であるが、いつもの慶應ならば何とか明い途を開得る筈であつた、しかも桐原の三壘ゴロに濱野を本壘に封殺し、高濱の三振に華軍の勝を樂からしめたのみ何等の收穫がなかつた。

此の攻撃不能が萬事を解決した、或る人はあの際バンド說を云ふが攻口としては二點を後れてゐるのであるから打つた方が正法であらうと思ふ、私は唯その力の不足を云ひたい、勿論滿壘になつたから無死にして走者を三壘に迎へたから必ず得點し得ると云ふやうな事はないが、桐原高濱と云ふ慶軍の明星が遂に無爲に終らねばならぬと云ふ悲慘は投手新田の苦衷を察したい。新田は漸次圓熟の域に達して行つたのでもあらうが、昨秋の如き生氣がないやうに見られた、私は彼れの中學時代より其の將來あるべきを起してゐた一人であるが、久し振りで見た彼れの投球には淋しい影がさしてゐたやうに見てならなかつた。これ彼れの精神的衰へか、或は肉體的の衰へか、但しは戰友振はず新進榮えざる憤惱が彼れの意氣を阻喪したか、知らず元氣を喚發して其の孤城を守らねばたるまい。

早華二回戰は二日に行はれた、兩軍とも前回と同一メンバーで早大は谷口、華州はレナードが一は復讐的意氣組を以て、一は返り討ちの氣慨を以て相對したのである。先の投手戰は變つて打撃戰に移つた感があつて、開戰直ちに早軍が久保田の二壘打に一點を得、空氣はいやが上に緊張した、華軍第三回に一點を返へし同點となれば、早軍は第五回に松本石井の好打に一點を加へて華軍を捨て、二對一のまゝ第九回に入つた、九回は

く波瀾を捲き起すインニングではあるが、誰れしも此の一回に壯烈なる打撃戰が伏在しやうとは思はなかつたに相違ない。

華軍のウエルツ四球を利して進んだ、谷口は此の日一個の四球を出す事なく華軍を撫切つて來たにも拘はらず、一のストライクを得る事なしにウエルツを送り出した、早軍は僅かに一點を挽てるのみであるから聊か動揺せざるを得ない、肥大漢マイルス、遊撃トーランスに代り打ち物も美事に左翼に安打し、マクメン二壘ゴロに殪れて三二壘に走者が進み、マロニー三振に屠られて二死となつた早軍は漸く息をついたがガードナーの一撃は風を切つて左翼に飛び松本の努力も及ばずウエルツ、ガードナーの生還となつた、早軍は勝利の玉をしつかり抱きながら、今や奪ひ返へされねばならぬ破目に陷つた。何人も早軍の敗戰を思はぬわけには行かない、場内は今迄の活氣を失つた。大下が倒てから一層早軍の影は薄くなつたが田中中堅に安打を放ち、久慈の二壘ゴロは名手ウエルツの併殺を急で失策したから、こゝにどうやら形勢は一變しさうになつた、果然平靜を失つたレナードは本壘に暴投し、球はプレートに強く當て捕手の頭上を飛び審判芦田君の胸を打つた、兩走者は雀躍して互に壘を進めた、松本の一打は小壘に淺く飛んだ、マクメン死力を盡して前進し確實にグラブに收たが、轉倒して已れの膝を以てグラブを叩たため球は彼れの身邊に轉々した、田中は生還し、久慈は三壘に進んだ、次は富永である、一死三二壘の走者、打手は日頃落付を以て鳴る早軍の老勇士、スコアはタイ、間違てもイキストライングに入るまでの事、ピンチに強き富永をいやが上に強くしたのは同點と云ふ事と、一死であるから次の打者まで望を殘し得ると云ふ點にあつた、條件は早軍によすぎる程である、果して富永は一のボールを得て第二球目を右翼に安打し、一大壯觀を呈して早軍の勝利となつた。

僅か一回の曲折としては餘りに變化に富んでゐた此のゲームは日本の野球史上恐らくは大仕合として初めてのレコードであるかも知れない。華軍の得點も理想的のものであつたし、ウエルツの失策はあつても早軍の攻擊は花々しいものがあつた、偶然と云へば云へ得るスコアであるが、兩軍の技倆が相匹敵し、共に力がなければあれまでの瀬戸は踏めないとも云ふ事が出來やう。華軍來襲の土産には好個のものであつた。

早慶兩軍の潰敗

早軍二勝し、慶軍一敗した、この後のゲームがどう變轉して行くか、早慶軍とも尚二回を殘してゐる、華軍強しと雖も巧緻な慶軍は如何なる逆襲をするかも知れぬ、早軍は華軍を連破

じた勢に乘じて更らにスコアを飾るの幸運を許されるかも知れない、と期待されたゲームは兩軍とも慘々たる敗戰を嘗めねばならなかつた、華軍の實力であるかも知れないが、四回連續して勝を與へた事は甚だ遺憾である。

早華第三回は五日に開かれ、早軍はセッツアのために全く手も足も出ず二安打に退けられて三對零の敗北を蒙つた、有川が投手として起ち第五回に二の安打を浴びて二點を與へたが、此の日の有田は決して出來が惡くはなかつたに拘はらず、味方の攻擊が殆んど功を成さず、新田と運命を同じうした、華軍は總じて左投手に弱く右投手に強い傾向を持つてゐる、それは左打者が多い關係もあらう、しかし此の日の敗因は有田にあらずして早軍の微弱なりし攻擊にあつた。

慶華二回戰は十一日、慶軍は再び新田を起て、華軍はレナードを送つて戰つた、慶軍先攻し新田の快打に一點を先取して大に氣をよくしたが、裏に華軍は安打を續けて一點を返へし、以後慶軍はレナードに翻弄されて一安打を飛ばしたのみ、三對一に敗れた、攻擊の不振は勝味に出る事が出來ず、守備の整然たるを殘したのみなるは惜しまれる。

早華第四回戰は谷口が投手となつて早軍必勝を期したが哀れ四對零の慘敗となつた、谷口の出來も香しくなく、内野の守備も振はず、攻擊にあつてはセッツアを比較的よく打つたが、不運につきまとはれ、マイルス、ウエルツ、マクメンの快技に潰滅した、最近守備力に向上した早軍此の日の失策は四對零のスコアを餘儀なくされた、凡の凡なるゲームであつた事だけが印象に殘る。

十三日東京に於ける最後の試合二戰二敗せる慶軍が勇を鼓して戰つたさまは如何にも健氣にみられた、殊に弱冠斯眞田が新田に代つて其中心に起ち、美事華軍を四回まで喰止めた武者振りはよし其の試合は四對零の敗戰であつても、此の新投手の將來を祝福せねばならぬ、慶軍はハーパーの直球をよく打つて兩三度のチャンスを造つたが、其のドロップに遮られて得點がなかつた、斯眞田は善鬪したが相變らず攻擊力なきため三度敗れたのである。

早慶の華軍戰は前三回に活氣あり、後ちの四回は惰氣があつた、此の惰氣たるや兩軍とも餘りに飽氣なく敗れたが爲めではあるが最も此の惰氣を助けたものは天候であつた、一月間殆んど降り續けた未曾有の雨師の活躍は野球戰の興味をまで打壞して仕舞つた。此の早慶華軍戰の間に法華戰が一回行はれてゐる、七對零で法政軍の敗に歸した、法政は可成い丶打擊を見せたが砂澤の球が打たれ勝ちであつたのでスコアが離れて了まつた。

鳴尾の三回戰

東京に於て豫定の試合を終つた早華兩軍は二勝二敗の成績そのまゝ與越勝を交へて關西に下つた、先に二勝し、後に二敗した早軍は自餘のゲームを多少危ぶまれぬでもなかつた、それは華軍が漸次勢力を增しつゝあるが如く、後の試合を輕々と勝つたから　ある、けれども之れを深く考察するならば、三四の兩試合にあつて早軍は可成不利な條件にあつた事を思はねばならない、谷口が指頭の故障、久慈の扁桃腺、大下の學期試驗等、尠なからず選手の氣を腐らした事は事實である、これ等は些々たることとの樣に思はれるが、技倆相匹敵する敵に對しては大きな影響を及ぼして、總ての力を殺がれて了まうのである、早軍の二脆敗をこれらの理由に歸すわけには行かぬまでも、野球戰の微妙を語るには必ずかうした點までも探ぐらねばならぬ、打擊不振や或は失策の多寡によつて直ちにその敗因を決定する事は表面から見た戰績に於ては許されるが、穿つたものとは云はれないと思ふ。

東京から地方に移つた試合は何時でも番外氣分に包まれるが、今度の早華戰は鳴尾に決戰を行ふ事になつたのと、兩軍が死力を盡してその最後を得んとする興味は今迄と違つた意味を齎らし阪神好球兒の氣を唆つた。

第一回は十月十五日早軍は谷口久慈、華軍はレナード、ランドのバッテリーで全力を濺いで戰つた、早華戰が三回勝負であつたならば早軍は美事華軍を立投げにしてゐた、五回戰となつて二—二の決勝戰を迎へたので、此の試合のいづれか勝者が即ち五回勝負に勝つたわけとなる。兩軍がベストを盡したのは無理ではない。

試合の經過は第五回まで華軍稍優勢で、早軍は確かに押され氣味であつた、華軍は五回までに三の安打、二の四球を得、早軍は一安打一四球でしかもレナードに多くの三振を得られてゐる。然るに形勢は第六回から逆轉して行つた、第六回早軍二死大下四球を利し、巧みに二壘を盜んだ折り松本が右翼線上に快打して大下二壘より生還し一點を先取した、此の一點は頗る鮮かなアーンドランで、たしかに華軍の致命傷であつた、これに力を得た谷口の投球はガラリと變つた。華軍は九回まで三人づゝ倒され、第八回此の日の當り家であつたトーランスが安打したのみで、第九回にはマローニーをガードナーに、ハーパーをパッキに代へて打たしめたが谷口の翻弄するところとなり、反對に早軍は第九回に總攻擊を開始し、大下內野安打、松本犧牲、田中二壘の右方に安打し快隼ウエルツよく掴んだが一壘に暴投し

大下生還、田中二壘に進み、久慈續いて安打して田中は三壘に進み、未だ一死であつた、富永二壘のゴロ、田中を本壘に倒し石井二壘ゴロに退いたが、更らに一點を加へて華軍を深く衝き刺した。ゲームは二對零のスコアの下に早軍は此の決戰に打ち捷つた、

試合を概觀すると平凡なるを免かれぬが、此の日のレナードは渡日以來の投球で早軍も第五回まで持て餘ました、しかしかれの技倆には常に運が守つて得ず、彼れの投手の時に限つて味方の打撃は振はず、終回に近づいて早軍に惱まされる、三回投球して三回共敗るゝの不運は同情に堪へない。前半に打ち負けた早軍が第六回後に四の安打を出してレナードを屠つたのは持久戰に勝つたやうなものである。安打早五華四、之れまた投手戰であつた、谷口の投球は指頭の恢復せぬため東京に於けるが如き辛辣さを見せなかつたが、華軍は彼れに魅せられたやうに打撃を封じられる。其處に早軍の持久戰が出來るのである。

第二回戰は翌十六日に續いて催された、早軍は此の試合に打ち捷つて條件をよくせんとし、再び谷口を起てた、同一投手を二回続けて投球させる事は非常な考へものであゝ、米國の商賈人は勿論、大學チームでもかくの如き無理はせないのであるが平生の練習さへよければ二日續けての投球は決して不可能ではない、殊に商賈人の如き其の投球を財產とするものは特別、學生チームにあつて他に勝ち得る投手がなき場合は已むを得ないであらう。

華軍は常勝投手セッツアを送つて戰つた、華軍としては是非とも勝たねばならぬ試合である、此の試合は前日に引換へ全然打撃戰となつた、早軍は第一回二死後松本田中の大阪出身選手が前後して二壘打を飛ばし易々として一點を先取した、溫厚なセッツアは此の打撃を蒙つて平靜を失ひ、殊に遊撃トーランスが三個のエラーを出し、ウエルツのエラーなど相亞ぎ、前半の形勢は早軍に有利であつた、然るに第六回華軍トーランス、マクメン安打しガードナー三壘ゴロに倒れたる後ち、ランドのバンドにトーランス危く生還、マクメン本壘に猛進して併殺され試合は一對一となつた、六回裏には早軍松本安打し機會を造つたが田中のバンド飛球となつて松本を併殺し、其の次に久慈は遊撃の失に出たが物にならなかつた、此のチャンスを失つた事は早軍の大なる失敗である。第七回には大下が二壘　失に出て松本が犧牲したが田中久慈凡打、第九回は先頭富永が安打したが石井バントを過まり、華軍を危地に追ひながら得點を成さなかつた。此れに反し華軍は七八回谷口に惱まされたが、第九回一死後ガードナー二壘打ランド三壘の飛球に二死となり望みな

く見られたが、パッキー二振後右翼に安打し、ガードナー生還二對一の接戰に華軍の勝利となつた。こゝにまたゲーム三對三のタイになつた。早軍にとつては惜しい試合であつた。谷口の奮戰は大に見るべきものがあり、攻擊力も豐富であつたが、機會を逸したのが敗因となつた。華軍はセッツアを打たれて狼狽し最終回にはレナードを出して鋭鋒を避けんとした。

この試合は東京に於ける第二回戰と同樣の興味があつて、早華戰中出色のものである。

十七日は華軍スターと戰ひ、早軍は和歌山中學と戰つた。スターの投手中村正祐君は五尺八寸餘の巨漢で砲丸(ショット)抛のレコードを持ち、野球用球投げのレコードホルダーとして有名な猛球家であるが、此の日速力鈍く惜しい哉華軍の打擊を封ずること出來ず、殊に野手の失策があつて五對零に敗れた、順當であつて豫備後備のスターとしては寧ろ善戰であらう。

和歌山中學は今夏の全國中等學校優勝戰に各全國の強チームを段違ひに破り、スター、ダイヤモンド、全布哇、バンクーバー朝日を連破し、僅かに加奈陀チームに六對一に敗れたのみで此の試合は如何なる結果を生ずるかと思はれたが、早軍有田堀田を投手として當り、和歌山の陣容を好打に破り十二對一で大勝した、和歌山は多少堅くなり、善戰しやうとの氣組が却つて禍したやうにも見られた。然し和歌山は中學チームとして近年になき打擊力を有し、殊に戸田江口北島の三選手は出色の若武者である。

十八日はダイヤモンドクラブが華軍と戰ひ一對零に敗れたが非常な接戰であつた。小野とセッツアが兩軍の打者を翻弄し、第六回にトーランスの安打に得た一點が華軍の勝因となつたのである。早華戰以外に於ける唯一の激戰であらう。

十九日は愈々早華兩軍の決勝戰となつた、一勝一敗の後ち東京の試合を通算すれば三對三の第七回戰であるから兩軍の意氣組は一通りではなかつた。華軍は四度レナードを早軍は六度谷口を起てた、早軍が勝たんとするにはどうしても谷口でなければならない。然してレナードは早軍に對して飽までも勝運に乏しき投手であつた、谷口は八個の安打を與へたに拘はらず僅かに一點を許したに過ぎず三度までも襲はれた危機を味方の好防に切り抜けたに反し、レナードは僅かに三個の安打を打たれたに過ぎざるに味方は肝腎の時にエラーをなし三回と四回に大なる深傷(ふかで)を負ふて遂に三對一のスコアを殘して敗退した。試合を通觀すれば早軍は攻守共に好運な試合をなし、華軍はどこまでも運が惡かつた、第三回に遊擊のエラーと大下の右翼線上の三壘打に一點を奪はれ、第四回には二走者のあつた折じか

も二死後に一壘の失策があつて二點を與へてから、すべてがアセリ氣味となり、無謀の盜壘や非合理的の攻口に全然その道を我から塞いで了まつた。華軍としては惡戰と評するほかないであらう。

かくて大阪に於ける三回戰は二對一の下に早軍の勝ちとなり兩軍は又々相携へて九州に去つた。（十月二十一日）

秋の漕艇界回顧

「東京朝日新聞」記者　植村陸郎

此の秋のシーズン位、運動各種の競技が盛んであつた事はあるまい、恐らく空前であつて絶後になりやせんかと思はれる位であつた。

野球、庭球、各種陸上競技、水上に於ては端艇、競泳等餘りに多事であつた爲めに、ファンが見物に忙殺され、遂に其の中最も興味深きもののみを撰つて目掛げざるを得ない程であつた事は爭はれぬ事實であつた。

中にも野球の如きは外來のチーム九を算し、日本チームが應戰に暇なき程多事であつたが、とりわけ端艇界に於ては光榮ある歷史の一頁を作り、永久に記念すべき事柄があつた。即ち去る十月二十二、三兩日隅田川コースに行はれた大日本漕艇協會主催の第二回レガッタに、我が英邁に渡せらるゝ皇太子殿下が國務多事の中の御閑暇を割かせ給ひ親しく御台臨遊ばされ、剩へ參加九校の選手にユニフォームの儘拜謁を仰付けられ、有難い御詞さへ給はつたと云ふ一事がある。其他東京帝國大學の學部對抗レースを初め、十月一日隅田川コースに擧行した東西兩帝國大學對抗レースがその主なるもので、我が漕艇界の氣運が彌が上にも熾んになつて來た。

軈て此の記念すべき秋の最も隆盛を極めた運動シーズンに於ける漕艇界の大なる催物であつた第二回東西兩帝國大學の對抗レースと、第二回漕艇協會レガッタに就き記憶するところを辿つて所感を述べて見よう。

東西帝大の對抗レースは昨年第一回を琵琶湖瀬田川の清流で試みられたのであつたが、遺憾にも中途京都大學クルーの乗艇に故障が生じた爲め東京大學が難なく大勝を博し京大方の實力は試されずに了つたのであつた。斯くして本年は去る十月一日東京隅田川のコースに第二回の對抗レースを行つた結果再び東京方の勝利に歸したのであつた。

此のレースの結果は當然の結果であつて京大方は未だ〳〵東大と競漕する極度の技倆には熟達して居らぬ、批評の外であると云ふ事も屢耳にしたのであつたが、此の大レースを勝負の結果からのみ即斷して斯く一笑に附して了ふと云ふ事は大に考ふるべき事であらう。

軈がては此對抗レースが我が漕艇界における最高權威のものとなる運命を有し、且つ又當事者は斯くあらん事に最善の努力を盡すべきものであつて、今から相當に尊重すべき性質のものたる事を信ずるものである。

此の意味に於て此のレースを今秋漕艇界の一大催物としてレースの經過につき私見を述べよう。

先づ漕法に於ては誰れが見ても一見東大方は京大に比し優た漕法を持つて居た事は明白な事實であつたが、京大は如何なる點が漕法の欠點であつたか。兩大學共にデイプに於ける水のキヤツチには大分苦心したらしく、或程度までは成功して居たが、東大は京大に比し此點に於ては確に荒削りであつて稚氣が祟り、望んだ程の効果が得られなかつたのである。尤も東大の方も未だ理想的と云ひ得ないものであつたが相當に好いところを掴んで居た。(東大については別に漕艇協會レガツタに就いて述べる時詳述する)而して京大はストロークに移つてから思ひ存分の力を傾注し得ずしてレンヂも短くフイニシユの即ち引切りに於ては多少狼狽氣味となつて最初に入た力を一度無駄にして更めて又そこに多少の力を注ぐと云ふ二段の不經濟的力の用ひ方をして居た、從つてフオアワード運動に移つてもユツタリとした餘裕を見出す事が出來なかつた。ボデイスウイングに於ても一二の人を除くの外完全にまでは却々遠い。又前述したフオアワード運動に餘裕がないためにスライドの具合滑かに行かなかつた慨がある。然し槪してレンヂの短い割合に艇の出は決して惡方ではなかつたのは、東大に比し最初から常に二本位早いピツチを引いて居た爲めであらう。尤もスタートに於て京大が最初のオールが完全に揃はなかつた爲めスタートを切るとすぐ可成大きいローリングをはじめ艇脚を鈍らし第一に敵に壓迫された形勢に陥つたが爲め、レースに馴れぬ京大としては策戦最初の豫算が狂つて終始ピツチを追はれ氣味となり力漕又力漕で

二哩コースの半を過ぎざる中に可成りの疲勞と落膽を來したに相違ない。そう云つた成行から京大方はレースの後半いとゞ短いストロークは三分二位に低下して了つたのであつた。即ちスタートに於ける僅かな破綻（結果から見れば決して小さなものではなかつた）所謂策戰外れが最後まで祟つたのである。

之れを要するに京大方の漕法はさる事ながら其の練習に溯つて考へて見て矢張練習不足（時間の長短に非ず）が不完全が敗因の大部分であつてレース當日のスタートはその近因となつたものであらう。

その理由として京大にはコーチがない、又他校クルーの刺戟がないと云ふ事は京大の選手連が云ふ如く事實に違ひない。又上京以來珍らしく降りつゞいた降雨と雨霽れ後の風波と落水に災されて折角の隅田川に於る練習が豫定の半分も出來得なかつた事は、種々の意味に於て彼等の損失であつて實に氣の毒に堪えない次第であつた。確かに隅田の練習は京大方にとつて同じ期日内に東大方が一の進歩を示すものならば一半若しくは二の進歩を開くものであつたに相違ない。此の意味からして京大は天災に祟られた事は東大の夫れ以上であつたらう。

兎もあれレースは再び東大方の優勝するところとなつたが、京大として隅田に於けるレースは第一回より得るところも多かつた事は爭はれぬ。來るべき第三回の對抗レースは何處に行はれるにしても京大方は更にスライデンク漕法に關する體驗せる知識を利し、一段の研究とトレーニングを積めば、此の爭覇戰が我が漕艇界に於ける最高權威のもの、即ち我國に於ける眞の劍牛レースなる事は必ずや近い將來に來る事は疑を容れない。

次は即ち第二回漕艇協會レガツタの東宮殿下台臨光榮のレースにつき卑見を述べよう。

同レガツタに於ては豫選レースに高工、慶應を破つた商科大學クルーが早大、外語、明大を一蹴して意氣揚々たる昨年の覇者帝大のクルーを見事二艇身半の差を以つて紛碎し、東宮殿下台臨と云ふ空前の晴の舞臺で名譽ある本年度の優勝者となり我漕艇界の覇權を握つたのである。

此の大レガツタに參加した九校のクルーは帝、商、早、慶、明、拓の六大學に高工、外語、高師の專門學校クルーで練習の際は技倆の等級は殆んどつけ難い程相接近し、之がレースに於ては各クルーのコンデツションと舵手のコースの掛引策戰に依つてのみ勝負が決するだらうと云ふ豫評が傳はつて居た。それは實際無理もない考ではあるが、漕法の相違は勿論オアズメンの精神的訓練は實に勝敗の上に重きを爲し、或る場合に於

ては實際の技倆以上に勝敗に關するものである事は言を俟たない。

第一回豫選に於ける帝、早、外語のレースに於て帝大の一着を占めたるは順當と云ふべく、凡ての點から問題にするに足らぬが、二着の早大と三着の外語については問題になる事ではないが一寸面白い事が起つた。それはゴール間近となつて第二位に居た外語の艇で、帝大がゴールに入つた號砲を間違いた二番三番の漕手がオールを措いて了つたその間に早大に拔かれ、後から狼狽して漕ぎ出したが間に合はなかつた事實である。後から聞いて見ると一番の漕手は帝大は既にゴールに入つたと思つて居たから今の號砲は自分の艇が決線に入つたのだと聞き違いてオールを措いたと云ひ、三番の漕手は帝大に拔かれて居た事を知らずに二コースに寄つて自分より遲れて來だ早大の艇を帝大と思ひ違い號砲を同じく自分の艇が帝大を拔いて居てゴールに入つたのだと思つたと云ふ事であるが、レース前コーチがやかましく舵手がストップの號令を發するまではオールを措くなと言ひ含めておいたのをこんな間違が生じた。帝大に敗れても二着になれば相當面目を保たれたものをとコーチが滾して居た。實際コーチの云ふ通りレースにかくすべき事はオアズメンとして心得べき事であつたのに、折角實力を盡して好く漕いだのに僅かの失策で第三着の憂目を見たと云ふ事に今後十分注意すべき事であらう。

第二回豫選の明大對高師のレースは、高師新進の意氣を以つて明大を拔き、二艇身も先んじて居たのを、決勝線近くで惜し敗れ方をした。要するに之は若い經驗の薄いものが老巧に敗れだかたちで、高師には氣の毒であつたが却つて藥りになる好經驗と云ふべく落膽すべきものではない。之に反して明大に實に立派な臨機の策戰に出た。最初スタートに於て高師を壓迫する考であつたらしいが、遺憾乍ら却つて敵に壓せられて了つた。然し此時明大が之に對抗してどこまでも敵を壓し樣と努めたら或は明大は敗れたかも知れない。それをよく隱忍自重して只追從し、全力を蓄へて最後に敵を脅し、結局勝利を占めたのはその臨機の策實に當を得たものであつた。

之と殆んど同じ樣に行はれたのは拓大對慶大の第三回の豫選レースで、拓大は之亦新進の氣物凄く最初から敵を壓迫せんと努めて能はず、最後までその努力を繼續したので、コースの大半を過ぎた頃殆んど精力を使ひ切つて了つたと云ふ下手な掛引をやつた。然るに慶應は明大と同じく敵の脅し來るを應戰せず、チョク〳〵と進み、最後の力漕に見事敵を一蹴したところ流石一日の長として經驗の力は大なるものであつた。

第四回の豫選レースはファンが最も期待したレースの一つであつたが、高工が戰を誤り遂に商大の爲め事もなげに優勝圏外に放擲されて了つた。豫評はともあれレース當日の模樣を見ると商大に勝つべき力を十分具へて居た。その力が高工には解らなかつた爲め策戰を間違いたか、レースの際の臨機の策も誤つたのか、何れにしても敵を見そくなつた恨みがある。高工がスタートに於ける頑張り方は全くラストに於ける漕法と同じで、あのまゝスタートからゴールまで續くものであつたら高工はそれこそ大した代物であつたらう。未來性を十二分に有する高工は今後一層の自重を要する。

一勝者戰に於ける商大對慶應、及帝大對明大は之亦順當なレースで商大、帝大の勝となつたが明大、慶大は大敵を向ふに廻しての奮戰振り實際豫想以上と云つて好からう。明慶クルーも來るべき機會には相當な代物となるに違いない。

最後に帝大對商大の決勝レースに就いて一言述べて見よう。商大の勝ちは堂々たるものであつた。敗れたる帝大立派に覇權を讓るに恨なからうと思ふ。最初スタートを切つた時も商大は一本丈け帝大に先んじ、滑り出しの具合も實に好かつた。帝大も亦敵の力を知つてスタートに於て抑へんとの策戰であつ樣だが前述の通りで先づ失敗したので、間もなく力漕によつて敵を拔かんとし、拔きかゝつたが商大も巧みに應戰してさうはさせなかつた。第一のカーヴ(スワン萬年[illegible]裏)にかゝつた時、商大は敵に半艇身遲れて居てもよかつたのであるが、たしかに商大は一歩先んじて居り、而もその大事なカーヴを大廻しながら此處で半艇身も拔いて了つた。その後は帝大も只追從するのみ、艇差は漸次大きくなつた。かくて帝大は厩橋から可成ピッチを上げねばならなかつたのであるが、どうも上らない。僅かに半本一本と上つて漸く藏前三本煙突から當然とるべきピッチに上つたが最早遲かつた。此處に於て立派に勝負の數は決定した。遂に商大は見事に優勝を占めたのである。

然し此の決勝レースは兩軍遺憾なく實力を發揮した火の出る樣なレースであつて、勝敗の數は漕法の相違と用艇の構造に基因せねばなるまい。帝大の漕法は引き切りに於て欠陷があつたが、商大は此の點に意を注ぎ可成りに研究したらしく、ディプから引切りまで理想に近い程完全に引張つて居た。帝大は前述の如く引き切りが不完全であつた爲めフオアワード運動に移る具合非常に急しい。その爲めにフオアワード軟かに行かず何となく物足りなさを感じた。之が商大の漕法に帝大の夫れが劣つた點であらう。然しフオアワードの終りに於ける何物も我手に收め盡すと云ふ壯快はモーションは兩クルーに見出す事は出

來なかつた。用艇の構造についてはたしかに商大の競艇が上出來であつた樣な氣がする。帝大の競艇は打ち込みに際して艇首を水中に突込む事は誰が見ても明かに解つたが、之は漕法の故ではなく艇の構造に欠陥があつた樣に思はれる。之に反し、商大の艇は決してそんなところは發見が出來なかつたのである。尤も帝大の艇は組艇のサイドシートをセンターシートに改造したものであるから、そんな事から來て居るのかも知れない。要するに造艇に關しても今後十分の研究が必要であらう。帝大の敗因については、その他名整調なく、止むを得ず東陽氏に整調を漕がせた爲め、バウ整調にした事が多少累を爲したとも思はれるが、同時に三番の漕手に欠陥があつた事も否まれまい。

終りに臨んで暴言を多謝し撓人の健康を祈る。



想華

雨（小品）

葛西善藏

久しぶりで、秋晴の日に出會つた。何と云ふ天氣だつたらう。隨分厭な、雨の日ばかり續いたことだ。樹木に蔽れた高い崖の上から眞直ぐに落ちて來る白い雨脚、霧のやうな細雨。――病む身には實に鬱陶しく、堪え難いこの秋の天候だつた。机の前に、毛布を敷き、枕を出して、掻卷をかけて、終日發熱の身體を横たへ、氣分の腐蝕に惱まされた。茅屋根の雨滴れの音も佗しいものだ。私の室借りの寺の、杉の樹間の高い石段を下りて建長寺の石だゝみの道を散歩出來るやうな日が、幾日と數へられなかつた。喘息、肺尖、神經痛――私の身體は萬病的のやうに思はれた。

滑らかに霽れた碧い空が、私の机の前から、崖の上に、佛殿の茅葺屋根の上に、打仰がれた。椽下の濡椽に早く日の射し込んで來るのが樂しみに待たれた。西南からの光線が、ほんの十一時頃から二時過ぎ頃まで射し込むきりだつた。

私は座蒲團を濡椽に持出した。夏の海水帽をかぶり、褞袍を肩脱いで寢衣一枚になり、づき〳〵と痛む脊中を光線に晒らした。兩肩の間の脊骨のあたりが特に強く疼いた。私はちつと胡座を搔いて、特にその邊に光線を直射させるやう

な格恰して、一時間近く座つてゐた。日光の照みの熱さが、痛む脊髓にまで泌み入るかのやうで、私は和げられた快い氣持になつた。『これはいゝ！　これはいゝ！』と、私は思はず心の中に叫んだ。『溫泉が一等よささうなんだが、行けさうもないんだから、これで間に合せることにしよう。溫泉の效力だつて、大抵似たやうなものなんだらうから……』と、私はひどく滿足して、その日はそれだけの時間でやめることにした。が翌朝はまた、私は崖の上の樹木の騷ぎ、樋の雨滴れの音で目をさまさねばならなかつた。

×

午後は降りやんでゐたが、曇つて寒かつたので、私は冬の外套を着て×院のT氏を誘つて、散步ながら八幡前の風呂屋へ行つた。私はその日は割に氣分がよかつた。もう一つは、此頃ずうつと朝からの熱が續いて出るのに怯ぢ氣が出て垂れ籠め勝だつたので、少し元氣を出して見たい氣もあつた。それでお湯を出て四時半過ぎだつたが、『海岸へ行つて見ませんか、僕海を見たくなつたなあ……』と、八幡前通りから海岸の方へと話しながら步るいて行つた。T氏はやはり×院に室借りしてゐる海軍士官の面白い失戀談など途中話して聽かした。

『小說になりませんかねえ、……何しろ變つてますよ』

『さあ、僕の畑ではなさゝうなんでしてね、僕も此頃はつく〲貧乏や肺病小說は厭になつてるんですが、そんな小說が書けるやうだと氣分の爲めにもたいへんいゝと思ふんですがねえ、やつぱし書けないんですね』と、私は嘆息しながら云つた。

春に一二度來たばかしで、海岸は久しぶりだつた。滑川の海近くの橋の兩岸で、二三人鮫を釣つてゐた。海は黃色く、空は鉛色に濁つてゐた。夏の間のいろ〲な戀を得た人、失つた人々の——海軍士官も混つて——足跡も今は痕跡もなく

消え失せて、濡れた沙の上には夕方の散歩の人の影も見えなかつた。

『士官の夢――とでもしませうかな？　戀と云ふべく餘りにセンチメンタルか何か、少し他愛がなさ過ぎるやうぢやないですか』と、私は云つたりした。

『まあそんなものでせうかね。僕なんかの氣持だ　、今になつてまだその婦人雜誌へ出た相手の寫眞など部屋に揭げて置く氣が知れないと思ひますがねえ、やつぱし揭げてますよ』と、T氏も寧ろ感嘆の調子で云つた。……

門のところでT氏と別れて、私は急いで自分の寺へ歸つて來た。そしてまた大急ぎで便所にはいつたが、激しい下痢をした。『しまつたな！』と思つたが、たいして氣にもとめず、いつものやうに晩酌にかゝつた。また激しい降りになつた。七時近くなつて、中學入學の豫習をしてゐるRが、由井ケ濱の小學校から雨に打たれ懷中電氣を賴りに濡れて歸つて來た。慰めて呉れたり、話相手になつたりするやうな母も妹たちもゐないのだ。

『隨分遲くなるねえ。疲れるやうな氣がしない？』

『いや、そんなことないよ』と、彼は無雜作に云ふ。

『それだといゝがな……』と、私は彼の眼色から判斷しようとする一瞥を與へて、毎晩のことゝてこれで一安心したと云つた氣持になつて、彼のことには構はず私は自分の杯に親んだ。

三四本飮んだが、ヘンに頭が冴えて、いつになく醉が廻つて來ない。そのうちシヤツクリが出て來た。どうかして胡麻化さうとしたがます〱激しくなるばかしで、苦しくなつて來て、私は飯も喰はずに寢床に這入つたが、それでも醉を發したと見えてすぐ眠入つたが、何時間かして眼をさまして見ると。私はやはり激しいシヤツクリに襲はれてゐたが、すぐ跳び起きて便所へ行つたが、非常な勢ひで吐瀉下痢した。胃痙攣の激痛が續いた。三時頃だつた。雨の音、風の叫

び、崖の崩れ落ちる音など物凄かつた。胃痙攣の痛みは午後まで續いた、Rは日曜だつたので煖爐の灰など取替へたりして仕へて呉れたが、水の一口も腹に止まつてゐなかつた。終日私は寢床を出たり這入たりしてゐた。

八時頃ドシヤ降りの暗い中を、東京からS青年が來て呉れた。彼の元氣のない顏を見て、私の賴んでやつた用事の失敗だつたことが直感された。

『……すぐ明日にも手紙で御返事を差上げることにしますからと云ふもんですから』とS君は枕元に片手を突いて云ひにくさうに云つた。

『いや、そんなことでせう。……御苦勞樣でした』と、私は橫向きの眼をつぶつたまゝで云つたが、疲れ切つた頭には詐しく聽くのも退儀だつた。

『ひどくお瘠せになりましたね。僕にもそんな豫感がありましたよ、あなたの病氣が……』S君はげつそり頰が削げ眼の凹んだ蒼醒めた私の顏を覗きながら云つた。

『咯血でもした夢だつたでせう?』と、私は口まで出かゝつたが、言葉には出さなかつた。

S君とRとは、私の床の傍に、床を並べて寢に就いた。蒲團が足りないので、S君は敷蒲團だけで毛布や私の外套など掛けた。胃痙攣の痛みが消えると、肺尖の方が心配になり出した。藥を飮み始めてから四ケ月にもなり、カルシウム注射も二十回もし、出來るだけ營養にも氣をつけて來たつもりだつたが、この一回の失策ですべて水泡に歸してしまつたやうた絕望が感じられた。藥も營養も何の賴りにもならないのだと思ふと、心細かつた。この何ケ月――いや何年にも缺かしたことのない晚酌もやれないやうになつては、最早おしまひだと云ふ氣がされた。雨續きの此頃の時候が、何より毒だつたのだと、怨めしく思はれた。この一冬が無事に越せるかと思ふと、悲しく思はずにゐられなかつた。故鄕二十年

結局骨成金になつて、RやS君などに送られて郷里の老いた父の許に歸ることになるんだらう……』さう諦めるほかないと思つた。

夜の更けると共に、風雨がます／＼激しくなつた。RやSはスー／＼睡つてゐる。數丈の崖の上から岩が崩れて、ドブン／＼と凄じい音を立てゝ池に落込んだ。私は蒲團の中で胸を抑えて慄えた。さうした間にもチー／＼と啼く蟲の音が聞えてゐた。

私はフラ／＼する身體して、蒲團を出て、次の部屋の机の前に座つて、火鉢の灰を掻きをこしたが、豆粒位ゐの火種が五つ六つ殘つてゐた。私は酒が飲みたくなつたのだ。十幾年缺かしたことのなかつた酒だ——生前一杯の酒と云つた氣持が、強く私をそゝのかした。RやS君を起すのも氣の毒だつた。私は炭をつぎ、その豆粒のやうな火種を灰の中から拾つては、丹念に一つ／＼積んだ。——私ア裸ア裸、裸身裸佛、裸々身裸々佛、裸ア裸ア裸——私は斯う出鱈目をお經の調子を模ねて呟きながら、雨滴れの蟲の聲に合せて、一つ／＼豆粒のやうな赤い火種を積んで行つた。

——十年十月——

佛蘭西を中心として

柳澤健

はしがき

自分の乘つた船が四十幾日の航海を終へて馬耳塞に着いたのは、昨年の夏の最中であつた。その時から滿一個年程自分は佛蘭西を中心にしていろいろの國を旅して歩いた。英吉利へは二度行つた。伊太利へも二度行つた。獨逸、墺太利、瑞西、それから西班牙などへも出掛けた。繪や建築やを一通見て歩いたけども、これ等の國々を遍歷するのに一個年は決して長いことはなかつた。それなのに自分はその國の政治經濟のことも知りたかつた、民族の心理といふやうなことも知りたかつた、郷土の傳說や風俗やも知りたかつた、繪や建築やのほかに、音樂や芝居や詩やも知りたかつた。かうした無數な欲望を抱きながら限りある日數のなかで旅して歩くといふことは、普通の漫遊客には判らないある苦しみがあつた。自分は全く稍困憊に類した身心の狀態を感じながら、馬耳塞を出て日本に歸る船の客となつた。

自分がこゝに書かうとする遊記は、かうした『雜多』な旅の記憶をそれからそれへと辿つたものに過ぎない。それを整理して纏まつた一個の紀行とすることは、自分が他日の仕事であることを、特に斷つて置く。

○

自分が巴里に着いたのは八月の末で、風がうそさむく、どんよりと曇つた日であつた。未だ夏の八月といふにもう街路

樹のマロニエやプラターヌやは黄ばんで見えた。自分はギャール・ド・リオンからタクシーを凱旋門の方に走らせながら、これが巴里なのか！とこの寂しい燻んだ町の光景をば、幻滅に似た一種不滿の感情をもて眺めやつたのであつた。全く我々が日本にゐて讀み聽き想像してゐた巴里は、華麗で豪奢で陽氣で花やかで、如何にも眼を眩惑させるやうな燦びやかさに充ち滿ちてゐなければならなかつた。それなのに、實際自分の眼前に展開した巴里は、意外に閑寂で地味で沈んで見える。葉の落ちかゝつた街路樹越しに並立してゐる建物は一樣に薄黑く燻んでゐる。往來を通る人の服裝は殆んど黑に限られてゐる。わけて女の服裝は一人殘らず黑いと言つて差支へなかつた。眼を惹くやうな派出た色合のものは、何處(どこ)にも見當らなかつた。……

この巴里の第一印象は、遂に自分が一個年の後そこを去る時まで變らなかつた。彼女は常に地味であり燻つてゐた。然しながら、この地味が、この燻んだものが、その奥に何とも言へぬ魅力を持つてゐるものだといふことが判つたのは、その第一印象の後しばらく經つてからであつた。第一印象で感じた幻滅に似た感じは、間もなく跡形もなく消えて了つた。むしろ自分は加重的にその地味・閑寂がつゝむ美を強く感じるにいたつた。

この美は言はゞ澁い感じとでも名付け得やう。巴里の持つ美は要するにこの澁みにある。從つて、――日本人がこの澁みをば出來感覺生活の最高位に置き、わけても都會藝術の最特徴としたことから考へても、巴里の都市美は、徒らに金力ばかりでは出來ない尊さを持つてゐるのである。同時に、この美の鑑賞は、あはたゞしい漫遊客にとつては甚だ困難でもある。心の落付きと、纖細なる感覺とが是非ともこれに必要である。

このことは單に巴里の觀光計りではなく、實は佛蘭西の國民性、佛蘭西の文化を觀察する上でも同樣であらうと思ふ。佛蘭西の國民性、その文化を第一印象で批評することは、巴里の街を第一印象で是非し盡さうとする危險と同樣で

ある。一瞥見では到底知ることのできぬ深さ、複雑さを彼等は持つてゐる。——がこのことは後に譲らう。

無論自分は巴里を、例へば畫家キヤリエルのやうに、一様に曇りがちの鈍い灰色をもて染め出さうとするわけではない。方々にあるミユジツク・ホールや、キヤバレーや、舞踏場や、さてはオペラやブールヴアールの夜景や、これ等をも、まさかに地味閑寂の境なりとはしない。然しながら、これ等多數の遊興の機關は、巴里が持つ世界的の名物であるにしても、嚴格に言へばそれは『外國人の巴里』であつて、決して『佛蘭西人の巴里』ではないことを知るを要する。多くの佛蘭西人は、巴里は外國人の殖民地(コロニー)であるといふ。從つて、佛蘭西を研究するには、巴里を去つて田園に赴けといふ。この言葉は誇張があるにしても、幾分の眞を持つことを否むわけには行かない。試みに巴里では目貫の場所であるブールヴアールの大路かオペラ前の廣場(プラス)と交叉する所に絶好の位置を占めてゐる雜沓するかのキヤフエ・ド・ラ・ペーへでも立ち寄つて、周圍に腰を下しキヤフエを唇にしてゐる幾百の客の顔を仔細に點檢したがいい。殆んど一人殘らずそれが外國人である事に氣が付くであらう。更に店前を往來する人波を見渡しても、眞の佛蘭西風の容貌を見ることが頗る稀であるのに驚くであらう。

然るに歐羅巴漫遊をなしつゝある日本人の大多數は、一週間若くは十日間ほどの僅少な巴里滯在期間を殆んど全部、この『外國人町』に費やすのを常とする。そして、ある者は巴里に渇仰し、ある者は巴里を唾棄する、兩者倶に當らぬことは言ふまでもない。實に眞の巴里は、佛蘭西人の巴里は、これ等の漫遊客の『うしろ』にあるのである。

曾て、自分は、レーグ内閣が倒れて、現在のブリアン内閣が未だ成立せぬ際に、現上院議長ラオール・ペレが首相とならうといふ噂の立つた折、彼に關する記事が毎日のやうに新聞紙等に現れたのを讀むだ。そのなかに彼の平常を説いて、彼が巴里に住むこと數十年、しかも未だオラムピアの位置すら知らないと書いてあつたのを見て、深く胸を打たれ

た。オラムピアと言へば、巴里を訪ねた日本人ならば誰しも知つてゐる有名な酒場であり舞踏場であり寄席である。精勵謹嚴ペレー氏の如きこそ眞の佛蘭西人（ルヴレー・フアンセエ）である、とその記事は結んでゐた。

眞の巴里はかゝる佛蘭西人のみからなつてゐるのでないにしても、すくなくともかゝる佛蘭西人によつて導かれてゐるものであることは牢記するを要する。

○

倫敦が濃霧につゝまれぬうちにと思つて自分は巴里に着いて間もなく九月の半ばに英國へ渡ることにした。ギヤール・デユ・ノールを出た汽車は過般の戰爭で有名になつたアミアンを通つてブーローニユに着く。海峽を越すとフオークストンである。そこから汽車は約二三時間で倫敦はヴイクトーリア停車場に着く。このフオークストンから倫敦にいたるまでの間の山野の眺めほど美しいものはない。緩やかな丘陵が青々とつゞく。楡の老樹や樫の林がこの美くしい青野に點綴する。そちこちに隱見する瀟洒な意氣なカツテージ。それから、青野のかなたこなたに、恰かも風に吹かるる花のやうにゆるやかに動いて見える牛や羊の群。寂然たるレーノーヅの風景畫そのまゝである。

自分は馬耳塞から巴里まで、更にブーローニユまでの車窓から眺めた佛蘭西の風景を思ひ泛べて、何といふ相違であらう！と思つた。佛蘭西の風景は、殆んど畑からなつてゐる。森林をのぞいては、殆んど山の頂までも耕作され盡してゐる。牛や羊やの牧場も見當るけれど、多くは收穫を終へた畑をそれに用ゐてゐる。とてもこの英國のやうに、見渡す限り牧場（それも大しては牛羊が居らない）であるといふやうな「自然そのまゝ」の風景は、何處だつて見られやしない。

この見る眼に樂しい英國の風景を目睹しながら、自分は言はう方ない快適な感情を味つたと同時に、一方反對に一種不安な感情に捉へられざるを得なかつた。それは、この大英國を屢々怖るべき痲痺狀態に陥れる産業爭議は、實に

美くしき風景が間接に作りあげたものとも言へるからである。

言ふまでもなく英國は工業國であつて農業國ではない。二百萬弱の農業者に對して工業に從事する者は實に千二百萬の多きに上つてゐる。そのことは尠くも今までの英國にとつては國是でもあり同時に今日の富國の原因ともなつてゐる。然しながら同時に禍機はそのなかにあつた。耕作を殆んど捨てて工場に走つて行つた今日の英國は、一國を動かすその動力が全然工場のなかのみにあると言つてもいい。從つて一朝その動力が脅やかされれば、英國全體が忽ち痲痺することとなる。過去に於ける數度の大同盟罷業、現在に於ける工業勞働者の失業問題、それは全くロイド・ジョージも言つたやうに英國の將來にとつては過般の歐羅巴大戰よりも怖るべきものである。

無論勞働爭議の波は田園に働く者等の上にも押し寄せないわけには行かない、否、それどころか、英國なぞはその階級爭鬪史の端緒を辿つて行くと實に地主對小作人間の問題から發してゐることが判る。それにも係はらず、農業勞働者の間をつゝむ空氣には、常に平穩靜和なる調子がある。地に親しむ者が持ち得る平和と慰籍と自足とがある。これがやがてその國家その社會をして能ふだけ動揺を少なからしめることが能きる。無論かゝる意味の安定は、現代の社會組織の倒壞を希望してゐる論者からすれば、最も嫌惡すべきものであらう。自分は今そこまで立ち入つて言ふつもりはない、唯現在の國家・社會並びに國際關係から見れば、英國の累代の重商工政策が今漸く怖るべきその弱點を現はし來つたといふことを述べるに止める。

車窓から見たこの美くしき自然は、大概僅少な大地主の手にあるのだといふ。かゝる大地主の間に於ては、自己の所有地のなかに停車場が續いて二個所もあるといふのが珍らしくないとの事である。從つてかくも有福なる彼等から言へば、この廣き美くしき土地を格別耕地とする必要もなく、また耕地としたくもその農夫に事を缺くさまである。これを佛蘭西

に見る。この國に於ては農民は實に總人口の七割であると稱せられてゐる。然も、佛蘭西大革命は大地主の手から土地を奪つてこれを無數の小作人の間に分割してしまつた。從つて今日佛蘭西に於ては、英國に存在してゐるやうな大地主は全然無い譯である。卽ち大部分の佛蘭西人は自己の所有にかゝる土地の上に優しき氣候と快き勞働とを樂しみながらに日を送つてゐるのである。この關係に於ては佛蘭西現代の社會は英國の社會とくらべて遙かに安定の度が強い筈であると思ふ。現に自分の滯歐一個年の間に英國では炭鑛夫の同盟罷業が二度ほどもあつた、その他種々の工場、交通機關やにも頻々として同盟罷業が起つた。然るに、佛蘭西に於ては、――自分の記憶してゐる限りではオペラの役者が二個月計りも同盟罷業を續けてゐたことがあつたのみで、その他には殆んどかゝる紛議のあるのを聽かなかつた。思ふに現在佛蘭西は獨り英吉利に較べてその社會的安定を誇り得る計りではなく、他の諸國（そのなかには日本をも含めて）に較べてもまた充分に誇り得ることと信ずる。而して、その最も重大なる原因として自分はこの國が農業國であること、然もその農夫が何れも稍平均せる富の所有者であること、（彼等は勞働者であり且地主である。眞實の意味で彼等は勞資協調なのである。かゝる勞資協調は賞むべきかな！）等を擧げ得ることと思ふ。

自分は日本のことを振り返つて考へた。今や日本は上下擧つて重商工政策に向ひつゝある。農作地は益々大地主の手に集積しつゝある。その形勢をこのまゝに放置しておくならば、ロイド・ジョージではないが、日本の將來にとつてそれは「日米戰爭」よりも怖るべきものであると慨嘆しなければならぬ日がやがて來やしまいかと危惧さるゝのである。

○

英國に渡つて先づ困却した事は、言葉が判らぬことであつた。こつちの言葉が先方によく通じない計りでなく、先方の言葉がまたこつちによく通じなかつた。自分は英語なる者を中學校で敎はつてから今日まで二十年近くにもなつてゐる。

その間兎も角も引續いて其言葉に親しんできた。――のにも拘はらず、その本國を踏んで見たら、まるで自分は暗中を模索する樣な氣持になつて了つた。例へば、地下鐵道で銀行町の方に出掛けやうと思つて開札口で『銀行（バンク）!』と怒鳴る。『何ですつて（ワット）?!』――かういふ返事だ。やがて自分はこの銀行（バンク）はむしろベンといふやうに發音するのだといふことを漸く知るやうになる。それからリヴアプール・ステーションといふ停留場がその先にある。そのPoolの發音が容易にできない。そうすると、例の『何ですつて（ワット）?』がくる。ある時なぞは、倫敦に二三年もゐる友人が自分と一緒に電車に乘つて、シエフアード・ブツシユといふ地名を口にしたところが、また『何ですつて（ワット）?』だ。何遍繰り返しても結局車掌に理解ができない。どどのつまり友人は鉛筆をとり出してそれを紙に書いて見せるといふ始末である。

倫敦で聽いた話であるが、當時K氏といふ英語では日本で唯一人であるといふ勅任教授が遣つて來て矢張り言葉の不通に苦しめられ、つくづく述懐して、自分が今まで英語を教へると言つてゐたことは過誤で、實は單にマコレーとかサカレーとかの書いたものを日本語に譯すことが能きるといふに過ぎなかつた、今後はもう英語教授の看板を下さねばなるまいと言つてこぼしたといふことである。

兎に角に英語は難かしい。到底佛蘭西語のやうには行かない。――といふ氣が起る。然しながら、これは單に言葉そのものの難易に基くものであらうか。なるほど、英語は佛蘭西語などにはない強いそして複雜な抑揚（アクセント）を持つて居る。その點だけでも、日本人なぞにとつては大分の難物と言へる。然しながら、自分にはこの通語の難澁は、單にその言葉の性質のみにあるのではなくて、言葉よりはむしろ英國人それ自身の側に原因が存してゐると考へられるのである。

それは、英國人の鈍感といふことである。もつとよく言へば、强剛堅硬だからである。やがてそれは英國人の傲りでもある。この容易に他に浸滲しないで自恃自尊でゐる特性が、やがて一般的に物の理解を鈍らしてゐる所以なのであら

う。自分の作り上げてゐる型にぴつたりとはまつて來なければ、遠慮なく排除して了ふのである。言つて見れば手を動かさずにキャッチボールをしてゐるやうなものである。その不動の手にうまくはいつてくる球ならば受取るが、そうでなければ、よし一寸手を伸ばせば容易に握れる球でもそのまゝに外らしてしまうのである。一寸した抑揚(アクセント)の間違一つでも、彼等は理解し得ない、また理解するを欲しない點は、實にこゝにあるではなからうか。

そこに到ると佛蘭西人はまるで反對である。彼等の手は、縱横無盡に左右前後しに餘程の見當違ひの球でない限りは綺麗に握つてくれる。實に鋭敏でフレキシブルで察しが早い國民であることを、日常の對話に於てすら十二分に感知し得るのである。こちらで言ひたいことが半分以上まだ口のなかに溜つてゐるのに、對手は既に全部を理解して途中でこちらの口を閉ぢさせてしまう。かうした點では日本人の特性は、英國人よりもはるかに佛蘭西人の型に近いと思ふ。あの鈍重な英國人氣質は到底日本人の眞似られるところではない。

○

佛蘭西の土地を踏んでからこの英國に渡つたものには、ここの料理が可成りに不味(まづ)いことが感じられる。このことだけは、什麼に英國贔負をもつて目されてゐる人でも承認してゐるやうである。自分の經驗から言へば、歐洲各國を通じて英國の料理が一番不味かと思ふ。粗食に馴らされてゐるといふ獨逸ですら、英國よりは美味である。世にも名高い佛蘭西料理の味は言ふに及ばず、西班牙や伊太利やの料理も遙かに英國料理の上にある。自分は滯英中、いろ〱の機會で種々手數のかゝつた料理を味ふのを得た。が結局それ等は、歸途ブーローニュから巴里の間に佛蘭西の食堂車のなかでたべた十法均一の辨飯に比すれば、その味に於て遙かに劣つたものであると言ふことが能きる。ある人の惡口に『佛蘭西人は貧しい材料を用ひて美味に料理することに手腕を持つてゐる。英國人は豐かな材料を用ゐて不味く料理するこ

とに手腕がある」と言ふてゐるが、前述したやうに英國は耕地にも乏しいし、眞の牧場にもまた不足してゐるのであるから、別に豐かな材料を用ゐてゐる譯でもあるまいが、英國人の調理の不手際、それを格別不平無しに甘受してゐる一般の舌の無感覺は、何人も否定し得ない所だと思ふ。

問題は單にこの味覺のみに限られてゐない。その他あらゆる方面の感覺についてこの國民の鈍感なことは、親しくその地を踏んで見ると一層その感を强うする。衣裳の色彩の撰擇のごときも、可成りに慘めな氣がする。黑味がかつたもののみを着てゐる佛蘭西からこの倫敦に這入つて見ると先づその色彩のはるかに華やかなのに氣がつく。紅や靑や白やの單色を持つた衣裳が、町にも公園にも溢れてゐる。綺麗だと思ふ。然しやがてその個人個人について見ると、その模樣の具合その色合の調子が一向に生きてゐない。あるものは俗惡過ぎ、あるものは寂し過ぎ、あるものは不調和と言つた風に、眞によい感覺で撰擇せられたものと感心させられるやうなのはなか／＼見當らないのである。

かうした感覺生活の貧弱は、必然的に一般精神生活の空虛を意味するものではないであらうか。感覺の鋭敏といふことは、やがて精神作用の活潑、思想生活の豐富といふことになると思ふ。不味いものを平氣で食べ、不調和な色彩のものを平氣で着け、オペラや音樂會もなしでも格別不服を感じない國民に、自分は眞實の精神生活、思想生活があり得ないといふ氣までする。

どうも英國人は、政治とか實業とかいふ方面には驚嘆すべき技能を持つてゐるやうだけれども、藝術的の方面に於ては可成り悲觀すべき素質の所有者である如く考へられるのである。トルストイが、英國を罵つて、世界で文明國と稱するもののうち最も野蠻な國である、と言つたことは激越すぎる言葉ではあるが、かうした意味に於ては當つてゐる氣がする。

○

エドモン・タブーだつたかが言つた言葉のなかに『希臘が盜まなかつたところのものはたゞその評判(レピユテシオン)だけだ』といふ句がある。自分はその句を、ブリチツシユ・ミユヂアムの廊下を歩きながら思ひ出した。それはむしろ希臘ではなくてこの英國だ！から自分は腹のなかで思つた。

全く、何といふ大きな贓物の倉であらう。埃及から、印度から、それから希臘から。さては伊太利から彼等の先祖が盜掠して來たもので充ち溢れてゐる。藝術を想ふものにとつてはこのブリチツシユ・ミユジアムはまるで阿剌比亞夜話の中のアリババの寶窟である。何といふ豐富、何といふ剩多。而してそれが全て英國以外の國の所有だつた寶物である！英國自身の生むだものを見るには、テート・ギヤルリイにでも行くを必要とする。そこにはターナーが、ブレークが、ミレースが、さてはロセツチが、——あゝ、然し何といふ貧弱、何といふ稀薄。

無論巴里のルーヴルにしても、若くはマドリツドのプラドのミユジアムにしても、さては羅馬のヴチカンにしても、所謂贓物はうんとあると言つていい。然しながらこれを假にそうした贓物の寶石の光芒にあつても負けぬだけの强烈な燦爛を含んだ多量の自國製の寶石をば持つてゐるのである。決してブリチツシユ・ミユジアムのやうに『盜まなかつたところのものはたゞその評判だけ』であるといふやうなことは無いのである。

日本の門司を出て馬耳塞に着くまでの長い船旅の間を、誰しも一樣に無限の感慨に耽らせられる一事がある。英國の領土が斯くも多い！といふことである。各人のその感慨は時には讃嘆の色を帶びることもあるが、また時には憤懣の色を帶びることもあらう。兎に角、上海以西馬耳塞に着くまでの五六の港は全部が英領若くは英領同然のものである。

自分は、ブリチツチユ・ミユジアムを歩きながらに胸中に湧えた感想は、既にかうした航海でも湧えてゐたのであつ

た。――

假令英國最負を以て自任してゐる人でも英國の傳統的政策が常に帝國主義的であり侵略的であることは認めてゐるやうである。尠くとも英國の殖民史や外交史やを一瞥した人であつて見れば、これに異論がない筈である。然しながら、英國人を各個人として見れば頗る尊敬するに足る紳士であると言つて、その謙讓・親切・重厚の風格を賞するのに日も足りぬ人々が世上に頗る多いのを見るのである。殊に我日本に於ては英國紳士(イングリッシュ・ジエントルマン)を以て紳士の型と見做し、これに倣ふに汲々たる士が可成りにあるやうに思ふ。

個人として尊敬に値するが、その個人の集合たる國家としては非難すべき行動を敢てしてゐる。――世にこれ程不思議な命題はあるであらうか。自分には、國家が個人としては不德を以て目さるべき行動を敢てしてゐるのであつたならば、無論その國家を組織してゐる各個人にその不德の素質が充分にあるものと推斷されるのである。若し、その個人が如何にも尊敬に値するもののやうに外の者の眼に映ずるならば、彼は驚くべき扮裝術のエキスパートであらねばならぬ。然しながら個人と多數との關係は複雜で曖昧である。英國の所謂紳士と充分に交誼を厚ふする機會を得なかつた自分にとつては、要するにこの推斷は『机上の空論』に類する。否、庶幾くは机上の空論で終らんことを、我英國紳士のために祈らざるを得ないのである。

○

英國から戻つて巴里に暫く止まつた。が、十月の末には再び旅に出た。蒼い浦曲(コート・ダジユール)と呼ばれてゐるキヤンヌやニスやモンテキヤルロやマントンやの美くしい海濱の町々を歩いてから所謂南部(ミデイ)のプロヴンサルの地方を越えて西班牙の國に這入つた。佛蘭西は秋風が身に泌みる頃であつたが、ピレネー一つ越せば日光が見る眼に痛いほど未だ眩ゆかつた。

往時『世界の中央』に位してゐるとまで言はれたバルセローナの古都は、自分にとつては闘牛と諸聖祭(トウサン)と、それからサンヂカリストの爆弾の町であつた。

この町にはいると早々自分の眼を惹いたものは夥しい巡査と兵士との群であつた。今日も電氣雇主組合の組合長とかがつい先刻殺されたところだといふことであつた。電車は全市から影をひそめてゐた。自分は日本を出るまへに一讀したヴアンダーリツプの『歐洲巡記(ホワツト・ハツプンド・ツウ・ユーロツプ)』のなかの西班牙の章に、こゝの國の暗殺の不思議な方法について書いてあるのを想ひ出した。それによればかうした暗殺團體たるサンヂカの組合はその統轄の中心を全然不明にして置く。外部の者は無論のこと、そのサンヂカの内部の者でも判つてゐない。而して、この團員の間を聯絡するためには、各團員がそれぞれ二名づゝ相識ましてあつて、それが團員の單位になり、甲の二名が、乙の二名と直接に接觸するといふ風になつてゐる。それが丙、丁……といふやうに數學的に傳波して行くことになる。從つて團體の首腦者が誰であるかは内部の者にも秘密にされてゐて判らぬ譯である。かくして、暗殺がかうした不思議な『東洋風』な組織の下に行はれる。それのみならず、近代勞働爭議の現象である總同盟罷業でも、やはりこの組織でやるのだから、實に面白い。即ち、何等の要求もせず、また代表者を示すこともなく、忽然として總同盟罷業が起り、續き、而して終了する。——

かゝる不思議なサンヂカリズムは到底他には見ることが能きない。(無論諸國に種々の秘密團體はあるが、かうまで巧妙に且大袈裟にやつてゐるものは無い)如何にも傳奇的で小説的で、——從つて『西班牙的』であるといふ氣を起す。

このサンヂカの目的は、一は現代產業組織の破壞にあることは言ふを待たぬが、その他に政治的の目的をも多量に有してゐるのである。この後者は一般人の注意を惹かぬけれど、吾々の興味はむしろこれにある。即ち、バルセローナを中心としてゐるキヤタローニア地方一帶を現在の西班牙から、——換言すればマドリツト政府の羈絆の下から脫

めやうといふのである。言はゞ、西班牙の『愛蘭問題』である。（現に、自分の滯西中、愛蘭のシン・フェン黨に對してこゝから熱烈な應援辭を送つたものである）

彼等の言ひ分に依れば、このキヤタローニア地方は西班牙とは言ふものの、他の地方とは全然別異の人種である。言語も從つて異る。然もその特性は强毅敏捷にして商工業方面に優秀なる才能を有し居る計りではなく、また頗る勞働を好み農夫としても理想的であつて、かの懶惰遊蕩を好む一般西班牙人と同一視さるゝことは心外である。從つて、現下西班牙の國富の殆んど大半はこのキヤタローニア地方に存在するやうな狀態である。かの實力無く活氣無きマドリット政府の統治下にあることは、キヤタローニアとして到底堪え得ることではない。――と、斯う言ふのである。

今年の春首相ダトー氏が暗殺されたのも、このバルセローナから出た青年の手に依つてであつた。マドリット政府から派遣されるキヤタローニア知事が頻々として殺害されることもまた實にこれに由來してゐる。

兎に角かうした巧妙な暗殺方法によつて獨立運動を促進してゐるところが如何にも古風であつて西班牙らしい感じを起さす。同時に政府當局がその鎭壓方法に苦しむることが英國政府の對愛蘭問題以上であると言へる。眞逆に政府として、これに對抗する爲めに暗殺方法を採用する譯にも行くまいから。然しながら、雇主若くは産業上の有力者に對する暗殺に對抗する爲めに、此等の者から成る暗殺團ができてゐる。頻りにサンヂカリストに復讐をなしつゝある。自分の記憶にして誤またぬならば、この春迄に暗殺された雇主側が三百數十名、サンヂカリスト側が約二百數十名あつた。まだその差が百名近くもある。それだけ更にサンヂカリストを殺さねばならぬ、兎に角こちらが殺された數だけ、あちらを殺す――斯う、雇主側の暗殺團は放言してゐるといふ。まるで傳奇小說のなかの町である。かうなると單純に物騷な町といふよりも、むしろお伽噺のなかの怖ろしい町といふ氣がする。

○

闘牛を見に行つた。ゴヤの畫でお馴染の、馬場孤蝶さんの譯されたシャンキウイッチの文章でお馴染の、さてはあのビゼーの『キャルメン』でお馴染の、その闘牛(トロス)である。

一番、二番、三番と續けて見てゐるうちに胸が悪くなつてしまつて、到底最後まで居殘る元氣がなくなつてしまつた。黒山のやうな大勢の見物は、きら〳〵した日光に照しつけられながら、夢中になつて歡呼の聲を擧げて、誰一人席を立たうとする者なぞはない。自分の氣の弱いことを多少恥かしく思ひながら、然し一方からした慘酷なものをかくも歡んで見てゐる西班牙人に對して一方ならぬ憤懣をも感じながら、ひとり場外に出たのであつた。——

その翌くる日は諸聖祭(トウツサン)であつた。バルセローナの目貫の通りを歩いてゐると寺詣でにと兩手に一杯花をかゝえた人だちが一杯に通る。花屋の店が町の眞中を何町となく續いてゐる。その間々には愛らしい小鳥を賣つてゐる店が散在して大勢の人がその小鳥の美くしい色彩や音色やに微笑(ほゝゑみ)交してゐるのであつた。自分はこの通りから近いカテドラルにはいつて、しばらく彌撒の式を眺めた。虔しやかな人達で薄暗い殿堂は充ちあふれてゐた。

かうした平和な敬虔な人達と、きのふあの闘牛で熱狂してゐた人達とを論理的に結びつくること到底能きない。然しながら實際は、それ等の人達は同じバルセローナの住民であり、——否、全く同一の人達であるのだ。きのふは闘牛の熱い紅い血を見て歡び合ひ、けふはカテドラルの微かな燭のゆらぎを見て祈るのである。

この矛盾性、この極端性、これが實に西班牙のハートだ。彼女は慘酷だ、しかしまた涙もろい。彼女は(その國旗が表徴してゐるやうに)血を流しながら黄金を探し出すのだ、しかし一杯のマンツアニージヤの酒に醉へばその黄金を捨てることをすこしも厭はないのだ。狡(ずる)いがまた親切だ。嘘つきだが、また眞情がある。

何れにしても、この國は傳奇的の國であり雜曼的の國である。それだけに、現代の舞臺には向かなくなつてしまつた。自分はそのことを西班牙のために悲しみ、また同時に悦びもする。全く現代の舞臺といふものはそんなに羨むに値するものではない！

○

サラゴッサを通つて首府のマドリッツトに出た。こゝに滯在中自分は幾度かプラドのミュジアムに足を運んでそこに蒐められた名畫の數々を見て廻つた。ヴエラスケス、ゴヤ、ムリオ、リヴイエラ、かうしたこの國の巨匠の作品がチシアンやチントレツトやさてはルーベンスやの大作と並んで場内を壓してゐる。何かの案內記に、このプラドを訪ねるばかりにでも西班牙に來る價値がある、とあるのは大して誇張ではないと思つた。そうした夥しい作品のなかで、自分に最も強い感銘を與へたものは、實にこの國の巨匠エル・グレコの諸作であつた。このグレコに比べるとゴヤもヴエラスケスも著しくその光彩の薄らぐことを感じた。

マドリッツトから汽車で數時間南行したところにトレドといふ古都がある。こゝでわがグレコは住み、描き、そして死んだのである。その町の不思議な蠱惑的な美は言葉に盡し難い。自分は隨分と方々の場所を踏んだけれど、あゝも不思議な美の印象を受けた所はなかつた。こゝで自分はまた數日を過した。その間自分はまたグレコを探し廻つた。こゝには彼の作品を集めたさゝやかなミュジアムがあるほかに、方々の寺院に彼の作品を藏してゐるのであつた。數にすれば四十にも達するほどの作品がこのトレド全市にある譯である。

自分のグレコに對する讃嘆は、かうした作品の展觀につれて刻一刻強くなりゆくのを感じた。恐らく自分が西班牙から得た旅の感興のうちで、最も貴いものといふことができる氣がした。自分は今でも西班牙の空を想ひ遣ることに、か

のグレコの畫の持つ色と匂とが香爐の煙のごとく立ちのぼるのを感じるのである。

自分は今こゝでグレコの作品についての自分の詳しい印象を談ずることは止さう。それには更に機會があることと信ずるから。たゞ西班牙の旅行が自分に齎したもののうちグレコ展觀が最も自分に印象が深いものであつたといふことを一言するにとゞめやう。

○

アンダルシア地方を旅した。ドン・フアンやキヤルメンや、さてはコルネーユの『ル・シッド』などで名高いセヴイラの町、(西班牙の人はセヴイジヤと發音してゐる)それから例のアルハムブラ宮殿で名高いグラナダの町、さては不思議な回教寺院(モスケ)のあるコルドヴアの町、西班牙のなかでもまた特に西班牙らしい地方、そこを一週間計りかゝつて歩き廻つた。

このアンダルシア地方の旅行は、自分にサラセン文明の氛香をはじめて目の當りに知らしめた。歐羅巴とは言ふもののこの邊一帶の風物は、阿弗利加に近かつた。土のいろ、空のいろ、樹、草、花の色、それ等は何れも阿弗利加らしかつた。それから行人の服裝にしても、その薄黄いろな皮膚にしても、黑い頭髮、眼、睫毛にしても、また酒や歌や踊にしても、阿弗利加の熱い匂ひが充分に滲み入つてゐるのが感じられた。かうしたなかにあつて、アルハムブラ宮殿の上に佇み、アルカザールの庭園のなかを歩むならば、誰でも均しく歐洲大陸から亡びて行つてしまつたサラセン文明のうへを哀切な思慕の感情を以て思ひ泛べるに違いないと思ふのである。

白人の文明の爲めに追はれて了つたこの亞剌比亞人の文明は、その建築や彫刻やが斯くも明かに示してゐるが如く充分に優れてゐたものであつたことは容易に推察できる氣がするのである。これ程の秀れた藝術を持ち得る民族が野蠻人

であつたと言ふことは到底受取れない。彼等はその藝術に於けると同じく、政治、經濟、軍事等に於ても當時優に白人と對抗できたのであらう。現に『アルハムブラ物語』の著者ワシントン・アーヴイングは千四百九十二年に於ける亞剌比亞人の敗辱の原因を一にその身内の爭鬪に歸してさへゐる。

自分は、世界文化の多彩多錯のためにもこのアラブの文明を能きるだけ完全な形で保存して置きたかつたと思ふ。全くこのアラブの文明の持つ美と魅力とは白人の文明からは得られぬ特異さがある。ある點に於ては、我々日本人にとつて白人文明よりも遙かに容易に且端的に理解できやうとさへ思はれる。『東方(オリアン)』の血が西洋よりもむしろ我々を強く捉へてゐる氣がする。そうした意味でも、自分はこの文明が壞され次第々々に亡びてゆくことを惜まずにはゐられない。

然しながら、國は亡びても民族は殘る。否民族は亡びても藝術は殘ることが能きる。この意味で、亞剌比亞の藝術は決して亡びることなくつねに創られ育てられして生きつゝあるといふことが能きる。アンダルシアの地方で我々が見聽きするものは何れもその生きつゝあるアラブである。歌に、踊りに、さては聳立する建築に、庭園に、かくも明瞭なるアラブの心が動いてゐるのである。

否それを感じる爲めには何も態々アンダルシアの地方まで旅する必要はない。白人文明の中心とも言はるべき巴里に於て我々は如何にこのアラブの心が感する機會が多いか、むしろ意外と言つてもいいほどである。自分は屢々キャルメンのことを言つたがこのビゼーの名曲は、殆んど一週一度は必ずオペラ・コミックに上ると言つていい。しかも例外なく常に滿員である。而してかくの如く人の心を惹きつけるその旋律(メロディ)は、實にアラブの旋律であるといふではないか？ 更にこの種類の歌劇を擧ぐるならばマスネーの『タイス』があり、サン・サンスの『サムソンとダリラ』があり、またヴエルデイの『アイダ』がある。何れも間斷なく巴里のオペラに上場せられつゝある。これを他にして夥しいアラブ風の樂曲

や舞踊やらにいたつては擧示するの煩に堪えない。一口に異國情調(エキゾチズム)の語彙をもつて稱ばれるものは實は殆んどアラブの情調を指すものと言つていい。これ等をもつて見ても、如何にこの黒人の藝術が不思議なる魅力を以てあまねく人の心を捉へゆくかが推察できやうと思ふ。

希臘文明の研究もいい、ルネッサンスの研究もいい、そうした言はゞ文明史上の正系(オルソドックス)の研究は無論必要である。然し一方、一時は白人文明と對峙し、今尚その影響を廣く及ぼしつゝあるアラブの文明について、日本人の間にもすこし研究するところがあつていいではないかと思ふ。地理の上から計りでなくその心のうへからも、日本人とアラブの間は決してそんなに遠くはない筈である。

○

前記したアーヴイングの『アルハムブラ物語』のなかに西班牙の貧しい百姓のことを書いた章がある。それに依ればかうした貧しい無知な百姓の間に遍く行き亙つてゐるある確信がある。それは、今は海の彼方に去つて了つた阿剌比亞人がこの地を去るに當つて夥しい財寶の類をば深く地下にかくしてから逃げたといふ傳説についてである。彼等百姓はこの傳説を眞實のこととして疑はない。いつかは屹度その財寶を堀り當てることが能きるといふ考を皆が持つてゐる。從つて現在こそはかくも慘めな生活をしてゐるものの、明日の日にも什麼富限者になれるか知れたものでもない。といふ思想を、いづれもが抱いてゐる。この希望が、現在の苦しい生活を他で想像するほどには苦しくなく感じさすのである。——とその本に書いてゐる。

自分はこの話につれて、西班牙全國に傳播してゐる例の富籤(ロッテリア)のことを思ひ起さざるを得ない。この富籤は堂々たる府の發行にかゝるものであつて、日本の勸業債券のやうにどつち附かずの宙ぶらりの手緩いものではない、全然時

る。千倍か百倍になつて戻るか、然らずんば總一文戻つて來ぬといふ徹底さであり、何ペセタといふ金がうまく行くと何十萬ペセタとなるのである。昨日の乞食が今日巨萬の富限者となる『可能性』があるのである。

この可能性は、――要するに亞剌比亞人の財寶を掘り當てる可能性である。無智の百姓がこの可能性にたよつて今日の貧乏を案外苦にせんで日を送つてゐるやうに、一般の西班牙人がまた富籤（ロテリア）の當る可能性によつてその惨めなプロレタリアの生活を甘受しつゝあるわけである。最初に亞剌比亞人の財寶が土のなかにあるぞと言ひはじめた人間も、この富籤（ロテリア）のことを思ひついた西班牙政府もこの點に於て均しく恐ろしく人性を洞視してゐる社會政策家であるといふことができやう。

由來西班牙は上下貧富の差の著しい點に於て遙かに他の歐洲各國の壘を摩してゐる。その少數の特權階級の者は無爲豪奢、日夜逸樂をのみ事としてゐる。それに反して一般勞働者殊に農民の生活はある意味で畜類にすら劣るの現狀である。この不祥なる對比は何日か怖ろしき爆發を生むことがあるかも知れない、が今のところは、前記のバルセローナの騷ぎやまたは北部の工業市ビルバオの騷ぎやが局部的且慢性的の震動をなすのみであつて、一帶に左程不穩の實行を見ない。これは主として一般が無知の結果その境遇に對する眞の自覺が無いのにもよるが、その他に前記の如き『社會政策』がうまく魔睡藥の役割を演じてゐるからであらう。なほこの他には、こゝの國民は愈々生活が窮迫して來ると容易にメキシコや南米やに飛び出すことができる。そこは、（ブラジルを除いては）獨立國とは言ひ條、各れも西班牙人に依つて創建せられた言はゞ西班牙の殖民地のやうな觀のする所であつて、國語もそのまゝ西班牙語が通用する。（因に、今春の國際聯盟總會に西班牙語が國際語として採擇された。聯盟加入國中西班牙語を國語としてゐる國が實に十四個國の多きに達するといふ。）從つて、西班牙人にとつては斯うした國に赴くのは、多少の手數のかゝる移轉に過ぎない。そして

こゝで何年か辛棒してゐれば一寸した小金ができる。それを持つて本國に歸れば、當分はぶら〳〵遊んでゐても食べられる。——といふことになるのなさうである。

西班牙の社會問題の上には斯うした種々の避難所があるわけである。これが何日まで避難所の役割を續けることが能きるか、可成りに興味のある問題であらう。

○

一個月に亘る西班牙の旅を終へて巴里に歸つた頃は、もう冬の初めであつた。宮内の時、親しげな暖爐と燈火との時、そしてまた芝居や音樂會やの所謂季節（セエソン）の時でもあつた。

あゝ、巴里の季節（セエソン）！そのことを今杳かに日本から想ひ遣れば、全く夢のやうな氣がする。何といふ豐かさ、何といふ美くしさ。こんなにも澤山あつて一體いいものか知ら、——そう自分は獨語した。自分は餘りの豐かさは人を不安にすることを知つた。全く繪を愛し詩を讀み音樂を知る者にとつては、この頃の巴里を地上の樂園にたとへても綺語ではないであらう。日毎夜毎のコンセエル、華やかなオペラ、芝居、舞踊、次々に開かれる繪や彫刻やのサロン、詩や小說や講演會、そうした催しのプログラムを新聞や街の廣告塔やで見るだけでも一つの仕事であつた。自分のスケデュルは一週間位前まではいつも餘白がなかつた。一日のなかに幾つも聽きたいもの見たいものが累集して、その取捨に困るのは毎度のことであつた。午後に（マチネ）行つた日に夜にも（ソワレ）行くといふ日が稀ではなかつた。日本のことを想ひ出す毎に、自分はたゞ長嘆息した。藝術を愛する素質を持つてこの日本に生れさせられたことを何と言つて慰めていゝか、——とまで自分は思つた。

そうした季節（セエソン）のなかで自分が最も多く足を運んで行つたのはコンセエルとオペラとであつた。わけて佛蘭西の作家の

ものは缺かさずに聽きたいと思つて出掛けた。それは、一つには獨逸音樂一點張の日本では容易に聽き得ぬものであつたし、一つには獨逸音樂よりは遙かに自分にぴつたりすると感じたからであつた。

　セザール・フランクやベルリオースやビゼーや、さてはドビュッシイや、かうした人々の音樂を完全な姿に於て幾つとなく聽くことが能きた。今更に自分はこの人達の偉大のまへに頭が垂れるのを感じた。ベルリオースのサムフオニーや『フオーストの地獄墮』やなどを聽いた時なぞは、日頃は尊敬してゐるベートーヴエンをすら輕蔑する氣になるのであつた。ドビュシイの『ペレアスとメリサンド』などは幾度も聽くことが能きたが、その一度なぞは折柄巴里に上場されたワグネルの『トリスタンとイソルデ』を見たその翌くる日だつたので、如何にも都合よくこの二人を比較し合ふことが能きた。そして、今更のやうにドビュシイの純眞な感情、新鮮な様式、その魅力を感じたのであつた。ビゼーにいたつては我愛人以外の何物でもなかつた。短かい季節の間を自分は彼が『キヤルメン』を聽くために六七度もオペラ・コミツクの門をくぐり、『アルレジアンヌ』を聽くために三四度もオデオンの石段を踏んだのであつた。そして今更にかのワグネルの爲めの最大な代辯人であつた『ツアラツストラ如是説』の著者をして『キヤルメン』は現在のオペラ中最も美くしきもの……」と叫ばしめたことを故あることと思ふたのであつた。

　自分はこの文章を書きながら、この數日前、茲大阪で開かれた音樂會のことを想ひ出さざるを得ない。その曲目には、——ブラームスが、メンデルソーンが、リストが、さてはヴエルデイがあつた。そのなかに一つフランクのソナタがあつたのがせめてもであつた。兎に角、十年一日の如くこの國の樂壇を指揮してゐた獨逸音樂が、依然としてその夜の音樂會をも指揮してゐるのを自分は、見たのであつた。そして、この國が歐羅巴の影響を受けてゐるといふものの、そのほんたうの影響を受けるには餘りに遠く離れてゐることをつくづく想つたのであつた。

自分は、そう言ふことに依つて一概に佛蘭西音樂を擧げ獨逸音樂を蔑まうとする者ではない。それどころか自分をして今日のやうな熱心な音樂愛好者たらしめたのは、一重にこの國の獨逸音樂によつてであるし、なほまた引續いて自分はベートーヴエン、バツハ、リスト、ウエバー、モツアルト等の激しきアドマイアラーでもある。從つて自分がいま佛蘭西音樂のために强調するのは、むしろ、獨逸音樂を蔑むためではなくて、獨逸音樂を擧げるとともに佛蘭西音樂をも擧げたいといふに他ならない。

自分は全く日本の樂壇の獨逸偏重におどろく。自分は佛蘭西は言ふに及ばず、英國、伊太利、西班牙等の旅に於ても機會ある毎にコンセエルに赴くのを樂しみとした。そうした何れの國に於ても、この日本のやうな獨逸偏重の曲目をつくる所を見なかつた。それ許りではなく本國の獨逸に於てすら、（伯林のフイルハーモニーで自分はかの名指揮者ニキシユを見ることを得た）――それも戰雲が未だ消え終らずに激しい敵意を聯合國側に對して抱いてゐる現在の獨逸に於てすら、自分はもつと公平な曲目が作られてゐるのを見るのである。

殊にドビユシイ以後、世界の音樂の中心は、獨逸や伊太利から全然佛蘭西と露西亞に移つたといふことは豫ねて聽いてゐたところであつたが、自分が親しく其地を踏んで感じたところも亦その通であつた。自分は巴里で樂人小松耕輔氏が獨逸の旅から歸つた砌に自分に語つた言葉を今想ひ出す。氏は、音樂の季節（セエゾン）の間を利用して獨逸に赴き主なるコンセエル、歌劇等を遺憾なく訪ねて巴里へ戻つたのであつた。氏は言ふ、獨逸にて樂壇の新人を以て目せらるる人達の作曲は佛蘭西の夫れに比較すれば頗る振はず、然も徒に佛蘭西音樂の模倣に汲々たるものゝ如く、新人中の異才シユトラウスすら近作『ヨセフの傳說』の如き、ドビユシイ以後の佛蘭西音樂の影響を受け居ること明瞭である云々と。自分も、一個月に亘る滯獨中の經驗によつて全然小松氏と所見を共にする。然も、氏は日本に於ける總ての樂人と異らず、全然

獨逸音樂のなかに育ち、特殊に獨逸音樂にシムパシイを有するの士であることを記憶しなければならぬ。

自分は羅馬滯在中一日テアトロ・コンスタンチに於てマスカニの新作『ピッコロ・マラト』の上演されるのを見る機會を得た。『カヴレリア・ルスチカナ』の作者として現代伊太利の有する最大の樂人である老ひたる彼が親しく指揮臺に立つて百數十人から成るオルケストラを指揮してゐるその姿は、自分に忘るべからざる感銘を與へたが、その曲を耳にすればかの『カヴレリア・ルスチカナ』の伊太利音樂特有の色調は消えて、これも亦佛蘭西音樂の強き影響の下にあることを知つて、むしろ自分は寂しく感じたのであつた。

兎に角今日の音樂は佛蘭西と露西亞とがその中心をなしてゐることは言ふまでもない。然し日本の樂壇にそのことを悟つて貰ふまへに、自分が眞に希ふてゐることは、今日までの佛蘭西音樂をもつと正當に理解し、愛して貰いたいといふことである。自分は巴里の季節(セエゾン)の間に友人とともに、幾度日本にゐる音樂愛好者の不幸に就いて語り合つたらう。自分までがこの『不幸な』境遇に立たなければならなくなつた今日、この希願は一層強からざるを得ない。

○

オペラやコンセエルやに次いでは矢張り芝居を多く見た。それも餘り新らしいものでなく古いものの方を多く見勝ちであつた。

コルネーユやラシーヌやモリエールやは季節(セエゾン)にはいると方々の劇場に絶えず上演される。ユーゴーやミユツセやヂユマやなぞも可成り頻繁に見ることが能きた。

かうした古い作家のものの上演は、一般佛蘭西人の古典趣味をば充分に物語つてゐる。彼等は新らしいものに赴く憧れよりも更に強い執着を過去のものに感じてゐるのだ。巴里と言へば流行の中心、新奇な運動の淵源地の如く世人から思

はれてゐるけれども、事實はむしろこれに反して極めて保守的、擬古的であつて容易に新奇に趨らぬ所を持つてゐる。恰度この季節（セエゾン）の終る頃にテアトル・フランセエ（國立劇場）にイプセンの『人民の敵』が上演されたことがある。日本なぞだつたならば今頃イプセンでもあるまいではないかと言はれさうなものを、この國立劇場は初めて上演したわけである。この北歐の天才の作品が初めてかうした檜舞臺にかゝつたといふので、今更のやうにイプセンのことが巴里評壇の話題となつた。『巴里もいよ／＼歐羅巴になつた！』洒落ことを言つた新聞もあつた。この『人民の敵』の上演よりすこしまへに制作劇團（メエゾン・ド・レーヴル）と稱ばれる合同組織の劇團の手でストリンドベルヒの『債鬼』が上場されたことがあつたが、その時なぞもポール・スーデーだつたかゞル・タンの紙面で長々とストリンドベルヒの藝術の紹介をするといふやうなこともあつた。自分がこの夏佛蘭西を去る頃なぞは、タゴールの『郵便局』を何處かの劇場で上演するとかいふので、それを機會に詩集『ギクンジヤリー』の飜譯がでたり、タゴールの藝術に對する批評が新聞雜誌に現はれたりしたのを見た。

斯くの如く保守的なゆつたりとした佛蘭西の行き方とくらべると、獨逸なぞは著しく氣風が違ふやうに思ふ。僅かに一帶が進取的であつて、新奇々々と物を趁ふて行く風がある。ほんの僅かな伯林の滯在中でも自分はアンドレエフを、ワイルドを、ショーを、ロマン・ロランを町に掲られた芝居のポスターに見ることができた。如何にも、一昨日本にでもゐるやうな氣さへするのであつた。古い芝居であつても、たとへばゲーテの『フアウスト』なぞを見ると舞臺裝置からことごとくラインハルトの考案になつた新奇なものであつたし、シーラーの『オルレアンの少女』なぞを見るとデコールもコスチユームも全然表現主義（エクスプレツシヨニスムス）と稱する奇怪な樣式によつて爲されてゐる許りではなく、その科白は元來が詩劇なのに係らず散文朗讀で棒讀みをやつて了ふといふ始末である。佛蘭西がモリエルなぞをやるに、舞臺の上に更に小さな舞臺を作つて十七世紀そのまゝの空氣を出させやうとしてゐるのとは大變な相違である。

かうした佛蘭西の好古趣味は芝居に限らずあらゆる方面に現はれてゐる。繪畫なぞも日本のアマトウルこそセザンヌやルノアールをこの上ないものに云爲するけれど、巴里なぞで自分で感じたところは、一般の好尚は概ね印象派以前にあることである。恰度自分が巴里滯在中、セザンヌとルノアールとの二つの展覽會が催された。曾て催されたこの二人の展覽會と比べると、その時のは質に於ても量に於ても勝つてゐたと言ふことであつた。數十と並んだ大小の作品を前にして、自分の感動と感慨は實に大であつた。人も少なかつた。落付いてゆつくりと見ることが能きた。所がこの二つの展覽會のあつたあとで、十八世紀末の畫家フラゴナールの展覽會がルーヴルの建物の一部で催された。その時は前記の展覽會が無料だつたのに反して、五法だつたかの相當高額の入場料さへ徴收された。然るにその展覽會に夥しい觀客の爲めに、自分なぞは大概人々の肩越しにその作品を見るの止むを得ない有樣であつた。繪畫がこんな具合であるから、彫刻なども同然である。かのロダンなぞに對する一般の批判はおどろくほどに冷淡であると言つていい。自分が一時下宿してゐたところのある家庭の令孃なぞは、ロダンに對する自分の崇敬の辭を聽いた時に『おゝ、あんな不完全（アンペルフェ）なものを！』と言つて不思議さうな表情を顏に浮べたものであつた。ロダンのミュジアムにも何度か出掛けたがあの廣い建物のなかに自分は五人を越えた見物があつたことを一度も見なかつたと言つていい。ロダン以後の作家として人はマイヨールなぞを擧げてゐるが、これ等も眞に一部の人達に過ぎないのであつて、一般は矢張りバルテルミー邊の傳統的なアカデミックな作品を尚んでゐるのである。

　詩や小說といふやうなものも、この例には洩れない。否、かうした藝術上の作品のみに限らず一般の學問に於ても態度に於ても、更に廣く生活そのものに於ても、斯くの如き保守的傾向の強きことは意想の外であると思ふ。從つて、佛蘭西の特徴は新らしきよりもむしろ古きにありとした方が事實に近いではないかとさへ感ぜられるのである。

○

巴里の保守的傾向は前述の如くに強い。然し、それだからと言つて巴里がその新流行の中心、新運動の淵源地としての方面を失つてゐるかといふと、決してさうではない。巴里の好尚は概括的に言へば極めて保守的であると共に、その生氣ある部分に於ては最も急進的であり飛躍的であつて絶えず新らしき精神と様式とを創りつゝあるものなることを忘れてはならない。これこそやがて巴里を浸しゆく『泉』でもあり、その四周を照し出す『烽火』でもある。しかも保守的傾向がこの新らしき泉、新らしき烽火のあるがために却つて一段の生き生きした魅力をも帶び來るのである。進取的傾向がこの場合保守的傾向の防衛をするのではなくて却つてその淨化の役割を果すのである。……

また芝居に就いて例をとらう。テアトル・フランセエで今年はじめてイプセンを上演したことを前述したが、實はこれの裏には十年もまへから今日に至るまで引續いてイプセン劇を主として演出してゐるポーエ氏に率ゐらるゝ製作劇團があることを忘れてはならぬのである。(テアトル・フランセエは、言はゞ十年の苦節を守り續けたこのポーエ氏の功績を考へて、その『人民の敵』の演出に際して舞臺監督となることを懇請した)イプセンの名が人の耳に未だ親しまぬうちからこの劇團は、この天才の作物を手にかけてゐたのである。

サラ・ベルナアル座で老女優サラ・ベルナアルが古いラシーヌの戯曲『アタリイ』をこの季節に演じた。彼の當り藝でもあつたので見物は蝟集した。『アタリイ』がすむとすぐ彼女は追つかけて『ダニエル』といふ新作を上演した。そこで彼女は主人公の病人の男性に扮する。作者は一向聽き馴れぬ人であつた、——未だ三十歳の若い男だといふことがあとで知れたのであつた。老女優は巴里を打ち上げると更にこの知られない若い作者の脚本を携へて態々倫敦まで出掛けたのだつた。……

まへのレジャヌ座、今の巴里座(テアトル・ド・パリ)は華麗で意氣な劇場である。(東宮殿下が巴里滞在中この劇場へ臨まれたことは世間には知られてゐない。お勧めして御案内申し上げた人を多とせざるを得ない)こゝでアンリ・バタイユの「薔薇の人(ロンム・ア・ラ・ローズ)」を上演した、(この芝居のことは自分が何日だつたか朝日紙上に詳しく書いたことがある)バタイユと言へば佛蘭西翰林院(アカデミー・フランセエ)の會員、『翰林院(アカデミー)にはいる時は文學(リテラテュール)から出るときだ』とまで言はれてゐる古風な空氣の漂ふてゐるところであるが、この『薔薇の人』の著想・構圖・演出、どれとして新奇でないものはなかつた。樂人レーナルド・アーンの作曲が挿曲としてその演出を助けてゐたことも耳新らしいものであつた。——

こんなことを書き並べて來たら果てしが無い。自分は最后に近々日本に來る筈のポール・クローデルの新作『人とその慾情(ロンム・エ・ソン・デジイル)』をシャン・ゼリゼエの劇場で見たことを書いてこの例證を終らうと思ふ。

クローデルのその作は Poème Plastique 造形詩といふ不思議な名で稱ばれてゐる。詩をそのまゝ運動と音樂を通して見せやうとするのである。結局は舞踊(バレエ)のコレグラフイではあるけれど、コレグラフイは音樂ができてから然る後に創られるのに反して、これは音樂に先んじて若くは同時に創られたものである。クローデル氏の言葉に依れば、この『人とその慾情』は、南米リオドジヤネロに近い森林のなかで詩人、樂人及畫家の三人の手に依つて出來た思想と音樂とデツサンとの協同製作であるといふ。音樂はダリウス・ミロー、デツサンはパール夫人、思想は言ふまでもなくクローデルである。

かうした日く附の作品が瑞典舞踊(バレエ・スエドワ)によつて前記の劇場に上演せられたのである。この瑞典舞踊といふは、露西亞舞踊(バレエ・リュス)とその行き方に於て大差はない、たゞジヤン・ボルリンといふ當時の露西亞舞踊のニジンスキーにも匹敵する巧妙な踊り手があつたので、盛んに人氣を呼んだのである。(『千九百十四年の舞踊(バレエ)の神様はニジンスキーだが、千九百廿一年の神様はジヤン・ボルリンだ』こんなことを巴里の新聞は書いてゐたほどであつた)このボルリンが、『人とその慾情』のなか

のその人(ロンム)をおどつた譯である。

何といふ奇怪至極の舞臺であつたとか、それに何といふ途法もない音樂であつたとか。たゞもう自分にびつくりして仕舞つた。舞臺は上下三段に分れて、一番上に並んだ黑い被り物の人物は『夜』を表はすのだといふ、白い被り物の人々達が現はれる。これは『月の光』を表はしたのだといふ。同じやうな人々達が一番下の段にも現はれる。これは水の面の『反射』であるといふ。そうした上下兩段の中央に當る段で眞紅い『人(ロンム)』が眞蒼な『慾情(デジイル)』と奇怪な運動をつゞけるのである。その不思議な舞臺は到底細かな註釋無しでは判るものではない。それに、その舞臺がつゝた騷々しい支那の芝居でゝも耳にするやうな奇異な音樂――

斯うした言はゞ思ひ切つた試みは、到底巴里以外では見ることが能きまい。兎に角巴里ならば罵詈もされるが、また理解もされ得るのである。新聞や雜誌の上なぞでも、斯うした作品に就いて激しい賛否の爭を不斷に見ることが能きた。

斯うした風の新運動は、芝居の上でのみ明らかに見られるので無いとは言ふをまたない。餘り長くなるのでこゝには芝居以外のことは言及しないけれど、巴里が今その方面の世界思潮を指導しつゝあると言つてもいい新らしい繪畫や、彫刻や、音樂や、さては詩やを一瞥見するだけでも、容易に肯き得ることと思ふ。兎に角、巴里の一般の好尚は古いものに飽いてゐることは疑を容れぬが、然もその一部には斯くの如く新らしき噴泉が存して絶えずその生々せる飛沫を兎もすれば枯燥せんとする氣味ある好尚趣味の上に浴びせかけてゐるといふことは、容易に他の諸國に見ることが能きぬ面白い現象と思ふのである。

○

然しながら斯く新舊兩面を有するは敢て佛蘭西に限つたとでもないではないか？——斯う讀者は言ふかも知れない。全くその讀者の言ふ如く、敢て佛蘭西と限らず英吉利でも伊太利でも獨逸でも、さては我日本でも、新舊の兩面を充分明瞭に持つてゐると言ひ得る。從つて、單に新舊兩面を持つと言ふだけでは、特に佛蘭西を別格に云爲する理由にはならぬ。然らば何れの點が佛蘭西と他の諸國とを分つのであるか？　それを一言に要約すれば、その調和力でありその化合力である。新舊が水と油の如く不融合の狀態になつてゐるのではなく、互に相牽引して混和化合して行くその調和力にあるのである。他の諸國にあつては新舊の爭闘は、譲るのを敢てせぬ物の兩極である。この佛蘭西にあつては、唯その化合の途次に於て起る一時的の現象に過ぎない。

例へば巴里の町と羅馬の町とを比較して見る。我々は巴里の町に於て何よりも先づ調和の美を感じる。この美がふつくりと匂やかなる雰圍氣をもて我々をつゝむのである。その雰圍氣はあらゆる時代あらゆる土地のエッサンスを含めることを感じさせる。我々はそこに古いゴール時代の土の匂いを嗅ぐことも能きれば、古羅馬の微かな匂ひをすら嗅ぐことが出來る。路易(ルイ)王朝や帝政(アンピール)時代やの雅びやかな色と匂とは直ぐ間近くに感じることが能きる。然もかゝる異れる時代の姿相がそのまゝの形に於て現はれるのでは無く、柔らかき雰圍氣を通して恰かも薄絹の面紗(ヴェール)を透いて優しき面輪をうかゞうが如くに現はれ來るのである。

これに反して我々が羅馬の町などで感じるものは「過去」の幽靈とそれに對抗しつゝ闘つてゐる「現代」である。古代のフォルムやコルセオやのおそろしき屍骸に並んで、中世紀のヴナカンが小山の如くに聳立してゐる。かと思へば、一方には新らしきセセッション風の樣式でできた家屋がかうした屍骸の周圍に建ちつゝある。自分には羅馬の町は病人の瘡蓋のあたりの如くに感じられるのである。ある個所は死滅して了つた瘡蓋である、ある個所は未だ膿を持つたまゝに

なつてゐる、がまたある個所は新たに肉が湧き上つてゐる。――これが羅馬の町であつた。新と舊との間に渾然たる調和がない。あるものは個々の爭鬪か、それとも無關心である。

――この巴里の町が示す調和力、引いて佛蘭西の文化が有する調和力は、彼女の持つ最上の魅力である。この魅力を感じ得ぬ人だつたならば、彼女の有する夥しき寶庫は遂に開かるることなく終るであらう。それは單に藝術のこと許りを意味しない。總て政治經濟の方面、法律制度の方面までもこの調和力を先づ感得した上でなければ理解能きぬであらう。

ヴィダル・ド・ラ・プランシュといふ地理學者が佛蘭西の本相の特性を短かな言葉のうちにいみじくも言ひ現はしてゐる。

『佛蘭西は己れを攻圍し來る雜多不同なるものに抗戰してやがてそれを己れの同化力のなかに導き入らせる。彼女は己れの受け容れたものを變態せしめる。對抗は薄らげられ、侵害は消滅する。恰かもこの佛蘭西にはその角度を軟らげ、その輪廓を暈かす何かがあるやうに、感ぜられる……』

現に今佛蘭西の持つ『新』も『舊』も、軟かき角度、暈かされたる輪廓を持つてゐる。その新にも常に何等かの古き傳統を揺曳してゐるし、その古にも常に爽やかの新味を帶びさせてゐる。新舊傾向の對峙、新舊思想の衝突、さては社會階級の鬪爭、かうしたものはありながらも、他の各國とはその色合を著しく異にしてゐることを我々は見逃してはならぬのである。――以下次號――

時論

法學博士　吉野作造

重ねてヤップ島問題に就いて

ヤップ島問題の事はこれまで度々論じた。事柄も今は大體解決が着いたと云つて好い。重ねて之れを論ずるのは餘り煩いやうだけれども、之れに絡む二三の問題の未だ明白に知られざる點あり、のみならず之れに依つて外交上の時事問題に對する國民の見解を正すの便もあると思ふから、かた〴〵更に貴重なる紙面を割く事にした。

米國の所謂「均霑要求」の根據如何。

米國は海電陸揚、電信局及び無線電信局設置並びに之れに要する土地所有及び收用等、ヤップ島に於ける陸上の諸權に關し、日本と同等の權利に均霑せん事を要求したのだが、其要求の根據如何に就いて我國では十分明白に了解して居ないのではないかと疑はるる節がある。先頃某大新聞は其社説に於て、國際聯盟に這入りもせで、權利のみを要求するとは不都合だと論じて、丁度米國の態度を會費を拂はないで御馳走ばかり食ひたがる者かのやうに見て居つたが、之は飛んでもない見當違ひであらう。向ふの言ひ分はそれを正しいと許すべきや否やは別問題として、斯う云ふ所に根據を置く。曰く、此度の戰爭では皆の協力で獨逸に勝つた、從つて獨逸は其海外屬領諸島を「主たる同盟及び聯合國」の爲めに放棄した。故に米國は有力な仲間の一人として之れ等の諸島の上に一部の權利を有する。そして夫れは日本などの有する權利と多少の差あるべき筈はない。日本の持つ丈けの物は自分も當然持ち得る筈だと。見るべし、國際聯盟に加入すると否とは毫末も米國の權利に關係がない。米國の立場よりすれば彼れの權利は國際聯盟に加入する事に依つて初めて發生したものではないのである。

米式要求に對する日本の當初の抗辯は如何。

ヤップ島は他の屬領諸島と共に其初め皆の物であつた事は疑ひない。然るに米國も參加せる最高會議に於て、ヤップ島等は日本の委任統治區域に割當てられた。最高會議は所謂「主たる同盟及び聯合國」を代表するものである。而してヤップ島は所謂C式委任統治區域に屬するが、之れは自國領土同樣に統治し得ると定まれば、ヤップ島は即ち日本の專屬的統治區域にして、他國は最早や之れに容喙する事が出來ない。米國の要求は此點に於て成り立ち得ないと云はねばならぬ。如何なる權利を如何なる國に認むるか認めざるかは日本の自由であつて、他國の指圖を受くべき問題ではないのである。

斯くの如く日本側の主張する通り最高會議の決議を有效とすれば、米國の言ひ分は其儘通り得ない。米國は初め最高會議の決議を承認し、只海底電線に就いては他日の協議に留保したと主張したのであつたが、日本は嚴格に之れを拒んだ事は先きにも述べた通りである。そこで米國は論法を一變し、全部否認の態度に出で、ヤップ島の處分は何等の協約もなかつた昔の白紙に還つて出直さうと云ひ出した。さうすると即ち前段に述べたやうな所謂均霑の要求が一つの理窟になるのである。

そこで此問題の解決は米國の言ひ分を通すか、日本の言ひ分を通すか、二者其一を選ばねばならぬ羽目になつた。細目の點に就いては双方の便宜の爲め妥協讓步の餘地はあるが、此根本問題は主義の相違であるから斷じて妥協は出來ない。ヤップ島問題は略解決したと政府では聲明して居るが、予輩の茲に問はんと欲する點は、此主義の爭點はどう決つたかと云ふ事である。

假りに米國が日本の立場を承認したと想像して見やう。

米國は今年春頃の交渉に於て日本の立場は認めても好いから、海底電線問題に就いては自發的に開放するの措置に出でないかと申し出た事がある。して見れば米國では海底電線問題に關する要求さへ通れば日本の立場を強ひて爭はない考へらしい。當時日本政府は之れをすらも嚴しく拒んだので問題は紛糾するに至つたのだが、もと／＼米國の考へは右述ぶる通りであるから、話を又元に戻し得ないとは限らない。そこで此度の解決に於て米國の要求する諸權利を假りに認めたのは、一旦日本に歸屬した權利を改めて米國に承認したものと見れば、根本問題に就いては米が我れの立場を承認したものであつて、此問題は日米兩國限りで解決し終つたものと見なければならない。多くの新聞は斯くの如く解釋して居るやうであり、時々政府當局者の發表する所に依つて見ても同樣の見解を有して居るやうだが、併し此點

は米國も果して同じ考へであるかどうか疑はしい。重大な外交問題として我々は明白な答辯を責任ある當局者から聞きたいものだと考へて居る。

時論

日本が米國の主張に讓つたのではあるまいか。前後の事情、彼我當局の發表する所などに依つて推定して見ると、どうも日本が米の立場を認めたものではないかと思はれる。少くとも米國自身に自家本來の立場を少しも抂げたと云ふ考へのない事は疑ひない。米國は斯う云ふ積りで居る事を日本側で相當に理解して居るかどうか。之れを理解しないと向ふの爲す事爲る事が分らなくなつて、徒らに無用の猜疑を逞うする事になる。

予輩の見る所では米國に第一通信事業に關する權利均霑の要求を貫徹し、此本來の目的を達した以上は、委任統治割當てに就いての抗議を強ひて固執するに及ばずとして、ヤツプ島等を日本に與ふの最高會議の決議の趣意を承認した。そこで初めて最高會議の決議は總ての關係國の承認の下に完全に成立し、日本とヤツプ島との關係も確定したのであるが、併し問題はこれで全部終了したとは云へない。米國は抗議を撤回したとは云へ、現に仍ほ一旦「主たる同盟及び聯合國」の一員たる自分の承認なしに獨逸諸島の處分を勝手に決めるのが不都合だと云つて、米國の承認なしには何事も終局的に確定しないと云ふ原則の承認を求めた。之れは獨りヤツプ島のみに關する問題でないのみならず、又日本のみに對する交渉でもない。して見れば日本と關係する範圍に於て總て圓滿に解決したとは云へ、最後に殘る主義の問題は改めて列國の協議に附する必要があるのである。列國の問題に持ち出したからとて別に變つた解決を求むるのではない。君達の云ふ通りにして好い、只一應は自分にも斷はつてくれろと云ふ丈の問題である。形式一遍の手續きに止まる。併し之れを踏まなければ完全に話が落いたとは云へない。故にヤツプ島問題が日米兩國の懸案として解決を見たるに拘はらず、猶ほ米國が之れを華府會議の議題に上提せんとするの怪しむべからざる所以である。

最近米國に議題私案中に委任統治に關する一項を追加したと云ふ報道がある。それに對して、我國では米國の意を知るに苦しむと云ひ、又は一切の解決が華府會議以前に解決せられない所から之れを問題とするのだらうなどと云ふ説があるが、夫れは皆誤りだ。上提するのが當然で、日米の懸案が會議以前に一切の解決を見ると否とに拘はらない。又之れが華府會議に上提されたからと云つて日本の不利益でもなければ不面目でも

帝國政府は何故にヤップ島問題の解決を急ぎしや。

現に政府の發表する所に就き精細に之れを研究するに、ヤップ島問題の解決は完全に米國の當初主張せられた通りになつて居る。新聞では米國が前に提出したる委任統治權に對する抗議を固執せざる了解と交換的に、陸上諸權利に對する米政府の均霑要求を悉く容諾したと發表せしめて居るが、之れは些か羊頭を掲げて狗肉を賣るの嫌ひなきを得ない。米國は取らうとする丈けのものを完全に取つた。之れに對して日本は失はんとしたものを恢復したと云ふのではない。米國に委任統治權に對する抗議は申し出でたが、之れは日本にやらないと云ふのではなく、日本にやると云ふ事は自分の不承認のために終局的に決つたのではないと云ふまでの事である。其裏面には改めて自分の承認を得んとならば、陸上諸權利に對する自分の言ひ分を容れろと云ふのである。夫れを厭やだと云つて問題を此處まで引つ張つて來たのだから、今更先方の云ふ通りに致しましたと云ふのでは一寸面目は立たないのかも知れない。けれども事實は完全に先方の要求を容れたに過ぎない事は明白疑ひを容れない。

予輩は之れを以て日本の不利益だとも、又讓るべからざるものを讓つたとも思はない。只どうせ讓るものなら何故に早く讓らなかつたかを訝む者である。同じく金を出すのでも早く出すのと、愚圖々々云つて餘儀なく出すのとは大變な相違だ。此意味に於てヤップ島問題の交渉は日本の道德的聲望を大に損したと云ふ點に於て外務當局の失態を斷定して好いと思ふ。

又も一つ文句を云つて見ようなら、どうせ恁んな解決をするなら寧ろ華府會議の問題とした方が有利ではなかつたか。政府は恐らく華府會議の問題となるのが損だと見て、少くとも米國と直接に交渉する事が幾分有利の解決を見ると期待して解決を急いだものだらう。けれども結果は少しも芳しくないではないか。丁度三越の番頭に知つて居る者があるとて、こつそり行つて買物の談判をしたが結局正札通りに物を買つて來たと云ふ形である。正札で買ふ程なら何故堂々と表門から這入らないか。格別の利益もないのに內緒で物事をさばからうとする丈けに人の侮蔑を招くばかりだ。此點に於ても我々は外務當局の爲す所を是認する事が出來ない。

華府會議議題追加に關する帝國政府の提案について

華盛頓會議の議題に關する米國政府の私案に對する帝國政府の方針は、愼重なる審議を重ね、外交調査會にも諮つて一定の成案を得たとは、前月央ばの新聞に現はれて居つた事だが、其報ずる所に據ると、極東方面に關しては大体米國の提案に同意し、太平洋方面の問題についてのみ多少の追加を申出す事に定まつたといふのである。極東方面については大體同意はするが、只特定國限りの問題及び既成事實を除外すべしとの、初からの要求は之を貫く事にしたとあるが、所謂特定國限りの問題及び既成事實の點に關しては、前號にも之を述べたから茲處には云はぬ。太平洋方面の事について追加の提案をしたといふ問題について聊か卑見を述べようと思ふ。

新聞の報ずる所に據れば、太平洋方面について追加を提議すべき問題は三つあるとの事である。一、日英通商條約を濠洲にも適用せしむる事。二、佛領印度支那の門戶につき日本に對する差別的待遇を撤廢せしむる事。三、濠洲新西蘭及び英本國のC式委任統治區域に於いて機會均等主義を確立する事。是等の問題は獨り日本の利害に關するばかりでなく、又理に於いて當然の要求と云はねばならぬ。日本は率先して是等の點の解決に努力するのは決して徒爾ではない。

但、第一と第二の問題は今新に起つた問題ではなく、戰爭以前からの懸案だ。今度此問題をも併せて解決せんとするに勿論異議はないが、戰爭以前に困難ならしめた事情は、今も同じく解決を困難ならしめて居るかも知れないから、今度の會議が特に是等の解決に適當な機會を供するものとは云へまい。今度の會合でも引續き努力するといふまでの話で、其間何等新しい意義は無い。獨り第三の問題に至つては、之れ今度の戰爭に於て初めて起つた問題であるのみならず、是等の問題を定める爲めの會合であるから、之れをどう取扱へば巧く其目的を達するやは、愼重に講究するの必要はあると思ふ。而して帝國政府は此問題の取扱に於いて、果して機宜の措置を誤らなかつたらうか。

予は本誌五月號に於いて「ヤップ島問題」を論じ、其末段に次のやうな事を述べた。

……終りに臨み本問題の解決について更に吾々の希望に

ざるは、ヤップ島問題の解決と同時に、も一つ重大な問題の解決に着眼せられん事である……世界の人々は假令此種の委任統治區域が非統治國の屬領と同様に治めらるべき事が定まつたとしても、非國の我儘な法律が非儘行はれて、爲に國際的道義が犠牲に供せられん事を欲しない。……故に之は（ヤップ島問題に關する日米の爭議）、屑く米國の主張に讓つた方がいゝ。……而して吾々は之と同時に凡そ文明國は國際上の通義に對しては、一國の我儘な主張を犠牲にすべきであるといふ原則を立つる事に努力したいと思ふ。日本は米國の主張に讓つたが、之はヤップ島丈けを問題として讓つたのではない。斯ういふ場合には一般に讓るべきだといふ原則に服從するといふ意味から讓つたといふ事にする。さうすれば日本の讓歩は同時に或る高尚なる一原則の國際的に確立するを促すもの……加之、日本丈けの實利の問題としても、斯ういふ原則の確立する事によつてアングロ・サクソン人の頑冥な白濠洲主義を破る事も出來る。……得たものは少しでも失ふまいといふ態度一點張りでは、得べきものをも得られずに終る事がある。……

半年前の予輩の說を味はつて下さるなら、今帝國政府の取つて居る態度が時機宜しきを得て居るかどうかの判斷は自ら明白であらう。

どんな立派な理窟でも、之を持出すに時機宜しきを得ねば何にもならない。政府當局は樽爼の學究とは違ひ、正しい議論なら何時吐いても差支へないと云ふのでは、中にも外交官は勤らない。日本の外交は頭の惡い學者のやうに、何時でも遲れて說を發表しながら、一人よがりで力味返るので困る。生前になかく〳〵金を出し澁つた安田家でも、今度兇變に逢ふと三百五十萬の大金を喜んで東京市に寄附するといふ。後藤男は有繋に時機を利用するの聰明を有つて居る。外交も此コツで行かなければ駄目だ。日本の外交は後から、有象無象が寄附を強請りに行つてかなり厭氣が差して居る所へ、公共事業の爲めにこれ〳〵の金を出せと云ふやうなものだ。出さぬとも限らないが、必らず成功するといふ時機を失つた事丈けは疑ひない。

當局は云ふ、「C式委任統治區域は自國の構成分子として統治せらるゝ規定なりとは云へ、委任統治の全體をして機會均等門戸開放の實を擧げしむる事は米國政府の強硬なる意見」であると。然り、米國は此主張を楯としてヤップ島問題を提げて我に迫つた。而して此時直ぐ様之を承諾し、同時に此主義を日米兩國共同の主張として更に濠洲にも承認を求むべきであつた。それが

厭やなら米國の要求を一應斥けるに何の躊躇する必要もない。之を予輩は本誌五月號に於いて大いに主張したのだが、政府は之を顧みない。即ち米國の要求を手厳く撥ね付けたのである。自國の構成分子として統治する事が出来るのだから、之をどう治めるかは日本の勝手だと答へた事は、帝國政府の發表せる「日米交涉顛末」にも明かである。そこで米國は開き直つて全く別の根據から日本に迫まる所があつたので、終に今度の解決を見たのだ。そして今頃になつて自分も之れ丈の讓步をするから、滿洲にも同じ犧牲を拂へと云ふのは、理窟は兎も角情に於いて滿洲に無理心中を强ひらるる感なきを得ようか。之れ予輩が理に於いて正しくして而かも甚だ時に宜しきを得ないと云ふ所以である。少くとも絶好の機會を、惜しい哉、夙うの昔に逸し去つたと斷言して間違はないと思ふ。

西伯利鐵道の國際管理

新聞の報道する所に據れば、西伯利鐵道聯合管理技術部委員長スチィブンズ氏が此程米國に召喚されたが、之れは米國に西伯利鐵道國際管理案を華府會議に提出するの意あり、多分其準備の爲めだらうと云ふ事である。此說は有りさうな事ではあるが、併し此點は今私の論ぜんとする所ではない。斯ういふ報道に關聯して起る我操觚界の評論に甚だ慊らず思ふ所があるので、之を此際に一言して見たいと思ふのである。

右の報道について多くの新聞には何と書いてあつたか。米國の西伯利鐵道に着眼せるは一朝一夕にあらずとか、ケーレンスキー時代既に特殊の協定を結んだが叛徒の爲めに頓挫し、其後事毎に機會を覗て特殊の關係を結ばんとしつゝあつたとか、意味あり氣な揣摩臆測をなすものが普通で、中には公正の假面を被つて利己的目的を遂せんとする奇怪の提案だと論ぜるものもある。私は如何なる根據でかゝる提案を米國がするのか知らないが、然し藪から棒に斯ういふ臆測をするのは餘り輕率ではないか。況んや彼は表面上國際管理と云つて、初めから管理權の態度を露骨に現はして居ないに於いておや。

私の知る限りに於いて、米國の識者の間には多年世界の交通幹線を國際的なるものにしようといふ遠大の理想がある。鐵道船舶は固より有線無線の電信にも及ぼさうと云ふのである。ヤツプ島問題の如きも一つには此國際的理想から起つたと考へる。日露戰爭後間も無く滿洲鐵道の中立といふ問題が起つた

も、全く此見地からであつた。當時外資輸入熱の盛んであつた所から、日本もウツカリ共相談に乘つたのを、小村侯の國家主義的獨占論に防げられて話が纏まらなかつた。其以來滿洲鐵道を國際的のものにすると云ふやうな議論は頭から耳を傾くべからざるもの、提唱者ハリマンは怪しからぬ奴といふ風に、多くの日本人は先入の偏見を有つやうになつたけれども、熟く考へて觀れば、此案は決してさうした不都合なものではない。彼の當時の考からすれば、小村侯が井上侯の激しい反對を押切つて滿鐵の所有を日本に維持したのは、感謝に値する事と云ふべきであらう。併しされぱと云つて米國の提案には本來少しも日本の利益を傷くるといふ意志の無い事は明白だ。問題は只一人でやるか、皆でやるが好てかといふ點に在る。少くとも今日のやうな國際協働的精神の盛んになつた時代からすれば、ハリマンの抱負の如きは實に先見の明に富む堂々たる提案と云つていい。斯ういふ理想を豫ねく\/有つて居るといふ事を念頭に置いて考へると、今度の國際管理案の如きも恐らく其一つの現はれではないかと思ふのである。露西亞が困憊して列國の救助を求むるの急なるに乘じ、西伯利鐵道から食ひ入つて國際干渉の端を開くなどと觀るべきではなからう。

暫く一歩を讓つて米國に不純な野心があつたとしても、之を遂げしめざる途は十分にある。旣に國際管理といふ以上は、提案者一人の專決に委すべきにあらざるは云ふを俟たない。米國が野心を以つて之に臨むなら、我も亦野心を以つて之に對抗するの途もある。少くとも國際管理といふ事夫自身が惡い事でないたら、米國の提案を直ちに取て此考を實現せしむる事は困難でない。若し夫れ之によつて世界中の交通幹線を凡べて國際的にするの端緖を開くを得ば、世界の幸福之より大なるは莫い。

昨今我國にも國際的精神は大いに起つた。世界の平和の爲めに起たんとする人もボツ\/見える。武裝的對立の忌むべき事を說けば、國民の多數は躊躇なく共鳴を表する。それでも他の一面から西伯利の國際管理とかヤツプ島に於ける海電の國際化などと云へば、直ぐに一種の反感を感ずる。之れによつて吾々は今日まで吾々國民が如何に深く國家的武[illegible]對立の思想に浸み込んで居つたかを思はざるを得ない。

小題小言六則

●ブライスの日米論

十月二十一日の「朝日新聞」電

報知は、プライスの「タイムス」に寄せたる一文の大様を報じて居る。其中に米國の陸軍が大戰前の狀態に縮小せられたるを歡ぶと共に、海軍費の過大の膨脹は甚だ憂ふべきだと云ふやうた事が述べてある。引續いて之れがまた米國をして海軍縮小の協定を思ひ付かしめた原因だとて、一面華府會議の前途に囑望して居るが、他面に於いて日米關係については、一抹の陰影ある事を見逃しては居ない。之について彼は米國民衆に向つて次の二點に不當の誤解が懐くなからん事を警告して居る。一つは日本の野心についてであり、も一つは日英同盟についてである。

プライスの立言は米國民の警告にあるから、日本に對しては何とも云つてないが、併し吾々としては日本にも其野心を疑はるゝ丈けの誤ちはあつたと自白せざるを得ない。併し乍ら之に對する米國の疑の滑稽な程大袈裟であつた事も疑が容れない。詰りは日本が本來十歩で止まるべき所を二十歩まで踏み進んだといふ事實はあるが、米國は之を百歩の遠きに彌つたといふ風に見て居つたのである。蓋し加州問題で業を煮やし、極東から來る宣教師達の報道に一部の日本人の失態を誇大に聞き、之れに黄色新聞の煽動記事に過まられるのだから、日本を非常に恐るべきものと見たのも無理はない。而して此間違つた考は米國西海岸の無防備といふ不安心な、實に相伴つて大いに恐日病の根柢を深くした。此両度疑惑が日米反感の有力な一原因である事は疑を容れないので、プライス警告も此點に於いて吾々も徳とする理由がある。若しそれ日英同盟に對する猜疑に至つては、英米の間の未だ十分なる國民的諒解に達せざるを暗示するゝのであつて、吾々は茲に多大の注意を注ぐ心要がある。日本では英米の親密なる接近によつて日英同盟は徐々水の如きものになりつゝあると心配して居るのに、米國では日英同盟がある限り、英國は日本の我儘を助けないといふ保障が無いと見るので、此點に於いて英國は日米双方から疑はるゝといふ立場に在る。日英米の將來を考ふるものに取つて一見逃すべからざる點である。

尙ほ終りにプライスが日本は長期の戰爭を爲し得る國でないと見た點は、吾々も亦遺憾ながら承認せざるを得ざる點である。吾々は濫りに長期の戰爭をやり遂げようとするものではない。が、長期の戰爭に堪へざる狀態に止まる事も本意でない。併し事實は到底隱くす事が出來ない。此事實の表白によつて外國も安心するだらうが、之れよりも吾々は此事實の明白なる認識の上に今後の政策を定める事を必要と考へて居る。

◎支那に於ける憲法制定運動の前途

支那に於ける憲法制定運動は、文字通りの意味に於いて、第一革命の當時から初まつたと云ふけれども、眞に國民多數の意志に基く憲法制定は近頃漸く初まらんとして居つた。其先驅を爲すものは浙江であり、湖南廣東之れに次ぎ、やがて全國に風靡して所謂聯省自治の統一的體裁を完成するだらうと豫期されたのに、其浙江省の運動がまだなか／＼圓滑に行かないやうだ。支那復活の生みの苦しみの慘憺たるには、吾々深く同情に堪えない。九月八日浙江省憲法會議は、其議定する所の憲法を發布し、二十二日其附屬法をも公布した。然るに民間には憲法會議を以つて省民を正當に代表するものにあらずとなし、亦其公布する所の憲法は省民の一般投票を得たるものにあらずとして、頻りに無効を宣傳して居る。爲めに折角の憲法運動は玆に一頓挫を來して居るのは甚だ遺憾に堪えざる次第である。

　併し乍ら熟く考へて見ると、之れ亦已むを得ざる現象だと思ふ。政治の實權は有勢の支那に於いても今や官僚軍閥の手から離れんとしつゝある。新に何人が之を握るかといふ問題に逢着して、玆に有識階級と民衆との爭が起つたのである。之を諸國の歴史に徴するに、官僚軍閥の手から一旦政權は有識階級の手に移り、極めて最近の現象として民衆の起つて有識階級に政權を讓與せしむるの運動が起つた。然るに支那は遲れて發達した國丈けに、此二つの階級が一どきに起つたのであり、それ丈け政界は複雜で波瀾も烈しいのであるが、併し之を見て彼の國政治家の昏迷を嗤つてはならない。彼等が之をどれ丈け巧みに突破するやは問題だが、其遣り様によつて吾々よりも一段進んだ階段に躋登らないとも限らない。何れにしても支那の今日の紛雜は之を單純なゴタ／＼と見るべきではない。生命の躍動であり、舊き衣を脱ぎ捨てるまでの生みの苦しみであると觀るべきだと思ふ。

◎歐洲勞働大會議開催の風說

後に述べたやう前な所謂有識階級と民衆との政權爭奪は現代政界の特長であつて、それがいろ／＼の方面に表はれて居る。就中最も著しいものは政治家階級に對する勞働者階級の絶對的不信認である。其結果今日盛んに起つて居る國際平和運動の如きも、之を政治家階級の仕事として勞働者階級の態度は案外冷淡を極めて居る。平和運動其物に不滿なのではない、成功すればいゝ事には相違ないが、只所謂有識階級の爲す仕事なるが故に之れに與みしないと云ふのである。勞働者階級の支持を缺くといふ點が今日の平和運動の最大の難點だ。併し乍ら平和は有識階級よりも特に勞働者階級に於いて必要だ。華府會議を有識者階級の仕事

として冷視するはいゝとして、彼等は此際此儘平和問題に緘口して已むべきでない。それかあらぬか先月中旬のロンドン電報は、運輸、炭坑、金屬工等凡て戰爭に缺くべからざる職業に從事する勞働者の歐洲大會議を開催するの風説を傳へた。之れが物になるかどうか、少くとも彼等にかゝる會議を開いて戰爭防止の目的を有効に達するの見込みありやは大いに疑なきを得ないが、兎に角斯の如き説の傳はる事によつても、吾々は社會的階級の對立といふ現代的形勢の根本特長を看取せざるを得ない。今度は物にならないとしても、將來此形勢がどう進むかは、決して吾々の看過すべからざる所である。

●帷幄上奏問題の解決●●●●●●

加藤海相の海外派遣に伴ひ、文官たる總理大臣が海相の地位を兼攝し得るや否やが問題となり、之が端なくも帷幄上奏問題を一部解決する結果を見た。從來軍事官憲は軍機軍令に關して獨自の上奏權を有し、爲に國家の政務にして內閣と沒交渉に決定せらるゝものがあつた。而かも軍機軍令の範圍につき不當に解釋を擴張するやうな事があると、即ち國家の政令が二途に出づる結果となる。之れ日本が多年二重政府なりとの批難を受けた所以であつて、吾々も亦之まで屢々此點を論じたのであつた。然るに軍事官憲は從來努めて此點を抑へて居たのに、今度原首相が海相を兼攝するといふ段になつて、之に反對するが爲に露骨に帷幄上奏の特權を振翳した。曩きにはこんな特權は無いといふやうな顏をして居りながら、今度は此特權を楯にして所謂海相兼攝論を碎かうとする面白い遣り方である。併し海相兼攝論は勝つた。兼攝なら文官でも海相の事務が執れるといふ所まで進んだ。官制の法律的解釋としてはどうか知らぬが、政治上の問題としては確に大きな一進歩たるを失はない。それでも帷幄上奏の特權は全部捨てさせる譯には行かなかつたと見え、武官たる海軍大臣の仕事の中軍機に關するもののみ文官たる兼攝海相に之を許し、軍令に關するものは軍令部長の掌中に歸するといふ事にした。之れだけでも一つの政治的進歩たる事は疑ないが、之を第一段として吾々はやがて此特權が全部取拂はれて、國家の命令が完全に一途に出づるに至らん事を切望して已まない。尙ほ當局は軍機に關する上奏を兼攝海相に許したのは、內閣官制第二條によると何處までも法律的解釋に拘泥して居るから、兼攝者が首相でなかつた場合には同一の取扱ひを受け得ない事になる。何となれば內閣官制第二條には、總理大臣は各大臣の首班として機務を奏宣しとあるからである。法律的解釋はさうであらうが、兎に角吾々はかゝる新例を開かしめた根本の原動力は、政治上の理由である事を確信して疑はない。

◎教育整理案　所謂教育整理案の無謀なるは天下公論の歸する所、一點の疑を容れない。四面楚歌の裡にある政治の急を救はんとてにや、十月十日首相官邸に於ける教育行政調査會特別委員會の席上、三土委員は本整理案は政府の諮問案なりや、將たまた諮問に對する答申原案なりやといふ奇想天外の珍問を發した。事實諮問案に相違ないと信じて居つた全委員は此一言に一驚を吃した。而して馬場委員會幹事長は之に答へて「教育の効果を減殺する事なくして教育費を整理節約すべき方法なきや」との最初の首相の挨拶が諮問案で、現整理案は即ち答申案であると説明した。鬼面人を欺くの甚だしきものたるは云ふを俟たない。而して私の茲に之を引合に出したのは、何も此問題を論ぜんとするの意ではない、此問題の利害得失は喋々の論ずるまでもなく、餘りに事理明白を極めて居るからである。それにも拘らず私の此問題に觸れたのは、當今の官僚界では教育の整理をどうすれば本來の目的を達し實効を擧ぐる事が出來るかを其信ずるが儘に研究發表し得るものよりも、一旦言ひ出した説明に其場の先の粉飾を加へて、兎に角一應の理窟をつけるやうなものを、得がたい人才として重用するといふ事を云ひたいからである。西洋の諺に「人を欺く谷川の如し」といふ事がある。旅の疲れに渇を覺えた旅人が、行手に山の青々としたのを望み、彼處の麓にこそ必定谷川があると勇んで行つて見ると、何も無かつたといふ意味である。旅人の望む所は谷川の水である。山のたゝずまひがどんなに奇麗でも、それ丈けでは渇望は癒されない。而して今日の官僚社會の爲す所は、山の姿にいろいろと手を加へて、人をして徒に谷川があるやうに思はしむる事であつて、谷川其物を作る事ではない。谷川を作る腕は必ずしも顧る所とならず、粉飾を之れ事とするに巧みなものが人才として重寶がらるゝのだから堪らない。

◎大本教神殿の取毀ち　大本教の神殿はいよいよ十月廿日の正午から取毀たれた。甲斐甲斐しく身を固めた多數の人夫、之を遠巻きに保護する警察官、更に萬一の警戒として市中を練り歩く三千五百の在郷軍人、凡てが芝居がかりで、此報道を讀んで一種異樣の感想を催さずには居られない。大本教の神殿が畏れ多くも賢所に形取つたといふ丈けなら、不敬を論じて改築さする事に大した困難はなからう。腕力を用ひて猛々しく取毀つといふ事は、いろいろの意味に於て正しい遣り方ではあるまいと考へる。私は何も大本教に同情するつもりはない。同情どころか邪教迷信として之を排斥するに決して人後に落ちざるものである。けれども由來宗教政策の腕力を以てする態度は如何なる場合においても禁物だと信じて居る。迷信であると

は云へ、兎も角もあれ丈け多數の魂を捉へて居る精神的威力には、相當の敬意を拂ふの必要がある。少くとも之に對抗するには、同じく健全なる思想を以つてすべく、腕力を以つて之に臨むのは本來の目的に裏切る自殺的行爲たるのみならず、亦自ら侮るの甚だしきものと云はねばならぬ。何故なれば對抗すべき正當なる武器を有せざるを自白するに等しいから。大本敎が邪敎迷信である以上、どうせ長く續く筈はない。政府は之を自然の消滅に放任し難き特別の理由を認めて法律的制裁を加へたのであらうが、あゝした形で腕力の壓迫を加へては、却つて彼等の結束を固くする。意地にも之れで押さうといふ氣になるの恐れがある。私は大本敎の不遜を兼ね〴〵非常に不快に思つて居る。さればと云つて今度のやうな形で壓迫されるのを痛快とするには堪えない。官憲の態度の常軌を逸して居るのは言ふまでもないが、國民が之を平然として看過して居るのも、私自身に取つては淺間しく思ふ。

――時論――

前號時論欄正誤

頁	行	誤	正
一三四(上段)	一五	整理	支配
一三四(上段)	一九	統治的	絕對的
一三五(上段)	一六	之を承	之を否
一三五(上段)	二〇	一旦	一應
一四〇(下段)	一五	見定めて	見定めずして
一四三(下段)	九	一片	一變

卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社

十二月號の長篇讀物豫告

現下に於ける神話化の源流を究明す……田中王堂

利潤分配制度と産業民主主義……林癸未夫

人間族と文化氣候……杉森孝次郎

お小姓兒太郎 外二篇……室生犀星

東京「勞働篇」續稿……上司小劍

静かな朝……塚原健二郎

大正十年歳晩記……生方敏郎

談話賣買業者に賣つた話……村松梢風

佛蘭西を中心にして（完）……柳澤健

其他精選せる記事を滿載して本年雜誌界掉尾の偉觀たるべし



赤いシャツの仲間

宮地嘉六

一

ステーションの驛夫が貨車を連結する際に過つてカツプリングの間に狹まれて慘死した其の夜から急にまた父は私の遠い旅立を許しさうもなくなつた。全く此の出來事はいこぢな私の思ひ立ちをも幾分弱らせはした。私はその驛夫がプラツトホームで苦しげに呻いてゐるのを見に行つた。まだ二十三四の、若いがつしりした體格の驛夫であつた。驛夫になつてからまだ幾月も經たないと誰かゞ話し合つてゐた。それは恰度夜汽車のやつて來る少し前のことであつたが、怪我人は鼻から少しばかり血を出してゐるのみで、線路からプラツトホームへ抱き揚げられて、そこで、仰向きに寢かされてゐた。間もなく醫者が來た。もう此の時はシグナルの青い灯の彼方から夜汽車が轟々とやつて來るところだつたので、怪我人はプラツトホームから更に倉庫の蔭に移されて、そこで提灯の灯に圍まれながら手あてを受けた。そして間もなく絕命したのである。屍體はそのまゝ箱詰にされてしまつた。

『可愛さうなことをした。あれだから遠くへ行くのはよせと云ふのだ。どちらに萬一のことがあつても遠く離れてゐちやあ死に目に會ふことも出來やせん。親の云ふことを聞くもんだぞ。ようく考へい……』父は云つた。

それほど父から云ひ聞かされても私は旅立を思ひ止まる氣にはなれなかつた。造船所の勞働は隨分いろ〳〵の危險を伴ふものではあつたが、そこにはまた、頑強な鐵を自由に打ちのめしたり、拉げたり、切り刻んだり、削りとつたりする壯快な作業があるのであつた。そこには烈しい過度の勞働があり、苦痛があり、慘事があるには違ひない。けれども夜の街に出れば自由に面白く醉ふたり唄つたりすることの出來る酒場があらう。遊廓があらう。小料理屋があらう。そして戀があらう。さう思ふと今更さびしい故鄕の街にどうしても止まる氣にはなれなかつた。

私は自分の故鄕から少しでも遠方へ行つて生活することがひどく意義あることのやうに思つてゐたのだ。故鄕と云ふところは、遠いところから時たま歸つて來る者をめづらしがつてくれる。と云ふことが私をしてます〳〵遠い旅へ行つて生活することを望ませるのであつた。

私のやうなものは故鄕を遠く離れて時たま歸つてでも來なければ、父も繼母も、妹等までも、さては親類や近所の誰れ彼れまでが私の存在をそれほど重大に見てくれさうもない。と私は思つてゐたのだ。

私は僅か二十里ほどしか故鄕から隔つてゐない佐世保の街で暮してゐるのがひどくつまらなく思はれた。私は佐世保に四年ほどゐた。そして立派な若い衆になつたつもりで父の家に歸つて來た。皆は私をめづらしがつてくれたのは無論である。私は中國の方へ行きたいと云ふ相談を父にする爲めに戾つて來たのであつた。父は無論喜ばなかつた。然し私は久しぶりに親らしい心を父に見た。唯一人の男の子を遠い旅の空へ行かせたくないと云ふ父の心を此の時ほどはつきり感じたことはなかつた。そのことは聊か最初から豫期してゐないではなかつたので、私はそれによつて、ひねこびれた少

年の持つ或る滿足と自負とを覺えないわけには行かなかつた。『自分は父にとつては矢張なくてはならぬ長男であつた』と云ふ滿足——然し私は何故かます／＼父の親心につけ入つて背かずにゐられない少年であつた。私はどうあつても中國の方へ行くことを心に決めてしまつてゐた。

私が遠方へ行つて暮すことを心から好都合に思ふものは繼母唯一人であつた。邪慳で貪婪な彼女は私と云ふ先妻の子が家にさへゐなければ氣樂であつたし、彼女は内證金を溜め込んだり、自分の實の子の爲めにいろ／＼の計畫をすることには考へ深い女であつた。彼女は私の中國行きの希望に對しては義理にも引き止めようとはしなかつた。私は此の時ほど彼女の無知な無教育な女であることをはきり見たことはなかつた。

『行きたいと云ふならやつたが好えぢやありませんかね。』彼女は私の性質を見ぬいてゐて突慳貪に父に云つた。

『だがそれも考へものぢやて……。』と父は權威のない答へをした。

私は父の許しを得る爲めに一週間ほど家で暮した。父はたしかに私の眞の父らしい父であつた。私は父の心を察すると氣の毒であつた。而も私は父に何ものかを與へる爲めには放浪生活を主張せずにはゐられなかつたのだ。『そんなら何故これまで私を大事に養育してくれなかつたのだ。何故繼母と共になつて冷遇したのだ……何故……』

私の悲劇好きな病的な復讐的感情は自分の行動をどこまでも正當化して、善良な父に對してそれを主張しないでは止まなかつた。家庭に對する私の復讐は最早故鄕の一切を忘却してしまふことだつた。父の長男であることも何もかも放棄して生涯旅の空で暮すことの他にないと思つた。强くもない意志によつて私はそれを爲し遂げる考へであつた。此の弱い父思ひの、センチメンタルな親不孝者の私をやさしく飽くまでなだめさとしてくれたのは女中のお七どんであつた。

『もうどつこへも行かんと家にゐてお父さんを安心さしてやんなはれ。お父さんはあんたをたよりに思ふてゐなさるよ

つてに、そないに遠いところへ行くのはよしなはれ。あんたは家の長男やさかい、お繼母さんなんかに好いことをされてはいけまへん。』

彼女は普通の女中として雇はれてゐる女でなかつた。毎日午前中に町の眼醫者に通つてゐた。青眼鏡をかけた、色白の、なか高の、すべつこい、それはやさしい顏だちの女であつた。以前は下の關の藝者で、或る失敗した相場師の妾で、當分私の家に身を寄せて何かと二階廻りを手傳つてゐる女であつた。早熟な私は一週間ほど家にゐる間に、彼女に對して破廉恥と冒險とによつて得らるべきものを幾度想像したことであつたらう――彼女は私にとつて一生涯忘れることの出來ない女であつた。

父はとう〳〵私の中國行きを許した。旅立の前夜家中の者に私が別れの盃をすることになつて、父はいつになくしんみりと私にいろ〳〵のことを云ひ聞かせたが、其の場で出しぬけに繼母はかう云つた。

『お前さんに五間間口の家を建てゝやる時はこれ達にも同じ五間間口の家を建てゝやらにやならんから、さう思ふとつておくれ……。』

私にはそれが何の意味か直ぐにはのみ込めなかつた。これ達と云ふのは繼母が産んだ私にとつては異腹の妹二人のことであつた。

『默れ、今此の場で何を餘計なことを云ふ。』父は始めて權威のある叱り方をした。

『餘計なことちやありますものかね……』貪婪な眼を光らせながら繼母は口元を思ひきり尖らせた。彼女のさうした口元を作る時彼女の鼻は一層低く下品であつた。

『今お前がそんなことを云ふには及ばぬ。お前はどうかしてやせんか、靜江はまだ八つちや、しげをは四つちやないか、

今からそんな話は早過ぎる。」と繼母の兄は横合からたしなめた。

「ついでちやから今云ふて置くんちやないかのお前さん。」彼女は兄の顔を正面から睨んだ。

場席が異ふよ。」兄はわざとらしく笑つて見せた。

「きさまが今そんなことを云はんでも好え。俺には俺の考へがある。きさまなんかの知つたことちやない。機嫌よう旅立ちをさせてやるものだ。」父はさう云ひながら手にしてゐた盃をぐいと乾して私にさした。

これまで何事につけても繼母の味方になつて私を叱り飛ばすのが例であつた父が、始めて私の味方らしく私のほんとの父らしく、思ひ切り繼母を叱りつけたことは私にはちよつと意外な感じがした。而も彼女の兄の前で父が彼女を叱りつけたのは私にはめづらしいことであつた。

「父は俺の思つてゐるほど意氣地のない人ではなかつた……」私は此の時さう思つた。私は始めて父を自分の方へ取り戻した感じがした。父に對する嬉しさを私は此の場でうんと抑へつけねばならないほど感激した。私の父はいつもかうあつてくれなくてはいけないのだつた。父は何故か繼母や繼母の兄弟に對してはおかしいほど過度に義理立てをして損失を忍ぶと云ふ弱いお人好しを續けてゐたのだ。彼女の兄が日清戰爭から歸つて來ると父に直ぐに同じ家業の宿屋を隣りに開かせて客用の諸器物から夜具其の他何から何まで貸し與へた。其の以前はならず者として世間から顧みられなかつたほどの人物を、兎も角も宿屋の主人らしく仕立て上げてやつたことは、父の俠氣には違ひなかつた。然し先妻の子の私から見れば、いかに父と云ふ人が後妻に對して、または彼女の身内の者からよく思はれたさに骨折つてゐるかと云ふことが馬鹿らしく感ぜられるのであつた。それほど盡してやつても繼母は依然として父を尻に敷く女であり、彼女の兄は決して私の父を心から恩人などゝ思つて尊敬するやうな男ではなかつたからである。たまに父が夫婦喧嘩をおつ始

めでもすると彼は早速飛び出して來て自分の妹の味方になるほどの男であつた、然し其の夜は兄らしく、妹のさし出がましい云ひ草をたしなめたのは私をちよつとばかり見上げさせるものだつた。

二

雨の中を汽車は馳つた。

『門司へ着いたら中田廻漕店へ寄つて見い。都合で一晩ぐらゐ泊めて貰へ。あそこは度々此方から客を送つてやつてゐるから角玉屋だと云ひさへすれやどんな世話でもしてくれる。俺にも度々來てくれ云ふて案内狀をよこしよるから、お前が行つて一晩泊つて見い。』父は私の立ち際にさう云つた。然し私には何故か角玉屋の息子と自から名乘つて其の廻漕店へ立ち寄るのは氣はづかしくて出來さうもなかつた。ろくに父の家にゐもしない私が角玉屋の息子と名乘つたとて先方が果して信ずるかどうかと妙に氣がひけた。『自分は職工だ。勞働者だ。どうして宿屋の息子だと云つたとて人が信じよう……而も自分はほんとに角玉屋の息子だ。ひとり息子だ……そんなら何故勞働者などになつたのだらう。……矢張人はさう云つて怪しむだらう、だから矢張自分は勞働者で好いんだ。角玉屋の息子なんて云はないが好いんだ……』私はさう思つた。

門司についたのは午後二時頃だつた。初めて着いた土地と云ふものは、どんな生活でも新鮮に見せてくれるものである。ステーションの出口に待ち構へてゐる多數の客引き、港に碇泊してゐる大小の汽船、對岸の下の關の街、青々として聳えてゐる周圍の山々、それらの皆が雨の日の情調を帶びて門司と云ふ最初の印象を私の胸に躍はせた。

『門司、門司、門司、……』日頃から名のみ聞いてゐた此の土地の名を思はず私は口に呟やいた。

『え中田でござい。』

「え松延でござい。」

「え石田でござい。」

ステーションの出口は多くの客引の聲で魚市場のやうであつた。

私は全く自分の家とは關係のない廻漕店から其の日の五時に出る中國行の汽船に乘つた。汽船は狹苦しく不潔だつた。然し私は長い間造船所にゐた爲めに汽船の如何たる部分にも親しみを持つことが出來た。如何たる部分でも自分達職工の手を煩はせてゐないものはなかつたからである。然し、

「何て滑稽な小さな船だ、何てぞんさいな仕事をしてある船だ。」

いきなり私をしてさう呟やかせた。僅かに三百噸にも足らぬ此の中國航路の汽船は、軍艦や御用船や、または驅逐水雷艇のやうな立派な艦艇にのみ親しんで來た私にはお話にならぬほど貧弱な、手薄なペンキの肌の荒れた汽船だつた。ペンチレエトは煙管のやうに小さかつた。そして火箸のやうに細いスタンチが甲板の兩側に立つてゐた。それでもひとかどの汽船らしくダアビツトがあり、そなへ附けのライフボートがそれに吊り下げられてゐた。

やがて汽船は柄にない間ぬけな太いフリユトを鳴り響かせて出帆の用意をした。仰々しいウインチの音と共に錨が捲きあげられた。そして間もなく動き出した。

然し港を出ると此の汽船は馬鹿にならないほどの速力を見せた。時の間にどん〳〵私の郷土に續く門司の山々を遠ざかつてしまつた。まるで私と云ふ親不孝者を、遠い〳〵未地の旅の空へ無責任に乘せて行つて、そして私の思ひもよらない多くの辛酸をそこでなめさせる役目をでも持つかのやうに。

やがてボーイは食事ちやと怒鳴つた。此の汽船のボーイの飄輕でがさつで駄洒落の達者なのに乘客はすつかり煙にま

かれてしまつた。旅客は幾組も車座を作つて大きなおはちを包圍した。若布の酢味噌あへが一椀宛づゝだつた。

『え。お金のあるお客はんだけにお望み次第の罐詰を寄附しますよつてに……』ボーイはさう云つて罐詰 客に賣りつけた。

『あんたはん、そこはお遠いさかい、わたしついであげますわ、お茶碗かしなはれ、』

『え、ありがたう。』

まご〳〵してゐては一碗も口に入れることは出來ないほどしやもじの順は不規則に忙しかつた。私は上方言葉のおかみさんに遠慮なくついで貰つた。

『え、皆はん、もう罐詰めはよろしいか、早いとこ云はんと、たんとおまへんで。』

ボーイは叫んだ。

『まあ口の達者なボーイはんや。』おかみさんは笑つた。

『それやあんた知れてまんね。親爺はんは大坂で一流のはなし家だすよつてに……。』

ボーイはどこまでも頓智よく答へた。

薄暗いランプの灯に照らされた三等船室は場末の寄席のやうに陰氣であつた。座席は二階と下にと分つてゐたが、起てば頭を打つけるほどの低い棚仕掛けであつた。その窮屈な座席に船客の多數は棚の達磨の陳列のやうにうづくまつて並んでゐた。其の中には旅馴れた愛嬌もの、饒舌家がゐた。洒落のうまい男がゐた。それを笑ふ女がゐた。年増がゐた。婆さん爺さんの幾組がゐた。肥つた小商人風の男がゐた。然し彼等はどう見ても三等船客らしい人間達であつた。無論私もその一人であつた。彼等の多くは何故か自分の境遇を直ぐに相手に見すかされるやうな話はしなかつた

行く先には幸福が待つてゐるやうな風に自分を話した。同時にまた相手の話によつてその境遇を見ぬいてしまつたやうな顏を努めてしないのであつた。かうした汽船に乘り合はせた未知の人間同志が初めて言葉を交へる瞬間の興味となつかしさとがそこにはあつた、然しその興味は直ぐに互の冷たい批判と嫌惡と警戒とに遮られた。そして自分は自分より他にないと云つた風にやがてめい〳〵の手荷物のそばで寢支度をした。

私が一眠りして夢からさめた時、乘客の多數が車座になつて、緊張しきつた顏で錢の音をちやら〳〵させてゐた。博奕に違ひなかつた。その中には例の洒落のうまい男がゐた。爺さんがゐた。若い女も交つてゐた。肥つた小商人もゐた。

『おい、お若いの、お前さんも此所へ來て一番わしと一緒に張つて見ないかね。』

例の洒落の上手な男が私を顧みて云つた。サイコロを轉ばす度に勝負がどん〳〵運ばれて、其の都度喧嘩口調で互に口きたなく云ひ爭つた。

『いけねえ、今のはいけねえ、そんな法があるもんぢやねえ。』

『いけねえもへちまもあるもんかい。』

『まあ、お前さんあきらめろよ。どうせ負け口だあ。』

『だつて今のはいけねえ。』老人は頑固に頭を振つた。

『ぢや、もう一ぺんやり直しだよ爺さん。そら好いかい――半だ！お氣の毒さま。』若い男は手早く錢をさらひ取つた。

『これ爺さ。もうよしなんせちふに、いくらしたつて勝てりやせんけ、よしなんせちふに……。』かう云つて頻りに爺さんの背中を突いてゐるのはつれ合ひらしい婆さんであつた。

『えい、やかましわい。われは默つちよれ。』

爺さんは財布から摑み出した銀貨をやけに張つた。

『もそつと強氣で來い。』

『何くそ……』肥つた小商人は汗で磨かれた銅貨を更に積み重ねた。

『半だ……』

『よう、お氣の毒さま。』

『えい貧乏神！』

私も思はず氣が入つて一膝進んだ。かうした博奕の光景を見るのは厭やだつた。其のくせ抑へきれない好奇心が蹈つて仕方がなかつた。私はシャツの内ポケットの中にある蝦蟇口の金高をちよつと思ひ浮べて見た。まだそこには汽船賃の殘りがふつくらとした重味みを持つて潜んでゐたのである。

『いや、つまらない。よさう……』私は目的地のK市に着いてからのことを直ぐ考へた。就職の不安が忽ち私の氣持を引きしめた。

『これ、若い人、あんな連中にかゝつてはなりませんぞ。あの連中は皆で組んで客の金をまきあげるのが商賣ぢやから誰が手出しをしても勝てりやしません。まあ、あの爺さんは氣の毒な爺さんぢや。とう〳〵あの連中にひつかゝつて、今に裸にされてしまふのぢやが……』直ぐ後方にゐる廣島の小間物屋が私に注意してくれた。

『え、やりませんとも。やるもんですか。』

汽船は夜の二時頃三田尻灣に着いた。三人組の博奕師共は好い加減金をまきあげて逃げるやうにそこで上陸した。

『おつさん。いけえやられなすつたらうなあ……』

爺さんは返事をするのも大儀さうであつた。どろりと手荷物のそばへ腕枕で寢そべつて目をぱち〳〵させてゐた。

私は夜中、變な夢ばかり見續けた。乘つてゐる汽船が夕方立つた筈の門司の方へ馳つてゐる夢や、目的地のK市では工廠が暇の爲めに入職が出來なくて、其の上仲間達が案外不親切で途方に暮れて失望してゐる夢やを見た。然し目がさめると私の汽船は間違ひなく私の目的地へ走つてゐた。もう宮島に着く時分だと人々は話してゐた。圓い舷窓は薄明るく白んで夜は明け離れてゐた。私は甲板へ出た。そこには新鮮な淺黄色の空と、緑深い島山の群れと、紺碧の海との魅力ある爽快な朝が驚くばかり打ち開かれてゐた。汽船はほんのりと薔薇色を見せた東の空へ向つて忠實に力限り疾走してゐるのであつた。やがて薄い狹霧の立ちこめた彼方の島山の眠むたげな水際に鳥居の形が見え出した、塔が見え出した。汽船は朗らかに汽笛を鳴り響かせた。それが嚴島だつた……。

三

私は其の日の夕方K市へ着いてなつかしい仲間に會ふことが出來た。彼等は皆竹西爺さんの家に合宿してゐた。

『よう來た。好え若い衆になつたわ。早いもんやなあ。わいが佐世保にをる時分はまだこんなやつたが、これでは大丈夫兵隊に取られさうやなあ。』竹西爺さんは私をまじ〳〵見て云つた。私は三年ぶりに此の爺さんに逢つたが、相變らず人の好い爺さんだつた。

『まあ狹いとこやけど仲間と一緒に此所へゐた方が好えやらう。遠慮はいらへん。』

『どうぞ何分よろしくお願ひします。』

『わいが佐世保にゐた時分に夜業の時何處かへ寢に行きよつて皆にどえらい心配させたのは確かおまはんだつたなあ。』

爺さんは思ひ出したやうに笑ひながら云つた。

「え、私でした。」

私はちよつときまりが惡かつた。それは私がまだ佐世保の工廠へ見習職工として入つたばかりの小僧時分のことで、夜業中に工場の横手の荒箱の鉋屑の中にもぐり込んで翌朝まで寢てしまつた、皆に大騷ぎをさせたその時のことを爺さんから云ひ出されたからである。

「あの時は皆どない心配したか知れなんだ。老吉やい／＼云ふて夜業をしまふ時分になつてからおまはんがゐないよつて大騷ぎや、屹度海にでもはまつて死んでやへんか云ふことで、それから船渠の方から、海岸のはづれの百噸クレンのとこまで總がゝりで搜し歩いたもんやが、それでもゐよらへんよつて、とう／＼守衛の詰所へそのことを屆けて、皆は去んだが、翌朝工場に出て見ると寢ぼけ面をして工場の裏手からひよくら出て來よつたわいな。」爺さんは笑つた。全くその通りであつた。私は何故か此の爺さんから小僧時分のことを云はれるのが耻かしくはあつたが嬉しかつた。出來るだけの世話をしてやらうと云ふ好意が爺さんの目にあふれてゐた。

家には頭髮を男のやうに刈り込んだ七十近い婆さんがゐた。それはかみさんの叔母さんと云ふのであつた。もともと由緒ある家に生ひ立つた婦人で長刀の覺えがある婦人だと私は聞いてゐた。

「まあよう來やはつた。遠慮せんと家や思ふてゐてな。」婆さん、かみさんは親切にやさしく云つてくれた。

私は仲間につれられて近所の風呂屋へ行つた。それから一緒に晩餐の膳についた。

彼等は皆私よりは年上で、佐世保の工廠では私よりも一期ほど早い見習工だつた。すべてに於て大人らしく落ついてゐた。そして恐ろしく眞面目な男になつてゐるのに私は驚かされた。彼等は三人共澤山の書籍を本箱に持つてゐた。私

には彼等の頭腦がどれほど進歩してゐるか想像だもつかなかつた。

『おい。若年寄、白足袋だけは早速よせよ。出來るなら其の腰差しの煙草入もな。見つともねえ。そん服裝をして佐世保では娘つ子を引つかけてゐたんだらうな。白狀しろ。』仲間は皆で私を冷かした。私は彼等に圖星を打たれて一言も返答が出來なかつた。私はもう生意氣に白足袋をはいて、腰差しの煙草入をさげたりしてひくど大人ぶつた樣子をしてゐたのであつた。久しぶりに逢ふ仲間等をうんと見上げさせてやるつもりで、波止場へ着くと私は早速頭髮を意氣な刈角にしたのだつた。然しそれは却つて彼等をして嘔吐を催させるに充分だつた。彼等が最初私を見た瞬間妙にそつけない目つきをしたのもその爲めだつた。と云ふことを私は間もなく氣づいた。で私は直ほに彼等の指導に從つて白足袋及び腰差しの煙草入を行李の中へしまひ込むことにした。

『彼等は一體何を勉強してゐるんだらう。』

私にはそれが第一の疑問だつた。で本箱の中をそれとなく覗いて見た。そこには十九世紀佛蘭西革命史や生物進化論など丶云ふ本があつた。私にはそれが如何なる內容の本だかさつぱり見當がつかなかつた。

『えらい本を讀んでるな……。』と私は思つた。

一方のすゝけた白壁を見るとそこにはいろ〳〵の樂書がのたくられてあつた。the workmen essayed armed Resistanceと云つたやうな橫文字が得意さうな筆致で書かれてあつた。私はその橫文字の意味を彼等に訊ねて見た。

『これは誰れが書いたの。』

『誰れだつてそのくらゐのことは書けるさ。』

『何と云ふ意味なの。』

『それか、職工は武裝的反抗を試みた。と云ふ意味さ。』

『ほう……。』私には其の意味さへものみ込めなかつた。

『君は佐世保にゐる間、本なんて讀んだことはなかつたんだらう。』最年長者の西脇は云つた。

『あゝちつとも』

『踊りの稽古ばかりしてゐたんだらう。なあ踊りはうまいかい。』

『うん少しはやれる。』

『こまつたねえ。これからは本を讀んで少し勉强しろよ。本は嫌ひか。』

『嫌ひぢないさ。』

『そんなら讀むが好いぜ。工場に入るんだつて、仕事の試驗だけぢや此所の工廠は採用しないぜ。ABCくらゐは知つてないと面喰つちまふよ。』

仲間の話では技術の試驗の外に作文や、齒輪の割出しや、エンヂンの附屬品の能力の說明や、その他いろ〳〵の問題が出ると云ふことだつた。中でも齒輪の割出しは私の最も不得手だつたので氣になつた。

『ぢや俺が問題を一つ出すから答へを出して見ろよ、好いか、一インチに一山の三口の角螺を切るのにはパイトの巾は何分にしたらよいか。これくらゐのことは分つてるだらう。』西脇は云つた。私にはそれが數學の様式では全く出來なかつた。

『二インチに一山……一山が八分だから八分を三で割れば好いわけだな。』

『駄目だ、そんなことぢや駄目だぞ。』仲間は笑つた。

「そんなら好いかい、旋盤のセンターは廻轉するもんかい、しないもんかい。」

「廻轉しない。」私は答へた。

「何故廻轉しないんだ。」

私には學理上の答へは勿論出來なかつた。

「プーリーとベルトの關係は摩擦か粘着か。」

「粘着だ。」私は答へた。

「ノー〳〵、摩擦だ、こんなことは常識として質問されるから覺えて置けよ。」

彼等は何でも知つてゐた。

志願書を出してから二週間目に私は體格檢査に呼び出された。その朝仲間等と一緒に起きて工廠の門口へ出頭した。そこには百人近い大勢の志願人が青服や筒袖やいろ〳〵の服裝で詰めかけてゐた。應募者は其の表門口より内へは、一歩も入ることは許されなかつたので、柵外に立ちむらがつて煙草を吸ひつけ合つたり、足踏みをしたり、欠伸をしたりこれまで働いて來たどこそこの工場の景氣を語り合つたりしてゐた。彼等は云ふまでもなく失業者であつた。彼等の顔や服裝は明らかにそれを語つてゐた。力のぬけた鈍い眼つき、默つて人の顔色のみ眺めてゐる痩せた姿勢、さびしい水溜りの小波のやうな笑ひ顔、踵のすりへらされた靴、色さめた帽子、それらの一つ〳〵が彼等の窮迫の度合を語つてゐないものはなかつた。

さうしたみすぼらしい志願者等の前を通勤職工はえらさうに氣取つた歩み方をして門を入つて行くのであつた。彼等も一度は此の工廠の門口へ立つて通勤職工の身の上を羨ましく思つたほどの憐れた失業者であつたらう。然し今は

者らしい晴れやかな得意げな顏をして、胸には記錄の徽章を光らして、自分が嘗て經驗した惨めな多くの失業者等の前を歩いてすまし込んで行くのである。少しくらゐ見覺えある男の顏も知らぬふりをして行くのである。私は彼等の中に幾人か見覺のある顏を見つけた。

　志願職工受附係の役員が事務所から現はれたのは九時頃だつた。もう港には高い朝日がいつぱいに照りつけてゐた。小蒸汽が忙しげに走り廻り、ボートのオールがそこかしこに閃めき、碇泊軍艦に喇叭の音がして國旗が揚げられた。工廠の空には鐵の響きとエンヂンの音とのオーケストラにつれて煤煙の舞踏が始まつた。

　應募職工係の役員はいかめしい髯顏と豹のやうな眼つきで大勢の志願人を見渡した。

『さう寄りついて來ちやいかん。二列横隊に整頓せい。』彼はいきなり怒鳴つた。そこで私達は曲りなりにも二列横隊を作ることになつた。私の直ぐ隣りには四十あまりの、水兵ズボンをはいた、痩せぎすの男が並んでゐた。此の男は時々ヒユウ、〳〵と喉を鳴して、エイヤボンのやうな咳をする癖があつたが、それで始めて門司から私と同じ汽船で來た男であることが思ひ出された。彼は夫婦づれで二人の小さい女の子をつれて三等船室の二階の隅つこに寢てゐて、絶えずヒユウ〳〵喉をしてゐたが、此所で一緒になるとは私は思ひもよらなかつたのだ。彼は喘息持ちらしかつた。

　やがて役員は志願者の名を一人〳〵聲高に讀み上げた。そして寫眞と本人とを睨み合せて嚴重に點檢した。これは體格檢査に替玉を使ふものがあるからであつた。

『え、念の爲め云ふちよくが、これまで度々志願者の中には僞名をして入職した者がある、ぢやが此方はそんなことにごまかされやせん、いろ〳〵の方法で一應は調査をするから必ず發覺するのぢや。若し此の中に僞名をしとる者が一人でもあつたら今のうちに正直に云ふが好えぞ。どうだ、そんな者はをらんか。をらんことはあるまい。』兵曹あがりの募集

係はむくつけに一場の訓示をした。此の時列中で誰か笑つた。

『何がおかしいのか、あん。』役員の顏は丸パンのやうに赤くふくれた。彼はいきなり其の方へ進んで行つて笑つた男の胸倉をつかんで列外へ引きずり出し、思ひ切自分の腕力を示した。

『無禮者、きさま達は物の數と思つとるか。あん。蛆蟲め。』

此の活劇は單調で退屈な大勢の心に思ひかけない刺戟を與へた。それから一同は工廠内の病院へ送られた。病院の外科室には多數の公務負傷の職工達が青い顏をして呻いてゐた。

『えゝ、しつかりしろ。』醫員は血だらけの怪我人を叱りつけてゐた。怪我人は右の手首を齒輪に嚙まれたらしい。

私達はその隣室で衣服を脫いで身體檢査を受ける用意をした。

『一列縱隊に列べ。』氣むづかしい顏の佐官らしい軍醫は助手と二人かゝりで先づ呼吸器の檢査を始めた。

『もつと大きく呼吸をせい。』

例の喘息持ちは此所でもヒユウ〳〵喉を鳴して咳入りながら軍醫の云ふまゝに苦しげに大きく呼吸をした。その度に彼の瘦せた肩は大きく波打ち調子の惡いフイゴのやうに呼吸は中絕した。

『きさまはこれで勞働が出來るか。』軍醫は彼の胸から聽診器をはづして冷かすやうな口元で云つた。

『えゝ出來んことはございません。』

『駄目だ。この身體で出來るわけはない。こんな身體を持つて來たつて通りはせん、養生せい。』

『養生せいとおつしやつても我々には……』

『そんな餘計なことを訊ねてゐやせん。』軍醫は彼を突きやつて更に他の男の胸に聽診器をあてがつた。

『きさまの背中の此のほりものは何か。』

『ほりものであります。』

『何の爲めにこんなことをしたのだ。』

『…………』。

『よし、あつちへ行け。』

身體檢査は午後三時頃に終つた。百人中半數以上は不合格者であつた。彼等は三週間を經なければ再檢を受ける資格はないので、喰ひ詰めぬうちに此の地を斷念する者もあつた。幾度か檢査を受けて遂に喰ひつめた果てを身一つの捨て場に窮して途方に暮れてしまふ者もあつた。——私は辛うじて合格した。

四

いよ／＼工場に働くやうになるまでには容易でなかつた。工場長や職工長や伍長や技手やに贈物が必要であつた。私は竹西爺さんの意見通りにそれ／＼商品切手を贈ることにした。『つまりが自分の身を可愛がつて貰ふことやさかいなあ、金をつかふても損にはならへんよつて……。』爺さんは私に云つて聞かせてくれた。私は爺さんにつれられて夜中技手の家を訪問した。それは山の手の寺の横手の新建の二階家で、ベルつきの門の潜り戸を開けると取次の女中が玄關に出た。爺さんはそこで馬鹿叮嚀に頭を敷居まで下げてお辭儀をした。私もした。

『あの大将さまは、おいでになりますでござりませうか。えへ。』

『はい。どちらさまで。』

『まことに恐れ入りまするでございまするが、立花組の竹西の爺がまゐりましたと、どうぞおつたへ下さりませ、へい……。あのこれは甚だお粗末さまでございまするが、どうぞあの……私の方の若い者が此の度工場へはめて貰ひますそのでまことにありがたいわけで…… へ。』

『かしこまりました。』女中はかうした來訪者には馴れきつてゐた。女中は奥へ消えたが間もなく出て來た。

『旦那さまはもうおよつていらつしやいまするで奥さまが一應お預りしてお置きになりますさうで……。』

『左樣でございまするか。では何とぞ、えへ。』

二人は玄關を辭して出た。後方で女中が門の扉を閉める音がした。

『なあ、えらいもんや、平職工からあれまでに出世した人やが、えらいもんや。洋行から歸つてあの立派な家も新築したし、今ぢや十萬圓からの財産が出來たる云ふこつちや。職工もあそこまで行けばえらいもんや、盆暮に限らず職工等は物を持て行くし、貰ひ物のビールや正宗だけでも置き所はあろまい――おまはんなんぞはまだ年が若いさかい。これから一生懸命セイ出して勉強したら、あないになれんこともないさかい。しつかりやらんとあかんでえ、なあ。今度工場にはいれたら勉強するこつちや。』爺さんは技師の家の門を出てその板塀に沿ふて坂を下りながら私に云つて聞かせた。

『え、一生懸命やります。』

『さうや、人間は勉強次第や。』爺さんはくれ〴〵も私を勵ましてくれた。

坂を下りきつてから私と爺さんは大通りを横切つて河岸の職工長の家を訪ねた。そこではもう戸がしまつてゐた。

『え、ごめんくだされませ。え、ごめんなされませ。』竹西爺さんはそれを幾度か云つた。内からやつと聲がして潜り戸が開いた。此の時、内側から戸を開けた梅毯の妻君らしい女は、潜り戸を開けると同時に、ひよいと身をかゞめた。

私にはそれが何の爲めだか分らなかつた。

『え竹西の爺でございます。えへ。』

『あら、竹西さんだつか。どうぞおはいりやす。』内なる婦人はかゞめた身を伸ばして『今時分誰や知らん思ふたら。』

『おやすみのところごめん下されませ。もうちきにおいとまいたしますさかい、あの親方には失禮させて頂きます。實はなあ奥さま、今度此の若い者が私のとこをたよつて佐世保から來ましてな、親方にはめて貰ふようにお頼み申しましたについてな、いろ〳〵御盡力に預りますよつてに、これは、ほんのおしるしだすけれど、えへ。』

『まあ、御叮嚀な、そんなやつたら親方は酒に醉ふてねてしまふたるさかい、わたしがお預りしといてもよろしかいな』

『どうぞ、よろしう奥さまお願ひたしまする――これがあの、佐世保から來ました若い者で……これが親方の奥さんや、ようく挨拶しいな。』

『どうぞよろしくお願ひいたします。』私は奥さんに腰をかゞめてお辭儀をした。

『そんなら、わたしからもよく親方に頼んどいて上げるよつてに……』

『ありがたうございます。』

私は爺さんについてそこを出た。

『なあ、さばけた奥さんや。あないな調子やさかい、自分が氣に入つたらどないでも親方に頼んでくれる奥さんや。』と爺さんは河ばたを歩きながら今度は親方の奥さんをほめた。私は何よりも潜り戸を開ける時彼女が、意味ありげにひよいと腰をかゞめた、そのわけが分らなかつた。で私は竹内爺さんにそのことを訊ねて見た。

『おまはんにや分らんは。あれはなあ、大勢の職工を自分の部下にしてると、それ、中には恨みを持つ者もあるさかい。

夜中に戸を叩く者には、あないにして、身をかはすもんや。どないな者が萬一來て、戸を開けしなに、それ、切りかゝるやうなことないとも限らぬさかいなあ、分つたやらう。」

私には始めてうなづけた。

「同じ職工から立身しても、あつちやの親方とこつちやとはえらい異ひや。今の篠原親方かて博奕さへせなんだらもつと立身出來る人やけど、惡いこつちや、あんなちつぽけな家に入つて貧乏ばあつかりしてゐるがな。」

竹西爺さんは私にそんなことも云つて聞かせた。その夜は晩くなつたので、もう一軒廻る筈の伍長の家はやめにした。

五

私は體格檢査がすんでから三日目に工場へ行つて試驗を受けた。私は初めてK工廠の機械工場を見た。すばらしく偉大な旋盤が大波のやうに廻轉してゐるのに先づ私は驚きの目を見はつた。小つぽけな佐世保の工場とは比較にならなかつた。入口から向ふの出口を見ると小さく人の影が見えるほど工場の棟は廣やかに長かつた。四棟になつてゐる鐵筋硝子屋根を仰ぎみるとモートルクレンが輕く物を宙吊にして走つてゐた。調べ皮は雨のやうにシャフトから機械へ傳はつて鳴りはためいてゐた。大旋盤は各個にモートル附きになつてゐて、艦艇のクランクや、シリンダーや、プロペラを取りつけて悠々と旋廻してゐた。バイトの齒先からにゼンマイの形をして切り粉が落ちてゐた。仕上げられたウエイシャフトや、コンネクチングロットの圓滑部や、其の他のあらゆる機械の滑部に屋根硝子から射し込む光線が降り注いで、工場の内部はプラチナで飾られた殿堂のやうに強い反射で輝々渡つてゐた。さうした中で仲間達は青服の上衣の袖をまくり上げて、帽子を横かぶりに冠つて、赤いシャツの胸を見せて作業をしてゐるのであつた。

私は先づ此の壯大な內部の光景に心をのまれてしまつた。然し事務所での口頭試驗は無事にすんだ。それは云ふまでもなく商品切手のおかげでもあつた。

私はいよ〳〵技術の試驗に移つた。慌てずに落ちついて取りかゝらねばならなかつた。然し大きな機械の間に立たされて自分の未熟な技術をためされることはこれが最初であつた。

『あせらんかて好えさかい。うまいことやらないかんぜ。』竹西爺さんは云つた。

『びく〳〵することはない。どん〳〵やれ。』仲間は云つた。

かうした大事な場合に立て見ると自分と云ふ者が私には始めてはつきりするのであつた。考へばかりが生意氣過ぎて實力はそれに伴ふてゐないこと、頭髮を角刈にして大人ぶつたり、白足袋をはいたり、腰差しの煙草入をさげたりする資格のまだないこと、佐世保を飛び出すのが早過ぎたこと、父の意に背いて來たこと、さうした反省が大工場の機械の威嚇と共に犇々と胸に押し寄せた。私は泣きたくなつた。額や鼻の頭から汗がぼた〳〵落ちた。そして夢中になつてしまつて、自分は今、世界のどこに來てゐるだらうと云ふことを殊更に考へねばならぬほど氣が變になつた。

『これではいかんぞ、もつと落ちついてやらう。』かう云ふ場合にはさうした獨言でも何かの爲めになるものだ。私はそれを幾度自分に向つて云つたか分らなかつた。試驗は三インチに一山半の三口螺と云ふのであつた。

まご〳〵してゐる間に晝食のブーが鳴つた。三十時間で仕上げねばならぬ試驗品にいつの間にか半日を費してしまつたのだ。

私は竹西爺さんの大道具箱のそばで仲間と一緒に辨當をとつた。食事休みの間エンチンはピタリと止まつて全工場內は水を打つたやうに靜まつた。

竹西爺さんの大道具箱はかなりにでかい箱だつた扉。は観音開きになつてゐて、高さ一丈ほどの鼠色のペンキを塗つた頑丈な箱だつた。内部には棚が幾段もあつて抽斗もついてゐた。昼食の時は其の大道具箱の扉が兩方へ開かれて、そこで爺さんの所謂『うちの若い者』が集つて辨當をとることになつてゐた。そこには爺さんに使れてゐる頭の短い小僧がゐて食事時には湯沸場から熱い湯を取つて來たり、いろ〳〵の用をした。爺さんの箱の小抽斗には仲間の罐箱や、佃煮の罐詰や挽茶や、醬油を入れた罎や、食後にのむ健胃散や胡椒鹽などが入つてゐた。また一方の大きな抽斗には花王石鹼や、巻煙草や、ちよつとした安香水や、袋入のリンカケ豆やが入つてゐた。これは工場内で爺さんは内證で物をあきなつてゐたからである。老ひ込んで先の見込もない爺さんはそれを大目で許されてゐた。其の賢爺さんはかけ倒されてばかりゐたのだ。

『おつさんバツト一つおくれんか。』

『よしや一つで好えか。』

『そんなら二つほど貰らうとこか。』正午の休み時間にはリンカケ豆や煙草が賣れた。

六

私の試驗品は三日と半日で出來上つたが、かなりの不出來だつた。だが、ありがたいことには例の商品切手のおかげで日給七十五錢を支給すと云ふ辭令が下つた。私は首尾よく東洋一の造船所の造機部職工になることが出來たのである。爺さんは云つた。

『勉强さへすりや、どん〳〵昇給さして貰へるよつてに、しつかり辛抱して、工場を休まんやうにせんとあかんで、えか。』

『へえ。』私は爺さんの云ふことには間違ひないと信じた。

工場には様々の人間がゐた。一月經たぬ間に私はいろ〱の連中と知り合ひになつた。大學生あがりのフライス盤師とは最も早く知り合ひになつた。長い間市俄古の造船所に働いて歸つたハイカラなステッキ盤師とも知り合ひになつた。青服のポッケットにいつもパイプルを入れてゐるボール盤師もゐた、腕や眉毛にまで入れ墨をしてゐる盤若の寅と綽名のついた喧嘩好きの大將もゐた。それからいつも乘馬用の長靴をはいて、騎士氣取りで工場の中をぶら〱見巡つてゐる『黒』と綽名のついた伍長もゐた。この男は人の話によると工場内での憎まれ者で、職工のあらを探しては事務所の工場長に報告し、別にすぐれた技術もないがそれによつて重寶がられてゐる男だと云ふことだつた。皆から非常に厭がられてゐた。姓は黒崎であつたが、皆は蔭で犬と呼んでゐた。色の黒い、眼のくるりとした五十近い伍長で、誰れにでもやさしく上品ぶつた口調で話しかけた。

『佐世保と此所とはどつちが好い。矢張此所が好いだらう。うむ。しつかり勉強したまへ。技師が大變に君を氣に入つてゐるよ。惡い仲間に寄りつかないやうになあ。あのフライス盤師は社會主義者だ。あの男と近しくしないが好えよ。君の立身の妨げになるからなあ。今君は誰れの家に下宿してゐる。うん竹西爺の家にゐるのかい。あの赤いシャツの連中も大分社會主義にかぶれてゐるからあの連中と一緒にゐるのも考へものだなあ。日曜の日にはわしのところへ遊びに來たまへ。』

彼は或る時私にさう云つた。何でも工場内の不穏分子の言動をそれとなく探偵しては事務所に報告するのが内密の役目らしかつた。私は無論社會主義などに用はなかつた。それが如何なるものかさへ分らなかつた。私にとつて工場は一個の神聖な歡喜に滿ちた會堂であつた。私は一意專心に勤勉であつた。私の目的はえらい立派な腕前の旋盤師になるこ

とだつた。宿へ歸へつても仕事の夢を見た。それは驅逐艇のエンヂンの附屬品ほど私にとつて興味ある手頃の仕事はなかつた。畸形なバルブやコツや、その他私の好きな仕事が山ほどあつた。私はそれらを旋盤へ取附けるには一風變つた工夫をすることが得意だつた。

朝は誰れよりも先に目がさめた。そして工場に出て行くのが何よりも愉快であつた。私に於ては工場の十二時間の勞働時間は短か過ぎた。

「きさまは造船廠の養子にでもなれ。」

仲間達はさう云つて私を揶揄した。私はさう云はれることが少しも不愉快でなかつた。何故なら勤勉が如何なる場合にも惡い筈はないと信じ、それによつてのみ自分の將來、立身が得られるのだと期してゐたから。

毎朝工場に出ると、私は就業の汽笛と同時に機械のハンドルに取り附いた。まるで戀人の手をで握るやうに。それは手ずれのした、すべこい舊型の、持ちなれた自分の旋盤のハンドルほど私にとつて觸れ心地のよいものはなかつた。私の旋盤はイギリス盤には見ることの出來ない、非常にデリケートな調子のよいフランス製の、それは機械の中での女性とも云ひたいほどの、華奢な、輕快な旋盤であつたから。そして私は愛馬に對する騎士のやうに自分の意氣やかさを意識したものだ。

氣持よく仕事の出來るのは矢張朝の間であつた。私はぐん／＼午前中には働いた。ひと仕事したと思ふ間にもう正午近い日光が硝子の高屋根から直射して『ひるだ……』と微笑んでゐる。晝飯の時にはいつものやうに仲間と共に竹西爺さんの大道具所に集つた。食事休みの間、工場内は喫煙と談笑との倶樂部に變つて、工場のあちこちでは講談本の朗讀が始まり、五目並べが始つた。小僧等は工場をぬけ出して船渠や濱邊の方を飛び廻つた。年寄職工は機械の蔭にうづく

まつて三十分の休み時間を猫ゝやうに默々として過すのであつた。

私の赤いシャツの仲間は晝の辨當を喰べ終ると例の大學生がありのフライス盤師のところへ集つた。私も自然とそこへ近づいて行つた。彼はいつもイギリスやフランスやロシヤの勞働運動の話をした。皆は彼をえらい男として、教養のある、知識のある男として尊敬してゐた。ロバートオーエンはもと雜貨店の小僧であつたとか、ロシヤの文豪ゴルキーはパン燒職工であつたの、我々勞働者の一番緊急な生活方法は消費組合の實現にあるとか、彼はいろ〳〵のことを知つてゐた。伊太利や獨逸の勇敢な勞働運動の話をも彼はくわしく知つてゐた。八時間勞働說の主張については彼はかう云つた。

『もと〳〵時間勞銀制度ちふものは職工保護時代の遺制なんだ。つまり職工の能率の極めて低い工業の初期にや時間勞銀の方が職工にとつちや安全で都合が好かつたのぢやが、今日のやうに職工の能率が進んで來ると時間勞銀制はありがた迷惑で、工場主にとつてだけ都合が好いことになつてしまつた。それにもかゝはらず日本の勞働者は少しでも長く働かしてくれることをありがたがつちよる。四時間殘業や徹夜や日曜出を喜んどるから仕樣がない。』

彼は日本の勞働者の無自覺であると云ふことをいつも口にした。

『何故自分達は彼の云ふやうな不平を持たねばならぬだらう。』私は彼のさうした話を聞くたんびに心ではさう思つた。工場へ出て仕事をすることが唯一の愉快であつた私には彼のいろ〳〵の說はまことに親しみがなかつた。

『ねえ君、あの男はいつもあんなことばかり云つてゐるぢやないか。職工生活は僕には少しも悲慘ぢやないよ。僕は每日工場へ出て來るのが愉快でたまらないよ。あの男の云ふのは間違つとると思ふよ。君はどう思ふ。』私は仲間に聞いて見た。

『間違つてゐるものか。あの男の云ふのが本當なんだ。』と年上の西脇は云つた。『俺達勞働者が社會のどんな地位に置かれてゐるか、どんな取扱ひを受けてゐるか考へて見れや分るぢやないか。お前だつて體格檢査を受ける時は癪にさはつただらう。志願人係の役員から犬か猫のやうに云はれた時は腹が立つたと云つたぢやないか。あんな風に俺 は一つだつて人間扱ひにされてゐないんだよ。さうして職工等は毎日工場へ來て技師や職工長や守衞の影を見ると囚人のやうに恐れる。就業中に煙草一ぷく吸ふのにも臆病にあたりをきよと〳〵見廻してからやらかす。それから工廠を出る時に俺達の受ける屈辱を考へて見ろよ。まるで罪人のやうに毎日歸る時は守衞から身體ぢゆうを點檢されるぢやないか。』彼は云つた。

さう云へば實際それに相違なかつた。職工一般は工場長や職工長に對しては此の上もなく臆病だつたし、絶えず工場内を巡視にやつて來る守衞からは監獄人のやうな目を以て見られてゐた。我々職工は一ぷくの煙草も就業中にはゆるされなかつた。其のくせ彼等は恐ろしく煙草好であつた。鉈豆煙管をそつとポケットから取り出しては、機械の蔭でおづ〳〵と吸ふことに馴れてゐた。さうして、怖々と吸ひ込む一ぷくの煙草がどんなにたまらない味のものであつたらう。『來た!』彼等はかう云つて互によく嚇かし合つた。すると奴さんはびくりして吸ひさしの鉈豆煙草を慌てゝそのまゝポケットへ押し込んで鼬鼠のやうにあたりをきよと〳〵見廻すのがくせであつた。見つけられたが最期大事な日給の二日分を罰せられるからであつた。

然し何よりも我々勞働者の人格——と云ふのは大げさであるが、良心を持つ人間としての矜誇を傷け、蹂躙するものは守衞の點檢であつた。終業の二番汽笛が鳴つて、工場を出ると守衞本部の前には幾萬の職工が縦隊に長くつらなつて、その一人々々は守衞のなすがまゝに背中、胴體、股ぐら、脛、と嚴重な點檢を受けねばならなかつた。それが雨の日と

來ては堪へられなかつた。出口はステーションの改札口に似て、造機部、製鑵工場、木工、電氣、鑄造とそれ〳〵分類されてゐたが、恐ろしく混み合つた。それが毎日のことであつた。後方からどん〳〵押してくる。押し返す。わつと鬨をあげる……喧嘩が始まる。毆る。突き放す。

『やい、この畜生押すない。ひよつとこ。』

『後方から押んだい。どぶ板め。』

『しやれたことをぬかすない。せつちんの踏板め。』

『ぐづ〳〵云はねえで門外に待つてろ。』

『きいたことを云ふない。すつとこどつこいのあんにやもんにや……。』

彼等は互に毒口を吐き合ふことにかけては天才であつた。彼等は汚辱的な點檢を行ふ守衞に對しては憤慨せずに仲間同志で喧嘩をした。

非常點檢の場合は靴まで脫がされた。辨當箱を振り動かして見て少しでも怪い音がごと〳〵鳴れば守衞は呼び止めた。

『きさまの辨當を開けて見せろ。』

『何でもございません。中に入つてゐるおかずの入がごと〳〵云ふのであります。』

『何でも好えから開けろと云ふのだ。』

此所で少しでもぐづ〳〵云ふ者はどし〳〵部長室へ引きずられて行つた。守衞は大抵水兵あがりの兇官巡査で屈強な體軀の持ち主であつた。

七

工場内には富籤がはやつた。それは大抵時計の籤引で、一番から五十番ぐらゐまでの番號を記した帳面を持ち廻つて籤主は誰にでも一本五十錢で賣りつけた。彼等は五六圓のぼろ懐中時計を何處からか手に入れて來て、それをば二十五圓で籤に出して儲けるのであつた。

『よう、佐世保から來た色男、一本買つてくんな。』時計の主は私にさう云つて賣りつけに來た。それは見ただけでぞつとするやうな、昔はやつた二十二三形のニッケル側の時計だ。然しおつき合ひで私は二本ほど買つた。籤引にかけては妙に自信が強かつた。私は十五番と三十一番とを買つた。時計は時代おくれのお話にならぬしろものであつたが、開籤の日を待つのは何となく樂しみだつた。私は毎日一度はそのことを思ひ出した。若しあの時計があたつたら、竹内爺さんにやらう。などと考へた。私は誰れにもそのことを話さなかつた。

一週間ほど經つて、時計の主は開籤の日を私に知らせに來た。お晝の休みに裏手の石炭小舍の中で開籤すると云ふことだつた。

『俺にあたるかも知れんな……。』私はふとさう思つた。そしてさう思ふことが確實な豫感だと云ふ風に考へた。私は十一二の時分、父の代理でよく賴母子講の席へ行かされて、其の都度必らず(ブライ)と云ふ花籤にあたつたものだつた。そして必らず其の前に或る豫感の閃めきがあつたことを記憶してゐた。私は晝の休みが待ち遠しかつた。

高がニッケル側のぼろ懐中時計に對して何と云ふすばらしい人氣の集中であらう。全く其の日の開籤には皆がおかしいほど緊張しきつてゐた。彌次馬共に百人近い大勢が裏手の石炭小舍に集合したのだ。時計の主はこよりの束を勿體ぶ

つた手つきで十字を切るやうに捧げて、瞑目しながら云つた。
『さあ、誰れか引きぬいてくれたまへ。諸君、前以て云つて置きますぜ。最初に引きぬいたこよりが時計、次に引きぬいたのが一圓の花籤、其の次に引きぬいたのが五十錢の花籤――ようがすかね。』
『よろしい。早いとこ〳〵……。』誰れかゞ叫んだ。
選ばれた一人はこよりの束から先づ一本を引きぬいた。
『これが時計ちや、此のまゝ時計にゆはへつけます。』時計の主は公明正大な顔をして其のこよりを時計の環に結びつけた。
『さあ、第二本目を引きぬいてくれ。』
『よし！』件の男の男は二本目を引きぬいた。
『これが一圓の花籤ちや。』時計の主は前よりも少しも耶なげに叫んだ。
『さあ、あともう一本』
『よし來た。』
『これが五十錢の花籤ちや。』
やつと抽籤がすんで、いよ〳〵こよりは開かれることになつた。皆の呼吸は一瞬間しめつけられたやうに止つた。
『え、若の三番……これは五十錢の花籤ちや。』時計の主は讀み上げた。
『よう、三番は俺ちや。』から叫んだのは州番の禿頭の爺であつた。
『え、次は四十二番……これは一圓の花籤ちや。』

「よう。四十二番は私さまちや。」モートルクレン屋の髯の生へたのが頓狂に叫んだ。

最後に時計のことよりが開かれる段になつて、いよ〱一同は緊張し苦しげに呼吸を殺した。時計の主は一際森厳に讀み上げた。

「え、十五番……十と五番ぢや。」

「誰れだい。十五番？。」

私の胸にはづきんと何物かゞ内の方から打つつかつた。私は騒がなかつた。然し羨望の際は私を一瞬間夢心地にした。大きな二十二形のニツケル側は此の時最早其の仰々しくぶらさがつてゐる磁石盤附の眞鍮の鎖と共に私の手に移された。

「やい胴あげぢやい……。」

誰かゞ叫んだ。と思ふと早速私の身體は宙に持ち揚げられた。そして大勢でわつしよい〱と波止場の方へ運んで行つて、積まれた材木の上にどかんと私を放りあげた。私は時計を後生大事に手に握つてゐた爲めにいやと云ふほど腰の骨を打つた。それでも怒れないほど嬉しかつた。間もなく就業の鐘が鳴り渡つた。

八

私は竹西爺さんの怒つたのを始めて或る夜見た。それはひどい癇癪を起して茶ぶ臺や、皿小鉢をひつくりかへして手がつけられないほどの怒りやうだつた。かみさんは泣き叫んだ。爺さんは十一になる唯ひとりの男の子の横つ面を續けさまにひつ叩いた。お婆はたまらなくなつて孫をもぎ取つて掻き抱いて爺さんの亂暴を防禦した。仲間は總かゝりで二

階から飛び降りて行つて爺さんをとり抑へた。

『何ちや、恩知らずのひよつとこ婆々め、もう一ぺん云ふて見い。大それたことをぬかすな。此の子を大きうしてやつたのは誰やと思ふてけつかるね。え。俺が達者な間は喰いつぶしてゐくさつて、そろ〳〵先が見え出したと思ふともう逃げ支度をしてくさるやないか。俺あちやんと分つたるぞ。へん、皆んな、若い衆達聞いてくれ。こいつらはな、行く〳〵わいをほつたらかして別になろ云ふ氣で、此の小さい男の子にまで何かと入れ智慧してばつかりゐくさるのでな、わいはこれまで知つて知らんふりをして我慢してゐたのや。ところが今夜と云ふ今夜はもう我慢が出來なんだのや。皆も知つてる通りわいはこれまでめつたに癇癪起すやうなことはせなんだ。そやろ、此の子は赤ん坊の時から婆と一緒に引きとつて、それ、そこにゐる婆々めも一緒にわいが引きとつて、どうやら暑さ寒さを凌いでやつて來たのや。ほんまに我が子同樣にして氣まゝにさして、わいの及ぶだけのこととして育て來たのや。それに何ぢや、そろ〳〵大きうなつて來ると、お前のほんまのお父さんやないとか何とか、智慧を入れくさつて……』

『それはあんた思ひ過ぎやおまへん。何いふてゐな……。あたいら何もそないなこと考へてしまへん。自分からあんたはひがんだことを云ひなはるさかい……何も知らぬ此の子までが、ほんまのお父さんやないのか知ら思ひますしやないか……』かみさんは泣き聲で云つた。

『うまいこと云ふてもあかへんぞ。わいがちやんと此の間から見ぬいてるよつてな、どない辨解したかてあかへん。さあ見込みのない老ひぼれの亭主のそばにゐんと、さつさと出てうせう……。』

爺さんは怒鳴り續けた。

『親ちさん、まあ僕等にまかしておくんなさい。それは親ちさんの思ひ過ぎです。』下宿人一同は一生懸命になだめた。

實際さう云ふ爺さんの言葉は我々下宿人にも信じられなかつた。かみさんは働き者で、下宿人に親切で、やさしい貞節な中老の女であつたし、媼さんはもの靜かな、それは品のよい、お家流の筆蹟の見ごとな、そして婦ながらに武藝の覺えもある人であり、竹西爺さんは無類のお人よしで、全く表面は貧しいながらに氣持のよい、一度此の家に下宿すると誰でも動きたくなくなるほどの家であつた。

『あ、こんな好い一家にもさう云ふ事情があるのか。』私は落寞とした氣持がした。然し翌日は何ごともなかつた一家のやうに爺さんはいつもの好い人に歸り、かみさんは朝早く起きてせつせと働き、媼さんは孫の世話をし、そして互にやさしい言葉をかけ合つてゐた。

『や、昨夜はすまなんだな、皆に晩くまで心配さしてほんまに氣の毒やつた。わいも少々言ひ過ぎよつたわい。』爺さんは朝から一杯傾けた。

『ほんまにうちの人は、昨晩のやうなことはめつたにおまへん。これまで十何年つれさうて來てますけどあんなことは唯の一度あれしまへなんだ。まあ昨晩はどえらい大きい聲しなはつたなあんた。もう／＼酒は適度にして、惡よひせんやうにして貰ひまひようかいな、ほほほ。』

『まあ／＼、たまには好えわ、勘辨せい。さあ平吉、學校へ行きしなにこれで何なと買へ、お父さんがおあしやるよつてに……』爺さんは子供に白銅を投げてやつた。

九

工廠では二つの事件があつた。それは公務死亡者追弔會の日の投石騷ぎと、不健康職工解雇に對する糺彈騷ぎとであ

つた。不健康職工解雇は名を工場衛生に借りての一種の職工淘汰で、これは工廠緊縮の結果だつた。全く數萬の職工中、身體檢査に逢つては一人として完全な健康者のあるべき筈はなかつたので職工の恐慌は一通りでなかつた。そこへ恰度公務死亡者追弔記念日が來たのだ。職工一同は自分達の同胞の亡魂を前にして勞働者待遇の不法を訴へる意味で、工廠長の追弔演說中罵聲を揚げ、そして盛んに投石した。本願寺の何々の御臨場もめちや／＼だつた。

此の事件の主なる煽動者として例の大學生あがりのフライス盤師は工廠を馘になつた上に此の土地から追放の憂目にあつた。そして私の赤いシャツの仲間等は爾來職工中の注意人物になつた。それはフライス盤師と相通じてゐた爲めと、彼が遺して去つた事業の消費組合を飽くまで發達させようとして奔走してゐた爲めであつた。

此の消費組合が一時職工町の小賣商店に與へた打擊は尠くなかつた。然し小賣商店はだん／＼組合の行動に對して妨害を與へるやうになつた。組合と卸商人との間を掣肘したり、または同組合は社會主義的勞働運動の前哨だと云つて其の筋の壓迫を仰いだりした。

組合假本部は竹西爺さんの家に置かれてゐて毎月臨時總會が開かれた。そして其の筋の壓迫と共に組合員中にも脫會者が出て、いろ／＼の異說の衝突があり、各自の意見が百出した。

『それはたんぢやて、小賣商店に四割の暴利をとられるのはつまらん話やけど、組合員の住所が各々離れて散在してるさかい米や薪炭やいろ／＼の食糧品を一々各人が此の本部まで取りに來んならんちふことは、とても不便でやりきれへん。皆さんもさうやらう。家の婦らはそれればあつかりこぼしてゐくさるでな。これが一番此の組合の缺點やと思ふがどうや、諸君。』

『それは皆同感やが、今のところは仕様あろまい。そこを我慢してやらう云ふのが本組合の意志やないか。え、諸君さ

うやらう。」

「さあ、それには違ひないやけどな……」

「諸君のお說は尤もです。然し此の際多少の不便は共に忍耐したいと思ひます。英國あたりのやうに千人二千人と云ふ多數の組合員が出來れば自然と組合の資本金にも餘裕が出來て、配達人を雇ふことも出來ますが、今のところではそれが出來ません。然し幸ひ私共若い連中がをりますから遠方の諸君には吾々が工場から歸つてから配達いたします。願はくは諸君よ妻君の小言に同情し過ぎて本組合を見棄てられることなきを……」

「謹聽々々。」

組合員は僅かに三十五六人に過ぎなかつたが、毎月各員の購買高に準じて三割の割戾しをし、小賣奸商の四割に近い暴利を生活費の上に免かれてゐることは事實だつた。そして小賣店の不純不良な物品に比べて組合が直接仕入れるところのすべての食糧品その他は優良で廉價であつたのだ。

赤いシャツの仲間は默々として組合の爲めには自分を忘れて奮鬪した。彼等は日曜の休み日にも手車を曳いて波止場から米や醬油の荷を受取つて來たり、それを遠い組合員に配達したりした。帳簿や物品の整理も彼等は嚴格にやつてゐた。

竹西の爺さんは便宜上最初から組合長に推薦されて、組合員以外の現金小賣は自分の收益になるところから非常に熱心だつた。仕入品の監理役をしながら組合の資本で一個の商店を營んでゐるわけだつた。

彼等に對して心から恥ぢねばならなかつたのは私であつた。私は全く世の中のことも自分の境遇に對する深い自覺もなかつた。そのくせ私は彼等に對してはかう思つた。

「彼等は何かに囚はれてゐるのだ。かぶれてゐるのだ。あんな馬鹿々々しい無意味な組合なんかに夢中に骨を折つてどうするんだらう。思想だの正義だのとばかりよく云つてゐられるものだ……」私は彼等に對して心ではさう思つた。私は工場から宿に歸ると何よりもお湯をつかつて、おめかしをして、それから內證で歌の稽古に出かけた。如何にすれば娘達に認められるかと云ふことばかり考へた。私は工廠に働いて得た月々の給料から稽古料を支拂つた殘りでコスメチツクや香水や美顏水を買ひ込んだ。意氣な襦袢をこしらへて着ては喜んでゐた。まつたく無自覺極まつてゐた。私はさうした自分を多少心で輕蔑してはゐた。

私は毎晩師匠の家に行くのが樂しみだつた。そこにはおせつちやんと云ふきれいな師匠の娘がゐたからである。工場が休みの日は朝から私は師匠の家に入りびたつた。日曜日の教會へバイブルを持つて通ふ青年のやうに私は小唄全集を持つて朝から師匠の家へ出かけたものだ。晝間はそこは大勢の舞子達がお稽古に來るからであつた。私は彼女達から兄さんと呼ばれることが何とも云へぬほど嬉しかつたのだ。兄さんと云はれるまゝに私は兄さん氣取りで月々のおさらひには小さい娘達の面倒を見る役目を進んでした。

『こまつたしろものだ……』仲間等は私に云つた。彼等は兄分らしい友情を以て私を善導しようと努めた。然し私は自分の一應踏むべき道を歩まねばならなかつた。で私はとう〳〵彼等のそばから逃げ出すことにした。竹西爺さんの家から遠い町の歌の師匠の近所に轉宿した。

仲間と別になつてからの一年間の生活は私の一生涯に最も羞恥の記錄を作らせた。師匠の家に出入する五六人の若い連中は私に劣らぬやくざな男ばかりだつた。あまり將來の見込のないのらくら者ばかりであつた。かうゆふやくざな連中に交つて見ると、さすがに私は赤いシヤツの連中のことを思つた。彼等は私にとつては得がたい指導者であり、良友

であつたことがつく〴〵感ぜられた。

『何てこいつらは低級な人間達だらう。』一緒に師匠の家で落ち合ふ連中に對しては輕蔑の感じより他に持てなかつた。其の實私も彼等に近かつたのだ。彼等はどれも救ひがたい不眞面目な、怠け好きな男であつた。喉自慢の遊蕩兒であつた。柄にない遊びをして借金でピい〱云つてゐた、そのくせ見え坊で、いつも意氣で粋な服裝をすることに苦心した。或る者は親兄弟に見放されて師匠の家にごろ〱してゐた。寄れば必らず淫猥な話で持ち切つた。好色的な意氣がりと、きざな藝人ぶりとで鼻もちのならぬ空氣をみなぎらせた。彼等の唯一の目標は師匠の娘であつた。然しかうしたのらくら者に對して師匠は月々の月謝と糸代とを貰へばよかつたのである。ところが彼等は皆彼女に對して自惚と自信とを抱いてゐたことは非常なものだつた。

四月の花見時節が來た。揃ひの手拭を首に結んで野や山に浮れ出る春の日の騷ぎは何國も同じで、私も連中に加はつて、思ひ切り道化た眞似をして、町から野へとくり出さねばならなかつた、連中はその日は土提の青草の上でめつた踊りに踊りぬいた。そして多くもない瓢箪酒に醉つた風をしてた。私も無論である。何と云ふ醜態!

やがて夕陽が沈む頃連中は師匠の三味線を肩にして歸途についた。その歸りである。青服のスボンに赤いシャツを着た私の敬愛する三人が米や醤油を手車に積んで、汗たら〱で河つぷちを曳いて來るのに私はぽかりと出くはした。私は其の一瞬間ひどくまごついた。逃げ出したいほど氣耻づかしい思ひをした。然し此の時私は目鏡をはめてゐたのは幸ひだつた。彼等はそれとも知らず呼吸をきらしながら車をえい〱曳いて行き過ぎた。然し私は慚愧の爲めに心臓を蒸されるやうな思ひがした。

十

それから二十年は過ぎた。彼等の消息は不明である。私の消息も恐らく彼達には不明であらう。彼等は私にはどう考へても立派な精神の持ち主であつた。そして私は――いや私はそれから父を失ひそしてます〳〵放浪し貧乏して道草を喰つたものだが、私には私のあらゆる經驗がまた大いに必要であつたのだ。（十年九月十日）

大工部屋の孕み猫

上司小剣

一

喇叭を吹いて、忙しさうに、賣れ殘りの荷を擔いで通る豆腐屋があつた。

『この邊でも、豆腐屋は喇叭を吹くんですね。目黑の森の中でも、矢ツ張りさうですよ』と、春田は敷居の上に立つたまゝのんきなことを言つてゐた。

『さうですかね、とうふいイ………と言つて來るのもあるがね。』と言ひ〳〵、母親は燈心と種油とで、佛壇へ上げる小さな土器の燈明を作つて、其の灯に照れた半面を照らされつゝ立つて、簞笥の上の佛壇へ手を伸ばした。其の手も瘦せて細かつた。

『君、早く行かうよ。』と、監督は背後から春田の袖を引いた。春田はよろ〳〵として、遊動木の上にあるやうに、危く足を敷居の上に踏み止めながら、『まだ早いから、一寸この家へ寄つて行きませうよ。』と、振りかへつて言つた。

『まア、あなた、どうぞお上り下さいまし。』と、母親はまた愛想よく、黄色い聲で言つて、指先きに附いた油を、火の氣つきさうに亂れた丸髷の髮で拭き〳〵、萎びた素足を運んで再び店頭まで出て來た。

『見合ひに行きがけに、道草を食つちやいけないぢやないか。』と、監督は銀行で仕事をしてゐる時と同じ口調で、叱るやうに言つた。銀行でもさう怖くはないのだから、此處まで引つ張り出して來ると、いよ〳〵詰まらない男に見えて、自分の上に立つ人間とは思はれないが、たゞ『見合ひに行く』なぞといふ言葉を、母親の前で使はれるのが恐ろしかつた。

『彫彦さん、敷居を跨んぢや、いけないね。そんな汚ない敷居でも、わざ〳〵跨むことはお斷りだよ。』と、母親は今まで言つて使はなかつたきたない言葉で叫んだ。

『さうですか。』と、少しまごつきながら言つて、春田は敷居から下りたが、店の品物に兩方を取り圍まれた土間は、ほんの足を立てるだけの面積しかなかつた。

『それぢや、僕は先きへ行つてゐるからね、後からきツと來たまへよ、番地は分つてるね、今川小路の×番地だ。』と言ふたり監督は身を飜へして、笛を吹きつゝ杖で土を叩いて來かゝつた盲目按摩に突き當りかけて、よろけながら行つてしまつた。

『あなた、まアおよろしいぢやありませんか。むさくるしいところですけど。』と、母親は伸び上つて表を見やりつゝ言つたが、其の甲高い聲も、監督の貧相な耳には屆かないで、彼れに背後を振りかへらせることは出來なかつた。母親とてもまた强ひて引き留めたいといふ氣のないのはよく分つてゐた。土間に立つた春田の鼻ツ先きは、丁度母親のよれ〳〵になつたメリンスの帶のところにあつた。剝げかゝつた紺飛白の筒袖を上はツぱりにしてゐるが、前のところに赤

の入つた帶のちら〳〵見えてゐるのは、年齡に合はして、不思議でもあり、可笑しくもあつた。其の赤の入つたよれ〳〵の帶が、亡き濱江の遺物で、濱江が平常着の上へよく締めてゐたのは、春田の記憶にまだ新らしかつた。帶の古くなつたのにくらべて、記憶の方がズツと新らしかつた。

狹い土間に立つた春田の上から、おツかぶさるやうにして、監督を呼び留めようとした母親の帶のあたりが、春田の鼻ツ先きへ來たので春田は在りし日の濱江によく似たにほひに小鼻をひこつかせた。顏や姿は父親の方によく肖たのであつたが、にほひは矢張り母親の血から受けてゐたのだと思はれて、亡き愛人の面影がまた涙とゝもに浮んで來た。濱江の母親をば『阿母さん』と呼ぶことによつて、この場の切なる思ひを紛らしたかつたけれど、どうしても、『阿母さん』といふ聲が咽喉から上へはあがつて來なかつた。濱江の父親とは目黑の奧の森の中で此頃は共に住んでゐて、『お父さん』と平氣で言へるやうになつたのに、母親に對しては、『阿母さん』と呼ぶのに躊躇された。

『小母さん。』と元の通りに呼んだ聲は、涙に濕つてゐた。

『早くおとりよ。』と、母親は言つて、ギク〳〵なる狹くるしい店頭の板の上で、身體を縮めて、春田の通る隙を作らうとした。破れた硝子の蓋に細く紙を貼つて繕つた駄菓子の箱を、袂で掃くやうにして、春田は縁側に母親と擦れちがひつゝ、亡き濱江によく似たにほひに咽せるのを感じて、奧の一室へ入らうとした。其の途端に飴の子だはしが二つ三つ、どうした機みかころ〳〵と土間に落ちた。

『あツ。』と言つて、それを拾はふと俯向きかけた春田の手を握つて、母親は奧へ押しやるやうにした。其の手のあたり工合はばさ〳〵と荒れてゐて、兎ても濱江の手のやうに柔かくはなかつた。

『小母さん、淋しくはありませんか。』と、春田は奧の四疊半の眞ん中に立つて、きよろ〳〵しながら言つた。箪笥の上

の小さな、粗末な、白木の佛壇には『釋尼妙照』の白い位牌を燈心の火がちら〳〵と照らして、此處にはガス燈も電燈もなかつた。店頭から覗いた方が明るく見えるほどで、入つて見ると、薄暗かつた。

母親は春田の下駄と縋の子だはしとを一緒に土間から上げて、『人が入つて來ると踏むからね。』と獨言をしつゝ、もう新らしくない薩摩下駄の爪先きの缺けたのを、大事さうに店の片隅へ重ねて置いた。

『寂しくはありませんよ、獨りでかうやつてる方が淸々してね。わたしは尼になつた積りでゐるのさ。…………尼になつて、濱江の菩提を弔ふてゐるのが、わたしには一番いゝんだよ。親爺さんみたいに、毎日ぎごちない理窟ばかり言つてる人わたしや嫌ひさ。』と、兩手を擦り〳〵奥へ來た。奥と言つてもこの一室きりで、障子もない敷居の彼方には臺所が見えて、細長い白い甕で包んだ上水道の水口から、ぽつり〳〵と、バケツの中へ落ちる雫の音が忙しかつた。

二

裏にはこの建て詰つた場所柄に勿體ないほど、廣い空地があつて、其處から吹き込んで來る夜風が涼しかつた。燈明の光りはちら〳〵して、濱江が佛壇の中で喜んでゐてくれるやうに見えた。一番新らしい寫眞が、位牌とゝもにあつた。

『汚なくつて狹いけど、此處は夏知らずだよ。』と、母親は誇り顏に言つて、佛壇の燈明に見入つてゐた。

『おくんなさい。』と、店には客があつた。『入らツしやい。』と、急いで立つて行つた母親は、がさごそと何かを買つてゐたが、汚ない一圓紙幣を持つて來て、錢函代りの長方形な箱から釣錢を出して、『有りがたうございます。毎度有りがたうございます。』と言ひ〳〵店へ持つて出た。長方形の箱には小紙幣やら銀貨やら白銅貨やら銅貨やらが、ごちや〳〵

してゐた。紙幣は皆春田の勤めてゐる銀行へ入れば、直ぐ灰にされてしまひさうなものばかりであつた。新らしい手の切れさうな、パリ〳〵した姿で、石の館を出て來て、人々の涙や汗に汚れ、垢に揉まれて、かうした穢間しい姿で、元の石の館へ歸ると、忽ち箱に押し籠められて、灰になつてしまふ彼等の運命も果敢ないものだと春田は思つて、しみ〴〵と細長い箱の中を見詰めてゐた。

『影彦さん、こんな汚ないお紙幣は、あなたの勤めてる銀行ぢや皆燒いちまふんでせうね。』と、母親も同じことを考へた風で、かう言ひながら、店から奥へ來たので、春田は偶然にも二人の考への符合したのを、濱江の靈の引き合せのやうに思つて、不思議な感じを催した。

『えゝ、汚れてゐなくツても、一度あの銀行へ戻つて來ると、百圓紙幣でゝもなけれや、餘ほど新らしいのでないと、みんな燒かれツしまふやうですよ。』と、春田は首を傾けつゝ言つた。

『濱江も灰になつてしまつたし、お紙幣も灰になつちまふのね。人間て、詰まらないものだね。』と、母親は痩せて窶れた口から、今にも血を吐きさうな痛ましさを見せて言つた。

『わたしたちも灰になるんですよ、今に。』と、春田も哀しさうな聲をして言つた。

『早く灰になりたいわね。』と、母親は佛壇を見やりながら言つた。燈明は首肯くやうに瞬きをした。

『濱江さんのあの寫眞と、目黑の方にある僕の寫眞と取りかへてくれませんか。』と、春田は泣き聲をして言つた。

『取りかへて上げてもいゝが、まだあれより新らしいのがあるのよ、死ぬ半月ほど前に寫したのが。………』

『後姿のぢやありまんか、あれなら僕も持つてますよ、吉松さんに貰つて。………後姿ぢや詰まりませんね。』

『後姿ぢやないの。それや大變なの。………ほゝゝゝ。』と、母親は妙な笑ひかたをした。

『大變なのツて、どんなのです。』と、春田は眼を瞠つた。

『もういよよ、影彦さん。吉松さんがこなひだわざ〳〵屆けてよこしたんだが、あの人も妙な人ね、どうしてあんな厭やな寫眞を持つてるんだらう。………自分に寫したんだツて。………あの人畫も描けば、文章も書くし、それから寫眞もやるのね。器用な人だよ。』と、母親はうツかり口を滑らしたことを悔ゆる風で、何かとごた〳〵喋舌り立てゝごまかしてしまふとする樣子に見えた。

春田はもうスツカり解つてしまつた。曾て吉松の二階で、新聞紙の上に、水洗ひを濟ました印畫紙の乾かしてあるのをチラと見た時それがあられもない濱江の姿であつたのに、覺えずハツとして、眼をそむけたところへ、濱江病氣の電報が來て、其の方へ眼を奪はれてゐる隙に、其のモデル女のやうな寫眞は、吉松の手で素早く隱されてしまひそれと摺りかへられた後姿のアーチユラが前のよりも一層ひどく濡れて、前からあつたのはこれだぞと、人を欺かうとして、新聞紙の上にペツたりとくツ附いてゐた。其の折りの絶望的な、胸をきゆうと締め附けられるやうな、惱ましさと苦しさとを、今またこゝに感じようとして、春田は佛壇の方を怨めし氣に見やつた。燈明は力なく濕つて、炎がうなだれてゐるやうであつた。

挑發的な色を浮べてゐて、男に誘惑され易い素質をもつてゐた濱江と相愛して、許婚のやうな仲になつてからは、自分の苦勞の絶えなかつたことを、春田は寧ろ恐ろしい經驗として、今もなほ胸いツぱいに抱へ込んでゐる。戀をすることと、愛人を得たことは、こんなに苦しいものかと、戀をしない昔しの物を思はなかつたことや、愛人を得ない前には、心持ちの常に安易であつたことが、折りにふれて懷かしく思はれたのも、今ではまた哀しい狙懷になつてゐる。

吉松の藝術を完成させる爲めの犧牲だ、と誤り信じて、吉松の畫布(ツアンバス)の前にあられもない姿を立てたのも、果てにはそれ

をばまだ新らしい美人裝のレンズに收められて、消えさうで消えないピンボケのした醜態を、印畫紙の上に留めたのも、皆自分の愚かしさから晒らした恥だ。――とは、重態に陷つた濱江の口から、郊外の病院の寢床(ベツト)の上で、看護婦たちの隙を、衰へ痩んだぼんやりした眼で狙つて、竊に春田の耳へ囁き得た濱江の懺悔であつた。

「影彦さん、濟まなかつたわね。」と、幾度も繰りかへして、哀はれに低く、苦し氣に言つた濱江の聲は、まだ春田の耳の底にヂツト沈んでゐて、いつでも湧き上つて來さうである。

「影彦さん、吉松(わざと呼び棄てにして)のところから、わたしの畫と寫眞を取りかへして頂戴!」と言つたのが、濱江の自分に對する意味を成した言葉の最後であつたことも考へられて、春田は自分の臆病が、まだ吉松のところへ、二十號とかの裸體の油彩と、あられもない姿の寫眞とを取りに行く勇氣を起し得なかつたのを、『釋尼妙照』の位牌に對して濟まないと思つた。さう思つて佛壇の方を見ると、燈明の炎が勢ひよく、瞬きもしないで、油を吸ひ上げてゐた。

三

「寫眞を見せようかね、濱江の一番好らしい寫眞を。……影彦さんになら見せたつていゝわね、どうせ、……」

と、母親はニヤ〳〵疑な笑ひかたをして、佛壇の位牌の後に隱してあつた白紙に包まれたものを、大事さうに持ち出して來た。それは其の薄さから考へて、まだ臺紙に貼られない印畫紙で、曾て吉松の二階で、吉松が周章て、後姿の帶の模樣のよく寫つたのと摺りかへたあれであらうと考へて、春田は何故か今更胸をどき〳〵させた。

「さア、御覧なさい。」と、其の薄い白紙の包みを、春田の膝の上に置くなり、母親は逃げるやうに、店の方へ行つたがそれでもまだいけないと思つたか、狹い土間の低い床下に下駄を探ぐつて、表へ出てしまつた。表からは些か濕氣を帶

びた凉しい夜風が、前とは反對に裏の空地の方へ吹き流れた。佛壇の燈明がチラ〳〵と瞬きをした。

春田は膝の上の薄い紙包みをヂツと押さへて、披いて見ようか、披くまいかと、暫らく迷つた。裏の方を覗ふと、母親は何處へ行つたか、其の黒い姿を暗い町の中に消してしまつてゐた。

漸く決心して、白い包み紙を披かうとすると、まるで、神秘の殿堂の扉にでも觸れたやうに、手がぶる〳〵と慄へて、胸がわく〳〵した。半分掻きわけては躊躇した末に、重い石でも揺り動かさうとするが如く、兩手に力を籠めて、薄い紙をば右に披き、又左に披くと、内部からは偽らぬ濱江の立ち姿が、すらりとして神々しく現はれた。手も足も人並みよりは大きかつたのが、こゝでは見事に役立つてゐた。眩しく眼を射られる細い光りが、其の肌から放するやうで、春田は兎でも長いことそれを見てゐることが出來なかつた。素人業としては珍らしくピントの外れないもので、燈明の火とガスの灯の淡い影にも、ハツキリと其の焦點を探ることが出來た。亡き愛人を祀つた佛壇の燈明の火で、初めて其の人の偽らぬ立ち姿を見るのも、奇しき緣だと考へられた。愁の利いた其の瓜實顏は、白粉の濃さと、彩つた紅の痕とを見せて、思ひなしか、掩ひ切れぬ羞恥の色を浮べてゐた。『藝術の爲めに』といふ堅い信念から、吉松の二階のモデル臺の上には立つたであらうが、其の姿をレンズに收められる時、いぢらしい彼女の心はどんなに動搖したか、それを思ふと、春田の眼には涙がいツぱいに込みあげて來て包み紙の扉にパラ〳〵と落ちた。藝術を囮に使つて、無垢の處女を誘惑した吉松の毒手が、今更憎くてならなかつた。

春田は急いで、白い紙へ元の通り印畫紙を包んでしまふと、ほツとして、それを膝の上に置いたが、薄い紙から、じり〳〵と膝を壓する重みが加はつて來るのを感じた。

もうたまらないと思つて、春田は寫眞を包んだ紙を持つて立ち上るなり、佛壇の前へ進み寄つて、『釋尼妙照』の位牌

の後へ隱さうとしたが、また急に名殘り惜しく思はれて、手早く包み紙を披くと、再び現はれた亡き愛人の僞らぬ立ち姿は、燈明の光りに近く、一層鮮かな色をして、春田の眼を力强く惹き付けようとした。春田は唇を寄せて、其の寫眞の顏に接吻をした。印畫紙の一部分は春田の熱い唇に濡れて、ほうッと赤く染まつたやうに見えた。

また元の通り包んだ寫眞を、位牌の後の阿彌陀佛の畫像の後へ隱したところへ、母親が戻つて來て、きよろ〱と春田の手元やそこらあたりを見廻はしながら、

「彪彦さん、…………見て?…………」と、ニヤリ笑つた。

「えゝ見ました。…………元のところへ入れて置きましたよ。…………種板も取り上げておかなければいけませんね。」と春田は十分に嚴肅な態度と、莊重な言葉とで、母親に對した。さうして、『釋尼妙照』の位牌の後に光るまがい錦襴の表裝をした阿彌陀佛の尊像と、其のまた後にある亡き愛人の僞らぬ立ち姿の肖像との、奇妙な對照とを考へた。南無阿彌陀佛と△僞寫眞——摩訶不思議。

四

「彪彦さん、御目前でせう。」と言つた亡き愛人の母親の言葉を後にして、春田は汚ない駄菓子屋兼荒物屋の店を、ガスの光りの蒼白く輝く下から飛び出した。

「彼はこゝへ何をしに來たのか。」

寂しく暗い町の角に立つて、春田はさう考へた。さうして、

「銀行の門衛の鳥島爺さんの娘と、見合ひをしに行く途中だッたのだ。」と、氣づくと、亡き淸江に對して、まことに濟

きないことだつたといふ後悔が、泉の如く、胸から溢れて、濕つた街路の柔かさうな土の上へ滴り落ちるかと思はるゝほどであつた。

『殺さう、殺さう。見合ひなんか誰れがするもんか。』と、さう思つて、春田は今川小路の×番地を探すのを止めて、急げるだけ急いで、郊外の森の中の家へ歸つて來た。

締め寄せてある表戸を引き開けると、格子戸のない家の奥から、片脳油のにほひが、堰を切つた水のやうに流れて來て、春田の鼻に襲ひかゝつた。家中が便所のやうな氣のするこの平手な設計の小さな建物は、これから暑さに向ふに連れて、どうにも辛抱がし切れまいと思はれた。其の臭氣をば、父親は片脳油を座敷にまで撒きちらして防がうとしてゐるのであるが、空腹の春田は、これが爲めに忽ち胸がむか／＼して、頓に食慾を失つてしまつた。

戸棚の一隅へ無理に取り付けたやうな工合になつてゐる便所の方を足にして、父親は片脳油のにほひに浸りつゝ、粗末な夜具にくるまつて寢てゐた。光力の足りない電燈に薄く照らされてゐる其の横顔の輪廓は、幾度見ても亡き濟江そつくりであつた。よく／＼の父親肖だゝ思つて、春田は濟江の面影を偲びつゝ、ぼんやりと彼女の父親の枕頭に突つ立つてゐた。

『遲かつたなア。今夜は歸りが。………神田へ寄つて來たか。』

細く眼を見開いて父親がさう言つたのは、春田の眼が父親の横顔から、机の上の濟江の寫眞の方に移つた時であつた。春田は老いの寢顔と、若い寫眞顔とを見くらべて、今更にまた其の輪廓のよく似てゐるのを感じてゐた。妙に涙ぐましくなつて來て、二つの顔を長くは見てゐられなかつた。神田の家の佛壇の阿彌陀如來の畫像の後に隠してある濟江の偶らぬ立ち姿のことが、頻りに胸へ出されて、あの偶らぬ立ち姿を觀音と見て、觀音と阿彌陀如來とが重なり合つて

立つてゐる佛壇は、小さくとも、粗末であらうとも、世の常の佛壇よりは、遙に尊いなぞと考へたりした。

富江の僞らぬ立ち姿の寫眞のことを、どうかして父親に告げたいと、春田はいろ〳〵に婉曲な言葉を工夫してみたけれど、どうも自分の口からは、言ひにくいので、斷念してしまつた。

「今夜は飯がないから、パンだ。……………キャベツの煮たのがある。」と、父親は、横になつた身體の向きを、くるりとかへながら言つた。片腦油のにほひにも馴れて、空腹がまた襲ひかゝつて來たので、春田は片隅に新聞紙で被れてあつた飯臺の側へ躍り寄り、貧しい夕飯をば、獨りおくれて取つた。御馳走を拵へて待ちぼけを食つた今川小路の兒島爺さんの家では、今回世話好きの監督がどんな顏をしてゐるであらうかと考へると、今更氣の毒でならなかつた。

「神田ぢや變つたこともないかね。」と、父親はまたくるりと身體の向をかへて、パンを嚼つてゐる春田の口元に眼を注ぎつゝ言つた。一人娘の富江の死を機會として、豫ての計畫通り、母親は三文商ひを始めるし、父親は郊外の閑靜なところに引つ込んで、翻譯や著述に身を入れるつもりでゐたのだが、母親の方の三文商ひは、どうやらかうやら物になりかけても、父親の仕事は餘り捗取らいで、机の上には、書きかけた原稿が、一昨日あたりから一字も加はつてゐない。

「えゝ、なか〳〵賣れるやうですよ、子供相手ですからね。お客は九分通りまで子供ですから、阿母さんも氣が紛れていゝやうです」と春田は富江の母親に對して、蔭では阿母さんといふ言葉を使ひ得るのが、せめてもの心やりなのであつた。

「あの店で賣れるだけ、近所の店が賣れなくなつてるんだ。人間の共食ひだね。食人々種は文明國の大都會の眞ん中にも居る。……………仕事を失つて、何をすることがないから、小商ひでも始めよう。と言ふのが、一番いけないんだ。共の結果小賣り商が殖えて、物價が高くなる。……」と、父親はまた得意の物價論を始めかけた。今まで四個のものをば一人で賣つてゐたのを、二人で賣り、四人で賣るといふ風に、小賣り商が殖えて來ると、競爭の裏に協定が行はれて、

結局は四個から得てゐた口錢を一個から得なければならないことになる。そこで物價がだん／＼騰貴する。といふやうな議論を、春田はこれまで幾度聽かされたか知れなかつた。しかし此頃父親が頻りに母親の小商ひを攻撃するのは、別居してみても寂しいので、老夫婦でまた同棲したいといふ下心から來てゐるのだと推察された。さうして、母親が『一人で居る方が清々して幾らいゝか知れない。ぎごちない理窟ばかり言ふ親爺さんなんか厭やなことだ。』と言つてゐるのに引きくらべて、ひそかに微笑みたくなつた。

五

其の翌日は、銀行に出勤するのが、少し工合ひわるかつた。それで春田は、殊に早く監督よりも先きに地下室の紙だらけの机の側に納つてゐようと考へて、蚊張の嫌ひな父親が、殆んど夜をこめて焚く蚊やりの烟りに、鼻から脳が少し變になつたのを、涼しく滑らかな夏の朝風で洗ふつもりで、深呼吸の眞似をしながら、まだ方々の家に青い蚊張の吊つてあるのを透き見しつゝ、青い郊外から黄色い市へと、急ぎ足に銀行の石館まで辿り着いた時、時計を見たら、まだ七時の出勤刻限には餘ほど間があつた。

誰れよりも早い守衛の兒島爺さんは、もうちやんと守衛室で、詰め襟の制服の釦をかけて、好きな朝顔の鉢植ゑを前に、鉈豆の煙管から、朝霞のやうに白い烟りを窓の外へ棚引かせてゐた。この老人の顔を見るのも、今朝の春田には、なみ／＼ならぬ苦勞であつた。老眼にも遠くから、春田の姿をチラと見て、其のまゝ俯向いて素知らぬ顔をしてゐる制服の老人を、春田は眩しく眺めつゝ、近寄つて行かなければならなかつた。老人に用はないが、老人の側にある出勤簿に用があつた。

生れてこのたか、五本の指に數へなければならぬほどの勇氣を振ひ起して、森田は殊更につか〳〵と、足を早めつゝ、守衛室に近づいた。わざと伏せ目になつて、無理にも朝顔に見入らうとしてゐる老人の弛んだ喉が、ピク〳〵と蟲の這ふやうに動くのを見るまでに近づいた森田は、少し慄へる手で出勤簿を拔きかけると同時に、『お早う。』と、咽喉に引つかゝる聲で言つた。

『いや、お早う。』と、老人は初めて氣がついたといふ風を裝ふて、朝顔から眼を離した。顏の皺が一時に波打つて、いつもに變らぬ上機嫌の笑ひがあつた。『君だけだよ、兒島爺さんの笑顏を見るのは。……果報者だね、僕等は年中顰めつぶしたやうな顏ばかり見せられてる。』と、よく冷評半分に言ふ朋輩の機關夫相木君の言葉が思ひ出された。しかし今朝の森田は、兒島老人の怖い顏よりも笑顏の方が恐ろしかつた。そこ〳〵に出勤簿へ捺印した手を差し伸べて、自分の名の木札の赤い字を黑い字の方にかへすなり、逃げるやうに守衛室を出た。

もう餘ほど馴れて來た通路を、印刷室の脇からコツク室の前を通り、塗料室の横を曲つて、自分たち機關夫の地下室へと、石の階段を下りて行くと、堅く口を結んだやうに錠前のかゝつてゐる兌換券及債券燒却室の前で、バツタリ監督に行き逢つた。

『お早うござます。』と言つて、いつもよりは丁寧に頭を下げると、『お早う。』とだけは答へてくれたが、いつもの『やア』といふ感動詞が其の冒頭に缺けてゐた。さうして監督はバタ〳〵と忙がしさうに、階段の方へ曲つてしまつた。

自分が一番早く來たと思つたのに、もう同僚の相木が、淺黃色の作業服に身を固めて、配電盤の側に立つてゐたのには驚いた。『お早う。』を笑顏とゝもに交換してから、森田も手早く淺黃色になつた。昨夜のことなんぞは少しも知らぬ相木が、

『おい、お前入りはいつだい。』と、冷かしてゐるところへ、監督の顰めつ面がまた忙しさうに入つて來て、相木にだけ笑顔を見せた。

今日は仕事も閑だし、監督の側にはどうも居辛いので、春田はぶらりと地下室から上つて、コック室の角を曲り、行員の食堂――それは自分たち機關夫などの入ることを許されない――を左手に見て、其の奥の大工部屋を覗いた。

六

戸も扉もない大工部屋の入口に立つと、八坪ばかりの板敷の上には、六人の大工がスツカリ出拂つて、棟梁がたゞ一人、隅の方の火の乏しい圍爐裡の側で、猫の蚤を取つてやつてゐるのが見えた。

『ヤア、おまア入りなせえ。』と、棟梁は、柔かい動物の毛の奥に小さい蟲を追つてゐた眼を春田に向けて、愛想の好い聲を景氣よくかけた。

『有り難う。』と答へて、春田は土間まで入り、五寸ばかりの高さの板敷に、ぐつたりと崩れるやうに腰をおろした。

『さあ、ちつと遊んで來い。コック室へ行くとまた炊事長の畜生に打たれるぞ。』と言ひ〱、棟梁は猫を紺のにほひのさめた股引きの膝からおろした。猫はニヤアと啼いて、眼の大きな髯の濃い棟梁に甘へてゐた。牝猫で、孕んでゐると見えて、腹が垂れ落ちさうに下がつてゐた。

『身持だからなア、畜生だつて、無暗に打たれちや、身體に障るよ。猫だつて、鼠を捕るといふ役目をもつて、この銀行に居れやお前さん、喰物くれえ、やつてくれるなア、當りめえさね。……それにぽか〱打ちやがつて。……』

と、棟梁はおツかない顔をして、コック室の方を睨んだ。猫はまたニヤアと甘へた。春田は妙に痛ましいやうな氣持に

なつた。なんだか頻りに、亡き澄江のことが思ひ出された。

この棟梁は、業體と容貌とに似ず、動物や植物が好きで、いつのほどにか彷徨ひ込んで來たこの牝猫を、銀行の猫のやうに飼ひ馴らしてしまつて、其の食物のことで、絶えず炊事長と衝突をしてゐる。自分に鋸や鉋を取つて、勿體ないほど綺麗に拵へ上げた淺い箱を、何に使ふのかと、配下の大工どもが氣をつけて見てゐたら、其の箱へ一面に砂を敷き砂の上へ自宅から持つて來た襤褸を載せて、牝猫の爲めに産褥を作つたのであつた。産褥のあとが、其のまゝ小猫の護しになる仕組みであつた。

『髯の生えたお産婆さん！』なぞと、女事務員の誰れ彼れに囁かれるほど、この棟梁の猫好きは、別棟になつてゐる木造の小さなこの建物から、大きな石館の奥深くまで有名になりかゝつてゐた。自宅には數十鉢の盆栽を作つてゐるさうだが、『こんなところへ持つて來ても猫に小判だ。辨當を持つて、ちつと植木の作りナを習ひに來い。』などと言つて、エレヴエーターの飛永の草花や、門衛の兒島爺さんの朝顔を冷笑してゐる。

そろ〳〵正午に近づいて來たので、大工部屋の直ぐ前の行員の食堂へ、一汁一菜の料理を運び込む氣色がしてゐた。孕んだ牝猫は、ニヤア〳〵と頻りに啼いて、餓ゑを棟梁に訴へた。

『よし、よし、待つてろよ。今に手前にも、何か可味えものをくれてやらア。』と言ひながら、棟梁は太い煙管を手にして立ち上つた。春田はこの棟梁の氣性と、其のガツシリした鐵筋の入つたやうな身體とが、何んとなく頼もしかつた。

其處へ、一人の若い大工が、腰に挿した大きな金槌の重みに、弛い三尺帶を垂れ下がらして、つか〳〵入つて來た。これも春田の電氣作業と或る工事を共にしたことがあるので、にツこり笑顔を見せ合ふ間柄であつた。

『春田さん、あつしやお前さんに訊いてみたいと思つてるんだがね、この銀行ちや、給仕が馬鹿にえれえんだね。行

と一緒に飯を食つてやがるぜ、お吸ひ物附きでさア。春田さんなかん駄目だね、三十面下げて、穴蔵みたいなとこで弁飯をぱくついているんだからね。』と、若い大工は、金槌とゝもに垂れ下がつた腰の煙草入れを探りつゝ言つた。始終若く見られつゞけてゐた春田も、こゝの機關夫に身をおとしてから、滅切り老けて、まだ二十四だのに、三十面なぞと言はれるやうになつたのが悲しかつた。

『おい、おい。しみつたれたことを言ふなつてことよ。』と、頭梁は音羽屋の聲色のやうな聲を出した。

『でも、今の總裁になつてから、我々の青服組にも晝飯が出ることになつたんださうですよ。こゝぢや給仕は皆事務員見習の資格ですから、行員並みに食堂へ入つて、二品づゝお茶が附くんださうです。我々淺黄色は、今日もまた弁飯に南瓜と油揚げの皿盛りかな。上の方ぢや、我々にももつと御馳走が出てる筈だと思つてるさうですがね。………』と、春田は覺えず卑しいことを言つてしまつて、ハッと口を押さへた。

『こなひだ、あつちの方へ仕事に行つて、重役の食堂でやつを一寸覗いたが、素敵に美味えものがありそうだつたぜ。』と、若い大工は烟りを吐いた口で、舌を舐りながら言つた。

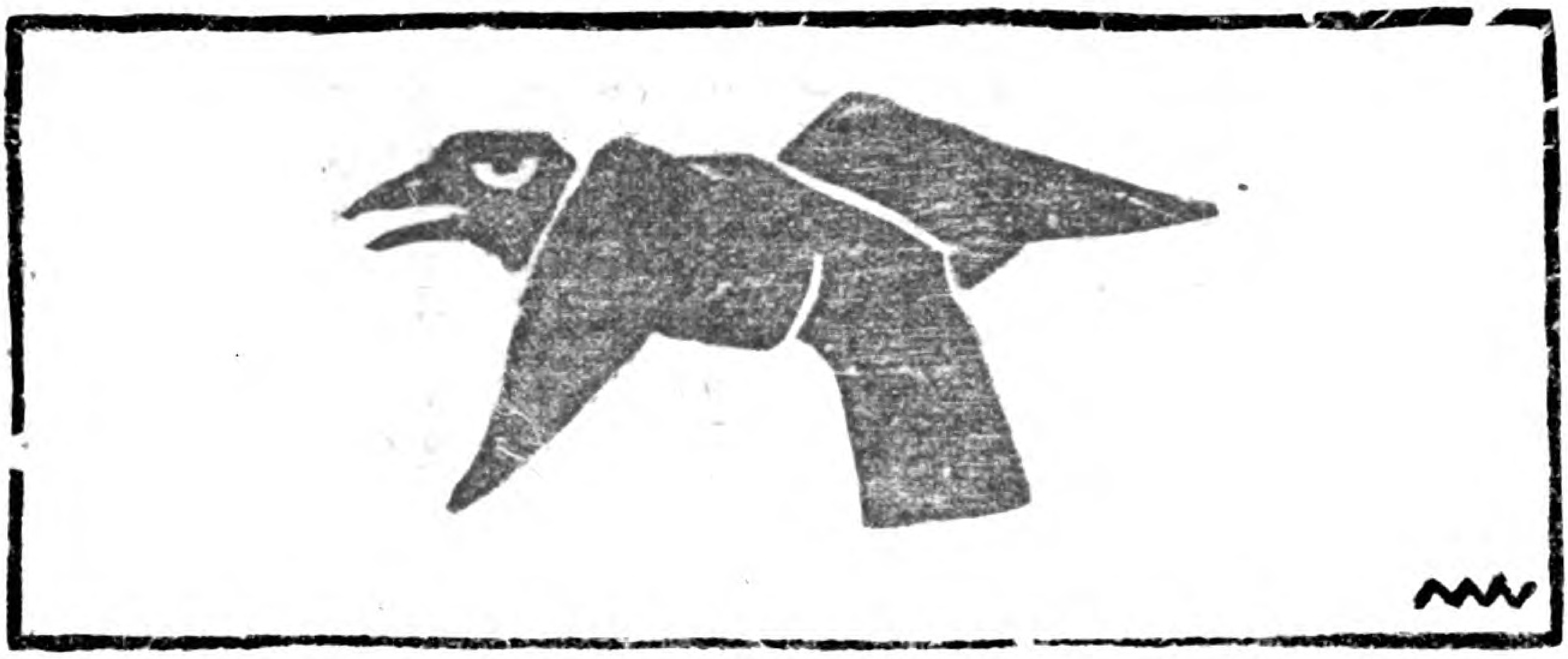
孕んだ牝猫が、またニヤア〳〵と、餌を棟梁に訴へた。

大工部屋から近い新館の普請場で、俄にさは〳〵と、人々の立ち騒ぐ氣色がして、

『足場から墜ちた。…………』

『死んだ。…………』などといふ叫びが、きれ〳〵に聞えた。

――長編『東京』第二部『勞働篇』の第六節――



或る調書の一節

谷崎潤一郎

A　お前の歳はいくつか。

B　四十六です、

A　お前は東京〇〇組の土工の頭をして居たと云ふがさうか？

B　さうです、

A　その方でどのくらゐの收入があるのだ。

B　いそがしい時は月二三百圓にはなります。

A　大分あるではないか、どうしてそれ程になるのか。

B　日當の外に、百人からの土工のあたまをはねるのでそのくらゐになるのです。

A　それだけの收入があるのに、お前はなぜ惡事を働くのだ、お前は今迄に賭博犯で三回、竊盜犯で二回、强盜罪で三回も罪を犯して居る。なぜさう云ふ事をするのか。

B　まことに申譯がありません。

A　申譯がないではない、どう云ふ譯でそんな惡事を働くのか、——二三百圓の收入があるのに、竊盜や强盜をして迄も金を取りたいと思ふのはなぜか、その金は何に使ふの

か。

B　その金はみんな女に注ぎ込んでしまふのです、私が惡い事をしたのはみんな女の爲めなのです。」

A　その女と云ふのはお前の女房の事か。

B　いゝえ、女房ではありません、みんな情婦の爲めに使ひました。」

A　情婦と云つても、お前には何人もあつたやうではないか。

B　それは今迄には隨分多勢ありました。

A　そのうちでお前が一番可愛がつて居たのは誰か。

B　私は一體非常に上せ易いたちで、どの女にも一時は夢中になりましたが、それでも一番可愛がつたのは菊榮とお杉でした。

A　お前が菊榮を知つたのはいつだ。

B　たしか大正元年頃のことだと思ひます、菊榮が森が崎で藝者をして居た時に始めて知つたのです。

A　それで、お前が菊榮を殺したのはいつだ。

B　それは大正三年の十二月二日の夜です。

A　なぜ殺したのだ。

B　菊榮が私に隱して外に旦那を持つたからです。

A　お前が菊榮を殺した時の模樣を出來るだけ精しく話して見よ。

B　ちやうどその時分菊榮は大森に住み替へて居ましたので、晩の十一時過ぎに客の座敷から歸つて來るのを往來で待

ち構へて、海岸へ誘ひ出して不意に…………を以て…………しました、そしたら菊榮は體をバタバタやりましたけれども私が…………して居るので聲を立てる譯には行かないで、…………まるで…………のやうになつて一二分で死んでしまひました。私は用意して置いた…………で屍骸を…………いてそれからそれを…………で…………證據になりさうなものはみんな…………してしまひました。それで今まで誰にも分らなかつたのです。

A　お前はさう云ふ方法をどうして思ひついたか。

B　私は前から人を殺す時は斯うしたらいゝと思つて始終考へて居たのです。

A　お前がお杉を知つたのはいつか。

B　それは私が菊榮を殺した明くる年の正月、仲間の者と一緒に新宿へ遊びに行つた時からです。お杉はその時分〇〇樓へ〇〇と云　て勤めて居たのを、それから一年ばかり立つて私が身請けして、澁谷の道玄坂へ〇〇と云ふ肉屋を出させて妾にして置きました。

A　お前は今でもお杉を可愛いゝと思つて居るか。

B　それは非常に可愛いゝと思つて居ます。あの女は菊榮と同樣に浮氣な方で、私から散々金を絞つて置きながら幾度も私を欺したりしたので、私は度び度び腹を立てましたけれどもやつぱり可愛くて仕樣がないので我慢して居ました。どうしても腹に据ゑかねていつそ殺してやらうかと思つたこともありましたけれど、あの女を殺してしまふと、もうあんなのはちよつとないと思はれたので、考へて見ると惜しくなつて殺す氣がなくなりました。

A　そんなにお杉を思つて居ながらなぜ△△屋の娘を手込めにしたのか。

B　なぜだか分りませんが私はさう云ふ性質なのです、あの晩は大分醉つ拂つて居ましたが△△屋の娘を見たらついム

ラムラとそんな氣になつたのです。

A ではお前はその時までその娘を知らなかつたのか。

B いゝえ、それはまへから知つて居て好い女だと思つて內々眼をつけて居る事は居ました。しかし堅儀な娘なのでべつにどうしようと云ふ了見はなかつたのですが、あの晩は又とない好いしほだつたのでついそんな氣を起したのです。

A あの晩と云ふのはそれはいつの事か。

B 大年六年の四月十九日の晩だつたと思ひます。

A その時の事を精しく話して見よ。

B その晩私は××坂の××と云ふ居酒屋で十時過ぎまで酒を飲んで、それから道玄坂のお杉の所へ行かうと思つて新宿の停車場へ來るとあの娘が居ました。あの娘はたつた獨りで何處かへ使ひにでも行つた歸りのやうでした。私は娘と同じ電車に載つて見たかつたので、娘が目白までの切符を買ふに違ひないと思ひましたから私も同じ切符を買つて同じ電車に載りました。それから目白驛で降りた時にもうよつぽど此處で引返さうと思つたのですが、娘の歸る路は淋しい所だと云ふ事を知つて居ましたし、つい跡をつけて見たくなつて附いて行きました。さうして七八町步いて人家のない所へ來た時に聲をかけたのです。さうしたら娘は前からうすうす氣が付いてでも居たのか急に駈け出しさうにしましたから私は矢庭に……………………きました。……「聲を立てると聞かないぞ、殺してしまふぞ」と云ひましたがそれでも娘は…………………………………………………………ので私は非常にビックリしてまさか死んだのぢやあるまい、氣絶したんだらうと思ひましたがどうも矢張り死んだらしいので、此れは斯うしては置けないと思つて、その屍骸を……………院線の土手の所で……………いてしまひました。

A　明くる日娘の事が新聞に出た時お前は何と思つたか。

B　大丈夫分る筈はないと思ひました、菊榮の時の事があるので大膽になつて居ました。さうしてとうとう分らずに済んでしまつので私は内心得意でした。

A　お前はさう云ふ兇行を演じた事を、今日まで誰にも話したことはないか。

B　それは女房にだけは話しました。

A　いつ話したか。

B　菊榮の時にも娘の時にも直きその後で話しました。

A　なぜ話したのか。何か必要がなければ話す筈はないと思ふが、…………

B　別に必要のない事でも、夫婦の間柄なら話すことがあると思ひます。

A　しかし、お前と女房とは一向夫婦らしくして居なかつたと云ふではないか。お前は始終お杉の方へばかり行つて居て、お杉と夫婦のやうに暮らして居たと云ふではないか。女房に話すくらゐならなぜお杉に話さなかつたか。

B　あんな女にウッカリした事はしやべれません、あれは人間ぢやありません。

A　では女房は人間だと云ふのか。

B　さうです、女房は人間です。

A　でもお前は、いつも女房を人間らしく扱はないで打つたり蹴たりして、ヒドイ目に遭はせたと云ふではないか。まるで犬猫同様に扱つて居たさうではないか。

B　犬猫同様に扱つたかも知れませんが、矢張あの女は人間です。私は女房ならどんな事を打ち明けても大丈夫だと思

ひました。あれは私がしやべるなと云へば決して人にしやべるやうな女ではないのです。

A お前の女房Eの話だと、お前は女房に打ち明けた時、「もし此の事を人にしやべつたら貴樣も殺してしまふ」と云つたさうではないか。それほど女房を信用してゐるならなぜそんな事を云ふのか。

B それはそう云つておどかして見ただけなのです。おどかしては見ましたけれども信用はして居たのです。

A 信用して居たにしろ、たとへ夫婦の間柄でもさう云ふ事はめつたに打ち明けられるものではない。打ち明けるには何かそれだけの必要があつたのではないか。お前は女房に「己は人を殺す事なんぞ何とも思はない、己の云ふ事を聞かぬ奴は誰でも殺す」と云つて威張つたさうだが、一體どう云ふ心持ちで威張つたのだ。

B どう云ふ心持ちだか自分にもよく分りませんが、ただ威張りたかつたので威張つたのぢやないかと思ひます。

A お前は人を殺して置いて、心の中で惡い事だとは思はなかつたか。

B それは惡い事だとは思ひました。

A 惡い事だと思つて良心に咎めたので、默つて居られなくなつて打ち明けたのぢやないか。

B 惡い事だとは思ひましたが、默つて居られないと云ふほどではありませんでした。

A では全く威張りたい爲めにしやべつたと云ふのだな。

B さうです、まあさうとしか云へません。

A お前が打ち明けた時女房は何と云つたか。

B あれは非常に氣の小さい人の好い女でしたから、眞青になつて顔へ出しました。私はその樣子を見るとつい面白くなつたので、「ぐづぐづ云へば貴樣も殺すぞ」と云つておどかしてやつたのです。さうするとあの女は「他人を殺すくら

ねなら私を殺して下さい、私を殺してどうかあなたは自首して下さい」と云ひました。私は生意氣な事を云ふ奴だと思つたので、「貴様なんぞ殺したつて仕様がない、貴様の指圖を受けなくつても殺したければ好きな奴を勝手に殺す」と云ひました、さうしたらEは「そんな惡い事をして置きながらまだ後悔しないのですか」と云つて、しまひには泣いて意見を始めました。私はEが泣けば泣くほど「何を泣きやあがる、貴様がいくら泣いたつて後悔なんかするもんか、うまく殺せば幾人殺したつて分りやしないんだ」と云つて威張つてやつたのです。

A　しかさう云つて威張つたあとで、お前もやつぱり女房と一緒に泣いたさうではないか。

B　泣くことは泣きましたけれども、後悔したと云ふ譯ではなかつたのです。

A　ではなぜ泣いたか。

B　妙な事ですが、あの女に泣かれるとしまひには私も泣いてしまふのが癖なのです。私はあの女を泣かせるのが好きでした、泣いて居る時だけは可愛いゝ奴だと思ひました、それであの女を泣かせるやうな風にばかりしましたが、結局私も釣り込まれて泣いてしまふのです。あの女と一緒に泣くのは何だか好い氣持ちでした。

A　ではお前は、心の中では女房に惚れて居たのか。

B　いゝえ、惚れると云ふのとは違ひます。

A　しかし、菊榮がお前に女房と別れてくれと云つた時お前は嫌だと云つたさうではないか。お前が女房と別れたかつたので、菊榮は燒けになつて外に男を拵へたのだと云ふではないか。

B　それはさうですが、何だか可哀さうな氣がしたので別れる譯に行きませんでした。

A　可哀さうだと思ふならなぜそんなにイヂメたりしたのか。

B　あまりイヂメたものだから可哀さうになつたのです。

A　それはおかしいではないか、イヂメるくらゐなら女房にして置く方が却て可哀さうではないか。お前の女房は實家も相當にしてゐるし、心がけもよいし、お前よりはずつと年も若いのだから、離緣された方が却て仕合はせな筈ではないか。

B　……………それはさうかも知れませんが…………私はつまり自分の爲めに泣いてくれる女が欲しかつたのです。私が惡い事をすると、あとで女房はきつと泣きました、どうか眞人間になつて下さいと云つてしみじみ泣きました、それが私には悲しいやうな嬉しいやうな氣持ちがしました。

A　ではお前は、女房を泣かせるのが面白いのでわざと惡い事をしたと云ふのか。

B　いゝえ、さうではありません、惡い事は矢張り自分がしたくつてしたのですが、あとで女房が泣いてくれるとそれでいくらか罪滅ぼしが出來るやうな氣がしました。つまり女房が居てくれた方が惡い事がしよかつたのです、だから私のやうな人間にはどうしてもあゝ云ふ女房が居なければいけないのです。

A　さうすると、若しお前にあゝ云ふ女房が居なかつたらお前は惡い事をしなかつたか。

B　それはさうは行くまいと思ひます、しかし女房が居なかつたら、惡い事をしても張り合ひがなかつたらうと思ひます。

A　女房が居る方が惡い事をするに張り合ひがある。――では尚更お前は女房と別れた方が好かつたではないか。さうしたらお前は善人になれたかも知れないではないか。

B　いゝえ、そんな事はありません、私は一生惡い事は止められません。私は善人になれたにしてもなりたいとは思は

ないのです、悪い事をする方がどうも面白いのです。ですから悪人ながら仕合はせに暮らして行くにはどうしてもあの女房と一緒でなければ困るのです。

A それほど女房が大切ならなぜもう少し可愛がつてやらなかつたか。

B でも可愛くないのだから仕方がありません。それに女房はイヂメなければ泣かないのです、泣いてくれなければ罪滅ぼしにならないのです。

A お前は女房が泣いてくれれば罪が滅びると思つてゐるのか。

B まあそんな氣がするのです。

A お前は人を二人までも殺して置いて、そんな事で罪が消えると思つてゐるのか。お前はいつか一度は罪が露顯して處刑を受けるとは思はなかつたか。

B それは思ひました、どうせ一度は摑まるに極まつてゐる、摑まつたが最後臺の上で樂な往生は出來ないと いつもさう思つてゐました。ですから猶更罪滅ぼしがしたかつたのです。

A すると罪滅ぼしと云ふのは、死んでから先のことを云ふのか。

B まあさうです、とても此の世では駄目だから、あの世へ行つてでも助かりたいと思つたのです。

A あの世とはどう云ふ事か、お前の女房は神樣や佛樣を信心してでも居るのか。

B 別に信心して居るやうな樣子もありません、ただ「神樣や佛樣なんてものは本當にあるのかしら」なんて、よくそんな事を云ひます。

A すると、あの世と云ふ考へがどうしてお前に起つたのだ。

B　前からそんなものがあるやうにぼんやり考へてゐたのです。

A　あの世の事にしろ、女房が泣いてくれれば罪が滅びると思ふのはなぜか。

B　なぜだか分りませんが何となくさう云ふ氣がするのです。

A　お前は今でもさう思つてゐるか。

B　さうです、今でもさう思つてゐます。私が斯うしてお調べを受けてゐる間でも、私の女房はきつと蔭で泣いて居てくれる、さう思ふと心强い氣がします。私は隨分ヒドイ目に遭はせたり亂暴な事を云つてあの女を泣かしましたが、泣かしたのはいゝ事だつたと思つてゐます。

A　では今ではお杉の事は思はないのか。

B　いゝえ、思はない事はありません、お杉の事は一日だつて忘れられません、やつぱりあんな好い女はないやうに思ひます。

A　お前の女房はお前の爲めに蔭で泣いて居るかも知れないが、お杉は今頃どうしてゐると思ふのか。

B　お杉の奴は好きな男でも引つ張り込んで浮氣をしてゐるに違ひありません、さう思ふと私は猶更氣が氣でならないのです。

A　お杉と女房と孰方の事を餘計考へるか。

B　孰方の事も始終考へます、しかし、ほんたうに氣が揉めるのはお杉の方です、女房の方は向うで私の事を考へてゐてくれると思ふので氣が揉めることはありません。

A　隨分勝手な話ではないか。

B　勝手な話ですけれどもどうもさうなのです。

A　お前は女房が泣いてくれれば罪が滅びると云ふが、さう云ふ人の好い女房をイヂメたり泣かせたりするのは悪い事ではないか。

B　それは悪い事かも知れませんが、でも何處かに悪くない譯があるやうに思へるのです。女房を泣かせると何だか妙に可愛くなつて來て、不思議に好い氣持ちがして、私も一時は女房と同じやうな善人になつた氣持がする、それが悪い事だと云ふ風には思へないのです。悪い事ならさう云ふ好い氣持ちがする筈はありませんし、たとへ悪い事だとしても、女房を散々泣して私も一緒になつて泣くと、それで罪が消えたやうな清淨潔白な氣分になる事はたしかなのです、どうも理窟に合はないやうですが實際さうなのです。それで私のやうな悪人はどうせ一生善い事がやれる筈はないのですから、同じ悪い事をするにしてもたまには好い氣持ちのするやうな悪い事をして見たい、さうでもしなければ苦しくつてやり切れない、だから神様が、――あそんな風に私は考へるのですが、――もし世の中に神様と云ふものがあんなさるなら、きつと私たち悪人の爲めに悪い事をしてもたまには好い氣持ちになれるやうな方法を授けて下すつたに違ひないので、私が女房をイヂメるのなどは、つまりはまあそれでいくらかでも氣を樂にするやうにと云ふ、神様の思召しではないかと思ふのです。人をイヂメて好い氣持ちがすると云ふのには何かさう云ふ譯がなければならないと思ひます。ですから私が女房をイヂメるのは菊栄を殺したり△△屋の娘を殺したりしたのとは非常に譯が違ふのです。又女房の身になつて見てもさうだと思ひます、夫婦である以上は繋がる縁で夫の罪を自分が引き受けて夫の代りに苦しんでくれる、打たれたり泣かされたりするのは辛いでせうけれども、それ堪へてやれば夫の罪滅ぼしになる、あの世へ行つても夫は地獄へ堕ちないで濟む、さう思つてくれゝばいゝのだと思ひます。

A　お前はさう云ふ心持ちを女房に打ち明けた事があるのか。

B　それはありません、自分がこんな心持ちだと云ふ事は自分にも分らなかつたのです、今日始めて分つたのです。

A　では今度女房に會つた時に打ち明けて見る氣はないか。

B　そんな氣はありません。

A　しかしお前がそれを打ち明けたら女房も少しは喜ぶだらうとは思はないのか。

B　きつと喜ぶだらうと思ひます、けれどもそんな事を打ち明けたらだんだん私は氣が弱くなつてしまひます、氣が弱くなつたら惡い事は出來なくなります。

A　惡い事が出來なくなれば結構ではないか。

B　いゝえ困ります、私はさつきも云たやうに惡い事はしたいのですから。惡い事をしないでは居られないやうな人間に、神樣が私を生んだのですから。

A　お前は女房の泣くのを見ると、自分も善人になつたやうで好い氣持ちだと云つたではないか。するとその時は一時にもせよ「あゝ惡かつた」と思つて後悔するのではないか。

B　後悔するのではありません、後悔したつて始まらないと思つて居ます、ただその時だけちよいと好い氣持ちがするので、ほんの一時ですがその氣持ちが捨て難いのです。まあ惡い事をする間の手のやうなものです。

A　その好い氣持ちと云ふのは例へばどんな氣持ちなのか、それを出來るだけ細かに說明して見よ。

B　どんなと云つてちよつと說明する譯に行きませんが、前にも云つたやうに其の時だけ女房が非常に可愛く、いぢらしくなるので、それを見てゐるのが何だか好い氣持ちなのです。

A　ではその時だけは女房の方がお杉より可愛くなるのか。

B　さう……いや、さうではありません、……同じ可愛いゝのでもお杉のと女房のとは少し違ひます。女房が泣く時は可愛いゝには違ひないのですが、お杉のやうに可愛いゝのではありません。可愛いゝ工合が違ふのです。女房はお杉に比べれば器量もよくはありませんし、色が黒くつて鼻が低くつて、體つきにもお杉のやうな意氣な婀娜つぽいところがちつともなくつて、物の言ひつ節なんぞがイヤに几帳面で不細工で、私は不斷はあんな味もそつけもない女はないと思つて居るのです。あの女の顏を見るとつくづくイヤ氣がさしてお座がさめるもんですから、可哀さうだとは思つてもやつぱりお杉の方へ行つてしまふのです。まあ不斷はそんな譯なのですが、それが泣く時になると其の色の黒いところや不意氣なところが……何だか斯う急に不斷とは違つて來て、……何だか斯う……お杉などゝは全く違つたきれいなものに見えて來るのです。

A　その「きれいな」と云ふのはどんな風にきれいなのか、どんな風に不斷と違つて來るのか、說明しにくいかも知れないが、その心持ちをよく考へて云つて見てはどうか。

B　まあたとへば……あの女の眼はいつもは何となくどんよりして活氣と云ふものがちつともないんですが、泣くとなると其れが淚で光つて來て、妙に生き生きとして來て、――かう云つてはおかしいかも知れませんが、水晶のやうにきれいになるんです。お杉の眼も非常に愛嬌がありますけれども、しかしあの女のあの時の眼のやうに淸淨な光は持つて居ません。私はあの眼を見ると悲しくもなりますが、その悲しいのが好い心持ちなので、胸の中まですうツと透き徹るやうになるのです。

A　ではきれいだと云ふよりも淸淨だと云ふのだな。

B　さうです、清淨なのです、――どう云ふ譯か知れませんが、私はあの眼を見るといつも神樣のことを考へます、やつぱり神樣と云ふものは確かにあるんだなと云ふやうな氣がするので、神樣はきつとあの眼のやうに清淨な、氣高いものぢやないかと思ひます。――氣高いと云ふと妙ですが、女房は下らない人間ですけれどあの眼だけは氣高い氣がします。つまり女房には、――私やお杉のやうな惡人と違つてあれは善人ですから、――いくらか神樣に近いところがある、それで泣く時には眼の中に神樣のやうなところが現はれるのぢやないかと思ひます。さうなつて來ると眼ばかりでなく、外のところまでがみんな一度によくなつて來るので、不斷は一向取り柄のない顏だの姿だのがその眼と同じやうに氣高くなつて來て、何處を見ても不細工なところがなくつて大へん情愛が籠つてゐるやうに、實際不思議ですがさう見えて來るのです。そこへ持つて來て聲をしやくり上げながら「どうか後悔して下さい、眞人間になつて下さい」つて云はれると、その聲が又いつもとは別で、細い、きれいな、腸へ沁み通るやうな悲しい調子なので、たまらなく可哀さうのやうな、胸の中がきれいに洗ひ淸められるやうな氣になるのです。

A　女房にさう云つて泣かれると、お前はいつも何と答へるのか。

B　「またためそめそ泣きやあがる！好い加減にしねえかい」ツて云つてやります、「いつ迄吼えて居やがるんだ」と云つて橫ツ面を張り倒してやることもあります。それはあんまりうるさいから意地になつて云ふことも云ふんですが、しかしさうすれば猶泣くことも分つて居るんです。泣かせる爲めなのか止させる爲めなのか自分でもよく分らないんです。

A　さうしてイヂめながらお前も一緒に泣いたりするのか。

B　女房はいくらイヂめてもイヂめればイヂめるほど泣いて、しまひにはおいおい聲を出したりして、鼻を詰まらせな

がら搔き口說くのです。一番たまらない氣がするのは「ねえあなた、あたしを打つならいくら打つてもよござんすから何卒改心して下さい、お願ひですから、……」ツて云つて、淚が一杯たまつた眼で私をぢつと見上げる時です。女房の眼が一番氣高く淸淨に見えるのはさう云ふ時です。それを見ると私は恐ろしいやうな悲しいやうな氣がして來るので、それをごまかす爲めにイキナリ女房の襟髮を摑んで引き擦り倒すんです。すると女房は倒れたまゝ矢張りしくしくといつ迄も泣いて居ます。私はそのしくしくとしやくり上げる泣き聲を聞いてゐるうちに、云ふに云はれないしんみりした氣持になるので、ついホロリとして、泣いてはならないと思ひながら泣いてしまふのです。

A　その時お前はただ默つて泣いてゐるのか、それとも女房にやさしい言葉でもかけてやるのか。

B　「もう泣くのは止してくれ、お前が泣くと己も淚が出て仕樣がねえから」ツて云つてやります。「泣いて意見をしてくれるなあ有りがてえが、己はどうも斯う云ふ人間に生れついたんだから仕方がねえ、お前も嘸辛からうが夫婦になつたのが因果だと思つてあきらめてくれよ、な、勘忍しろよ、」ツて云つてやります。すると女房はうん、うんて・たづきながら一層哀れつぽくさめざめと泣き出しますが、私も何か云へば云ふほど淚が止めどなく出て來て、悲しい歌でも聞いてゐるやうに、一緒になつて好い心持ちに泣いてしまふのです。

A　それでお前の心持は大凡そ分つたが、そこまで來たらなぜお前は後悔しないのだ。さう云ふ心持ちが長く續けば善人になれるのではないか。

B　でも長く續かないから仕樣がないのです、その時はそんな氣持ちになつても又直きに惡い事をするのですから、泣くには泣いても決して改心するつもりではないのです。此れから先も生きて居る間は何度でも惡い事をするでせうし、何度でも女房を泣かせるだらうと思ひます、いつ迄立つても同じ事を繰り返すだけです。

A　では女房の方でも矢張り駄目だと思ひながら泣いて居るのか、それともいつか一度はお前が改心する事を信じてゐるのか。

B　それはきつと、自分の力で今に改心させて見せると、さう思つて居るんだらうと思ひます。さもなければあゝ根氣よくいつもいつも泣いて意見をする筈がありません。そこがあの女のいゝ所なのです、さう云ふ所があるから尙更可哀さうになるのです。

A　しかし可哀さうだと思ふばかりで後悔しないのでは、一向罪滅ぼしにならないではないか。女房を泣かして置いて好い氣持ちがするだけでは何の足しにもならないと思ふが、……

B　いゝえ、それだけでもやつぱり何かの足しになります、好い氣持ちがしないよりは善い事です、何かあの世で救はれる賴りになります。年中惡い事をして居て時々女房に泣いて貰ふ、その間だけは神樣に縋つたやうな氣持ちになる、たとへ後悔すると云ふ所まで行かないにしても、「自分は惡人だ、自分は惡い事をして居るのだ」と云ふことを忘れずに居られる、此は私のやうな惡人に取つては大事なことです。私のやうな人間は、せめて自分は惡人だと云ふ事だけは忘れずに居なければなりません、さうでないと私は永久罪滅ぼしが出來ないやうな氣がします。ですから私の女房は犬猫同然に扱はれては居ますけれども、あれが居るので私と云ふものが救はれるのですから、あれは非常に必要な人間なのです。

A　すると、お前の女房は全くお前の爲めに生きて居る事になるのか。お前は自分の爲めばかりを考へて、女房の爲めを考へてはやらないのか。

B　女房にしたつて私と云ふ人間を救ふことが出來れば、それが矢張り何かしらあの女の爲めになると思ひます。あの

女が私のやうな惡人を捨てゝ、善人の男を亭主に持てば今のやうな苦勞がなくて樂かも知れませんが、樂をするよりは人を救ふ方がいゝ事です、あれは善人ですからきつとさう思ふに違ひありません。人間は誰でも苦しむのが當り前です、私だつて苦しくない事はないんですから。

A　お前はその心持ちを女房に打ち明けたくないと云つたが、いつか一度は打ち明ける時が來るとは思はないか。

B　いつか一度はさう云ふ時が來ると思ひます、しかしそれは此の世の事ではないやうな氣がします。

A　お前はあの世と云ふものがたしかにあると思ふのか。

B　たしかにあるとは思ひませんが、なくては困ると思ひます。

A　なぜ困るのだ。

B　でも此のまゝでは誰かに、――神樣にだか、女房にだか、自分にだか、誰かに濟まないやうな氣がしますから。

――

（大正十年十月稿）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至盛堂
同　本郷區本富士町	誠春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價　金六拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割さなれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金さす、前金切の場合は發送を止むべし

一替振貯金　口座は東京三十四番なり

一郵券代用　は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるゝを拒まず

一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す

一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢

一中央公論及婦人公論　代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ

一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正十年十月三十一日印刷納本
大正十年十一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木酉三

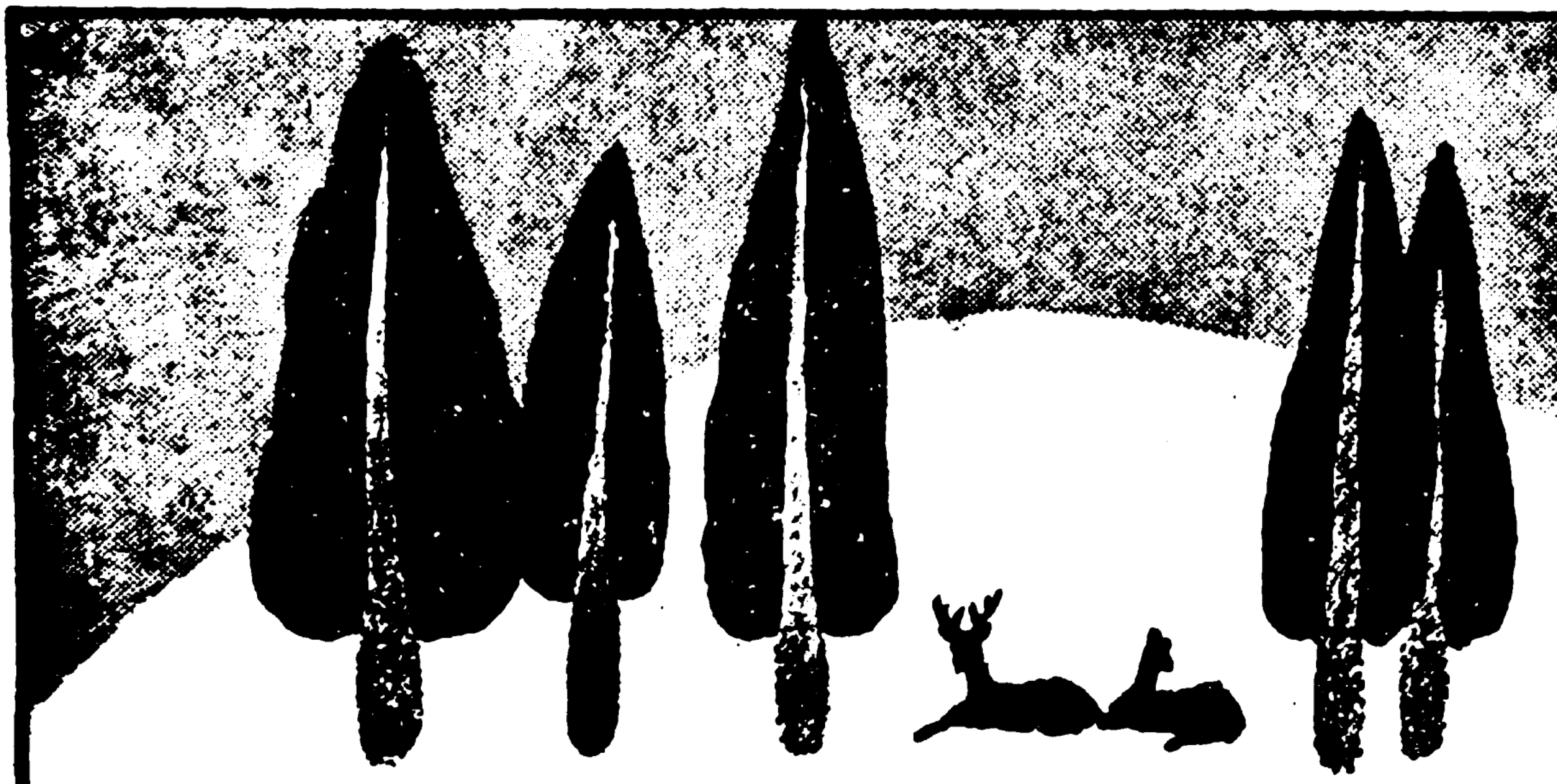
發行所　東京市本郷區本郷三丁目六番地
中央公論社
電話　園小石川一四四
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

◉本號特價　金八拾錢　郵稅金貳錢五厘

CHUO KORON (The Central Review.)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11.90; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.



寒さの御用意

冬のお品は三越の品

冬の必要品は三越に一つ残らず取揃へて御座います、三越の五分間は頭の先から足の先きまで即座に冬の支度になります三越は便利な店です

◆三越の十一月◆

▼格安反物賣出し（一日より）
▼丸帯陳列（同）
▼半衿帯揚陳列（同）
▼婦人世界主催女流日本畫展覧會（同）
▼石川縣工藝品陳列會（十一日より）
▼國民美術協會小品展覧會（十二日より）
▼龍村平藏氏織物展覧會（十五日より）
▼英國アカデミカル繪畫展覧會（二十日より）

東京市 **三越呉服店** 駿河町

◆三越の定休日◆十一月十日◆十一月二十五日◆